
東方野戦録～サバゲーしてて幻想入り～

ダンプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方野戦録〜サバゲーしてて幻想入り〜

【Nコード】

N7766N

【作者名】

ダンブ

【あらすじ】

ネットで見つけたサバゲーサークル。

その仲間とサバゲー中に幻想入り。

主人公は生き残ることができるのか!?

森のきのこにご用心(前書き)

スーパーマリオRPGとはなんら関係はありません。

森のきのこに用心

「う、ん？」

森の中・・・いつの間に寝てたんだ？

とりあえず起き上がる。

森の中というのは判った。にしても息苦しい。こんなに息苦しいのは初めてだ。

俺はサバゲーしてて・・・それで・・・思い出せない。

こんなことは初めてだ。いくら狙撃で寝そべっていても寝ることなんてなかった。

それに、見つからなくても何れはチームメンバーが居ないことに気づいて探しにくるだろう。

今は夕方・・・。時計を見ると5時半を回ったあたり・・・。試合時間はとっくに終わってる。

「暑い・・・」

にしても暑い。やはりギリースーツ*1を着たまま寝てたからか？

「・・・脱ぐか」

ギリースーツを脱げばそのまま迷彩服になる。

銃を背負い、歩き始める。

30分後・・・

おかしい・・・、この森は匍匐前進でも30分あれば抜けられるは

ずだが……。それに体が重い。スポーツサークルをしていて、体力に自信はあるのだが……。不意に肩を叩かれた。そこから意識が遠くなっていく最後に目にしたのは倒れる風景と黒い何か……。

（魔理沙サイド）

「今日は碌なものが取れなかったぜ」

このままじゃ研究が遅れる。そんなことを思いながら歩いていた。そんな時。

「うん？」

服の柄のせいかわからないが、前方に人が居る。

こんな所に私やアリス以外に住んでる奴が居るのか……。？そんなことを考えながら足を速める。外来人だったらものの数分で胞子にやられてしまうからだ。

「おい、大丈夫か？」

何とか追いつき、フラフラしながら歩いている男に話しかける。しかし反応はない。

「無視すんなって、大丈夫なのか？」

男の肩を叩く。

男は前のめりになりながら、崩れるように倒れた。

「おい、しっかりしろ！おい！」

これはやばい、胞子を吸って完璧に意識がなくなっている。ひとまず近いアリスの家に男を引きずって向かう。

アリスの家に着いた。

ドンドンドンドン！

必死になってドアを叩く。

「何よ、うるさいわねえ・・・っと、どうしたの？」

魔理沙は孢子の吸いすぎで倒れた男のことを説明する。

「はあ、また面倒ごとを持ってきて・・・。いいわ、ベッドに寝かせて頂戴」

男の服装はおかしなものだった。緑に濃淡を付けたり、災害でも起こったような服と同じ柄のヘルメット。靴は裏が厚く、つま先には何か硬いものが入っているようだった。

顔には目の部分に透明なガラスではない何かがはめ込まれた、顔全体を覆うよくわからない物質で出来たマスクを付けていた。

そして背負った謎の長物。何度か里で見た銃のようだったが、まったく形が違っていた。

背負っていたカバンには謎のモジャモジャした布のようなものが入っているだけだった。

服についた孢子の量からして、30分以上は森に居たはず。このマスクのおかげだろうか？

「とりあえず応急処置は済んだわ。後は様子を見て永遠亭に連れて行きましょ」

「助かったぜ、私一人じゃどうしようもなかったからな」
ホッと一息付く。

このままだったら、そのまま孢子にやられるか、妖獣の餌になっていただろう。

知らないところで知らない誰かがどうなるかと知ったこっちゃんいが、目の前で人が死にそうなのをほったらかしにするほど人間辞めちゃいない。

とりあえず一命は取り留めたようだ。

「まあ、明日あたり永遠亭に行きましょう。足は任せたわよ」
「わかつてるぜ」

私が連れてきたんだ、最後まで面倒は看るぜ。

まあ、明日のことは明日考えればいいさ。

そうしてアリスにベッドを貸してもらい、そのままアリスの家に泊まることになった。

朝日に当てられ、目が覚めた。

「見慣れない天井だ・・・」

一度言ってみたかった台詞だ。

とりあえず、家主に挨拶をしなくては。・・・多分、倒れていた俺を助けてくれたのだろう。

サイドアウト

アリスサイド

倒れていた彼を寝かしていた部屋から物音がした。どうやら彼が目を覚ましたようだ。

作っていた朝食を人形に任せて彼の様子を見に行く。

サイドアウト

主人公サイド

コンコン

家主が来たのか？

「はい、どうぞ」

聞こえる程度の声で返事をする。

「少しは元気になったみたいね。魔理沙に感謝しなさい」
入ってきたのは金髪の女性。

「はい、おかげさまで、ありがとうございます。重かったでしょう・・・」

そうね、と返しつつも「運んだのは私じゃないし」と言った。

「もう一人同居している方が居るんですか？」

ええ、と答える。

「とりあえずあいつはまだまだ寝ているし、いくつか質問してもいいかしら？」

勿論です、と答える。

それから何分経っただろう・・・。

質問の内容を少し挙げると

名前は？

高野^{タカノ} 悠太^{ユウタ}。ちなみに彼女はアリス・マーガトロイドというらしい。

見慣れない服装だけど、何をしていたのか。

これはただ単にサバゲー・・・、サバイバルゲーム*2をしていたと言った。サバイバルゲームを知らないようなので、そこから説明したが。

持ち物はすべてサバイバルゲームに関するものか。

これはイエス。サバゲーの途中に必要なもの持ちは歩かないようにしているからだ。

簡単にまとめるとこのような質問だった。

「そう……。これではつきりしたわ。悠太、あなたはここ、幻想郷で一般的に外来人と呼ばれる存在」

「なんだその外来人っていうのは。外から来た人……。つまり外国人みたいなものなのか？」

「だいたいは合ってるわ。ただ違うのはここが違う世界……。要するにあなたにとつての異世界のようなものってこと」

「異世界？何を言っているんだこの人は。」

「仮に異世界だとしても、なぜ俺はここに居るんだ？」

「多分あなたは八雲紫に連れて来られたんだと思うわ。いわゆる誘拐、拉致のような形で」

「拉致！？なんでそんなことをしてるんだ、その八雲紫って奴は！」

「さあ、と短い返事の後に繋げて「最近、あなたみたいに拉致される人が多いのよ。でも安心して、元の世界に戻る方法はいくつかわ」

「あるんですか。ならその方法を教えてください」

「ええ、構わないわ。ひとつはそのスキマ妖怪、八雲紫に頼んで世界の外に出してもらうこと。まあ、紫自体が何処にいるか、頼みを聞いてくれるかわからないからこっちは最後の手段。他には博麗神社の巫女に結界に穴を開けてもらうかの2択よ。こっちはこれ専門だし、場所もほぼ決まっているから見つける必要もない」

「なるほど、そう頷いていると」

「ただし、あなたはまだ無理よ。この森の胞子を長時間吸っていたんだから、それなりに検査しないと。外に行ってから死んじゃいましたー、なんて、目も当てられないからね」

「ふむ、この森の胞子はそれほど危険なのか？」

「危険も何も、普通の人だったら10分も居たら胞子の毒で幻覚を見ながら息絶えてるわ」

「うわぁ……。そんなにやばい森なのかここは……。ん？待てよ。」

・

「この森に住んでいるあなた方は大丈夫なんですか？」

ああ、その話？そう言った後、

「私は普通の人、いえ、人間ですらないのよ。種族は魔法使い。むしろ心地良いほどね」

そう答えた。

サイドアウト

主人公サイド

「は・・・？」

人じゃない・・・？

「何を言ってるんですか。どこからどう見ても人間じゃないですか？これが所謂厨二病という奴か？」

「うん・・・やっぱり信じないわよねえ・・・。」

そう言うと、外に出るように言われた、胞子で危険じゃないのか？

「このマスクをつけて。あなただよ。これには少なからず外と内を遮断する効果があるみたいよ。あなたが生きてたのはこれのおかげのようね」

そう言うと俺のフルフェイスのゴーグルを渡された。こいつのおかげなのか・・・。

外に出ると、

「よく見てなさい。これが証拠よ」

そう言うと、どこからか取り出した人形が宙を舞い、ランスや剣を持って自分の意思があるように動き出した。

そしてアリス自身も宙に浮き、人形とダンスを踊っているようだった。

当然上にはクレインのようなものはない。糸も見えない。

「人間じゃないって言うのはよくわかった。幻想郷には人は居ないのか？」

いえ、人は居るわ。その後が続ける。

「ただ、この近くにある人里に住んでいる人が多いわ。他にも吸血鬼の住む紅魔館に一人、博麗神社に一人、山の上にある守矢神社に一人、といつても、こっちは現人神あらひとがみだけだね。私が知っているのはこれぐらいね」

現人神という聞きなれない言葉。聞いたら、神の血が入っているだとか、神の生まれ変わりだとか・・・。

「幻想郷ではそういった常識に囚われてはいけないのよ。いい？人里以外で誰かに会ったら、妖怪・妖獣の類と思いなさい。他にも妖精も居るわ。こっちは羽根とかあるし、見分けが付くと思うわ。ただし、悪戯が過ぎることもあるから注意したほうがいいわ」と、詳しく教えてもらえた。

「じゃあ、朝食にしましょう。人形に作らせてあるわ」

彼女は「人形を操る程度の能力」を持っていて、人形に様々な家事を手伝わせているようだ。

ダイニングに行くと・・・

「よお、先にいただいでるぜ！」

と朝からテンションの高い黒白の明らかな魔法の格好をした金髪の少女が朝食らしい食べ物を食べていた。

「はあ、人が説明している間に何勝手に食ってるのよー！」
アリスはお冠のようだ。

森のきのこに用心（後書き）

どうも。はじめまして。

自分は某クソゲータウンで書いていたのですが、強制非公開になりました・・・。

なので、いつその事新しく書いてしまえと、そういう考えで書きました。

指摘、批判、暴言。何でも書いてください。

それだけこの小説を見てくださった方が居るといことです。

~~~~~

以下\*解説。知ってるよ？という方は飛ばしてもらって構いません。

\*1：ギリースーツ

猟師や軍人が使用する布などで草木に似せたものを使うことで、獣、敵から身を隠す衣服。写真はググってください。

\*2 サバイバルゲーム

主に自然の中で行われる遊戯銃を使った撃ち合い。

専用のフィールドもあるが、ただの山、雑木林の中では一般人が居る事もあるので注意が必要。ネットで探せば沢山のサークルが見つかる。

スピード狂は勘弁な！（前書き）

後書きは\*印用なんで、わからない人だけ見てください。

## スピード狂は勸弁な！

そんなこんなで15分。ようやく永遠亭と呼ばれる屋敷についた。

「こいつを診てやってくれ」

そう叫ぶ。すると中からうさ耳のブレザーを着た少女がまたうさ耳の少年を連れて出てきた。

「どうしたの？至って健康体に見えるんだけど・・・」  
不思議そうな顔をしている。

「魔法の森の胞子を大量に吸ったみたいだな。万が一ってことでさ  
そういうこと・・・。そう言って中に案内された。」

「ここは永遠亭。医者をしているわ。主に薬を作って里で売ったり  
してるの。それにしても・・・」

ジロジロと見られる。

「なんというか・・・、慣れないわね」

何のことだろうか？

「慣れないって、なににですか？」

ははは・・・と笑い、今は忘れて欲しいといわれた。

「ここが診察室。師匠が居るわ」

師匠ー、患者ですー、とノックをしながら言う。

「どうぞ」

その一言だけで女性だとわかる。

そのまま中に入る。

簡単な自己紹介が終わる。

彼女は八意 永琳というらしい。

5分程で問診が終わる。

「特に症状は出ていないようね。とりあえず血液検査をするわ。腕  
を出して頂戴」

言われた通りに腕を捲くり、針が刺される。チクリという感覚の後、

透明な注射器に紅い液体が満たされていく。

「とりあえず、検査が終わるまでゆっくりしていくといいわ」

お言葉に甘えて、近くにいたうさぎ（因幡というらしい）に声をかけて幻想郷の詳しい話を聞く。

しかし、大した情報はない（アリス達から聞いたことばかりだった）。

しかし、一つだけ情報が入った。

永遠亭にいる姫。

何でも蓬莱山 輝夜と言うらしいが、不老不死で様々なことを知っていたり、昔のことを話してくれたりするそうだ。

早速案内してもらい、結果が出るまでの間、話を聞こうと思う。

「姫ー、お会いしたいと申すものがいらっしやいましたー」

入っていいわよー、と声がかかる。言葉遣いからしてお転婆なイメージだ。

「失礼しまー・・・」

絶句した。

布団を被り、寝たままパソコンをしている・・・、と言うか、電源やインターネット接続はどうしているのだろうと疑問ではあるが、常識に囚われてはいけないということを思い出す。

「えー・・・、なにを見ているんでs「ニコ」動画」そうですか・・・」

話が続かない。

「あなた、外の面白いもの持ってない？」

突然そう聞かれた。

「え、あ、はい。これくらいしかありませんが・・・」

そう言っただアガンを見せる。アガンはL96A1という東京マ

イ製のポルトアクシヨンライフル。サブはUSP・45。

「へー、これが外の世界の玩具銃ね・・・」

へー、ほー、と言っているうちに撃ちたいと言ってきた。

「ええ、構いませんよ。まだ一発も撃ってないですから、沢山弾は



入ってますよ」

そう言つて外に出る。

途中で会つた因幡に紙とペンを貰い、簡単な的を作る。

「これを狙ってください。・・・と、ちよつと待つてください」

そう言つて、的を20メートルほど離し、レティクル\*1を合わせる。

「これで真ん中を撃てば的に当たります。跳ね返りは気をつけてくださいね」

はいはい、と生返事時をされる。

まあ、初めてじゃ当たらないだろう。

その予想は当たり、的の中心を外してしまう。何度も外し、最後は弾が出なくなつてしまつた。弾切れだ。

「弾が出なくなつたわよ？」

ただの弾切れだと答えて、マガジンプーチ\*2から新しいマガジンを取り出し、リロードする。

当てるコツを聞かれたので、安定した姿勢から慎重に狙うことと言つておく。

本当はさらに風を読むことが求められるのだが、今は無風だし、初心者には無理だろう。

見本を見せると言われたので、5回ほど見せる。

地面に伏せ、三脚を出し、ストックを腕で固定し、スコープを覗く倍率は4倍ほどにしてある。高すぎても見難いだけだからだ。そして中心を的に合わせて息を止める。こつすること手振れが少なくなる。そして、引き金を引く。

5発とも中心付近に当たる。サバゲーではこの程度でいいのだ。

いつもなら視界にいる奴を倒しきつたら即座に移動するのだが、今回はゆつくり息を吐く。

「こんな感じですね」

なるほどと言つたように頷き、自分に習つて伏せようとするが、止める。着物なのに地面に伏せるのはどうかと思つたからだ。

それに、先ほどのブレザーの女性（鈴仙・優曇華院・イナバと言っ  
らしい）が来て、診察の結果が出たことを告げた。

## スピード狂は勘弁な！（後書き）

\*1：スコープにある十字のこと。様々な形がある。

\*2：マガジンを入れておくポーチ。悠太は匍匐の邪魔になるので左太腿の外側に付けている。

隙間女っていう都市伝説あったよね？（前書き）

テスト期間で更新できなかった。  
ただそれだけ。

隙間女っていう都市伝説あったよね？

結果は予想だにしないものだった。

「結論から言うわ。あなたは能力を持ってしまっている」  
こう告げられた。

「能力っていうと、人形を操ったり、魔法を使ったりって言う・・・？」

そうよ、その後が続ける。

「私も“あらゆる薬を作る程度の能力”を持っているわ。そのウドンゲは“狂気を操る程度の能力”を持っているわ。くれぐれも目を合わせないようにね」

そんな話は聞いていない。いや、耳に入っていないかった。

過去、ここに来て能力が出ることは何度かあったらしい。そしてその人たち全員に課せられることも聞いた。“能力を持った者は境界の外には帰れない。”これはアリス達から聞いたことだが、嘘は言わないだろう。

つまり、俺も境界の外に出ることが叶わなくなったというわけだ。立ち眩みがする。近くにあった椅子に座り込む。

もう会えない、親にも、親友、友人、お互いに馬鹿やっていた悪友にも。

その事実だけが重く押し掛かる。

「・・・能力を消す薬はないんですか？」

ようやく搾り出した声。

「そんな薬はないわ。」

その声も儚く散る。

「そもそも能力っていうのは遺伝子によるものなの。そんな遺伝子を弄ってしまえば、あなたは本当に帰れなくなるわよ？」

聞いたところ、能力と言うのは遺伝子が記憶している特殊なもので、呼び名が変わっても能力の効果は変わらないそうだ。

・・・呼び名が変わることはほぼないようだが。

「つまり、もう幻想郷から出ることは、出来ないんですか・・・？」  
「そんなことはないわ」

聞いたことのない、ここに居ない筈の女性の声が聞こえる。

「紫、覗きとほいい趣味ね。」

永琳が言いきるか否かのタイミングで空中に線が浮かんだ。

刹那、の線が開き楕円の穴のようなものが出来る。

その時、フラッシュバックが起こる。

寝ていた時の浮遊感、その後に見た目、目、目。目目目目目目目目

目目目目。

そこで何か人影を見たような気がした。

何故、忘れていた？

いや、余りにも強烈だったために脳が忘れさせたのかもし  
れない。

恐怖。

その一言では言い切れないほどの恐怖が悠太を襲った。

なにが怖いといわれても答えられない。

純粹な恐怖。

赤子が初めて見るものを理解できないような、そんな恐怖が悠太を  
包む。

突如椅子をひっくり返した様な音が鳴る。

誰かが落ちたのか、そんな風に考えていた。だが・・・

落ちたのは自分。何故落ちたかは理解している。後退り。恐怖によ  
る後退り。

いつ落ちた？

分からない。

「そんなに怖がって・・・、かわいいわね」

食べてしまいたい。

そんな言葉が続いたような気がした。

「彼は能力が覚醒していたから幻想郷こまひつに連れて来たの。でも、途中で落としてしまっただね。ごめんなさい」

そのときから恐怖は無くなっていた。

永琳が溜め息をつく。

「紫、彼は人間よ？そんな妖気を当てたら気絶してしまうでしょう」  
永琳が言う。

害がないからほおって置いたらしい。気絶する寸前だったっての。

「まあ、細かいことは気にしないで頂戴。とにかく、彼はこちらで預かるわ。迷惑かけたわね」

紫さん、それは永遠亭の人たちではなく、アリスや魔理沙に言うべきだ。

「それじゃ行くわよ。荷物はいい？」

すでに準備は出来ている。

もともとここに持ってきたものは少ない。

「大丈夫ですが、紫さんの家はどこにあるんです？」

「マヨヒガよ」

マヨヒガ……。そんなような集落が出てくる話があったような気がする。

迷ってしまったとき、人の居ない集落に迷い込み、物を持ち帰ったから裕福になった。それを聞いて、マヨヒガに行こうとした者はたり着けずそのまま帰ってくる。こんな話だったか？

「ええ、だいたい合ってるわ。」

つまり普通に行ったらたどり着けないわけか。

「スキマで行くわよ。捉まってなさい」

抱えられてそう言われた。しっかりと腰あたりをつかむ。そして・

浮遊感。

反省はしてる。後悔はしてない。(前書き)

何か出して欲しいものがあれば出来る限りだします。



反省はしてる。後悔はしてない。

気が付いたら布団に寝かされていた。

「藍しゃまー！起きましたー！」

幼い女の子の声が聞こえた。

目の前には緑の帽子を被り、尻尾が二本ある少女。・・・尻尾が二本？

「おお、気が付いたかい？」

今度は白い帽子を被った尻尾が九本ある女性が入ってきた。

「えー・・・、猫又に九尾の狐？」

当たった。

どうやら九尾の狐　八雲　藍というらしい　は紫さんの式。

猫又　橙ちえんというらしい　は藍さんの式らしい。

俺はスキマを通った際、また気を失っていたようだ。

この時、もう二度とスキマを通りたくない。そう心の中で思った。

「紫様が、目を覚ましたら居間まで来て欲しいそうだ。案内しよう」

よかった。居間に来いなどと言われても建物の構造が分からなくては迷ってしまう。流石に抜けてはいないか。

「何でも君の能力について話があるようだ」  
心臓が弾む。

能力。

その言葉を聴いただけで心臓が締め付けられる。

ああ、もう戻れないんだな。

そう再認識させられた。

ものの数分。いや、数十秒だったかもしれない。居間に着いた。

「紫様、連れて参りました」

そこにはちゃぶ台の前に座っている紫がいた。

煎餅を齧

りながら座っている。

「お疲れさま。悠太、惚けてないで座りなさい」

紫さんの対面にはすでに座布団が敷かれていた。

そこに腰を下ろす。

「藍から話は聞いてるわね？ 話の内容については」

「ええ、俺の能力について・・・ですよ？」

そうよ。後に言葉が続く。

「よかったわ、帰れないと聞いて自殺する人も稀にいるのよねー。

あなたが自殺なんて考えなくてよかったわ」

そりゃあそうだろう。見知らぬ土地で友や恋人と別れていつ死ぬかも分からぬ土地で喰い殺されるより、自分の手で終わらせたいと思

うだろう。

「正直、俺もまだ半信半疑です。能力なんて・・・」

「でしょうねー」

他人事だと思いやがって。

「でも、あなたは生きている。これからも生き残れると思うわ。あ

なたの能力なら。」

そんなに強力なのか？

「あなたの能力は“小火器を創り出し、扱う程度の能力”よ」

「よ」

はい？小火器？

「そう、小火器。あなたが持っていた遊戯銃の本物よ」

「つまり、本物の銃を出すことが出来るってこと……、ですか？」  
心臓が大きく弾む。

恐怖や帰れないことへの心配ではない。

本物の銃が撃てることに対してだ。

いつか本物を撃つてみたい。そう思っていた。まさかこんな形で叶うとは思ってもいなかったが。

「……どうやれば、出せますか？」

大きく弾んだ反動か、心臓が痛い。

「ふふ、物には順序があるわ。まずは外に出ましよう。ここでは不味いしね」

それは暴発\*1についてだろう。

外に出て、やり方を教わる。

「何かを出すような能力は、イメージが大事よ。なにを出すのか、形はどうか、用途は何にするのか。それを考えれば非殺傷系の物も出せるでしょう」

それを聞いてイメージする。

自分の持ってきたものの本物を。

形、用途、弾。それらすべてを完璧に頭の中に造ったとき、手に重みを感じる。

「出来たわね。試し撃ちはする？」

手にはL96A1が握られていた。

マガジンを抜いてみる。中には7・62mm NATO弾\*2が10発入っていた。

試し撃ちとして100メートルほどの射撃レンジに案内された。・

・ずいぶん広いもんだ。

射撃レンジとはいえ、広場に机とターゲットとなる人型が置いてあるだけの簡素なもの。

「へー、こんな場所もあるのか……」

即席だけど、十分でしょ？  
そう聞かれた。

その答えを言う前に俺は行動をはじめていた。  
机に三脚を広げ固定し、三脚の高さを変えて、ストックにチークピ  
ース\*6をセットする。

机に双眼鏡を置き、構える。

狙いを定め、息を止めて引き金を引き弾が出る。重い音だ。

弾は目標の右を捕らえ、土の山で止まる。

四回繰り返し、ようやく的に当たった。

この時、頭の中には帰れないことは少しも考えていなかった。

本物の銃が撃てた。それだけが頭に残っていた。

レティクルを調節し、撃つ。

後5回撃つ。10発入るマガジンはこれで空だ。

マガジンに弾が入った様子を思い浮かべる。するとマガジンのみが  
手に創られた。

「マガジンだけ出すことも出来るのか・・・」  
なら・・・。

新たに思い浮かべる。

出来たマガジンの一発を取り出す。

「出来るのか・・・」

その弾は特別なもの。

弾頭が硬質ゴムに変わっている。非致死性のゴム弾頭。中には心材  
として鉛が入ってはいるが、貫通はしない。

これで銃を使っても殺さずに使うことが出来る。そう思った矢先。

「殺さずに済まそうなんて、甘いわね」

紫の声が響いた。

大きな声ではない。周りに響いたのではない。俺の心に響いた。

え　　？

「確かに多くの妖怪、妖精には理性があるわ。だけど、妖獣には理  
性の無いもの・・・、本能に忠実なものも多い。うちの藍や橙は理

性があるわ。だけど、すべてが持っているわけではないわ。人里以外で妖獣に出会ったら

「躊躇わないことね。」

また心臓が跳ね上がる。

そう、ここは弱肉強食。妖怪や妖獣が人を襲い、人は襲われぬように祈るのみ。

偶に力のある人間がいるようだが・・・、人間全体の一割にも満たないそうさ。

それに

紫が言った。

「殺さないためのスペルカードルールというものもあるしね」  
「周りが静まり返る。」

「・・・」

「・・・」

話しくい間が出来る。

紫はそれを咳払いで破る。

「まあ、この札に書いたことを宣言してから使うもので、人と妖怪たちが殺し、殺されの関係を辞めるために霊夢・・・博麗の巫女と考えたルールよ。これがあれば妖怪、理性のある妖獣、妖精なんかを相手にするときは殺されずに済むわ」  
「そう言われて札を10枚ほど貰った。」

なるほど、これを使うときは基本的に非致死性の弾を使えということだ。

「妖獣なんかは、どうすれば・・・？」

「ああ、それはね、襲ってくるようなら殺り返しなさい」  
「殺り返す。確かにそう言った。」

やり返すではない。殺り返す・・・。

「・・・分かりました」

「ふふ、理解はしたけど納得はしてないって顔ね。でも、いずれはそうしなければならぬことが起こるわ。ただし」

ここで言葉を区切る。

「殺しに慣れてはいけないわ。殺すことに慣れてしまえば、それは人ではなくなる。殺すことに慣れてしまった者は鬼になるわ。殺人鬼という鬼に・・・」

ごくり、唾を飲む音がやけに大きく聞こえた。

ああ、とんでもない世界に来てしまったな・・・。俺は改めてそう感じた。

反省はしてる。後悔はしてない。(後書き)

\*1:意図しない場合の発砲のこと全般を指す。

\*2:弾の規格。主にNATO諸国の狙撃銃に使われているが、  
部例外あり。

## 日常（前書き）

タイトルが考え付かない・・・。  
内容はあつという間に出てくるのに・・・。



## 日常

### 次の日

昨日は一日中射撃の練習をしていた。

サバゲーをしていたとはいえ、本物を撃っていきなり当たるなんて事は早々無いはずだ。

重さや反動、どれをとってもエアガンとは違う。本物という興奮もあつたが、一番大事なのは冷静になること。

どんな世界、どんな場所でも冷静さを欠いたら終わり。冷静に周りを見渡せた者が生き残る。

一日練習してようやく50メートルを当てられるようになった。

これなら、生き残ることも出来るだろう。

他にも判ったことがある。フラグ・・・俗に言う破片手榴弾や、閃光手榴弾ラッシュバン、スタングレネード、スモークグレネード煙幕や、ランチャー系（RPGやステインガーマサイルなど）も創り出すことが出来るようだ。

よく手榴弾のピンを歯で抜く漫画があるが、ありや嘘だ。ピンを思い切り引かなければ抜けなかった。

よく考えればわかることだ。

鉄の塊を支えているのだ。歯で抜けたらすぐに落ちてしまう。

これを読んでる方、万が一グレネードを見つけても、歯でピンを抜いてはいけません。ピンの代わりに歯が抜けてしまいますよ。

### 閑話休題

昨日一日である程度の銃器は撃てるようになった。

そして今は

「悠太、お茶を頂戴」

「はい」

八雲家で手伝い（と言う名のパシリ）をしている。

能力の練習をさせてもらい、尚且つ泊めてもらったのだ。これぐらいしなければ罰が当たると言うものだ。

それに、パシリといっても殆どが藍さんの手伝いである。料理は皿を出し、配膳して皿洗い。風呂洗い、雑巾がけ程度。やることはこれだけである。後は気分を手伝ったり、能力の練習をしたりしている。

2日して、能力を使うだけではいけないと思い、簡単なトレーニングをする。

射撃練習している場所を使って筋トレや走り込みをする。

いくら銃が使えるようともそれに振り回されていたのでは話にならない。

弾幕ごっこでは相手の弾幕をよけながら弾を当てる。

銃を持ちながら動くこともあるはずだ。そのときにへばってはいけません。しょうがない。

だから銃を持って走りこむようにしたし、寝そべってから起き上がり、10メートルほどダッシュする練習もするようにした。

やることはまだまだあるだろうが、今はこれ位にしておく。

そして話は数日後に飛ぶ。

## 日常（後書き）

今週末に高校生活最後の試合が控えています。

勝てばまだ部活が出来ますが、負けたら終わりです。

負けたら更新頻度が大幅に上がります。

2010/10/18

## 白玉楼（前書き）

白玉楼：文芸家や書家、画家が死んでから行くとされる天上界の宮殿。



白玉楼の庭の一角、そこにスキマが現れる。

「お邪魔するわよ」

「失礼します」

「お邪魔します」

「・・・」

上から紫、藍、橙、悠太の順。

悠太は気絶している。

「なに、また気絶してるの？」

紫が呆れた様に言う。

「まあ、彼はごくごく普通の人間ですし、しょうがないのでは？」

藍がフオローに回る。

「そうね、私たち以外の妖怪でさえ嫌がるのだから、当然と言えば当然ね」

もつとも、嫌がる理由はどこに出されるかわから無いからなのだが、彼女は知らない。

「いらつしゃい」

優雅に、そしてゆったりと、この屋敷の主、西行寺幽々子が現れ、傍らには庭師兼剣術指南役の魂魄妖夢が立っている。

「新人の紹介もかねて遊びに来ただけど・・・」

悠太のほうを一瞥する。

「あゝ、スキマは人間が通るものじゃないわよ。妖夢、布団に寝かせてあげなさい」

はい、とだけ答えて悠太を担ぐ。

効果音を与えるなら“ひよい”だろうか。それぐらい軽く持ち上げた。

妖夢が寝かせて戻ってくる間に紫たちは居間に場所を移した。

妖夢が戻ってくると、幽々子が「お茶とお茶菓子を持ってきて頂戴」と言い、妖夢が忙しそうに台所へ行く。

紫は悠太を幻想郷へ連れてきた経緯を話す。

そのうちに妖夢がお茶とお茶菓子を持って戻り、話に混ざる。

そうしているうちにノックの音の後、失礼しますと声がかかる。襖が開き、悠太が入ってきた。

紫サイドアウト

悠太サイド

知らない天井だ……。

こんな下らないネタを2度も言う奴は売れないな、などと考えながら起き上がる。

どうやらここが紫さんの言っていた白玉楼らしい。

布団をどうするか考えるが、使ったものをそのまま畳んでしまうのはまずいと思い、そのままにした。

襖を開け廊下に出る。目の前には立派な庭。有名なお寺等にありそうな石を敷いて模様の描いてある芸術的な庭だ。確かこういうのを枯山水ていうんだっけ？

そんなことを思いながら、声のする方に向かって歩いていく。景色を見ながら歩いていくと、時折白い、ふわふわしたものが見える。

これが幽霊か、妖怪がいるんだし、いてもおかしくない。むしろ、ここが本当に冥界ならいるのが当たり前なのだろう。

と、考えているうちに、声のする部屋の前に着いた。軽くノックをしてから「失礼します」と声をかけてから襖を開けた。

「あら、よつやくお目覚め？」

紫さんが言う。

「ええ。おはようございます」  
もうすでに昼なのだが。

「ええ、おはよう。あなたも要る？」

そう言つて湯飲みを見せる。いただきますと言つてから座る。

銀髪の人が出て行き、数分で戻つてきて、お茶をくれた。普通にうまい。

「そうそう、あなたが主役なんだから、挨拶しなさい」

と、帽子にドリキヤスのマークのようなものを付けた女性の対面に座らされた。

「私は西行寺幽々子。冥界の管理人をしているわ。能力は“死を操る程度の能力”よ」

「俺は高野悠太。マヨヒガに居候をしています。能力は“小火器を創り出し、扱う程度の能力”です」

冷静を保つてはいるが、正直ビビッている。死を操る……。生かすも殺すもこの人の手の中ということだ。

「なにビビッてるのよ。幽々子はそんなことはしないわ」

紫さんは心を読んだように言う。

「そうですね。そんなバンバン死なせていたら、すでにここは満員御礼ですよ」

冗談を言える程度まで何とか持ち直した。

「そうそう、あなたはそれぐらいの心意気で行かなきゃ。なにせ、あの八雲に気に入られてるんですもの」

はい？

八雲つて、紫さん達のことだよな？

「紫は自分が連れてきた程度で家に泊めたりはしないわ。しかも居候なんて、普通させないわよ」

幽々子さんが言い切ると、俺は紫さんのほうを向く

紫さんはニヤニヤとした笑いをしている。

遊ばれているのか照れ隠しかわからない……。

自分の中で一時保留にしておく。



「で、こっちのこっちが」

「庭師兼、幽々子様の剣術指南役を務めています、魂魄妖夢です。種族は半人半霊。能力は“剣術を扱う程度の能力”です。よろしく願います」

「こちらこそよろしく願います」と頭を下げる。

「紫と違って、礼儀正しいわね」

幽々子さんが茶化す。

「別にいいじゃない、礼儀なんて。私より強い妖怪なんて殆どないんだから」

お茶を啜りながら紫さんが言う。確かにそうだが、礼儀は大切だろう……。

その後俺は藍さん、妖夢さん、橙と一緒に雑談をしていた。

そのときに布団出しっぱなしですが、よかったですか？と聞くと「ええ、洗濯も必要ですから、そのまま大丈夫です」と言われて杞憂だったことに胸を撫で下ろした。

追伸、帰りもまたスキマで気絶したのは言うまでもない。

## 初めての人里（前書き）

サブタイトル考えるほうが本文考えるより難しい。

## 初めての人里

翌日

目が覚めた。

どうやら気絶してそのまま寝てしまったらしい。部屋に差し込む日の光が眩しい。

襖を開けて居間に行く。

「おはようございます」

八雲家が集合して朝食をとっていた。

「遅かったわね。そんなに私のスキマは気持ち良かったかしら？」  
嫌味っぽく言われ、返しに詰まる。

「まあまあ紫様、彼は人間なんですから。スキマは普通の人にはきついものですから。それに、毎回気絶しているんですから・・・」  
そう言っただけでもフォローする。

「藍は甘いわねえ、こういうのは慣れよ、慣れ。それに、ここに帰るにはスキマを通るしかないんだから」

何でもマヨヒガは幻想郷と外の世界の境界に建っていて、スキマなしでくるのは非常に難しいとのこと。

話を始める前に席に着き、朝食を食べだした俺は、話半分だが、スキマを使わずにくるのは難しいというのを聞かなかったことにするが、ただの現実逃避である。

そして朝食を食べた後は30分ほど休んでからトレーニングを行う。いつもどおり走り込み、筋トレをした後は、銃を創り出す練習をする。

創り出したものは、俺の“消える”という意志に反応して消えるようになっていた。

なので、作った後は消して、スペースをとらないようにしているのだが、普段から持ち歩く必要は無いが、急に襲われたときの為にすばやくイメージし、創り出せるようにする練習である。

一日かけて拳銃であればすぐに創れるようになった。時間にして1秒未満だ。

そうして、今度はアサルトライフルを作る練習に入る。そうして日が暮れていく。

一週間後

「おはようございます」

居間に行くとき紫さんが居らず、藍さんと橙が朝食の準備をしていた。相変わらずまだ寝ているのか。そう思いつつ準備を手伝う。

紫さんを起こしに行くのは橙の仕事だ。

妖怪とはいえ、女性の寝室に男である俺が入るのは気が引ける。

いつもどおり橙が起こしに行くと思った矢先

「悠太、紫様を起こしに行ってくれ」

藍さんにそういわれた。

「え・・・それはいつも橙が」

「紫様から今日は悠太に起こさせると承っていてな。何か話してもあるんじゃないか？」

それじゃあしようがない。

そのまま言われたとおり紫さんの部屋まで行く。

「紫さん！朝ごはんですよー！起きてくださーい！」

そう言う中から

「入りなさい」

拒否を許さぬ厳格な声が出た。

ゴクリと唾を飲み込む。

「し、失礼します」

襖を開けると布団に座っている紫さんがいる。

「何か、御用でしょうか」

紫さんが口を開く。

「あなたには今日から人里で暮らしてもらおうわ」

一言、そういわれた。

「今まではあなたの能力を使いこなさせるための練習期間。人里ではそんなことをするスペースが無かったからね。でも、あなたはこの数日ですっかり能力を使いこなせるようになったわ。だから、マヨヒガ《ここ》はお終い。あなたには独り立ちしてもらおうわ」

ああ、あのときのニヤニヤとした笑いは気にいってるから能力の練習もさせてくれたし、居候もさせてくれたという当たりの笑いだったのか。

「住まいは用意させてあるし朝食を摂ったら人里に行ってもらおうわ。心配することは無いわよ。妖怪は人里を襲わないし、いい人たちもたくさん居るわ。仕事は自分で探すことね。これは一週間分の生活費よ。」

そう言っただけでいくらかわからないが、お金の入った袋を渡された。

「今まで、ありがとうございました」

そのまま頭を下げる。

「そんな畏まらなくても、幻想郷にいる限り会えるんだから。偶にはそつちに行くわよ」

そう言っただけで頭を撫でられた。

人里についてからは慧音という人が案内してくれるらしい。

里の人に聞けばわかるはず、と言われた。

朝食のときに俺が独り立ちすることを聞かされた藍と橙は、出る際に病気や怪我に気をつけるなど、心配してくれているようだった。

そのままスキマに落とさた。

気絶したのは言うまでもない。

## 初めての人里（後書き）

感想、批判、使用してほしい銃などあったらどんどん言ってください。  
筆者が使えると思ったシーンで必ず出します。

初めての寺子屋（前書き）

真面目にサブタイトルが浮かばない・・・。

先週から七夜の短刀の製作始めました。



## 初めての寺子屋

「朝から気絶つてのも新鮮なもんだ」

と、心にも無いことを言いながら目を覚ます。

「起きたか？」

青い服に四角い帽子を被った女性が話しかけてきた。

「はい。ご迷惑をおかけしました」

「いいさ、困ったときはお互い様さ。君が高野悠太か？」

と、女性に名前を当てられ、びっくりしたが、彼女が慧音さんなのだろう。

「私は上白沢慧音だ。紫から君の案内を頼まれている」

こちらも自己紹介をして里の中に入る。

里の様子は、一言で言えばいい意味で新鮮だ。

むしろ里ではなく村という感じを得る。

人が往来し、あちこちで井戸端会議が行われている。

そうかと思えば道の片隅で一升瓶を抱き枕に寝こけているおっさんもいる。

子供たちは何人かで固まって走り回っている。鬼ごっこだろうか？

「いいところですね。里は・・・」

「君はこういった風景は初めてか？」

風景・・・、というよりも、古きよき時代と言った感じだろうか？  
困っている人には手を差し伸べたりする、現代にはない風景があった。

「俺が来た時代とはだいぶ違います。15歳ぐらいが万引きを武勇伝のように語ったり、悪さをしたのを咎めない親がいたり、いじめで自殺する子がいたりする・・・、そんな時代でしたね」

「酷い時代だな。そんな環境に里はなつて欲しくないな」

と、話をしているうちに家が見えてきたようだ。

「ここが、君に与える家だ。まあ・・・少し汚いが、掃除はがんば

つてくれ。家具はそれなりにあるはずだ」

と、言われて中を見てみるが・・・、埃だらけだ。

「箒や雑巾は？」

「すべて用意してある。はたきや塵取りもな」

良かった。一通り揃っているなら半日もあれば何とかなるだろう。

「それじゃあ、これからよろしく頼むぞ」

そう言つて、手を差し出してきた。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

そう言つて握手をする。これから大変になりそうだ・・・。

夕方

ようやく掃除が終わつた。

掃除が終わると、近所の方が来て、組合のようなものに入るように進められた。

具体的には、回覧板が来たり、使うゴミ捨て場の掃除や、月一の里の見張り、会合への出席などがあつた。

里に住むものの義務として、当然参加する。

里の見張りは、稀に群れで妖獣が攻めてくることがあり、それを守る、もしくは守護者に伝えて防衛するという仕事だ。

戦えるものは死なない程度に戦うこともある。命は惜しいというわけだ。

もっとも、戦いは俺の能力があれば何とかなるだろう。

里では、戦える能力を持つものは、能力を持つものの一割未満だそうで、大変重宝されている。

これを聞いて、俺は仕事を決めた。

その仕事とは、何でも屋。

所謂万屋というやつだ。

万屋といっても、やるのは護衛等の能力を使ったことなのだが……。

危険の性の高いことをするつもりだ。

まずは看板作り。

これは板を買ってそれに墨で書く。

しっかりとしたのが欲しいが、それは金が貯まってからだ。

とりあえず宣伝をしなければ……。

しばらく考えるが、いい方法が考えつかない……。

そうだ、慧音さんから知恵を借りよう。

寺子屋

里の人に聞いて慧音さんが何所に居るかを聞いたら寺子屋だと言われ、様々な人に道を聞き、たどり着いた。

その時に宣伝も忘れない。

「慧音さんいますか……?」

そこで慧音さんは授業をしていた。

いや、当たり前だ。ここは寺子屋。現代で言う学校。

居るのは殆どが子供、小学校レベルの問題を解いていた。まあ、問題のレベルはそれぞれ違うようで、教える側からしたら大変だろう。

「悠太か、今は授業中だが……、何か用か?」

そのまま店を出すのに宣伝したい旨を伝えると、

「知恵を貸すのはいいが、君が来た時代のことを生徒たちに教えてあげてくれないか?」

二つ返事でOKを出す。

「あー、今日人里に来た高野悠太だ。今は始めたばかりの万屋をしている」

子供たちからは「誰ー?」「やら」「こんにちはー」と言った声が聞こえる。

「はいはい、静かにしなさい」

と慧音さんの一声で静まる。現代では考えられない……。

「俺は外人という部類なんだが、慧音さんに頼まれて、俺が来た時代の話をしよう」

そう言つて様々な話をする。

あれは確か・・・、36万、などとは言わずに、真面目に話をする。携帯電話というもので遠くの人と話が出来ることや、飛行機で誰もが空を飛べること、今では考えられないほど人同士が戦争をしていることを教える。

そうしていると、慧音さんがハンドベルを鳴らした。

授業終了のチャイムのような音だ。

「切りもいいしこれで俺の話はおしまいだ。また来たときにでも続きを話そう」

はーい、といい返事が返ってくる。

「悠太、今日はありがとう。おかげで生徒たちも楽しめたようだ」

「いえいえ、後半は俺も楽しめましたから。それに、これくらいお安い御用ですよ」

その後、効率のいい宣伝方法を教えてもらった。

一つ目は瓦版。町の広場にあり、殆どの人が見るようだ。

二つ目は回覧板。これも殆どの人が見るが、回すのは何か大きな行事があるときや、異変が起こったときのみのような音だ。

三つ目は新聞を作っている天狗（鴉天狗というらしい）が取材に来たときに宣伝するというもの。これは不定期ながら、回覧板よりは頻度が高く、里以外の人（妖怪たち）も見ると、これが一番効果が良いそうだ。

慧音さんにお礼を言つて、寺子屋を出た。

家に帰り、考える。

とりあえずやることは二つ。

一つ目は瓦版に貼る内容を考える。二つ目はどうやって鴉天狗と接触するか。

鴉天狗は妖怪の山に住んでいるらしいが、きわめて排他的で侵入者は徹底的に排除するらしい。何らかの許可を持っている者たちには何もしないようだが。

内容は考えてある。

特に強調したいのは“危険なことでも引き受ける”ということ。単なる万屋では駄目だ。

護衛、妖怪退治、その他もろもろ。様々なことが出来るということを強調する。

その旨を書いた宣伝用のチラシの案も完成し、簡単なメモをして寝る。

チラシを作るのは明日だ。

久々に長話をしたので精神的に疲れた。

いや、長話のせいではなく、こつち幻想郷とあつち外の世界の違いに疲れたのだろ  
う。

人里の一日（前書き）

七つ夜完成しました。

## 人里の一日

次の日

次の日の朝。早朝というわけではないが、朝早くに戸が叩かれた。

来客に驚きはしたものの、早速仕事か？と意気込んでいると

「はじめまして！」

修験者が頭に付けるようなものをして、ワイシャツ、ミニスカ、手には手帳とペン、首からカメラを提げた俺と同じほどの年だろうか？そんな女性が尋ねてきた。

「えー、はじめまして、おはようございます」

挨拶は大事だよな！

「おはようございます！私は“清く正しい”射命丸文と申します！」  
そう言っただけで名刺を出してきた。

名刺には“文々。新聞記者 清く正しい射命丸 文”と印字されている。

「新聞記者さん？」

「はい！紫さんから面白い外来人が居ると聞きました。取材してもよろしいですか？」

慧音さんに聞いた次の日に合えるとは……。運がいいな。

「勿論です。その代わり、この店の宣伝を書いてもらっていいですか？」

「ぜんぜん構いません！じゃあ、質問をしますので、答えていただきます」

聞かれたことは、名前、歳、能力、仕事。後は趣味や店のキャッチコピー等だった。

「とりあえず今回はこれぐらいでいいですね。またしばらくして、密着取材等をさせてくださいね？」

そう言つて翼を出して飛んでいつてしまった。返事ぐらい聞けよ。

まあ、運が良かったことに変わりはない。

キャッチコピーは“危険な仕事は任せてください。護衛から配達まで、何でもいたします。料金は成功後に、分割も受け付けます！”。これ。

うん、胡散臭いことこの上ない。

ともかく、これでOK。

後はこれを紙に書いて瓦版に張るだけ。

今から広場に向かう。

広場

関係ないが、この広場には龍神の石像といわれる石像がある。

何でも、幻想郷の最高神の像だとか。これには河童が手を加えて天気予報の機能が付いているそうだ。的中率は7割ほどらしい。



「これでいいかな？」

瓦版は、小さな屋根が付いていて、俺の身長より頭半分ほど大きく、紙を画鋏で止めるようにしてあった。

「これで来なけりゃ、廃業だな」

そう考えて広場を見渡す。

広場には家族、友達同士、昼休みの職人らしき人、カップルが屯<sup>たむろ</sup>している。

屯と言うと不良のような言い方だが、簡単に言えば各々昼飯を食べているところだ。

リア充爆発しろ。

そんな様子を見て昼だと知る。

射命丸の取材は短かったようで意外と長かったようだ。

飯なんて用意していないので、近くの定食屋に入る。頼んだのは肉うどん。

一人で食って代金置いてさようなら。

家に戻って、一応確認するが、人の入った形跡はない。

紙と筆でも置いておくか……。

とりあえず紙と筆を置いておき、里の探索に入る。

探索といつてもやることは散歩だ。まだ里に来て日は浅い。何所に何があるはわかっていない。普通に散歩をして・・・といつてももう夕方。

やばい、夕食の準備を何もしていなかった・・・。

現代ならスーパーで惣菜でも買うところだが、ここは幻想郷。そんな便利なところはない。

米は家にあるが、おかずがない。急いで魚と豆腐を買いに行く。

魚一尾に豆腐一丁、大根を買い家に帰る。夕食は冷奴に焼き魚と白米のみ。

食べ終わり、食器を洗っておく。

朝は普段食べていないが、どうしようか・・・。

そんなことを思いながら布団に入る。

・・・本当にどうしようか？

## 人里の一日（後書き）

まだまだ重火器の募集受け付けています。

また、質問等ありましたら、こちらも受け付けています。

## 初仕事（前書き）

七つ夜見事に壊れました。

作業用BGMにマリオRPG フタエノキワミメドレーに絵を付けてみたを聞いてたけど相変わらずカオス。

## 初仕事

翌朝

朝食用に糠漬けでも作るか？

しかし、糠漬けといっても、親が漬けているのを知っているだけで、糠床の作り方なんてものは知らない。

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥という諺の通り、知らないことは聞くもんだ。

と、言うわけで、寺子屋の前に来ています。

「すみませ〜ん！」

今は時間にして9時ごろ。朝食は既に摂ってある。

「悠太か、どうした？」

慧音さんが出てくる。

「実は、糠床を作りたいんですが、作り方がわからなくて・・・」

そんなことか、と快く教えてくれた。

いり糠に塩、水、昆布に赤唐辛子。これだけあればいいそうだ。

「完成までに1〜2週間くず野菜を漬け捨てするんだ。ちゃんと毎日かき混ぜなきゃ、すぐにカビが生えるぞ」

ものすごく丁寧に教えてくれて、いり糠がどこで手に入るかまで教えてくれた。

午前中に糠床を作り終わり、くず野菜も漬けた。すぐに完成というのは無理だろう。

それはともかく  
閑話休題

一つ依頼が来ていた。

依頼の内容は、紅魔館という所に紅茶の茶葉を届けて欲しいというものだ。

この紅魔館というところでは、メイド長という人がいるらしいが、忙しくて手が離せないらしい。

普通の人が行くのは危険だということでこちらに回ってきたようだ。

とりあえず支度をする。(具体的には銃器を作り、サバゲーで使っていた迷彩服を着てホルスターにハンドガンを入れてカバンを背負い、マガジンを作ってポーチに入れる)

作った銃はプライマリ\*1は89式小銃\*2のバイポット\*3とホ

ロサイト\*4を付けたもの。セカンドリ\*5はMk・23\*6にした。

ホルスターが大型の部類なのですんなりと入る。

茶葉はもう受け取ってあるので出発するだけだ。

必要な銃器はその場で作ればいい。

出発して、里を出る。

3時間ほどして見えてきたのは湖。

しかし霧がかかっているため、全貌は見えない。

傍まで行ってみると、水が透き通っていて、とても綺麗なことがわかった。

こんなところで釣りをしてみたい。そう思っていると

「ちょっとあんた！」

上から声をかけられた。

上を見てみると、青い服に水晶のような羽根が3つずつ、2対で合計6つの水晶があった。

「ここはあたいのなわばりよ！何かってに入ってるのさ！」

どうやら彼女の縄張り（？）だったらしい。

「ああ、それは済まなかった。ところで、紅魔館はこっちのほうでいいのかい？」

謝りつつも、紅魔館の場所を聞く。すると

「そんなことより！あたいのなわばりにはいってあやまってすむと  
思ってたの！？」

一昔前の不良のようなことを言い出す。

そう思っていると、近づいてきて地面に着地する。

「あたいとだんまぐじっこしなさい！」

俺は手を後ろに回し、閃光手榴弾スタングレネード\*7を作りピンを抜く。

「ああ、いいよ。その前に足元を見てごらん？」

ん？と言って間抜けにも足元を見る。

その足元に向けてスタングレネードを投げる。

その際に俺は目を閉じて後ろを向き、耳を塞ぐ。

耳を劈ひたしく音とともに目を瞑っていても判るほどの光が出る。

倒れる音がして、その隙に岸を回る。



30分ほど歩くと、紅い館が見えてきた。あれが紅魔館だろうか？

## 初仕事（後書き）

- \* 1：主に使う武器のこと。今回は89式小銃。
- \* 2：自衛隊の正式装備。5.56mm NATO弾を使用し、米軍の使用するM4A1カービンのマガジンと互換性がある。バイポットが標準装備されている。
- \* 3：三脚のこと。
- \* 4：銃器の照準器（光学機器）の一種で、戦闘機などのスクリーンに映し出される照準などと同じ原理のものを応用したレーザー投影のホログラフィックサイト。
- 詳しく説明するのは文字数が足りないもので、そのうち出てきた銃火器、機器の説明を作るのでそのときにでも。
- \* 5：プライマリが使えない、弾切れなどときに使う武器の事。
- \* 6：45口径で、装弾数12発。H & amp; K社が開発し、日本ではSOCOMと呼ばれる事が多い。そのままサプレッサーが装着できるように銃口がネジ状になっている。
- \* 7：爆音と閃光で相手の目を眩ませるもので、室内での使用のほうが効果が高いが、今回はチルノの至近距離で爆発した為、気絶した。

## 紅魔館（前書き）

COD：BOゾンビは楽しいけど、キャンペーンとマルチはそんなに楽しくないね。

4が一番中毒性あると思う。

## 紅魔館

さらに数分。館の前に来たのだが・・・

「寝てるよ・・・」

緑のチャイナ服を着た赤髪の女性が眠りこけている・・・。

揺すってみても起きる気配がない。

しょうがない、無断で入るか・・・？

そう考えていると、何かが刺さる、小気味いい音とともに、ぎゃー！  
という悲鳴のようなものも聞こえた。

見ると、先ほどの女性の頭にナイフが刺さっている。

「どのようなご用件でしょうか？」

首にナイフを当てられ、尋ねられた。

「・・・ここが紅魔館であってるのか？」

銃を捨てて尋ねる。

「先に質問したのはこちらですよ？」

ナイフの刃が皮膚に当たる。

「里から紅茶の茶葉を持ってきただけです・・・」

するとナイフが除けられ、振り返ると、完璧なまでの礼をしたメイド服の女性。

「失礼いたしました、私は十六夜咲夜。この紅魔館でメイド長をしております」

それにうるたえながらも答える。

「俺は高野悠太。里で万屋をしている」

「私のことは咲夜とお呼びください。館の中へご案内いたしますので後についてきてください」

そう言って歩き出す。その視界の端には先ほどの女性の死体が・・・

「あの女性は大丈夫なんですか？」

ああ、と短く返事をして答える。

「彼女は紅美鈴<sup>ほんめいりん</sup>。この館の門番をしています。腕は立つのですが、いつも昼寝をしています・・・」

と、呆れた風に言う。

館の中では、羽根の生えた少女たちが掃除をしていた。

「彼女たちは妖精メイド。この館でメイドをしています。といっても……」

見ていると、メイドたちはバケツをひっくり返したり、物を倒したりと失敗ばかりしている。

「見ての通り、殆ど仕事を成しません。お嬢様は質より量と、大量に雇っているのですが……」

と、咲夜さんは苦勞をしているようだ。

数分して大きな扉の前に着いた。

「ここがお嬢様の部屋です。くれぐれも失礼のないようにお願いします。それと、こちらで茶葉を預かっておきます」

そのまま茶葉を渡し、ノックを3回。

入りなさいという子供のような声に違和感を抱きながらも、失礼のないように入る。

「失礼し……ま、す」

失敗したけどね!!

前にいるのは十歳ほどの少女に翼の生えたもの。

「ようこそ、我が紅魔館へ。歓迎するわ、高野悠太」

「あー、もう知ってるのか？まあ、一応自己紹介ってことで、もう一度。俺は高野悠太。里で万屋をしている」

「私はレミリア・スカーレット。吸血鬼よ」

吸血鬼・・・？吸血鬼というと銃剣を持った若本声の神父と殺し合いをしたり、十歳の子供先生の師匠をしたり、何度も転生したり、その男をを殺しに行ったりするあの吸血鬼？

「ふむ・・・、事実は小説より奇なり、だな」

と、失礼なことを小声で言ってみる。

「あら、こつ見えてもあなたの20倍は生きているのよ？」

なんとという合法口リ。

「まあ、そんなことより。俺に何か用なのか？こんなだだっ広いところと呼んで」

「あなた、銃を扱えるのよね・・・？」

そう尋ねられた。

「まあ、一応能力は“小火器を創り出し扱う程度の能力”だが・・・、それがどうした？」

帰ってきた答えは意外なものだった。

「貴方、紅魔館<sup>こくま</sup>で門番をしない？」

は・・・？

何を言っているんだこのロリっ娘は。

「あー・・・、もうここには門番がいるんだろ？何で俺を？」

「私もここに来て10年程よ。でも、外にいたときに狙撃銃つてのを聞いてね。何でも遠くから物を撃つそうじゃない。今の門番は近距離・・・、まあ、格闘技ね。それは強いんだけど、遠距離がね・・・。それに貴方が加われば隙が無くなるじゃない」

なるほど。しかし・・・

近距離専門の門番がシエスタなんてしていいのだろうか？

「まあ、わかった「引き受けてくれるわね？」話は最後まで聞いて欲しいものだな。わかったとは言ったが、引き受けるとは一言も言っていないぞ」

レミリアはえー、といった顔をしているが無視だ。

「俺は他にも仕事が必要な人が出てくるだろう。そのためにもそれを受けるわけにはいかない。どの道住み込みになるんだろう？」

うー、と悔しそうな顔をするが、何か閃いたのか、途端に顔がにや



ける。

「なら、私の妹と戦って、貴方が負けたらここの門番になって貰うわ。勝ったら貴方に仕事を積極的に依頼してあげる」

ふむ・・・、仕事が増えるのはいい事だ。

「よし、乗った。まあ、偶には帰してくれよ？言った通り、他にも仕事があるかもしれないからさ」

「そこらへんは勝っても負けても優遇するわ。元は里のものを盗った形になっているんですもの」

そこらへんは融通がきくらしい。

「じゃあ、今からやるか？」

「何言ってるの、もう夕食の時間よ？勝負は夕食の後でどう？」

時間を見ると既に7時を回っていた。

俺はおとなしく夕食を頂くことにした。

## 紅魔館（後書き）

相変わらず銃火器、質問等募集。

要望があれば今まで出てきた\*のもっと詳しい解説をしようと思います。

## 初の弾幕じっしん(前書き)

MHP3のギギネブラ強いな・・・、誰か倒すコツとか教えてく  
ださい。

毒っただけでむかつくのにはギィギィまで出すとかもつねいやらし  
きる。

## 初の弾幕じっし

食堂で勝負の時間を知らされた。

8時半にレミリアの部屋に集合、9時に開始するそつだ。

食事を終わらせて約30分時間がある。

とりあえず吸血鬼の弱点を整理してみよう。

まず日光。

日光でなければならぬのか、日光に含まれるものが弱点なのか・  
・。

その次に十字架。そんなものは手元にはない。

清流……。家に清流があるわけない。

銀。今作れるもので唯一弱点になり得るものだ。

しかし、聖別とかしてないが大丈夫か？

そして今の装備はM4にMk23……。閉所でやるには不利だ。

そこで散弾銃を出す。散弾銃の名前はAA-12\*1。

これにした理由は、弾が多い（8発と20発があるが今は8発マガジンを使用）、リロードがたやすい、フルオート、様々な弾が使える。この4つにある。

後は・・・M500\*2とスタングレネードをいくつか作っておく。

弾は勿論銀弾。シルバーバレット

吸血鬼ものの映画に良く出てくる、鉛の上に銀をコーティングしてあるものだ。

準備はOK。

AA-12を持ち、M500をホルスターに入れる。

ちょうど時間だ。

「さあ、行くわよ」

ドアを開けてレミリアが入ってくる。

「俺がお前の部屋に行くんじゃないのか？」

そんな細かいことはどうでもいい、と返された。まあ、行く手間が省けてちょうど良かった。

移動している最中に聞く。

「吸血鬼は、銀弾を受けて平気か？」

レミリアはこちらを見ないで答える。

「聖別されていないければ、ある程度は問題ないわ。むしろ銀でなければ大したダメージにはならないと思うわよ？」

後は会話もなく、廊下を歩く音だけが反響している。

紅魔館地下

悠太サイド

俺の目の前には巨大な扉。材質は鋼鉄か？

「この中にフランは居るわ。お互いに死なない程度にしておきなさい。万が一の場合は咲夜が止めに入るけど、ゲガをしないほうがいいでしょう？」

俺も痛いのは簡便だ。

「でしょうね。入って、コインが落ちたらゲームスタートよ」

はは、ゲームか。俺の仕事を賭けたゲームだ。

鍵の開く音。

その後が続く錆どろしがこすれる音と共に扉が開く。

扉が閉まり、目の前のベッドには七色の宝石のようなものがついた

翼らしきものを背に付けた少女。

「君がフランドール？」

「うん。話は聞いてるよ、ゆーた。遊んでくれるんでしょ？」

彼女ら姉妹には遊びに違いないだろうが、こっちは仕事がかかっている。

「まあ、遊びだね。でも、遊びだからって手加減はしないさ。俺は負けず嫌いだからな」

あはは、と笑い、彼女は話しかけてくる。

「手加減なし？あはは！じゃあこっちも本気で行かないとね！」

瞬間、身の毛がよだつほどの寒気。

逃げる逃げると本能が叫ぶ。この感じは、初めて紫と会ったような・

そこまで思考していると腹に衝撃が走る。わずかな浮遊感の後に背中に衝撃が走り、口に鉄の味が広がる。

「が……くそ！」

いつの間にコインが落ちたんだ！？

急いでAA-12を取り出し、構える。

(敵は吸血鬼・・・、なに呆けてんだ！)

自分を叱る。

「あはは！頑丈だね！ゆーたは壊れない？」

バックショット\*3を2発撃つ。

散弾がフランに当たったようだが、当たったところをささる程度。

「クソツタレ！」

次の弾を決める。

まだ6発残ったマガジンを抜き、さっさとリロードする。

「何それ？全然効かないよ？」

威圧を与えるように歩いてくるフラン。

そこにリロードし終わって構える俺。

「だからあ、そんなのきかnバン！ツ！」

フランの左腕が飛ぶ。俺がリロードしたのはスラッグ弾、散弾銃専用  
の一粒弾だ。

「そんなのが、何だって？」

痛がっているが反応がない。



「ここで降参してくれば、俺もこれ以上撃たなくてすむ！」

フランに銃口を向けたままそう言い放つが無視。

痛がっているのか、降参する気がないのか・・・、そんな時、フランがスペルカードを発動する。

『禁忌「フォーオブアインド」』

そんな声が聞こえたと思うと、フランが四人になっていた。

「よくもやってくれたね・・・」

その目には怒り。

『禁忌「レーヴァテイン」』

左腕のないフランが剣を持つ。

バスターソード\*4の2倍ほどある剣だ。それを振り回している。

分身からも弾幕が出ていて、かなり厳しい。

「ほら、余所見をしているとやられちゃうよ？」

フランが振る剣からも火の玉の弾幕が出る。

それをAA-12で受けるが、そのまま放してしまった。

次の火の玉を避けたとき、分身の弾幕が迫る。

「フンッ！」

それを無理な体勢で避ける。

すると

「余所見しちやられちゃっつよ？」

横でフランが言う。

そして

「ガアアア！」

腹が焼ける。

見るとフランの剣が腹に突き刺さっている。

「だから言ったでしょ？殺<sup>や</sup>られちゃっつて

その目には殺意のみが表れている。

そこに

「おまえも・・・な！！！」

フランの首にM500を突きつけ、

一発撃ち込む。

片手で撃ったせいか、M500が手から離れる。

そして

「・・・ツツツ!!!」

フランの頭が、フランの体から離れる。

扉が勢いよく開く音がする。

扉が開き、咲夜とレミリアが入ってくるのが見えて視界がボヤける。

ああ、もう死ぬのか。

それが俺の最後の思考だった。

サイドアウト

## 初の弾幕ごっこ（後書き）

\* 1 散弾銃で、弾をフルオートで撃つ事が出来る反則。アメリカのM P S社が開発した。

\* 2 S & a m p ; W社が開発したリヴォルヴァー式拳銃。有名な4マグナム弾の約3倍の威力を持つが、十数発連射すると、2、3日手の痺れが取れないらしい。装弾数5発。

\* 3 対人、中型〜大型獣狩猟用の8〜9発の小粒を撃つ弾。

\* 4 片手剣と両手剣の中間ほどの大きさ、1・2〜1・4メートルほどの大きさの剣の事。

昨日の敵は今日の友（前書き）

火竜の逆鱗が出ねええええええ！

## 昨日の敵は今日の友

レミリアサイド

「ガアアア！」

悠太の叫びが紅魔館に木霊する。

「咲夜！」

レミリアが叫んだ。

「ジュン」

その後ろに咲夜が現れる。

「フランと悠太を止めに行くわ。連れて行きなさい」

咲夜は時間を操り、レミリアを抱っこして移動する。

動き出した時間。

中から一発の銃声がある。

鋼鉄の扉を押し開ける。

そこには腹にレーヴァテインが刺さった悠太と

「フラン！！」

胴体と泣き別れしたフランの生首が落ちていた。

「咲夜！貴方は悠太のほうに行きなさい！」

悠太は客人。フランと戦ってもそれは変わらない。

フランは吸血鬼。首だけになっても一晩もすれば回復する。

しかし悠太は人間。

妖怪のような回復力はない。

あそこは不味い。

ひよっとすれば心臓に傷を付けているかもしれない。

「お嬢様！かなり危険な状態です！」

心臓は傷こそついてはいないが、肺静脈が絶たれている。

そのため心臓に血液がいかずに血が止まってしまっている。

しかし、傷口がレーヴァテインの熱で焼かれ、出血は止まってはいるが、長い時間止まったままでは脳に障害が残る\*1可能性がある。

「咲夜！パチエに診せなさい！」

フランを看ながらも咲夜に指示を出す。

「畏まりました！」

次の瞬間には咲夜の姿と悠太の体は消えていた。

サイドアウト

咲夜サイド

時間を止めて大図書館までやってきた。

音もなく開く扉。

中では本を抱えて止まっている小悪魔に、机で本を読んでいるパチユリー様。

パチユリー様の前で時間を動かす。

「パチユリー様！！」

いきなり現れた私に驚き、レーヴァテインの刺さった彼を見て二度驚いたようだ。

「小悪魔！机にシーツを敷きなさい！早く！！」

小悪魔は多少引きながらも、出された命令を忠実にこなす。



パチユリー様の唱えている魔法の属性は木。

「心肺停止……、不味いわね。彼がこの状態になって今何分？」

「約1分です！」

そう、と短く答え、さらに木と水の混合魔法を唱える。

唱えきり、魔法が効いたか確認すると僅かながら脈が動いている。

指先に集中しなければわからないほど僅かな脈だが、確かに彼の心臓は動いている。

「不味いわね……、心臓は動いているけれど、息がまだ」

その言葉を聞いた瞬間私は動いていた。

顎を上げさせ、手で頭を固定し、固定した手で鼻を塞ぐ。そして彼の口に自分の口を付けて息を吹き込む。

人工呼吸を2回し、呼吸確認する。

7、8回繰り返したところで彼が息を吹き返す。

「やったわ！後は彼を永遠亭まで運んで頂戴！」

言い切る前に時間を止めて彼を運び出す。

サイドアウト

レミアアサイド

これは私のミス。

彼が銃を使うことは判っていたが、銃弾の材質まで自由に創れるとは……。

彼が使ったのはおそらく銀の銃弾。でなければこれほどまでに傷が焼け爛れていないだろう。

しかし、唯一の救いはその銃弾が聖別されていなかったこと。

聖別されたものというだけで我々吸血鬼は致命的なダメージとなる。

しかも銀というものは吸血鬼の天敵……。

傷つけられれば回復は遅くなる。

しかし、小さな粒ほどであれば1日で回復するだろう。

しかしこれは何だ？

巨大な弾が首を引きちぎったようにも見える。

刃物ではない。断面が歪で、まるで引きちぎったようだ。

彼が刃物を持っている気配がなかったことから推測できる。

彼はこれほどまでに大きな銃を使うのか……、そう考えていると

「おねえさま……？」

フランが目を覚ましたようだ。

「目が覚めた？」

「あはは……、負けちゃった……」

少し落ち込んでいるようだ。

「ごめんねフラン。私が彼と貴女を戦わせたばかりに……」

「ううん、お姉さまは悪くないよ。お姉さまの話聞いて戦いたくなったのは私だし、ゆーたと戦って負けたのも私。ゆーたは大丈夫？」

自分は頭だけになっても悠太を心配するフラン。そこに

「彼なら大丈夫よ。今息を吹き返して永遠亭で治療を受けているわパチュリーが入ってくる。」

私は、私が思っているよりも長く考えていたようだ。

「といっても、まだ危ない状態だけだね。後でお見舞いにも行っ

たら？」

冷たくしているが、パチュリーが軽く息を切らしているのをレミリアは知っていた。

「フラン、貴女は大丈夫？」

「今生きてるってことは大丈夫だよ。回復に何日かかるか判らないけどね」

それを聞きパチュリーは地下から出ていく。

サイドアウト

## 昨日の敵は今日の友（後書き）

い。  
\* 1：5分以上脳に酸素が送られないと脳の細胞が破壊されるらしい。

一 厄介（前書き）

現代だつたら死んでるレベル。

自宅の糠床エ・・・。

## 二 厄介

サイド悠太

暗い……。

見たことの無い闇。

深海のような孤独と共に感じる闇。

直前に起こったことを思い出す。

「ああ、そうか。俺は……」

負けたのか。

そう言葉が続く。

その時、僅かな光が見えた。

針の穴ほどの小さな光。

思わず俺はその光に向かって走り出す。

その後は何も覚えていない……。

生への執着が身体を動かしたのかも知れない……。

目が覚めると、見たことも無い天井が目についた。

「師匠！！彼が目を覚ましました！！」

慌しく部屋を出て行くうさ耳の女性。

それを見て永遠亭だと気付く。

暫くして永琳がやってくる。

「気分はどうかしら？」

「いいと答えられる奴はそう居ないだろう」

胸を貫いた傷は僅かな痕を残しているだけだった。

「貴方が運ばれてきたときはとても吃驚したわ。胸に巨大な傷が出来ていたんですもの。貴方、よく生きてたわね」

と永琳は言った。

「俺が一番吃驚してるよ。何せ剣が胸を貫いたところを目の前で見ただ。シヨック死しなかったのが奇跡だろう」

そこで身体を起こそうとするが



「貴方はまだ絶対安静。面会謝絶とまではいかないけど、少なくともあと2日は寝たきりよ。・・・まあ、付き添いありでなら、トイレくらい行ってもいいけど」

と、言われた。

それからもう地獄だ。

暇、暇、暇暇暇暇ヒマヒマヒマヒマひまひまひまひま。

42時以上ベッドから出られないことがこれほど暇とは・・・。

おまけに寝すぎて夜も眠れない。

能力の使用まで制限された。

こんなことでは身体が鈍ってしまうということ、こっそり練習をしましたが・・・

「貴方って人は、医者言うことが聞けないのかしら？」

タイミング悪く見つかってしまい、見張りまで付けられた。

そして5日後

悠太サイド

「ようやく退院か……。」

3日目からは随分楽になった。

ある程度出歩けるようになった。輝夜と話をしたり永遠亭内を散歩したりと、鈍った身体をある程度動かすことが出来た。

「正直、あの傷が5日で治るとは思わなかった……。」

常識に囚われてはいけないといわれたが、流石にこれは……。

「もう重症で来ないようにしなさいよ」

と輝夜に言われた。

俺は退院してからすぐに紅魔館に向かった。

服は縫合してあって何とか着れるようだった。

……どうにかして新しいのを手に入れねば。

そうしているうちに、妖怪の類に遇うことなく紅魔館まで着くことが出来た。

門の前では美鈴が立ってしっかりと門を守っていた。

装備は以前と同じく89式にMk・23を使っている。

「こんにちは。お身体のほうは大丈夫ですか？」

美鈴が尋ねてくる。

「無茶しなければ大丈夫だって言われたよ。それよりも通っているか？」

美鈴が返事をする前に咲夜さんが現れた。

「悠太様、お待ちしておりました」

おかしい、アポは取ってなかったが・・・

そう考えているうちに目の前にはレミリアの居る部屋の扉が。

「便利な能力だな・・・」

「それ程でもございません。それでは中へ」

扉を開けられて中に入る。

中では吸血鬼姉妹が仲良くティータイムをしていた。あるえ？

「あら、いらつしゃい悠太。歓迎するわ」

招き入れたくせに。

「それはどうも。ところで・・・」

ちらりとフランのほうを見る。

「フランの首を取ったところまでは記憶があるんだが・・・、ありや夢か？」

首を傾げながら聞く。

「いいえ、事実よ。現にフランは完全に治るまで3日かかったわ」  
完全に治るまで？

「私達吸血鬼は頭だけになっても一晩あれば完全に治るわ。今回時間がかかったのは貴方の銃弾が銀で出来ていたからでしょうね」

聖別してなくても効果はあったようだ。

「もしあれが聖別してあるものだったら、フランはここには居なかったでしょうね」

そこで話を止め、紅茶を一口飲む。

フランを見ると、何かもじもじしている。

「フラン、悠太に言いたいことがあるんでしょっ？」

レミリアが言う。

「えっと……、ごめんなさい！」

フランが頭を下げた。

「へ？なんで謝るんだ？」

「貴方を殺しかけてしまったことを謝っているんです」

咲夜が耳打ちする。

「ああ、そういうことならこっちが謝るべきだ。フランはその気が無かったかもしれないが、俺には明確な殺意があって引き金を引いた。すまなかった」

俺も頭を下げる。

「はい、これでこの話はお終い。いいわね？二人とも」

お互いに頷き、そのままお茶会になった。飲んだことのない美味さがあった。

そして

「悠太、勝敗のことなのだけど貴方のk「俺の負けだな」え？」

驚いた顔をするレミリア。

「いや、俺の負けだろ。あのままやってたら俺は確実に死んでたよ」  
そう言ってレミリアに依頼内容を再確認する。

「紅魔館の門番・・・、主に遠距離からの侵入者の妨害でいいんだっ  
たな？」

「ええ、そうよ。あと、たまにはフ란の遊び相手を務めてもらってもいいかしら？」

フ란のほうを見ながらレミリアが言う。

「俺は全然構わない。まあ、あんなことはもう勘弁だけだな」

俺とレミリアは笑いあう。

「大丈夫よ。紅魔館が主、レミリア・スカーレットの名において誓  
うわ」

「それは安心できそうだ。これから暫く、よろしく頼む」  
そうして握手をする。

「そうだ、備品代ぐらいいは出してくれますよね？」

勿論、とレミリアは言う。

「なら、紅くて動きやすい服と、ネット。それから野球帽と無地の

麻布、紅い染料をお願いします。ネットは赤か、出来る限り薄い色をお願いします。」

首を傾けながら

「何に使うかは判らないけど、とりあえず明後日までには用意させるわ。咲夜」

畏まりました。

声が聞こえた時には既に咲夜さんは居なくなっていた。

少しして咲夜さんの代わりであろうメイドが入ってきた。

「ありがとうございます。ちなみに、無闇矢鱈に撃つわけにはいかないんですが、要注意人物みたいな人は居ますか？」

「彼女よ」

くると分かっていたかのように写真を取り出す。そこには

「霧雨魔理沙よ。うちの図書館にある本を盗み出していくの。私は構わないんだけど、パチエがねえ・・・」

まさか、恩人である魔理沙が盗みを働くとは・・・

「殺さない程度で頼むわ。泥棒とはいえ、殺すほど私も無慈悲じゃないわ」

まあ、仕事と割り切ってやるしかないか・・・。

「じゃあ、俺は仕事がしやすいようにしてきます。・・・旗に出来るような棒と布切れを10セットほど貰えますか？」

これは風を読みやすくするための処置だ。

殺さずと言うことは非殺傷性の銃弾を使わなければならないから、余計に流されやすくなる。

「ええ、メイドに言えば持って来るわ。少し待ってて頂戴」

近くにいたメイドが慌てて出て行く。そしてまた一人のメイドが入ってくる。

・・・なんというか、忙しいな。

数分して10本の旗を持ってメイドが入ってきた。

「これで十分です。ではフィールドを造ってきます」

そして部屋を出て、うる覚えながらも館を出る。

館を中心に約600メートルほど離れたところの地面に旗を挿す。

これを上空から見ると円になるようにする。

約370メートルおきに旗を挿した。



紅魔館に戻り、屋上へ出る。

「おお・・・」

それなりの高さがあるからだろう、景色は爽快だ。360度見渡せるここなら、メイドを使えば十分見張れる。

下に降りて、レミリアの部屋に向かう。

「レミリア、見張り用にローテーションでメイドを借りたいんですが、出来ますか？」

即座に返答した。

「何人必要かしら？」

「5人いれば十分足りません。見つからないようにする為に、俺と同じ服装をすることになるので、さっき言った材料を後5セット用意してください。」

「咲夜に伝えておくわ。他に必要なものは？」

考えてみる。600メートルなんて普通は分からない。

「後は高倍率の双眼鏡を6つと、小型の無線機みたいなものがあればそれを頼みます。」

「分かったわ。依頼内容だけど、定休日は無いけれど、不定期に休んでもらって構わないわ。食住はきっちり用意するし、寝るところも提供するわ」

「了解。<sup>ヤ</sup>これより任務を開始する」

敬礼をして答える。

## 一ノ厄介（後書き）

- ほんと、よく生きて、しかもM500なんて化け物撃つたよなあ・・・

番外編〜今日は何の日?〜 (前書き)

誰がなんと言おうと今日は土曜日です。

番外編〜今日は何の日?〜

紅魔館

「パーティーをするわよ!」

その一言から始まった。

フランは喜びの声を上げ、咲夜はまたかといった表情をする。

「今日の夕方から始めるわよ!全メイドに伝えなさい!」

紅魔館、屋上

「寒くなったもんだなあ・・・」

他のメイドとともに床に伏せ、双眼鏡を覗きながら一人愚痴る。

季節は冬に入りだす12月。

その中でギリースーツを着ているとはいえども、寒いことに変わりはない。

明日から下に何か厚いものでも着るか、そう考えていると、いつの

間にかメイドが交代する時間になっていた。

「うっし、そろそろ交代が来るから、準備しとけ」

と、数日前に、また懲りずにやってきた魔理沙が次はどんな手を使うのかを考えつつ、メイド達に言い放つ。

5分ほどで交代も終わり、またもメイド達と雑談をするが、その中で興味を引いたのが、今日のパーティーの話だ。

何でもレミリアがいきなりパーティーをすると言い出したらしい。

しかし、いきなりのパーティー発言は、初めてではないらしく、妖精たちはテキパキと準備をしているらしい。

・・・といっても、質より量のメイド達なので、咲夜さん一人とメイド達二十人が同じような感じらしいが。

咲夜さん、過労死だけには気をつけてください。

そんなことを思っているうちに夕方になってしまっていた。

大広間

メイドに呼ばれ、大広間に向かうと、そこでは準備万端といった感じで席が作られていた。

和風のように座るのではなく、立ったままのようだが。

「悠太、これに着替えなさい」

いきなり後ろに出て話しかけてきた咲夜さんにビビりつつも、差し出されたスーツらしき服に着替える為に自室へと向かう。

着てから気づいた。これスーツじゃねえ・・・、タキシードだ。

おいおい、こんなもん着るのは初めてだぞ、俺。

まあ、そんなことは気にせず大広間に向かう。

大広間では、音楽が鳴り響き、メイド達が談笑している。

「もう少しでお嬢様方がお見えになりますので、お待ちください」

またも後ろに出てきた。咲夜さん、あんた楽しんでるだろ・・・。

「まあ、違つと言えは嘘になりますね。今夜のパーティーを楽しんでいってくださいね？貴方が来てはじめてのクリスマスパーティーを」

そういうと、お辞儀をした後トランプを落としたかと思うと既に姿が消えていた。

おー、今日はクリスマスだったか、と思いつつ、気づいてはいけな

い事に気づいてしまったが、常識に囚われてはいけないのだろう。。。

少しして、着飾ったスカレット姉妹が現れ、挨拶をして、パーティーが本格的に始まった。

始まってすぐに姉妹が咲夜をつれてこちらにやってくる。

「どう？楽しんでるかしら？」

始まって数分もせずに楽しんでると聞かれても・・・、そう思いつつも

「楽しませていただいています」

と、返す。

「ならよかったわ。これは半分貴方歓迎パーティーなんだから」

そう言われた。

「ゆーたー！」

そう叫びながらフランがタックルをかましてくれる。

「タックルはやめろおおおおおおお・・・」

と、ドブプラー効果を出しながら悠太は吹き飛んでいく。

一分ほどして戻ってきた悠太は、フランに、いきなりタックルをし



ないようにと注意をしているが、フランは笑っているだけ。

聞く気は無いようだ。

「ところで、パチュリーや小悪魔の姿が見えないが、どうしたんだ？」

と聞くと、アンチキリスト反基督の化身のような魔女がクリスマスにパーティーをするわけ無いでしょ？と言って書斎に閉じこもっているそうだ。

人が言わないようにしていたことを・・・、というわけなので。

「アンチキリスト反基督の化身のような吸血鬼が、クリスマスパーティーとはねえ」とあきれた様に言うと

「別に、それは周りがそう思っているだけで、私達はそうは思っていないわよ？外の世界もそんな感じなのかしら？」

そう言われた。

確かに周りが思っているだけで、吸血鬼達に見たらいい迷惑なのかもしれない。

「お姉様、ゆーた借りていい？」

と、フランが聞いてきた。

「ええ、構わないわよ。存分に遊んできなさい」

と、レミリアが返す。いや、決めるのは俺じゃないのか・・・、な  
どど思っていると、フランの喜びの悲鳴とともに、思い切り引っ張  
られる。

びっくりしていると、フランが

「なにか面白い遊びをしない？」

と聞いてきた。

何か、室内で出来て、それほど場所をとらない遊び・・・。

ああ、と一声上げ、

「じゃあ、あっち向いてほいでもしよう」

というところ、

「あっち向いてほいってなに？」

ああ、そこからか。

ルールを簡単に説明して、ゲームを始める。

十数分して結果は5勝30敗。

原因は吸血鬼の驚きの動体視力と運動能力だろう。

最初の5回こそ勝てたが、後はずっと負けた。

じゃんけんでは、何を出すかを始動で気づかれ、掛け声でもまた始動でバレる。

ああ、勝ち目なんて無いんだな、とっていると、無線に連絡が入る。

「多方向から妖怪の群れが押し寄せてきます！」

その無線をきっかけに、俺は屋上へと向かい、走り出す。

その間、無線で指示を出す。

「美鈴は門付近の敵を出来るだけでいい、殲滅しろ！咲夜さんは中に入ってきた妖怪を頼みます！」

そう言っつて、屋上に向かって全力で走る。

「状況はどうなってる！」

屋上で見張りをしていたメイドに話を聞くと同時に息を直す。

聞く限り、相手がいきなり攻めてきて、現在は咲夜さん、美鈴が玄

関前で食い止めているらしい。

「よし、こいつをとこいつを持って、門に向かえ。こっちを仕掛けて、十分離れたら連絡をよこせ。こっちはメイドに持たせて姉妹の警護だ」

渡したものはMac10\*1、通称イングラムの32発マガジンとC4爆薬\*2。

その間、数の少なくなってきた敵をM82A3、通称バレット\*3で狙撃する。今回は確実に倒す為に、ラウフォスMk221弾\*4を使う。

重く、でかい音をたてて発射されるこの弾は、1.5キロ先のイラク民兵を上半身と下半身を泣き別れさせた、とか、2キロ先の装甲車を破壊したとかいう伝説があるいかれた弾だ。

え？人に撃つていいのかって？妖怪に人權は無い。

一発撃つごとに大きく跳ね上がるが、密集している妖怪たち3匹をまとめて吹き飛ばす。

それが5分ほど続いたあと、仕掛け終わったという連絡が入ったので、門に足止めさせてからスイッチを入れる。

その後は、もう数が多すぎてバレットでは追いつかないのでミニガン\*5を使うことにした。

毎分4千発を撃つこの銃は、遠距離まで届くショットガンとして扱われるので、通称ペインレスガン。つまりは無痛銃\*6といわれている

る。

そうしているうちに周りには妖怪の死体だけになって、俺も大広間に戻る。

そして誰もいなくなった

ということは無く、逃げ遅れた美鈴が爆風に飛ばされ、気絶していた。

大広間では、片づけが進んでいて、レミリアが

「まったく、パーティーを邪魔するなんて、無粋な妖怪共ね！」

と、既にこの世にいない妖怪にキレていた。

そのままパーティーは終わり、俺は自室に戻って、そのまま眠りについた。

番外編〜今日は何の日?〜 (後書き)

\* 1 : 9ミリパラベラム弾を使うSMGで、まさにばら撒く為のSMG。

\* 2 : プラスチック爆薬。電気信管でのみ爆発する為、火に入れても爆発しない。

\* 3 : 対物理狙撃銃で、アメリカのSEAL'Sでも使われている。

\* 4 : 焼夷弾と爆裂鉄鋼弾を組み合わせた、爆発する弾丸。

\* 5 : 毎分4千発の7.62mm NATO弾を撃ちだす。意味は小型化したバルカン砲。

\* 6 痛みを感じる前に死ぬ為、ペインレス(無痛)銃ガン

## 初狙撃（前書き）

冬休みやばい、曜日の感覚麻痺してぜんぜん書いてなかった。  
てかBOやった。



## 初狙撃

やり取りの後、すぐに屋上へ行き、10倍率のスコープで周りを見渡す。

今回使うのはM14EBRにスコープとサイレンサーを付けたもの。

これはM14の中身をそのままにSAGE社セージが近代改修を行ったもの。

俺の使っているものは正確に言えばM21\*1になるのだろうが、気にしない。

セミオートであり、精度もいい。

数時間して、咲夜が戻ってきた。

「言われていた材料です。1セット分しかございませんが構いませんか？」

充分ですと答えると、一礼して姿を消した。

「さてと、やりますか！」

ネットは赤だったので気にせず次に。

麻布を鉢で3つに分けて置く。それを棒に固定して染料に漬ける。

時間はそれぞれ20分、30分、40分になると、微妙に違った色が出る。

これを乾かしているうちに、ネットを上下で切り、上は上半身の服へ、下は股下を作り、ズボンへそれぞれ留める。そしてネットへ結ぶ。頭には野球帽使い、視界を確保する。

若干布が余っていたのでそれを銃に着ける為にバラしておく。

約二日かかってようやく完成した。

その次の日には頼んでいたものが無線以外揃った。

流石は完璧で瀟洒なメイド、やることが違う。

同じ作業をしてギリースーツを5着作った。

やはり5着となると骨が折れる。

明日からが本番だ。

翌日

朝から麻布を鋏を使って切っていく。

昨日、一昨日と同じ作業をして、作業をしている間は妖精メイドに監視をさせている。

監視は、目を離さなければ、お喋り飲食を自由にしてある。

軽い休憩時間のようなものだ。

ただし昼寝、読書のような事は禁止しているので、話す内容がなければ暇なだけなんだがな。

同じく二日して5着完成した。

明日からはこれを被ってもらう事になるが、平気だろう。

サイドアウト

レミリアサイド

彼は屋上で何やら布を鋏で切り赤く染めている。いったい何に使うのだろうか？

「咲夜、メイドは何をしているの？」

後ろについている咲夜が答える。

「各場所からローテーションで選ばれた妖精メイド5名以外はそれぞれ場所で仕事をしている“はず”です」

強調したのはほとんどの仕事の意味を為さないからであるが……。

「そう、屋上のメイドは仕事をしているのかしら？」

「それは心配ないでしょう。悠太がついていますので」

それなりに咲夜は信頼しているようだ。

「そうね。まあ、メイドにとっても半分休憩みたいなものだし、流石にサボりはしないわね……あ」

「どうされました？お嬢様」

何かを思い出したかのようにレミリアが声を上げる。

「美鈴が昼寝をしていたら起こすように言っのを忘れてたわ……」

そつえばそうですね、と咲夜も同意した。

サイドアウト

悠太サイド

「今日からはこれを被ってもらおうが、見つからないようにする為だ。」

我慢してくれ」

そう言つて5人にギリスーツを渡す。

俺もそれを着ているのでしょがないといった所だろう。

「これを着ているときはこまめに水分補給をしろよ、蒸すからな」  
注意事項を言つて監視に戻る。

見張り役の妖精メイドが何度か入れ替わつた後数十分して黒い影が見える。

メイドに確認を取つたところ、あれが魔理沙で合っているようだ。

「騙して悪いが仕事なんでな、死んでもらおう」

騙してもいないし、死にはしないが、狙い打つ。

隣には確認を取つた妖精が観測手<sup>スポッター</sup>\*2として見ていてもらう。着弾の確認だけだが。

今回も使うのはM14EBRにスコープとサイレンサーを付けたもの。

気の抜けたような音とともに魔理沙の横を弾が通ったようだ。

「びびってるな」

魔理沙があわてた様子で止まり、キョロキョロと周りを見回すが、600メートル以上離れて、カムフラージュしていればバレルことはまず無いだろう。

その後にもた息を止めて狙い撃つ。

今度は当たったようで、確認に行かせたメイド曰く「額の所に丸い痕が付いていた」とのこと。

その後はメイド数人が魔法の森手前まで運んで行っていた。

・・・手足を縛った後簀巻きにして。

「初めてのお仕事、お疲れ様」

そう言って咲夜が紅茶を渡してきた。

「いや、失敗だよ」

首を傾げた咲夜。

「見事に魔理沙は撃退したじゃない」

「狙撃はワンショット・ワンキルが基本だ。2発撃った時点で失敗さ」

そう言っつて俺は座る。

「貴方の仕事は撃退よ。殺しじゃないわ」

紅茶を一口飲み

「そうだったな。そうだ。無線はあとどれくらいかかりそうだ？」

「今河童に言っつて揃えさせているわ」

・・・なぜ河童？

「流石に今日は来ないだろう。みんな楽にしてていいぞ」

そう言っつた途端にがやがやと雑談大会が始まった。

今までは多少緊張して、口数が減っつていただけらしい。

その後はお役御免。

レミリアが今日はもう来ないだろうと判断した為、屋上に居た全員が紅魔館の中に戻っつて行っつた。

俺はそのまま書齋へ行き、本を読もうと思つ。



## 初狙撃（後書き）

\*1：M14の中距離の精度が良かった為、それにスコープを載せたものがM21という名前で米軍に採用された。

\*2：文字のまま狙撃の成功、失敗を見る以外にも、近距離の敵を倒したり、風の向き、風速、距離、指令などを引き受ける者。一般的には狙撃のベテランがするものだが、今回は狙撃の成功、失敗を判断する為のものなので、メイドにやらせた。メイドもこんなことをするとは思っていなかったと思う。

**図書室怖い（前書き）**

あけましておめでとございます。

本年も東方野戦録をよろしく願います。

てか冬休みマジで曜日の感覚おかしくなる。

## 図書室怖い

書斎はフランと勝負をした部屋の奥にあった。

書斎。

そう言われると広くても紅魔館の客間一部屋位だと思っていた。

実物はそんなもんじゃなかった。

広い、広すぎる。

具体的に言えば多分国立図書館ぐらいはあるのではないだろうか？

それほど広がった。

外見は地下にあるのでわからないが、多分一般的な市立図書館程だろうが、咲夜さんが空間を弄ったのだらう、それ位大きくなっている。

本の数はそれこそ数え切れない。

中にはここに住む魔女が記したという本もあるらしい。

それよりも、ここには外から持ち込まれた本も多数あるという。

その本が保管されているスペースにこの書斎の司書、通称小悪魔さ

んに案内を頼むことにした。

「それでは案内よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。

服装はギリースーツ（赤なのでそれこそムツクに見える）を脱ぎ、普通に迷彩服にしている。

ハンドガンは右の腿に吊っているホルスターに入れている。

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

お互いに挨拶は済ませて、そのスペースに向かった。

「おお・・・」

感嘆というのだろうか？

10年前ほどに来たと言っていたからどれ程の本があるのかと思えば

「外の、悠太さんが読める日本語で書かれた本はここから・・・」

.....  
「.....までになります」

ヨソウガイデス

一つ縦10メートル、横50メートルほどの本棚3列分はあった。

古くは明治ほどから、新しいのは2001年の物があった。

「あ.....、ありがとうございます.....」

その量に気圧されていると

「一応これを持っていてくださいね」

そういわれて信号弾と書かれたスペルカードを渡された。

「迷うと本当に洒落にならないので、迷ったと思ったらすぐに使ってくださいね」

その言葉が洒落になりませんで.....。

お気をつけて〜という言葉とともに、小悪魔さんの姿が見えなくな

っていく。

ここで一つ訂正だ。

ここは少なくとも国立図書館よりも広い。

と、まあ、雑談はこれくらいにして、本を探す。

数十分して・・・

「こんなもんでいいか・・・」

手にした本は3冊。

吸血鬼ドラキュラ、ザ・シューターの上下巻の3冊。

理由としては、ドラキュラは吸血鬼ものだから、ザ・シューターは狙撃手が主人公の話だからである。

そんなに多くても面倒なので3冊にした。

そして小悪魔さんに会う為に歩き出したのだが・・・

十数分後・・・

「迷った・・・！」

まず間違いなく迷った。

しかも信号弾のスペルカードまで落としてしまった・・・！

やばいやばいと考えた末・・・

「しょうがない、あれを使うか・・・」

俺は能力で55式信号拳銃\*1を出す。信号弾の色は赤。

それを出来る限り真上に打ち上げる。

後は助けが来るのを待つだけ・・・。

数十分後・・・

5分ほど置きに真上に信号弾を打ち上げ、ここに居ることをアピールしている、5、6発打ち上げたころ小悪魔さんが来た。

「大丈夫ですか？」

そう聞いてきたので

「性欲を持って余す」

某蛇のネタを言うが・・・

「そ、そうですか・・・」

引かれた・・・。

流石にそうか・・・。

「今は大丈夫ってことをアピールする為に、冗談を言ったんです  
が・・・」

「そ、そうですよね、あはは・・・」

完全に信用を失ってるな・・・。

「ま、まあ・・・大丈夫ってことで、読書スペースまで戻りましょ  
う」

小悪魔さんは飛んで、俺は徒歩でその入り口付近にあった読書スペースに戻る。

「あら、生きてたの？」

戻った直後にパチユリーさんがかなりブラックな冗談を言い放つ。

「正直洒落にならないので・・・、そういう発言は控えていただ



きたいのですが・・・」

「そう？何処かに以前見つからずにそのまま行方知れずの人がこの図書室で出ただけだ」

マジで洒落にならなくて・・・。

そんなことを考えていると

「パチユリー様、そんなありもしない嘘はやめたほうがよろしいですよ？」

小悪魔さんが冷静に言っていた。

「本当、こあには冗談が通じないわね・・・」

それは俺も同意だ。

「俺が救出されて大丈夫だという証拠で冗談を言っても、本気にしていたしな」

小悪魔さんが顔を赤くしながら「もうよしてくださいよ・・・」と呟いている。

「ちなみにどんな冗談を言ったのかしら？」

そう聞かれたので

「『性欲を持って余す』って言ったんだよ」

パチユリーさんは絶句し、一言。

「それは流石に冗談でも引くわ・・・」

パチユリーさんにも引かれた・・・。

「あ・・・、まあ、うん。とりあえずこの三冊を借ります」

許可を貰って、宛がわれている自室に戻る。時間としては昼ごろ。ちよつど昼食の時間だ。

俺は本を自室の机に置き、食堂に向かう。

## 図書室怖い（後書き）

\*1：現在自衛隊でも使用されているもので、口径は40mm。装填数1発の中折れ式。

**食事（前書き）**

冬休み最終日です。

今回は連投します。

## 食事

### 食堂

食堂にはもう全員が集まっていた。

「悠太、遅いわよ」

「時間には間に合っていると思うが・・・？」

夕食のギリギリの時間だが。

「五分前行動というものを知らないのかしら？」

「そういえばそんな言葉もあつたな・・・」

その言葉にレミリアは不満げな顔をする。

その言葉も入ってきていたのか・・・。

「お姉様、そうカツカしてたら食事が不味くなるわ」

そんな顔のレミリアに対してフランが言った。

「そうよレミィ、食事のときぐらい怒らないほうがいいわよ」

パチュリーも続けて言う。

「そうね。悠太、次からは五分前行動を心がけなさい」

「次からは気をつけます」

そう言うとレミリアは笑顔になり、食事が始まった。

食堂では雑談を交えながら食事が進んだ。

食事が終わり、自室へ戻る。

明かりを点けて、机に向かい、腰掛ける。

そうして、今日借りてきた吸血鬼ドラキュラを読む。

書き方は登場人物の日記調になっている。

あらすじは、ミナ・ハーカーがドラキュラ伯爵に噛まれ、吸血鬼になりつつあるのを、ヘルシング教授等が協力し、ドラキュラを倒して吸血鬼化を止めるという話。

この中で吸血鬼はんにくを嫌い、十字架を嫌い、聖餅\*や聖水は身を焼く。川・海・湖畔、流れる堀を渡れず、太陽に目をそむけ、聖書に耳をそむけ、夜しか動けず、安息のねぐらは唯一暗く小さな棺だけと書かれている。

これは本当なのだろうか？

明日にでもレミリアに聞こうと思っ。

途中に栞を挟み、明かりを消す。

続きは明日読む事にしよう。

ベッドの中、明日は馬鹿正直に進入する事はないだろうと考えつつ、意識を落としていく。

二度目の襲来（前書き）

いろんな銃が出せて俺得



## 二度目の襲来

翌日

8時頃に起きて、朝食を食べる。

内容はトーストにイチゴジャム、牛乳、サラダだ。

朝食の際に、昨日疑問に思ったことをレミリアに聞く。

どうやら半分本当で、半分はガセらしい。

日光や聖水、聖餅や銀は厳しいが、再生できないほどではないらしい。

十字架は平気なようだ。寝床も、紅魔館があれば安心できると言っていた。

朝食を食べ終わり、直ぐにギリースーツを着る。

見張っていた妖精によると、早朝、遠くに黒い点が動いていたとか  
なんとか・・・、魔理沙が侵入の下見にでも来ていたのだろうか？

そんな事を考えつつも、銃を作り、伏せる。

今回の銃はPSG - 1\*。

ほぼ据え置きなので、重さは気にしない。

そして時折妖精たちの雑談に混ざりつつ、双眼鏡からは目を離さない。

午前中、そろそろ昼飯時だろうと思われる時間に魔理沙はやってきた。

いや、魔理沙たちがやってきた。

周りには大量の人形が纏わり付いていて、その傍らには金髪の人形遣い、アリス・マーガトロイドが着いていた。

基本的に使う硬質ゴム弾頭は、非致死性ながらも至近距離であれば死に至るほどの威力を持つが、遠距離では豆鉄砲ほどになる。

以前使ったものは、火薬の量を増やして、顔に当てれば脳震盪を起こすレベルではあったが、何か物をクッション代わりに使えば効果はほぼ無くなる。

今回は狙撃を辞め、紅魔館内で迎撃する事にする。

「全員ギリスーツを脱げ！狙撃は中止！門付近、もしくは館内で迎撃する！」

美鈴のほうを見ると、またも寝こけていた。

PSG-1で頭を撃ち、起こさせる。

「美鈴！魔理沙が来てるぞ！」

怒鳴りつけると美鈴はこちらに向かって敬礼をしてきた。が、無視する。

「何人が着いて来い、迎撃するぞ」

メイドが3人着いてきたので、それぞれにVZ61スコープイオン\*  
2と、予備マガジンを5本渡す。

一応銃器の扱いは教えたが・・・、大丈夫だろうか？

そう思い後ろを見るが、引き金から指を離しているあたり、しっか  
りと覚えてくれたようだ。

途中、咲夜さんが居たので、狙撃不可のため、館内で迎撃します。  
と伝えると、途端に消えてしまった。

「よし、報告は終わったぞ、着いて来い」

そうして4人（1人と3匹？）で走り出す。

門の前では美鈴が善戦してはいるが、若干押されている。

「美鈴！下がれ！廊下で迎え撃つ！」

その言葉に反応して美鈴が下がり始めるが、魔理沙達はそこを狙っ

て来る。

俺はスモークを作り、ピンを外して投げ込む。

狙いとしては美鈴の3メートルほど後ろ。

「思い切り下がれ！援護する！」

そうしてすぐに全力疾走で走ってくる美鈴の姿が見えた。

「構えろ、すぐに出てくるぞ！」

と、言い終わるか否かで魔理沙達が煙を突き抜けて出てきた。

前面には人形達を置いて盾にしている。

「全員撃て！あいつ等、前は碌に見えないはずだ！」

途端に乾いた音が連続で聞こえる。

メイド達は弾をばら撒いているようで、ほとんどを外している。

俺もMP5を構え、指切りをしながら、的確に当てていく。

「チツ！盾が！」

魔理沙が叫んでいる。

「よし、撃ち方やめ！角に非難しろ！」

と、俺を含め全員が角に隠れる。

離れてしまつと硬質ゴムでは大したダメージは無い。

そういう風に出て来ているからだ。

そして、角から顔だけを出し、来るタイミングを見計らい、5メートルほど離れた位置にスタングレネードを投げ込み、怪我をしない程度に目をくらます。

そして、

「動くなよ？怪我したくなかつたら」

魔理沙を引き倒し、うつ伏せにした後、背中に膝をついて銃を突きつける。

「その声……、悠太だよな？何でこんな所に？」

うつ伏せのまま魔理沙が聞いてくる。

「仕事だよ。金と食住を提供してもらつ代わりに門番をする。入れた時点で失敗みたいなもんだが……、お前の場合は、図書館目当てらしいからな」

魔理沙は小さく舌打ちをするが、無視して手足を縛り、猿轡を噛ませる。

「誰かこいつを森の前まで置いてきてくれ。紐を解いて放置でいい」

「私が行くわ。手を貸したのも私だしね」

とアリスが言った。

「そうか、なら頼む。それと、今度から手を貸さないでくれよ？狙撃が出来なきゃ、面倒くさくて堪らん」

「手は貸さないわ。人形は貸すけど」

「アリスなら歓迎するわ」

と、パチュリーさんが立っていた。

「いつ来られたんですか？」

「ついさっきよ。喘息で走れないから・・・」

咲夜さんが3歩ほど下がって立っている。

いきなり消えたと思ったらパチュリーさんと呼んでいたのか。

「貴女は本を盗むなんて蛮行はしないでしょっから」

と、魔理沙を睨みつつ言う。

「当然よ。借りるときは聞くわ」

これまた魔理沙を睨みつつ言う。

「そうだ、悠太。魔理沙の家から本を取り返してきて頂戴。それなりに対価は出すわ」

「了解しました。対価は……、タリスマン\*3でも作ってください。アリス、案内頼めるか？」

アリスのほうを向く。

「かまわないわ。それとパチュリー、私も手伝うから、協力してほしいことがあるんだけど……、いいかしら？」

パチュリーは軽く咳き込みながら構わないと、短く返した。

「じゃあ悠太、行きましようか」

そう言って、魔理沙を人形に運ばせる。

そうしてプライマリにはG3\*4を、セカンダリにはG18C\*5を出し、G18Cはホルスターに入れる。

「……それどこから出したの？」

「俺の能力の“銃火器を創り出し、扱う程度の能力”だ。外の世界の銃火器を作り出せる」

そう説明する。

「何か撃ってみるか？」

そう言つと

「いいの？いいなら撃つてみたいけど」

じゃあ、湖でな、と言つ。

要望どおり、湖で銃を貸す。

出した銃は、M10イングラム\*6。32発マガジンだ。

「撃つまで引き金には指を掛けずに、壊したくない物、殺したくない者には銃口を向けないように。間違つても覗き込まないように」

軽く注意事項を教えるから渡す。

言われたように指はまだ掛けていない。

そうして、湖面に向かって撃つ。

乾いた銃声とともに、滝のような勢いで落ちる薬莢が鳴らす金属音が回りに響く。

そうして2、3秒程でその音が止む。

アリスの顔を見ると、ポカンとした表情で、M10を持ったまま、ただただ立ち尽くしている。



そんな顔を見て笑いを堪える俺。

そして

「何てモノ渡してくれるのよ!」

怒鳴られた。

「悪い悪い、低反動でスカツとするやつはそれくらいなモンでな、ほんとすまなかった」

半分以上笑いながら言う。

「まったく!・・・もつと撃たせなさいよ」

え?

「もつと撃たせなさいって言うてるの!まったく、積もりに積もつたストレス、発散させてもらっわよ!」

ストップ!ストップ!!なにか黒いオーラのようなものが出てます  
つて!

「いいから!さっさと撃たせなさい!早く!!」

しょうがないので諦めてM134ミニガンを出し、撃たせまくる。

毎分4,000発の7.62mm NATO弾が、くぐもつた音を  
つなげながら滝のように出る薬莖とともにとんでもない騒音が回りに

響く。

アリスの怒りは5分にも及び・・・

「あー、すつきりしたわ、ありがとう悠太」

約20、000発以上撃ったアリスが礼を言ってきた。

にこやかなアリスの顔に対して、真っ青な俺の顔。

ああ、これからはアリスを怒らせないようにしよう

そう思った俺。

「さあ、いきます・・・大丈夫？なんかすごく顔が青いけど・・・」

イエ、オキニナサラズニ・・・

地面に投げ捨てられている魔理沙を見ると、俺よりも青い顔をしながら泡を吹いてしまっている。

無茶しやがって・・・

心の中で敬礼をしてから、歩を進ませる。

## 二度目の襲来（後書き）

\*1：H&K社が作った狙撃銃で、セミオートながら、ボルトアクションに負けないほどの命中精度を誇る。値段が7,000ドル（1ドル83円で581,000円）と高い。

\*2：チエロスコバキア製の32ACP弾使用のサブマシンガン。毎分800発ほど。

\*3：日本で言うお守りで、アミュレットとタリスマンの2種類がある。

\*4：H&K社が作ったアサルトライフル。命中精度がよく、後に改良され、PSG-1などの狙撃銃にもなっている。

\*5：グロック社の作ったG17にフルオート機能を付けたマシンピストルで、9ミリパラベラム弾を使用する。毎分1,200発ほどで、銃が軽いため、精度は悪い。

\*6：9ミリパラベラム使用と、45ACP弾使用の2種類ある。今回は前者を使用した。毎分1,300発ほどの速度で撃つため、文字道理”ばら撒くサブマシンガン”として使われる。

**突撃、隣のゴミ屋敷！（前書き）**

まさか、日、月、火と風邪を引くとは思わなかった・・・。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

## 突撃、隣のゴミ屋敷！

1時間ほどして、魔法の森へ到着する。

「飛べないって不便ね。こんなに時間が掛かるなんて」

「飛べないことが当たり前の俺からすれば、飛べることが羨ましいよ」

そう愚痴る。

どうせならヘリコ\*1ぐらい出せるようになりたいものだ。操縦できなないけど。

「ここからが森の危険区域なんだけど、大丈夫？」

それは孢子に対しての心配なのだろうが

「一応、あの時のマスクは持ってきてあるが・・・」

そのマスクの下にもう一度手拭で口を覆う。

これで往復ぐらいいは何とかなることを願う。

「じゃあ、行くわよ。時間を短縮する為に飛ぶけど、貴方は走りなさい」

了解<sup>ヤ</sup>とだけ返事をするそのまま飛んでいってしまった。

その後を追うこと5分。家が見えてきた。

おそらくあれが魔理沙の自宅なのだろう。

中に入り、魔理沙を放置する。

「さて、この中にある本の殆どがパチュリーの本よ」

そんなことは判りきっている。

何故なら

「おいおい、散らばってるのが本じゃなかったら、完璧にゴミ屋敷だぞ……」

そう、床に本が散乱しているのだ。

「もう全部持って行ってパチュリーに判断してもらったほうが早いわね……」

そう言うと、人形を大量に出して本を持たせる。

一つの人形につき10冊ほど持たせている。そんなに持たせて大丈夫なのか……？

一応俺も落ちていた風呂敷に20冊ほど束ねる。

人形たちのおかげで作業開始から20分ほどで本をすべて回収できた。

中には魔理沙の書いたらしい本もあったが、それは後で返しに来よう。

「さ、紅魔館に戻るわよ」

その一言で、扉を開けて出る。

そして来た時と同じように走る。

高校でラグビーやったといてよかったと、久々に感じた。

紅魔館に戻った後は、本を書斎に置き、パチュリーが判断するまで待機。

結果、持って来た本のうち、5%程が魔理沙の本らしい。

やはり魔法使いというものは自分でグリモワール魔道書を作るものらしい。

もっとも、魔理沙のものはただの研究ノートだったらしいが。

アリスはとっくに帰っている。

本を魔理沙に返すのは俺の役目だ。

本を持ってきた風呂敷で再び束ね、魔理沙の家に向かう。

魔法の森、魔理沙宅

「まさか、本を片しただけでここまで綺麗になるとは……」

魔理沙の家は、8〜9割の床が本で埋もれていたもので、当たり前と言えは当たり前だが、その本や床も埃まみれで、お世辞にも綺麗とは言えないが。

魔理沙は、その埃だらけの部屋を掃除していた。

「まったく、いい迷惑だぜ……。入りにくくなったばかりか、肝心の本まで取り返されちゃ、堪ったもんじゃないぜ」

と愚痴っているが

「そんなに本を読みたいならちゃんと借りればいいじゃないか」

あまりの汚さに、俺も掃除を手伝うことにした。

「お、悪いな、手伝ってもらって。私はちゃんと借りてるぜ？私が死んだら返すからな」

と、手を止めて、こちらを向きながら話す。

「口より先に手を動かせ。そんなもん借りたうちに入らないだろ」

そういい、あらかた溜まった埃やゴミを塵取りで集めて手頃な袋にぶち込む。

そうして魔理沙のほうを見ると、手をぶらぶらさせている魔理沙の



が目に入る。

「・・・・・・・・」

ブチリ、と、嫌な音が響いたような気がした。

「そうかそうか、お前も首を飛ばされたいようだなあ・・・」

手に持つものはS&WM500。

「お？それなんだ？」

魔理沙が手をぶらぶらさせたまま尋ねる。

「これはな、フランの首を吹き飛ばしたもんだよ」

その後に、

「人間に使ったら、どうなるんだろうなあ？」

と、魔理沙の首に突きつける。

オートマだったら弾は出ないだろうが、リヴォルヴァーなので問題はない。

「わかった！わかった！！真面目にする！真面目にするから降ろしてくれ！！」

そう言われてM500を降ろす。

「有言実行！自分で言ったことぐらいやれよ？」

「わーってるよー！」

と、ばつの悪そうに言う。

少しして

「なあなあ、さっきの、撃ってみていいか？」

掃除も一段落して、もう休憩に入ろうかと言うとき、魔理沙が言い出した。

「ああ、構わないが、音もでかくて反動もすごいから気をつけるよ？」

魔理沙の細腕で大丈夫かと心配したが、しっかりとした射撃姿勢をとれば大丈夫だろう判断して、先に注意を促す。

「引き金にはまだ指を掛けずに、撃つときだけ引き金を触るようにすること、的以外は狙わないこと、覗き込まないこと。まずはこの三つを守るか？」

即答で「大丈夫だぜ！」ときたので、多少不安ながらも渡す。

「じゃあ、射撃しよ」「ドゴンー！！」「いか・・・ら・・・」

ああ、こんな莫迦に渡すんじゃないかった、その後悔する。

渡す 説明を始めようとする 構えて撃つ 反動で銃が顔に当たる

ぶっ倒れる  
の流れ。

ああ、こんな莫迦に渡すんじゃないかった。

その後は銃を取り上げ、放置して紅魔館へと帰った。

あれ以上莫迦のお守りはしてられない。

紅魔館に戻り、パチュリーさんに報告をする。

「本は全部戻ってきて、魔理沙の部屋を掃除してきました。その後、魔理沙は気絶したので帰って来ました」

ほんの少しの沈黙の後、パチュリーさんが答える。

「・・・掃除はする必要ないし、そもそも何で魔理沙は気絶したのかしら？」

かくかくしかじかと説明をして、納得しながらも呆れている様だった。

「きちんと説明ぐらい聞きなさいよ・・・。まあ、魔理沙らしいといえばらしいけど」

これに懲りてもうこなければいいけど、と呟くが

「まあ、そんなすぐに諦めるようなやつではないでしょう」

そう返すと、

「そうよねえ・・・」

と、溜め息交じりで返ってきた。

「悠太、これからも門番をよろしく頼むわ。あなたが居なかったら、今日も、この前も本を盗られていたでしょうね」

と言われた。

「ありがとうございます。こんなことで役に立てるならいつでも言うってください」

と返して、書齋を出る。書齋っていう大きさないけど。

**突撃、隣のゴミ屋敷！（後書き）**

\*1：ヘリコプターのこぼれ。

## 悠太の娯楽（前書き）

こんな一日だったらいいなあ、と言っのを考えて書きました。

## 悠太の娯楽

そろそろ一部のメイドに狙撃でも教えるかな、そうすれば俺もいろんなところを回れるだろうし。

そう考えて、その教える面子をどうやって集めるかを考える。

一番楽なのは、ローテーションで聞くのが一番かつ確実にだろうが、全員回るのに5日かかる。

これが一番確実だよなあ、伝言ゲームじゃ絶対におかしなことになるだろうし。

そう考えて咲夜さんに会うために、レミリアの部屋へと向かう。

「失礼します」

ノックをした後、返事を聞いてから入る。それくらいの常識は持っている。

「珍しいわね、悠太が私の部屋に来るなんて」

レミリアは、フランとチェスをしている。

フランは状況が拙いのか、考え込んでいる。

その様子を見て、レミリアはニヤニヤと笑っている。どつやらの勝っている状況を楽しんでいるようだ。

「咲夜さんは今居ますか？」

返ってきた返事は

「今人里に買い物へ行っているわ」

という、いつ帰ってくるかわからないと言っ答えだった。

そうですか、と返事をする

「貴方もやらない？」

と、チェス盤を指差して言ってきた。

「チェスはよく知らないんだがな・・・」

駒の動かし方を軽く知っているだけではあるが、いつの時代、どんな場所でも男が女よりも下なのは変わらないようだ。

とりあえず、フランの方から盤をしてみる。

どうやら、取るに取れず、チェックの状態のようだ。



逃げてても、いずれは詰むといった状態で、動かせるのはほんの少しの駒。

……？

ん？これならいけるんじゃないか？

フランに交代を求めると、OKを貰ったので、席に着く。

「フラン、キングとルークは動かしてないよな？」

という質問をすると、動かしていないという返事が来た。

現在、ナイトによつてチェックが掛けられている。他に動くプロモーション\*1したポーンに取られてしまう。

「これで、どうだ？」

俺は、ナイトを使い、レミアアのナイトを取る。その後にレミアアがポーンでナイトを取り、今度は右のルークを使ってポーンを邪魔する。そのルークをレミアアが取った後、左のルークとキングでキヤスリング\*2を行い、位置を変える。

レミアアはしまった、と言った表情を、フランは何をしたのか解らないといった表情をする。

その後は残ったビショップとナイト、を使い、ポーンをプロモーションしながらレミアアを追い詰め、チェックメイトにした。

フランは喜び、レミアアは無効よ！こんなの無効よ！！と、涙目に

なりながら呟いている。

「うう、あなた、軽く知ってるだけって言ったじゃない！なんでキヤスリングなんて知ってるのよ！」

と言ってきた。

「俺は、駒の動かし方は知ってる。プロモーションやキャスリングだって知識としては知ってる。戦術とかはまったく知らないけどさ。っていうか、そういうのをフランに教えなかったのか？」

そう言い返すと、レミリアは言葉を濁し、フランは「そんなの初めて知ったよ〜！」と、怒っているようだった。

と、ちょうどその時に咲夜さんが部屋に入ってきた。

「失礼します、お嬢様」

そう言って入ってくる。

「あら、悠太も一緒だったの？お嬢様、紅茶はいかがでしょう？」

その言葉を聴いて、レミリアはカリスマを取り戻し、

「ええ、頂くわ。フランと悠太の分もお願い」

そう咲夜に言う。

「かしこまりました、お嬢様」

その後、一瞬で消えたかと思うと、すぐに出てきた。

相変わらずずるい能力だ。

はて、何か忘れてしているような・・・？そんなことを考えながらふと下をみた。

そして絨毯に違和感を覚えた。

赤かった絨毯が、若干ながら余計に紅い染みがあるように見えた。

確かあそこはさっき咲夜さんが居た・・・と、考えているうちにその染みは消えていた。

見間違いだったのだろうか・・・？

その後、何か忘れていているような違和感を覚えながらも、レミリアや咲夜さん、フランともチェスをして、咲夜さんの淹れる紅茶の美味さに感動しながら、一日が終わった。

自室に来て思い出した。狙撃の練習をするために人員を借りれるか聞くのを忘れていた。

## 悠太の娯楽（後書き）

- \* 1：端に行ったポーンがクイーンになること。
- \* 2：ルークとキングを同時に動かすこと。

休日、そして騒動（前書き）

機関銃と言われても、FMJしか思い浮かばない・・・、末期だな  
Orz

## 休日、そして騒動

翌朝、起きてから朝食を摂る間に咲夜さんに逢って、人員を借りられるかどうかを聞いたところ、「居ても居なくても同じようなものだから構わない」と言う返事が来た。

(それでいいのか妖精メイド)

と言うことなので、聞いて、練習したいという妖精を集めて、俺も含めて集団練習を行おうと思う。

そう考えていると、レミリアに話しかけられた。

「悠太、そろそろ休みを取ったら？もう一週間以上経つわよ？」

え？と考えていると、そんなに経ったのか・・・、という感情と、まだそれだけしか経っていないのかという感情が出てくる。

やはりカレンダーと言うのは大切なものだ、外で何気なく見ていたカレンダーの大切さを思い知らされる。

「そうですね・・・、じゃあ、今日は人里にでも行ってきます」

そうしなさい。と言われた後に

「もしよかったら、フランも連れて行ってあげて欲しいのだけど、いいかしら？」

そのくらい大丈夫ですよと答え、フランも合意し、一緒に行くこと

となった。

人里に着くまでに、フランが今までどのようなように過ごしてきたか、少し前にあった異変のこと、魔理沙に会った経緯、霊夢（博麗の巫女だとかなんとか・・・）と知り合った経緯を聞いていた。

人里の門に着くと、そこには門番が立っていた。

しかし、戦いようではなく、最低限の身を守るものしかなく、門番と言うよりは、戦国時代の足軽と言った印象を受ける。

「失礼、君たちは？」

考えていると、門番に話しかけられた。

「どうも、二週間ほど前に来た外来人の高野 悠太と言います。今は紅魔館でお世話になっていますが。それでこちらが紅魔館の主、レミリア・スカーレット様の妹君、フランドール・スカーレット様です」

と話をすると、門を通してもらえた。

どうやらこの門番は、戦闘員と言うよりも伝令としての要素が大きいらしい。

里に入ると、何か物珍しい物を見るような目で見られた。

まあ、迷彩柄の服を着た青年に宝石の様な物が付いた翼を生やしたものが歩いていたら、そうもなるだろう。

まずは自分の家に向かう。

一番心配なのは糠床である。

いくら冬に入ったからとはいえ、一週間も放置していたら、さすがにマズイ。

それを廃棄するために一旦帰宅する。

自宅はすごい事になっていた。

有様が、ではなく、臭いがだ。

何かが腐敗したような臭い。まず間違いなく糠床だろう。

それを生物として廃棄し、事なきを得た。

そうしているうちにも昼時になり、昼食を食べる。

食べている中、フランは和食をあまり食べたことがないらしく、箸に四苦八苦していたが、いつの間にか箸を使いこなして食べていた。

この間僅か10分。この10分に何があったかは、フラン以外に知



りようがなかった。

そうして、自身の最大の目的である私服と、ボロくなってきた戦闘服の購入である。

私服は、里にある呉服店で購入できたが、戦闘服だけは手に入らない。

そういった服を手に入れるにはどうすればいいかを聞いたところ、魔法の森の入り口付近にある香霖堂という所ならあるかもしれないと言っ情報を聞き、やって来た。

その中には、明らかに不要なものから、なぜここに？と聞きたくなるようなものまであった。

外だけでこれなのだから、中はどれほどの魔境なのか、と想像していたら、それほどでもない。

ちょっと散らかっている部屋と言った感じだろう。

散らかっているものがおかしいが。

「いらっしゃい。何を探しているんだい？」

と、店の奥から銀髪眼鏡を掛けた青年が出てきた。二十歳後半と言った見た目だ。

「戦闘服と、あとナイフかなにか、小型の刃物を」

金は魔理沙を撃退したと言つことで、レミリアから貰ってきている。

「戦闘服というと、野戦服でいいのかな？こんな注文は初めてだよ」と言つて、店の奥から取り出したのは、右胸に鷲のようなマークと、鉤十字のマークの付いた軍服だった。

「まあ、それも軍服ですが、いろいろとマズイので、今着ているよ  
うな、迷彩柄のものを願ひします」

流石に、着ていて捕まるような物\*1は無しだ。

「じゃあ、こんなやつでいいね？」

と、俺が着ているものに近いものを出してくれた。

「それをあと2着ほどお願いします」

用意しておくから刃物を見ておきなよ。そつちにあるから、と指差したほうには、刃物が掲示されていたり、しまわれていたりしていた。

そこをフランと漁っていると、一本の棒のようなものをフランが見つけた。

「ゆーた、これ、先に穴が開いているだけだよ？」

と言つて見せてきたそれには、角に飛び出て、動くスイッチが付いていた。

「ああ、これはね

そのスイッチを上によけると

こんな風になるんだ」

それは金属同士が擦れる音と共に刃が出てきた。

それは世間一般で飛び出しナイフ 垂直式の飛び出しナイフであつた。

今の日本では完璧に違法ではあるが、ここではそんなもの関係ない。

「とまあ、こんなものだよ。うん、これにしよう」

そう言つて、会計を済ます。

服を着ると、ナイフを買つたにしては安かつた、と言つておこづ。

香霖堂を後にした俺たちは、里に寄つて、茶店 名前はおぢやばと言つて、団子とお茶を口に行っている。

「この和菓子って、甘いんだね」

どうやらフランは和食のみならず、和菓子も初体験だつたようである。

紅魔館のような洋館に住んでいたら当然かもしれないが、出てくるもの殆どが洋風なのである。

食事、お茶、デザート、風呂にいたるまでが洋風で、寝床もちろ  
んベッドである。

そうしていると、

「久しぶりだな」

と言う掛け声と共に慧音さんが顔を見せた。

「お久しぶりです」

「人里に来た二日目から姿が見えなくなり、聞けば吸血鬼の館に行  
ったと言っじゃないか。てっきり死んだものだとばかりに・・・」

「勝手に殺さないでください。今は紅魔館で、門番の仕事をしてい  
ます。今日は休みで、フランと来ました」

と言うと、フランがこんにちは、と挨拶をして、慧音も返す。

「里に来たときは世話になりましたし、奢りますよ。おばちゃん、  
団子とお茶、追加で」

奥から返事が聞こえ、数分してお茶と団子が追加された。

「すまない、ありがたくいただいておりますよ」

と、俺が居なくなつたことへの噂話を聞いていると、一人の足軽が  
行きも絶え絶えに駆け寄ってくる。

それに異常を感じた慧音さんが訳を聞く、すると、竹林のほうから大量の妖獣が向かっているとのこと。

まだまだ距離があり、妹紅が応戦しているため時間はあるが、多勢に無勢で押されているらしい。

「わかった、すぐに向かう！悠太、この埋め合わせは次回にでも」「いや、その妖獣にしてみらうさ。フラン、久々に能力をフルに使えるぞ」「

その言葉にフランは喜びを、慧音は疑問の感情を抱いた。

竹林側の門では、近づく妖獣の群れに対抗すべく、里の人々が集められていた。

「いいな！一匹たりとも入れるなよ！」

オーーーーッ！という威勢のいい掛け声と共に、男たちが気合を入れあっている。

「ちよつと失礼、見張り台に昇らせてもらつよ」

と言う声と共に悠太とフランが見張り台に昇る。

「あ、あんた！危ねえから、さつさと逃げな！そんな細い体じゃ、あつちゆう間に八つ裂きにされちまうよ！」

心配しているのか、馬鹿にしてるのか判らないような台詞を言われ

るが無視をする。

妖獣との距離は約800メートル。

悠太は92式重機関銃\*2を使う。

フランは、近づいたものを倒すようにと云ってある。

間違っても人を壊さないようにとも。

その間に600メートルまで近づかれているが、気にする必要はない。

それぐらいの距離で使われるものだからである。

もともとこれは多人数には向かない銃である。

なぜこれを選んだか問われれば、精度の良さと反動操作リコイルコントロールのしやすさである。

光学照準気を使い、大まかに狙いを定め、バースト発射で打ち込む。

いかにフルオートといえど、ただ撃っているだけではあたらないし、間抜けにしか見えん。

ならば、軽くばら撒き、制圧力を生かして敵を倒す方法を取った。

空になったクリップを捨てて、またクリップを入れなおし、薬室に送る。

距離が50メートルほどになったら気にせずにはら撒く。

とはいえ、100メートルほどになったらフランが能力であらかた片付けてしまうので俺は漏れたやつを倒すだけなのだ。

結局、その殲滅戦は10分ほどで終わり、里への被害は妹紅という人物が疲労で倒れていた以外は無く、門に集まった男集は、悠太たちに感謝をしつつ帰っていった。

「じゃあ、俺たちも帰るか」

という一言で、俺とフランは紅魔館へと戻って行った。

## 休日、そして騒動（後書き）

\*1：フランスでは捕まります。

\*2：30発という、機関銃にしては少ない弾薬帯（正確には、モゼルミリタリーのようなクリップについている）だが、レートが低く、銃身も加熱されにくく、精度もよい。



**節分（前書き）**

2月3日投稿。

一部不適切な表現があります。

不快に思った方は、感想で言ってください。

修正します。

## 節分

いきなりだが、今日は2月3日。節分である。

以前、クリスマスをしたように、今日も節分の行事をするだろう。

何故なら

「悠太、その豆を取って頂戴」

咲夜さんが現在進行形で豆を炒っているからである。

「はい」

と、袋の封を切って渡す。

それをそのまま鉄で出来た籠に入れて、火の上で揺する。

それを何度も繰り返す、作業は終わる。

「しかし、こんなに豆が要るんですか？」

豆が入っていた袋は、紫が用意した特注のもので、それが100袋ほどあった。

「何でも節分は家の奥から徐々に『鬼は外』を言って、最後は玄関から投げるそうよ？」

それでこんなに多いのか……。

それ＋福は内用と、食べる用も用意したらこれほどになるわけだ。

「それに、今日は特別ゲストも来るわけだしね」

「特別ゲスト？」

はて、節分に呼ばれるようなものと言えば鬼だが・・・

「ひょっとして、本物の鬼ですか？」

という問いに対して

「それは会ってからの楽しみよ」

と、結局教えてはもらえなかった。

そして夜

「今から豆まきをするわよ!!!」

という号令で始まった、豆まき。

「今日の鬼役は・・・彼女よ!!!」

ビリビリと、破れる音と共に現れたのは、頭に立派な角を2本持ち、手には瓢箪、両手首と腰に三角、丸、四角の分銅をつけた、小さな幼女・・・、まさに子鬼といえる者だった。

「はい、初見の人もいる様だから、自己紹介するよ」

と、瓢箪を煽る。

「あたしは伊吹萃香。鬼の四天王、小さな百鬼夜行とも言われてるよ」

と、軽く顔を赤らめながら、自己紹介をした。

・・・ていうか

「酒臭!!!」

そう、酒臭い。

どうやら瓢箪の中身は酒のようだ。

酒を呑む童子。

まるで酒呑童子だなと、考える。

「ははは、ごめんねえ、酒が無きゃ生きていけないんだよ」

と言って、また酒を煽る。

「じゃあ、館の奥から逃げていくから、存分に追って、撒いてね」と、館の奥に走り去って行ってしまった。

・・・あの走り方は狙っているのだろうか？

「さあ、全員豆を持ちなさい!!」

と、レミリアの号令で全員が升を持つ。

そして俺は……

M60\*1を構えた。

「ちょ!何持つてるのよ!!」

「弾は炒り豆ですから、安心してください」

と、的外れな返答をするが

「なら構わないわ」

と返された。もう何も言うまい。

そしてしんぐ……ゲフンゲフン!歩を進める。

そして最奥で萃香は止まっていた。

「じゃあ、行くよ!」

と、また駆け出した。

それを追うように俺たちも走り出す。

そして

発砲音と共にばら撒かれる豆、豆、豆。

そして

「逃げる奴は鬼だあ！逃げない奴はよく訓練された鬼だあ！」

と叫びながら撃つ。

「あなた、よくあんな見た目幼女が撃てるわね・・・」

「簡単さ！動きがのろいからな！！！」

と、九割九分九厘外して答える。

「まあ、ほとんどわざと外しているようだからいいけど」

と呟く咲夜。

「ホント幻想郷は地獄だぜ！！」

フウハハハハハ！！と笑う。

分かる人は感想よろしく。

と言っているうちに、既に玄関前。

「じゃあ、これにて終了ってことで。あと、その迷彩服着た人、こっち来て〜」

と、ほぼ名指しで呼ばれた。

「あんなこと言ってる割には碌に当てなかったねえ、何？ノーコン？」

そう言っつて酒を煽る。

てか、走ってるときも呑んでたよな？

「いや、九割九分九厘わざと外した。恨みもないし、こんな子供に当てるのも気が引けるからさ」

と、M60の弾薬ベルト\*2を交換しながら

「それとも、今からでも当てて欲しいか？」

と、冗談を言う。

「いや、炒り豆は痛いからさ、ほら」

と腕を見ると、所々に火傷のあとがある。

「あたしは鬼だからさ、普段はいろいろやってるけど、結局脇役。節分のときぐらいは主役をやりたいからさ」

と、ニカツと笑う。その際、八重歯が見え隠れする。

「そうか、鬼ってのはやっぱりいい奴が多いんだな」

と言っつて、手を差し出す。

「俺は高野悠太。これからよろしくしてくれよ、萃香」

その言葉に反応したのか、萃香がガシッと手を握り返してくる。

「こつちこそよろしくな、悠太」

と、力強く握手をする。

そして

「じゃあ、これ持って」

と、お吸い物のふたをひっくり返して大きくしたようなものを渡される。

「これって、杯？」

と、疑問に思っていると、それに瓢箪を逆さにして酒を盛る。

「さ、友情の証に一杯！」

と、いーつき、いーつき！と、手拍子まで加えられる。

「あー、もう！しゃーねえ！」

と、杯を一気に煽る。

そして



「ぶはあ！どうだ！！」

その杯の中にあつた酒を一気に飲み干した。

「おー、なかなかいけるねえ。じゃあ」

と言って、杯を奪い返すと、瓢箪を渡してきた。

「あたしにも注いでよ」

と言つたので、なみなみと注いでやる。そして

「うん、やっぱり酒はうまいわ」

の一言で呑み切ってしまった。

「じゃあ、戻ろうか。レミリアたちが待ってるよ」

と、逃げるときと同じように両手を上げて走っていった。

俺も続いて歩いていく。

もちろんM60は消した。

もうあんなものは必要ないだろうから。

そして、歳の数豆を食べて、そのまま就寝。

・・・とはいかず

「あの銃って言うの？面白いねえ」

と、夜遅くまで酒の入った萃香と語ることになってしまった。

## 節分（後書き）

\*1：アメリカ製の汎用機関銃。発射レートは毎分500発程と低い。E1からE4までと、B、C、Dがある。Bはすぐに取り替えられてDになった。Cは、副操縦士が、コックピット内から撃てるようになっている。

\*2：ミニガンのように、袋から直接給弾するタイプの弾薬帯のこと。携行する際は、袋を横に吊ることが出来る。

## 練習（前書き）

何の練習かは分かっていただけはず。

質問等、受け付けます。気になる銃、気になる設定等ありましたら、感想なり、メッセージなりに書いてください。一話使って紹介したいと思います。

## 練習

翌日の朝、パチュリーさんに呼び止められた。

「悠太、この間のタリスマンの件だけど、どんなタリスマンが欲しいのかしら？」

何でも、タリスマンを一から造ってくれるそうである。

「なら、技術が巧くなるようなタリスマンをお願いします。狙撃には、技術が肝心ですから」

と言つと

「技術ね、分かったわ。それと、たとえタリスマンを持っていても、それだけで巧くなるわけではないわ。練習したことが身に付きやすくなる程度よ。そこを勘違いしないようにしなさい」

と、言われた。

「肝に銘じておきます」

と、一礼をして、一緒に食堂まで行く。

朝食の後、俺は屋上に出て、狙撃の体勢に入る。

今回使うのはM40A3\*1と言つ、米軍海兵隊が使うボルトアクシヨン式狙撃銃だ。

射程距離は約1,000ヤード（約914メートル）で、もともとそれほど長い距離を撃つわけではないので、これぐらいで十分なのだ。

さすがに、自身も1.5キロ越えの超長距離狙撃は出来ないし、する気もないが、万が一することになれば、長距離用の銃は用意できる。

それを使って、狙撃の練習をする。

狙いは、シチューの缶である。

妖精メイドが、800メートルほど離れた位置に缶を置き、離れる。

それを、旗を見ながら、10倍スコープを覗き、微調整して、引き金を引く。

2秒ほどで届いた銃弾は、クツキリと弾道が見え、それが缶に当たるのが見えた。

ゲームでRPG-7\*2が横を掠める気分なのだろうと想像して吹きそうになってしまった。

当たった缶は、妖精の手でもう一度立てられ、今度は別方向に立てられた。

場所が変わると言うことは風向きも変わる。

もう一度風を読み、撃つが、今度は少し左に逸れてしまった。

風を完璧に読むことは難しく、正確な値を計算するのはスポッターの役割なのだが、そんなのは居ないし、そんなことは俺も出来ない。と、もう一発撃ったところで缶に当たるのが見えた。

後ろでは妖精メイドが当たったと、ひそひそと伝言ゲームをしていた。

まあ、監視してくれればいいのだが。

と、簡単な練習を10発撃ち尽くすまで行い、撃ち切ったら、簡単にマズルの中の煤を取り、特製の非致死弾丸を5発入れる。

そうしているうちに妖精メイドは紅魔館に戻っていた。

今日、魔理沙は来なかった。

一人、狙撃に興味を持ってくれたメイドが居た。

彼女に一挺、狙撃銃を渡す。

渡したのはL96A1で、弾は非致死性の硬質ゴム弾である。

来週予定している、狙撃の練習会に参加してくれるようだ。

一日に一人、か。

単純計算で五人……。

五人も居れば十分だろうと判断し、夕食を摂る。

その時フランに、将棋を指さないかと誘われた。

なんでも、咲夜さんが持っていた将棋盤と駒で咲夜さんとやってみたところ、以外に面白く、嵌ってしまったのだと言っ。

しかし、咲夜さんは多忙の身、偶の休憩で、指していたそうだ。

それで、同じ人間の俺なら指し方も分かるだろうと言って、誘われた。

最初はどのくらい強いのか分からなかったのですが、ハンデ無しで指したが、あっという間に詰みで勝ってしまった。

その次は飛車角抜き、次は金抜きとやっていて、最終的には玉と歩だけになってしまったが、それでも勝ってしまった。

このとき、すでにフランは半泣きになってしまっている。

とうとう深夜、眠気に勝って、フランを負かしたところ、フランのほうに先にダウンして寝てしまった。

寝てしまったフランをベッドに寝かせ、盤の片付けもままならないまま、フランの部屋のソファで寝てしまった。



## 練習（後書き）

\*1：海兵隊がM700を独自に改良し、10倍スコープを付けた物で、完全に海兵隊内部の物。なので、正確な造り方は不明だが、レミントン社が、これの外見のみを真似た狙撃銃もある。中身はまったくの別物である。

\*2：ソ連が産んだ、対戦車兵器。安価。取り扱いが容易で、安いことから、紛争地帯の発展途上国などでAK-47と同じく良く見られる兵器である。

## 花と妖怪（前書き）

今回銃の説明が長いです。

## 花と妖怪

翌朝

目が覚めたら、床で寝ていた。

「あゝ、身体中が痛い・・・」

床で寝ればこうもなるだろう。

落ちた衝撃でよく起きなかったものだと感じする。

そのまま食堂に行くと、すでにレミリアたちは食事を摂っていた。

「おはようございます」

挨拶をして席に着く

今朝の食事はパンとサラダ、飲み物は牛乳だ。

「おはよう、昨日はフランの相手をしてくれてありがとうだね」

「いえいえ、と返事をする。」

「将棋は俺も久しぶりですから、楽しめました。流石に睡眠時間を

削るとは思いませんでしたが」

と言って、フランが居ないことに気づいた。

「あゝ・・・もしかして、フラン、まだ寝てます?」

モーニングティーを一口飲んだ後、肯定として首を縦に振る。

もう起きていると思って確認しなかった・・・。

「気付きませんでしたね・・・、起こしてきましょうか?」

「ゆっくり寝かせてあげましょう? あんなうれしそうなフランは久々に見たわ。これも貴方のおかげかしらねえ・・・、」

どう? このまま紅魔館に永住する気はないかしら?

と言葉にはしないが、そういう雰囲気だった。

「俺ごときが出来ることなんてこの程度ですから。それに、フランが一番喜ぶのは、お嬢様レミリアと一緒に居るときですよ」

そう言って、牛乳を飲む。

パンと牛乳は相性がいい、なんて考えてると

「そうかしらねえ・・・」

と、トーンを落とした声で言われた。

「自分に自信を持ってください。紅魔館の主としての、フランの姉としての自信を。そんなんじゃ、フランに愛想をつかさねちゃいますよ?」

と言つと、バンツ!という派手な音と共に、フランが食堂へ入ってきました。

「そんなことないッ!」

と言つ否定の言葉と共に、レミリアへと抱きつく。

「姉さまは・・・、姉さまのことを嫌いになるなんて、絶対にならないッ!」

レミリアは、目じりに涙を溜めて、フランの目を見ている。

同じくフランも、涙を溜めてレミリアを見つめている。

その間に俺は片付けをして、食堂から出る。

姉妹の邪魔をするほど馬鹿じゃない。

まさかフランが起きていたとは・・・。

俺の開けたドアの音で起きたのか?

と考えながら食堂から出ると、咲夜さんがこちらに向かってくるのが見えたので、引き止める。

「咲夜さん、今は食堂に行かないほうがいいですよ。邪魔をしちゃいけません」

はじめは疑問を抱いていたが、食堂のドアを軽く開け、様子を見せるとすぐに納得してくれた。

その後、屋上に向かう途中で、例の狙撃手志望の妖精メイドに出会ったので、一緒に行くことにした。

狙撃には大まかに2種類の狙撃がある。

スカウトスナイパー  
前哨狙撃兵\*1としての狙撃と、一般的な長距離狙撃である。

前哨狙撃兵も、一般的な狙撃兵も共通することは、狙撃時には必ずスポッターが居るという点である。

スポッターの役割は、狙撃に必要な情報以外にも、—HQ《Head Quarters》とも言われる本部との通信なども含まれる。

この場合は、主に警察などの機関が、狙撃のタイミングを伝えたりする。

どちらにせよ、スポッターはベテランが行うものである。

某FPSでも、スポッターはマクミランが行ったように。

屋上に着き、ギリースーツと狙撃銃を出す。

今回の銃は、AR-15A2\*2。

これの理由は、単にどのような性能か、と言う点である。

セミ・3点と切り替えられる、これは突撃銃としてのものだ。

新兵がパニックに陥ったとき、無駄弾を撃たないようにする為の物だ。

それは関係なく、今回はAR-15A2の精度と、遠・中距離にどのように扱えるかというテストのようなものだ。

と言うわけで、ゴルゴ13モデルに改良したものを出しました。

といっても、キャリングハンドルにスコープを着けて、マガジンを20発マガジンにしたものだ。

アイアンサイトはそのまま残っているので、スコープが壊れた場合にも対応できる。

この考えは、東側の狙撃銃（要するにロシア方面）に多くある。

SVDや、SV-98には、標準でスコープが着けられているが、アイアンサイトも着いている。

これは、もともとが歩兵の支援用であり、小銃の届かない位置を攻撃するためだけなので、それほど長い距離は狙わない（SVDは、600メートル程度を狙う）からである。

同じく、この狙撃銃も、400〜800メートルと言う、比較的短い距離で使用されている。

こんなことはどうでもいい。

妖精メイドの銃は先日渡したL96A1で、今は狙撃の練習をさせている。

1マガジン5発で、2マガジン撃たせている。

狙撃のコツは、力を入れすぎないことである。

力を入れすぎれば、当然銃はぶれてしまう。

そのために、力を抜き、必要以外の力は抜かせている。

そして、呼吸による揺れを抑えるためにも、撃つ数秒前から息を吐いた状態で止める。

これで殆どの揺れを止めることができる。

メイドが撃つた後は、俺も撃つ。

同じく10発だが、精度にバラつきがあった。

だが、反動が少なく、比較的近距離でも狙えて弾数も多いというメリットもある。

主にこれは市街地で使うものだなと思っていると、前方に、人影が見える。



無線で咲夜さんに聞く。

「前方に日傘を差した、赤いチエツクの柄の上着とスカートを履いた緑髪の女性が近づいてきていますが・・・、彼女は？」

と聞くと、

「彼女は風見 幽香。中庭に花壇があるのは知ってるわよね？そのアドバイス等してもらってるのよ。銃を降ろしておきなさい、殺されたくなければね」

その言葉を聴いて、すぐさま銃を降ろす。

そして、双眼鏡で見ると、目が合い、微笑を向けられた。

その時、初めて紫さんに会った時のような悪寒を感じる。

すぐに逃げ出したい衝動に駆られるが、何とか押さえ込む。

あの人は拙い、戦ってはいけない・・・！！

そう本能が告げている。

何が拙いかではない。人間が勝てる相手ではないのだ。

そう悟る。

彼女が庭に入ると、途端に寒気が収まった。

「風見 幽香は花のあるところでは戦わないわ。フラワーマスターとも呼ばれていて、能力は“花を操る程度の能力”よ」

それだけじゃないことはなんとなく解っている。

「彼女の本当に恐ろしいところは、妖怪としての力よ。身体能力、妖力がずば抜けているの」

能力抜きでなら紫も勝てるかわからないレベルだそうだ。

そんな彼女が来て、見れば美鈴と仲良く談笑している。

「美鈴は花壇の世話をしているのよ。その関係で幽香とは仲がいのよ」

と、そんな話をしていると、一人の胴衣と思われる服を着た男がやってきた。

「咲夜さん、あの男性は・・・？」

「おそらく、美鈴に試合を申し込みに来たようね。ちょうどいいわ、お嬢様にも見てもらいましょう」

そう言った途端に姿が消える。

数分して、美鈴と胴衣の男が試合を始めた。

幽香はそれを門の角で見ている。

勝負は終始美鈴のリードで、胴衣の男は圧倒されていた。

勝負が終わり、お互いに礼をするが、レミリア、幽香の方と続いて、最後はこちらにも礼をしてきた。

「礼儀正しい男だな・・・」

「彼は本当に礼儀正しいわよ。今度、紅魔館に招待しようかしら？」

と、いつの間にか傍に来ていたレミリアに声を掛けられて、ビクッとナイフを抜いてしまう。

「・・・いきなり声を掛けないでくださいよ」

抜いたナイフを仕舞い、話をする。

「これから幽香とお茶会なのだけど、貴方もどうかしら？」

本題はそれのようだ。

別に問題はないので、狙撃メイドに、特製非致死弾の入ったマガジン2つと、無線機を渡す。

「これでOKです」

と、伝えてからギリースーツを脱ぐ。

「そんな迷彩服で出るつもり？」

流石に拙いようだ。

「後はこの間買ってきた私服しかありませんが・・・」

「こっちに来なさい、一応礼服はあるから」

と言われてホイホイ付いていくことになった。

「あの一・・・」

「どうかしたの？」

確かにこれは礼服だろう。礼服だろうが・・・

「何故燕尾服・・・？」

見た感じはタキシードのようだったのだが・・・

「悪いわね、館には礼服がそれしかないのよ」

「まあ、燕尾服なものいでしょう。しかし・・・」

何故サイズが合っている・・・！

「時を止めてサイズを測らせていただきました」

す・・・隙がない・・・ッ！

「まあ、これで構いません」

そうして、レミリアの部屋に着いた。

「くれぐれも、彼女を怒らせないようにしてくださいね？・・・片づけが大変なので」

りょーかいりょーかいと軽く返事をして、部屋に入る。

あの殺気に当てられたら、怒らせようなんて気は起きない。

「失礼します」

部屋に入ってすぐに気付いたのが、普段かぎなれない匂いだ。

紅茶のような匂いではなく、ハーブティーだろうか？そんなような匂いだ。

「早かったわね。ここに掛けなさい」

と、指定された席　　レミリアの隣に掛ける。

「失礼します」

と、掛けたとき、レミリアの対面の妖怪　　風見幽香から話しかけられた。

「あの時屋上に居た人間は貴方かしら？なにやら可笑しな物を構えていたようだけど？」

と、微笑を絶やさずに話す。

「あの時は失礼しました。侵入者を入れないための処置でして、悪気はありません」

と、頭を下げる。

「それなら、仕方がないわね」

その言葉の影に、“次は無い”という雰囲気が見え隠れする。

「門番が失礼したわね。もうこの話はお仕舞いにしましょう？折角貴女が持ってきてくれたハーブもあることだし」

と言って、ハーブティーを飲む。

「自分はハーブティーを飲むのは初めてですね。外で紅茶は飲んでいましたが」

と言って口をつける。

初めての味だが、嫌いではない。

「美味しいですね。紅茶とは違った味で、自分は好きな味です」

と言う。

「口に合ったようで、持ってきた甲斐があるわ」

と、喜んでいる。

その後は、妙な壁は無くなり、そのまま幽香が帰るように見えた。

だが

「ところで、その門番さんは面白い能力があるみたいね？」

そのままでは終わらなかった。

「はい、“小火器を作り出して扱う程度の能力”と言います」

「銃って言うと、外の世界の？」

と言う、驚いたと言う顔をしている。

「面白そうね……、私と戦って見ない？」

と、言われた。

「え……？」

驚愕した。咲夜さんの口ぶりからすると、とてつもなく強い妖怪のように聞こえた。

そんな強力な妖怪が俺ごときに勝負を挑んでくる……？

「強力な妖怪である貴女が、人間の俺ごとくと戦うなど、結果は火を見るより明らかではありませんか？」

と、一応断りたい気持ちを入れた言葉で返すが

「そんなことは判らないわ。人間でも私を倒すものも居るわ」

博麗の巫女とかね。

と返されてしまった。

「博麗の巫女・・・ですか。自分は会ったことが無いので判りませんが、貴女が負けるほどと言うことは、かなり強いんですね」

と、博麗の巫女の強さは分からないということ伝える。

「私と戦ってみれば判るわ。あの巫女がどれほど強いのがね」

ああ、拙い。このままでは戦う流れになってしまつ。

そう考えていると

「悠太、そろそろ仕事に戻りなさい。もう十分休憩したでしょ？」

という、鶴の一声がレミリアからかった。

「分かりました。それでは失礼させていただきます」

と、席を立ち、礼をしてから足を進める。

悠太サイド



そのまま屋上へ行くと、幽香が帰って行くのが見えた。

その時、一瞬こちらを向いたかどうかは分からないが、後ろに幽香が居るような気がした。

サイドアウト

レミリアサイド

「分かりました。それでは失礼させていただきます」

と悠太が言って退室した。

「レミリア、どういっつもりかしら？」

どうもこうも無い。今幽香と戦わせたら、良くて重症、悪ければ死んでしまう。

「今戦わせても、こちらにメリットが無いって言うだけよ。彼の命をベ照けるットできるほどの手ではないわ」

と、言い返す。

「人聞きが悪いわねえ、私がただ単に戦いたいからって言うだけで闘うと思っているの？」

ここに幽香の性格を知っている者が10人居れば、その10人が肯定する質問をしてくる。

「思っているわ、ハイサーカー戦闘狂」

彼女たちの間に電流走る。

「いいわ、今回は諦めてあげる。次は戦わせて貰うわよ」

と言って、席を立つ。

そこに咲夜が現れて、幽香の持ち物である日傘を手渡した。

「ハーブティー美味しかったわ。また持ってきてくださる？」

「構わないわ。彼と戦わせてくれるならね」

と言い残して、玄関を出る。

出て30メートル程して、僅かな時間、一瞬程の僅かな時間だが、首だけを回し、屋上に居るであろう悠太の方を見てから彼女は飛んでいった。

サイドアウト

## 花と妖怪（後書き）

\*1：通常の狙撃以外にも、偵察、観測も行うため、隠密行動で接近することもある。一般的なスナイパーからは邪道と言われ、彼らは一般の狙撃兵を腰抜けと評しているらしい。

\*2：米軍がM-16A2として採用している銃である。使用弾頭は5.56mm NATO弾。個人的には狙撃には向かないと思っているが、中距離の狙撃能力は高い。

練習会、そして・・・（前書き）

短かったので繋げました。

ストックが無くなって来たorz

狙撃メイドの名前を募集したいと思います。

無かった場合は、友人に考えてもらいたいと思います。

練習会、そして・・・

あれから5日して、結局集まったのは俺を含めて4人。

「じゃあ、始めるぞ」

そう言って、全員にL96A1を渡す。

「じゃあ、まずは500メートルだ」

そう言って、旗の手前にある缶を指差す。

その言葉に続いて、全員がバイポットを立てて、伏射姿勢をとる。

俺もそれに続き、姿勢をとる。

そして、狙いを定め、息を止めて撃つ。

実弾のFMJ\*1と言つことで、あまり風に流されずに缶へ当たる。

今回は訓練なので、スポッターはいない。

俺に続くように、銃声が3回聞こえた。

「500はいいな。次は700行こうか」

そう言って、手伝いのメイド（廊下でブラブラしてたのを連行した。許可はある）に無線で指示を出す。

これも難なく当てて、最終的には1、600メートルにまでなった。  
1、000メートルの時点で

「もうこちら辺からは当たらなくてもしょうがないからな」

そう言っつて銃は変えてある。

NTW-20・・・、通称ダネルNTW\*2と言っつアンチマテリアルライフルに。

この銃の有効射程距離は1、500メートルだが、有効なだけで、実際は2、000メートルでも当たれば即死レベルである。

その分、酷い反動があるが、ショルダーストックに衝撃を吸収するショックアブゾーバーが入っている。

それを使うことでショックを抑えることができる。

それを使っつても1、600と言っつ距離は遠い。

撃っつてから着弾まで約3秒、その軌跡がクッキリと見える。

それぞれが一発当てると、缶は跡形も無く消し飛ぶ。

あれが人体だったら・・・、自分だったらと想像すると、寒気を覚える。

「じゃあ、今日は止め。練習したくなっつたら、言えばまた開く」

そう言って、屋上を後にする。

門番は、あの3人のうち誰かがやるようには言っている。

「悠太」

と、パチユリーさんに呼び止められた。

「ん、珍しいですね、パチユリーさんが書斎から出るなんて」

本当に珍しい。

明日は雪でも降るんじゃないか？

「馬鹿なこと考えてると、煮るわよ？」

・・・本気の日だ

「失礼しました。本日はどのようなご用件で？」

わざとらしく敬う。

「ハア、もういいわよ。これを渡しに来ただけ」

その手には、金属光沢を放つ、円盤状の板に模様が彫られ、ネックレスのようになっている。

「タリスマン・フォー・マジカル・アーツと言って、身に付けている物の、技術や才能を伸ばす働きをするタリスマンよ」

もっとも、練習を怠っていれば巧くはならないが。

「ありがとうございます」

と、礼をする。

「いいのよ。私の大事なグリモア魔術書を取り返してくれたお礼が、この程度のことならいつでも造るわ」

と、言う。

と、その時

「あら、悠太。丁度いい所にいたわね」

と、レミリアがやってきた。

「悠太、私と一緒に博麗神社にお茶をたかりに行くわよ」

え？と思っっているうちに腕を掴まれ、引き摺られる。

途中、人里でお茶菓子を買ひ、神社へ向かう。



「ここが博麗神社よ」

と、言うことで、やってきました博麗神社。

「へー、なかなか綺麗な神社だなあ」

しっかりと管理されているようだ。

ふと目をおろすと、葉桜が回りに生えていて、中央に鎮座するよう  
に賽銭箱が置かれている。

「神社だし、賽銭ぐらい入れるべきかな」

と、財布から45円を出し、二礼二拍一礼で入れる。

「あら、ありがとうね」

と、後ろから声がして振り向くと、赤いリボンにスカートのような  
巫女服で、髪のみあげの部分には赤い髪飾り、そして何より

「涼しそうだな」

腋の開いた奇抜なファッション。

「初めましてかしら？私は博麗霊夢。この博麗神社の巫女よ」

と、言われ、我に返る。

「俺は高野悠太。今は紅魔館で門番してる」

門番？と疑問を持たれ、

「あの中国はクビ？」

という疑問を口にした。

「悠太は遠・中距離が本職よ。美鈴は近・至近距離よ」

と、かるうじてクビではないと伝えている。

一応俺も近距離は出来ますがね。

と、内思いながらも、口にはしない。が

「そういえば悠太、貴方、室内でフランに勝ってたわよね？」

おいィ、そこで思い出すのかよ

「あれは偶々ですよ。あのまま四人で攻められてたら今ここには居ませんよ」

と、言うておく。

「そう？まあ、美鈴を手放す気は無いけどね」

よかったな美鈴。レミリアに見放されては居ないぞ。

「まあ、中に入りなさい。お茶ぐらいは出すわよ」

と言って、神社の中に入る。

そのときに買ったお茶菓子（羊羹。1 / 500円也）を渡す。

それを摘みながら、談笑する。

俺の話、レミリアの失敗談、霊夢の解決してきた異変。

さまざまな話をした。

そして・・・

「じゃあ、そろそろお暇しましょう」

空を見ると、赤くなっている。

「そうね。霊夢、また来るわ」

そう言って外に出る。

霊夢は見送りだろうか、一緒に外へ出る。

「じゃあね、また駄弁りましょう」

そうだな、と返す。その時レミリアが

「近く、宴会で会うような気がするわ」

という発言と共に、地震が発生する。

「きゃー!!」

「おお!!」

その地震と共に、俺の目の前。霊夢のすぐ後ろで、轟音が起る。

神社が倒壊したのだ。

地震が収まり、霊夢が後ろを向く。すると

「あ……、ああ……」

と、泣きそうな声で嗚咽を漏らす。

「あと10秒でも外に出るのが遅れていたら、生き埋めになっていたな……」

と、安堵の声を出す。

「……霊夢、今日は紅魔館まじかに泊まらない？」

と、レミリアは霊夢を誘う。

霊夢は涙を拭き

「そうね。命が助かっただけ、儲けよね」

と、空元気で返事をする。

そうして俺たちは帰路へつく。

しかし、俺の見間違いだろうか？

霊夢の後姿に、紅い、靄のようなものが見えたのは。

練習会、そして・・・（後書き）

\*1：鉛の弾を銅などで完全に覆ったもの。人体を軽く貫通させることが出来る。

\*2：南アフリカが製造したアンチマテリアルライフル。使用弾は20mm×82という化け物のような弾を使用する。

白玉楼へ侵入者ではない（前書き）

他の幻想入り読むと、異変でもないのに正面から白玉楼行ってもみよんに切られてるor切られそうになってるのは何故？

確かに辻斬りまがいの発言してるけどさ・・・、可哀想だよ）\*、・、\*（

白玉楼く侵入者ではない」

翌日

確認してみると、紅いオーラではなく、靄のようなものが霊夢だけではなく、レミリアやパチュリーさん、咲夜さん、自分からも確認できた。

その靄のようなものは空の方に昇っているように見える。

「上空に昇る靄に博麗神社限定の地震・・・」

建物が倒壊するほどの地震なのに、被害は神社のみ・・・。

「誰かが起こしたものに違いなさそうね」

と、御祓い棒を構える。

「霊夢はどうするの？犯人を捕まえに行く？」

レミリアはモーニングティーを飲みながら尋ねる。

霊夢には緑茶が、俺にはコーヒーが出されている。

「当然でしょ！このままにしてたら舐められるわー！！」

と、やる気満々である。

「まあ、解決して神社が直るまではここに寝泊りすればいいわ」



と、レミリアは言うが

「一分一秒でも早く解決してやるわよ!!」

と意気込んで、緑茶を飲む。

「私たちも協力するわ」

と言っても夜にしか動けないわけだから、必然的に咲夜が動くことになる。

「俺は自分で動く。引つかかることもあるしな」

空に昇る紅い霧。

これが異変に関係すると言うなら、これを迎えば犯人につながるだろう。

「ここより高い場所はいくつある?」

結果は3箇所。

冥界、妖怪の山、守矢神社だそうだ。

この3箇所をつぶしていけばいいだろう。

まずは一番低く、入りにくそうな冥界から行こう。

で

来た方がいいが・・・

「どつしよつか・・・？」

でかい結界に阻まれ、向かうことが出来ない。

と、そこに

「お困りのようね」

と、紫が現れる。

「お久しぶりですね、紫さん」

「あら、驚かないのね」

つまらないといった様子で話す。

「この結界、通れますか？」

この結界は上ががら空きなんだそうだ。

「通してもらえませんか？ちょっと調べたいことがあるんですよ」

と、頼んだところ、即OKをもらえた。

と言っても、結界の反対、手を伸ばせば結界に触れそうなほど近くで……

「登るのか……」

見ても長いと判る階段を登ることになる。

途中で休憩を挟み、ようやく頂上の門が見えてきた。

それにあわせて、銃を作る。

今回出したのはG11\*1

それを手に、門を叩く。

そして

「何者だ!!!」

と、一閃された。

スパツと斬られ、斬られた部分が音を立てて落ちる。

「おお!!!」

流石に驚かない方がおかしい。

いきなり斬られたのもアレだが、一面銀世界となっている。

「そうですか……、悠太さん！貴方がこの異変の犯人ですか！」

と、言いつつ切り付けてくる。

それを避け、両手にCZ75\*2を取り出す。

妖夢からも紅い霧は出ていて、空に昇っている。

それよりもだ。

「何のことだ!!」

パンツ、という軽い音と共に放たれた銃弾は、妖夢の持つ刀に防がれる。

「妖怪の鍛えたこの楼観剣、切れぬものなど、あんまり無い!!」

一応はあるのか、と思いながらも、

「硬質ゴムだから、普通のナイフでも切れるんだけどな」

と、教えてやる。

「そんなの関係ありません!そんなことより、早くこの異常気象を止めてください!!」

「俺じゃねーよ!俺も犯人探ししてんだよ!!」

「なら何故ここに来たんですか!!」

「紅い霧が上に揚がっていくのが見えたから、標高の高いところを

風潰しに探してるんだよ!!」

「そんな霧がどこにありますか!!」

と、その問答をしながらも、斬られては逸らし、逸らしては撃ち、弾かれる。

「少なくとも俺と咲夜さんの目には映ってるよ!!」

と、まるで話にならない。

そうしている内に

「人符『現世斬』!!」

妖夢が思い切り踏み込み

「ぐツ・・・!!」

切り込んでくる。

それを銃を交差させて弾くが、右手の銃が弾き飛ばされる。

「クソツたれ!!」

がら空きの後姿を見て、左手の銃を撃つ。

その弾は妖夢の右手に当たり、楼観剣を落とす。

しかし、妖夢が残りの短い、小太刀ほどの刀で切りかかってくる。

銃で 間に合わない。腕が飛ばされる。

ナイフは？ 同じく間に合わず、腕が飛ぶだろう。

回避 間に合わず、内臓が出るほどの重症だろう。

とっさに俺は

「くっ!?!」

踏み込む。

そして

「うらあ!!--」

気合一閃、掌底を妖夢の鳩尾より少し上、肋骨の辺りに当たり

「ガッ・・・」

メキリ、と言う嫌な音と共に、妖夢の動きが止まる。

そのまま妖夢は飛び、1メートルほど先で倒れるが、起き上がろうとする。

それを阻止するため、ナイフを抜き、小太刀を持つ左手を足で押さえ、首元にナイフを突きつける。

その口からは赤い筋が見えており、内臓　　殴った位置からして肺だろうか？　　を傷つけているのが判る。

「これ以上しないなら俺は出て行く。いいな？」

妖夢はコクリと肯き、俺はナイフをしまう。

そして妖夢を起き上がらせて、廊下に寝かせてから門へ向かう。

ここも被害に遭っているということが判れば十分だ。

そうして俺は階段を降りる。

結界はまた紫さんが何とかしてくれるだろう、いや、してもらいたいと考えながら階段を降りる。

どつやら壊されるよりも繋げた方が楽らしい。

紫さんは階段の下で待っていた。

どつせなら階段の上で繋げてくれればいいのに……。

と、愚痴をこぼしながら歩く。

次の目標は妖怪の山。

守矢神社もここにあると言うことで、一石二鳥である。

が、ひとつ問題も出てきた。

妖怪の山は排他的で、他の人間、妖怪も立ち入ることは出来ないと言う。

入る場合は、特別な許可 降りるはずも無いが か、忍び込むしかないようだ。

当然俺は許可などないので、必然的に後者になる。

そのために

「すいません、ネットをひとつください」

人里で多めにネットを購入した。

そのまま妖怪の山の麓まで来て、草を采る。

これも多めに采り、持ち帰る。

時は既に夕方。

このまま行けば確実に夜になるだろう。

夜に、妖怪の山に行くのは危険すぎると思い、紅魔館へ戻る。

それをネットに結びつけ、余ったネットと草は銃へつける。

このとき、排莢、リロード、サイトの邪魔にならない位置につける。



染める必要も無いので、結びつけるだけでいいというのが自然を利用したギリースーツの利点である。

欠点は、枯れたら使い物にならなくなることであるが、それは季節による。

秋などの枯れ草の多い時期では使えることもある。

銃は、万一戦闘になった際に創る口スをなくす為でもある。

今回もM16A4を用意して、サブレッサー\*3に、サブソニック弾亜音速弾\*4を使い、銃声を抑えている。

さらに、ACOGスコープ\*5を着けて、ある程度長距離まで対応できるようにする。

そしてM9にもサブレッサーをつける。

それに双眼鏡を一つ持っておく。

視野は狭くなるが、光の反射で気付かれないように、レンズには四角い穴を開けて、光が入りにくくなるようにしている。

準備は出来た。

あとは寝るだけでいいという状態にしておく。

と、その時。

コンコン

ドアがノックされた。

「悠太、起きてるかしら？」

咲夜さんの声だ。

「開いてますよ」

と、答えると

「経過報告をするから来なさい」

と、言われてレミリアの部屋へと向かう。

そして

「報告は以上ね？」

と、報告が終わる。

俺の行った冥界以外は、魔法の森　魔理沙とアリスは白  
は異常気象とも言える天気だったそうだ。

その途中の河では、異常気象とも取れる程の濃い霧が出ているとの  
こと。

永遠亭でも同じように異常が起こっていて、鈴仙が調査をしていた  
そうだ。

あと怪しいところと言えば・・・

そう、妖怪の山がド本命になっている。

「明日は妖怪の山に行こうと思ってる。そのための準備をしてたんだが・・・」

どうやら咲夜さんと霊夢は乗り込む気でいるようだ。

「私たちは乗り込むわ。やられっ放しは癪だしね」

霊夢の意見はなんとなく分かる。

「私はお嬢様の命があれば今にでも乗り込みます」

流石完璧で瀟洒なメイド、言うことが違う。

「まあ、霊夢たちが暴れてくれれば俺も忍び込みやすい。なら霊夢たちが天狗たちの住処で俺は守矢神社を探ろう。その時に、暇があったら援護をするよ」

悠太は妖怪との近距離戦闘に慣れていないため、また、一人での多数戦は厳しいと言うことで戦闘にならぬように動く必要がある。

故の単独潜入によって、戦闘になりにくい守矢神社に向かうこととなった。

それで行きましょう。

ということまで話が終わり、それぞれ解散となった。

明日はしんぱんぶんのちひ。。。

と、考えつつ眠りにつく。

## 白玉楼く侵入者ではないく（後書き）

- \* 1：無薬莖弾と言う、薬莖を排出しない特殊な弾薬を使用する。バーストとフルオートで射撃レートが変わり、過熱しすぎると暴発するという欠点があり、一マガジン5万円と、某JPN政府も真つ青のばら撒きで、一発千円ほどという、なんとも燃費の悪い銃である。ブルパップ式。
- \* 2：鋼削り出しで作られた、作者が知る限り最も硬い銃。
- \* 3：減音器。音を小さくしてくれるが、無くなるわけではない。亜音速弾を使わなければ甲高い銃声になる。また、マズルフラッシュも小さくなる。
- \* 4：音速を超えない速度で発射される弾。弾頭が重くなっていてサプレッサーを着けて撃つと殆ど銃声が無くなる。サプレッサーのみで普通の弾を撃つと、甲高い銃声になる。拳銃の場合、元々が音速以下なので、亜音速弾にする必要は無い。
- \* 5：低倍率のスコープで、2く5倍ほど。

妖怪の山々前編（前書き）

妖怪の山での話。

戦闘描写難しすぎワロえない。

## 妖怪の山々前編

### 妖怪の山麓

#### 悠太サイド

「最終確認だ。咲夜達が山に乗り込んで、約10分後に潜入、守矢神社がクロならそのまま戦闘、シロなら援護に向かう」

その後、無線機の確認をして、咲夜達は山へと入っていく。

俺は、昨日用意したM16を担ぎ、ハンドガンも昨日の内に用意したM9を使う。

(まんま海兵隊の装備だな)

と考えつつ、時間を見る。

そろそろ10分だな。

その時、山に派手な光の珠が無数に飛んでいるのが見えた。

「始まったか」

それを始まりの狼煙だと考えて、のそのそと山に入る。

登りだして早30分……。

息を切らしながら登る。

すると

「おお？」

先に視界の開けた所があるのを確認する。

その場で伏せて、匍匐に移行する。

今まで他の妖怪、妖獣たちには会うことは無かったが、ここで初めて動く生物を見つけた。

「……幻想郷の巫女は腋だしがデフォなのか？」

そう、境内を掃いている、俺と同じぐらいの女性も、腋を出している。

そして、髪には白い蛇と、蛙を模しているらしい髪飾りが着けられている。

そして

「シロ、か」

その身体からも、赤い靄が昇っていた。



「こちら悠太。守矢神社に着いたが、どうやらここもシロだ。そっちはどうだ？」

「こちら咲夜！シロクロ判らないけど、数的にすごい不利よ！！何とか持ちこたえてるけど、そろそろ本気で拙いわ！援護をお願い！！」

流石に二人で一つの里を、しかも妖怪の里を落とすのは無理のようだ。

「了解した。これより移動に入る、少し待っていてくれ」

そうして通信を切り駆け出す。

数分して

「今どこにいるんだ？最初の光の珠を上空に放ってくれ」

そうして数秒後、上空に夢想封印が放たれる。

「位置を確認した、もう少しで援護できる。持ちこたえてくれ」

そうして数十メートル移動すると、三百メートルほど先で咲夜さんが戦闘しているのが見える。

（分断されて各個撃破されそうか・・・）

急いで伏せ、射撃姿勢を取り、咲夜さんに斬りかかっている天狗の足を撃ち抜く。

「位置に着いた。これより援護する」

サイドアウト

咲夜サイド

私達は無線の確認をして山に入る。

「しかし、妙に静かよね？」

霊夢が話しかける。

何でも、以前山に入ったときはすぐに神の警告があったそうだが。神  
って意外と暇なのかしら？

「静かな方がやりやすいし、いいんじゃないかしら？」

などと話しながら、登って行く。

そして

「動くな！しんnyぎゃあ！……」

警告してきた白狼天狗に霊夢が夢想封印をかましていた。

「さあ、忙しくなるわよ!!」

もう少し穏便に出来ないものだろうか？

そうして数分。

先ほどの光と音で、周りの天狗も気付いてこちらへと襲い掛かってくる。

私はナイフを、霊夢は御札と針で迎撃していく。

進むにつれ数も多くなり、20分後には完全に足を止められていた。

「数が多いわね・・・、これが多種族の強みかしら？」

と、斬りかかってきたのを避けて、ナイフを腕に投げる。

その痛みの為か、刺された天狗は青龍刀のような刀を落とす。

最初は押していたが、どんどん数が多くなり、数が多すぎて後退しだしている。

「拙いわよ霊夢、そろそろ足を止めなきゃ!!」

「判ってるわよ!!」

お互いの怒鳴り声が木霊する。

その時

「こちら悠太。守矢神社に着いたが、どうやらここもシロだ。そっちはどうだ？」

この一声で希望が見える。

「こちら咲夜！シロクロ判らないけど、数的にすごい不利よ！！何とか持ちこたえてるけど、そろそろ本気で拙いわ！援護をお願い！！」

「了解した。これより移動に入る、少し待っていてくれ」

あとは完全に持ちこたえるだけ。

「霊夢！あと少しよ！！絶対に下がらないでよ！！」

「判ってるわよ！！アンタこそ下がらないでよ！！」

咲夜は殺人ドールを、霊夢は陰陽鬼神玉を発動して耐える。

しかし、一対多には向かない鬼神玉のせい、霊夢に天狗たちが殺到する。

それを咲夜がナイフで抑える。

その時

「今どこにいるんだ？最初の光の珠を上空に放ってくれ」

「霊夢！空に夢想封印を撃ちなさい！！」

言い切るか否かのタイミングで霊夢が夢想封印を放つ。

放った夢想封印は、一発だけ空に昇り、他はすべて天狗を吹き飛ばした。

「位置を確認した、もう少しで援護できる。持ちこたえてくれ」

その声が聞こえたとき

「ハアア！！」

一人の天狗が私に斬りかかる。

「ふッ」

それを後方宙返りで避ける。

しかし、霊夢との距離が大幅に開いてしまった。

その時、後ろに動くものを感じ取る。

「しま」

しかし、その天狗は刀を振りかぶった状態から転んだ。

いや、倒れた。

「位置に着いた。これより援護する」

という、悠太の声が無線から聞こえた事に胸を撫で下ろす。

サイドアウト

妖怪の山々前編（後書き）

誤字脱字、リクエスト、質問、コラボ等がありましたら何なりと言  
ってください。

というか、批判が少なすぎて心配になってきます。

予約掲載で2月29日にしたらどうなるんだろうかw

妖怪の山々後編（前書き）

2月29日でしたら、3月1日になりました。



## 妖怪の山々後編

悠太サイド

ギリギリ間に合ったようだ。

「とりあえず近づいてくれ」

そう言うと、両方を援護できるくらいまで近づいてくれた。

「ある程度数を減らしたらスモークを張るから、それに紛れてくれ」

スコープ越しに頷くのが見えたので、スモークを放つためのアーウエン37\*1も用意しておく。

今回使用している弾はFMJ\*2の亜音速弾。

これを足の脹脛辺りに撃ち込む。

そうすれば動けなくなる。\*3

そうして数分。

「そろそろ動けなくなってる奴らの出血が酷いから先に進もう。スモークが十分広まったら言っから準備をしていてくれ」

そう言ってアーウエン37を撃つ。

20メートルほど間を空けて撃ち込み、約100メートルほどの煙幕が出来る。

「煙の中に走りこめ！」

グレネードに弾を入れつつ言う。

すぐさま走り出し、煙に入って姿が見えなくなった。

その先にもスモークを撃ち込み、充分煙が広がったことを確認し、移動しようとしたとき

「そこまでです」

首筋に刀が添えられる。

サイドエンド

咲夜サイド

悠太の援護が始まってから、後ろに気を配らなくていいので戦闘が楽になる。

悠太に撃たれた者は、足を押さえて蹲っている。

「悠太も上手いわねえ」

一人の足をナイフで刺し、転ばせる。

悠太ほどではないが、戦力を着実に削っていく。

「とりあえず近づいてくれ」

と、指示が来たので、霊夢の傍に寄る。

「ある程度数を減らしたらスモークを張るから、それに紛れてくれ」

どうやら殲滅はしないようだ。

それに頷き、霊夢の後ろから来た天狗の足にナイフを投げつける。

霊夢は、私の後ろの天狗を吹き飛ばしたようだ。

「意外といいコンビね」

「そうね、次の宴会のときにでも話さない？」

と、喋る余裕も出始める。

「そろそろ数も減ってきたわね」

と思っていると

「そろそろ動けなくなってる奴らの出血が酷いから先に進もう。スモークが十分広まったら言うから準備をしていてくれ」

そう言われたと同時に天狗の攻撃を避けて、膝を鳩尾に入れる。

十秒ほどして、

「煙の中に走りこめ！」

後ろを見ると、既に煙が広がっている。

その中に向かって走りこむ。

天狗はもう追ってはこないようだ。

そのまま走りぬけ、悠太を待つ。

その時

「すまない、天狗に捕まった。これ以上の援護は不可能」

という言葉が最後に通信が切れた。

サイドエンド

悠太サイド

「すまない、天狗に捕まった。これ以上の援護は不可能」

と、小声で伝える。

「こちらの指示に従っていただければ手荒な真似はしませんよ」

と言われ、銃を放り投げ、手を頭の後ろで組む。

「手を上げて立って、そのまま前にゆっくり歩いてください」

この声……、どこかで……？

そのまま天狗の里の一室に入れられ、椅子に手足を固定された。

銃火器は伏せていた所に捨てられ、無線は取り上げられている。

「さて、貴方達は何の目的で山に侵入したんですか？」

顔を見て思い出した。

今俺に尋問をしているのは射命丸文だ。

「異変の解決にね。今のところの本命はあんた達だが……」

文と、もう一人白髪で手に右手に刀、左手に紅葉の模様の入った盾を持っている天狗の身体からも赤い靄が昇っている。

「異変なんて情報はありません」

「最近異常気象か、天気がおかしかったり、地震があったりはしなかったか？」

現に博麗神社は地震で倒壊しているが・・・

「そんなことは・・・いや、そういえば」

と、最近突風が多いとブツブツと言っているが

「ともかく、我々はその異変に関係ありません。すぐに山を降りてもらいます」

と言って、仲間の天狗に連絡を取ろうとする。

「今、あなたの身体からも靄が昇ってる。つまりここよりも高いところに元凶が居るらしい。それが判った以上、降りるなんてことは出来ないね」

そう言つて、後ろにゴルフボールほどのC4を投げ、地面に付く音がした後にスイッチを押す。

爆発音と共に、爆風が襲う。

椅子ごと倒れたが、そのときに創った銃剣付きM16で縄を切り、同じく爆風で飛んだ射命丸に銃口を向けてホールドアップする。

そのあと直に他の天狗が駆けつけるが、すぐさまM93R\*4を創り、射命丸の首にナイフを突きつけ盾にする。

そのまま、じりじりと山に登る形で下がって行く。

「こんなことしても、あとで報復がありますよ」

脅す形で射命丸が言う。

「そんな後の事よりも現在の<sup>今</sup>の方が大事なんですね。静かにしててくれれば傷つけることは無い」

と、言っつて山に登る。

「もういいだろう」

そう言っつて射命丸を放す。

「少なくとも、解決したら記事を独占させて貰いますからね!」

そう言っつて射命丸は飛び去っつていった。

やれやれ、時間がかかっつちまつたか。

その時、後ろでガサガサと草木を掻き分ける音が聞こえ、銃口を向ける。

「誰ですか？」

守矢神社の巫女らしき人物が顔を覗かせる。

その顔を確認すると、銃口を下ろす。

「軍人さん……、ですか？」

迷彩服を着ているため、軍人に間違われたようだ。

「軍人の真似事かな？そんなことより何しに来たんだ？」

話を聞くと、天狗の里の方でなにやら騒ぎが起きているようなので、様子を見に来たらしい。

「あー、その騒ぎの原因は俺だろう。爆薬も使っちゃったし」

え？という表情をした後、直ぐにスペルカードを構える早苗。

「闘う意味は無いつて」

そう言つてナイフと銃を早苗の足元に投げる。

「……目的は何ですか？」

こちらを睨みながら聞いてくる。

「異変の解決かな？霊夢達はもう上に行って、頂上まで行ってるんじゃないか？」

またも、え？という表情をした後、スペルカードを降ろす。

「霊夢さん達？」

そう、と答えた後

「この山より高い所つて、何かある？」  
そう聞くと、少し考えた後



「冥界の上・・・、そこに天人が住むって言う天界があるって神奈子様がいつてました」

という有力な情報が手に入った。

「OK、元凶はそのようだ。じゃあ、俺はそれを伝えなきゃならんから、これでお別れだな」

そう言って山頂に向かって歩き出す。

どうやら解決は明日になりそうだなと思いつながら、頂上付近で立ち往生していた二人と合流して紅魔館へと戻った。

その晩、昨日と同じく報告会が開かれたが

「しかし、あんたが天狗の里から脱出してたとわねえ・・・」

これで三回目である。

一回目は頂上で、二回目は帰り道で、三回目が今。

「しつこいな・・・、能力使っただけだろ」

そう言って一口水を飲む。

「まあ、元凶は天界に住む天人が濃厚。行き方は冥界の遙か上空」

俺も行きたいが

「俺は大人しく残ってるよ。飛べないし、足手纏いになるだけだろ？」

そう言うが

「ここまで来たなら最後までやり通しましょうよ」

という一言で俺の参加が急遽確定したわけだが……。

ドウシテコウナッタ。

しかし

「今日みたいに霊夢の腕に捕まって飛ぶのはいいが……」

山からの帰り道は霊夢の腕に捕まって帰ってきた。

その時の形は霊夢の腕に片手で捕まり、片手では銃を構える形にしていた。

霊夢の能力は「空を飛ぶ程度の能力」であり、この能力はすべての重圧からの解放であり、それこそ重力から相手の圧力から解放される。フレッシュヤー

その能力を使って、俺にかかる重力すら解放したらしい。

「かなり恥ずかしいぞ、アレ……」

大の男が女性に捕まって空を飛んでいる……。そう考えるとかなりマヌケである。

「プライドなんてつまらない物は捨てた方が楽よ」

そう言っただけで霊夢は茶を一口煽る。

「そんなことよりも、明日の話をしましょう」

と、今まで黙っていた咲夜が声をかける。

「だな。とりあえず、相手が室内に居れば俺の閃光手榴弾で簡単に制圧できるが……。屋外に居たらどうする？」

「そもそも天人がどういった存在なのかを詳しく聞くべきであるが・

・  
「貴方の狙撃でいいわ。ただし、殺さないようにね？」

要約「痛めつけるのはいいけどドドメは私がする」ということである。

「はいはい、どの道殺すっていう選択肢はないからねー」

と、再び水を飲む。

「で、そもそも天人て何なんだ？」

その質問には霊夢が答えた。

曰く、彼らは死んで成仏した者達である。

曰く、彼らは元仙人で、不老不死を得た者達である。

曰く、彼らは欲を捨てた者達である。

「・・・無欲な奴らが異変なんて起こすのか？」

「判らないけど、今は天人が一番怪しいことに変わりはないわ」

そう言っつて御被い棒をギュッと握る。

「明日は早いわよ。天界についてから犯人探しなんだからね」

そう言っつて自然と解散の流れになった。

明日は何が待っているのやら・・・。

## 妖怪の山々後編（後書き）

- \* 1：リヴォルヴァー型のセミオートグレネードランチャー。5発。
- \* 2：鉛の芯に銅などを覆ったもの。貫通力が高い。
- \* 3：人間にやった場合、脛脛がグジャグジャになります。
- \* 4：M9と同じ、イタリアのベレッタ社が作ったハンドガン。トリガーガードの先にグリップが着いていて、リコイルコントロールがしやすい。3点バーストが出来る。使用弾は9mmパラベラム。

空気の読めるお方。(前書き)

今回の地震、津波、原発等で亡くなられた方々にご冥福をお祈りいたします。

## 空気の読めるお方。

次の日

「準備はいいわね？」

霊夢の声に、二人が頷く。

咲夜はナイフを、悠太は普段以上の装備をしている。

「これで終わらせて、神社を直させるわよ!!」

おー!!!!

と言ったのは霊夢のみで、咲夜さんは白い目で、俺はやる気を削がれた様な目で霊夢を見る。

「まあ、本来の目的はそうなんだろうけどね」

流石にどうでもいいことではある。

「ま、終わったら宴会の一つでもしようか」

と、皮算用をする。

「じゃあ、行きましよう」

と、咲夜が言つて、紅魔館を出る。

「しかし暇なもんだな」

悠太は、スコープのみを創り、周りを見渡す。

「周りに異常なし。・・・これ意味あるのか？」

霊夢が、「片手じゃ針も札も投げにくいから監視よろしく」と言っていたが、これほど見晴らしが良ければ意味も無い。

戦場だつたらいいのだ。

「一応よ。魔理沙みたいな火力持ちだつたら大変だしね」

魔理沙は「弹幕は火力」<sup>パワー</sup>を信条としているらしく、高火力の物が多いらしい。

それをアリスの近くで言うと、「弹幕は頭脳よ」<sup>ブレイン</sup>と返されるらしい。

そんなことはともかく、白玉楼に続く結界が見えてきた。

「じゃあ上昇するから、しっかり捕まつてなさいよ！」

そう言つて、グンと上昇する。

そのまま階段が見えて、それを飛んだまま超えていく。



「止まれしんny・・・みゅん!？」

出てきた妖夢に閃光手榴弾をプレゼントして通る。

「通らせてもらつわよ!」

と、声を荒げる霊夢に対して、幽々子さんは

「気をつけてね」

と、右手にお茶を持ち、左手で手を振っている。

・・・妖夢ドンマイ

などと考えていると

「そこの方、止まってください」

と、声を掛けられた。

周りは霧・・・、上空と言うことを考えると、雲だと考えられる。

その中から、濃い青の髪を肩ほどで切り、皆から昇る靄と同じ色をした羽衣を羽織って、スカートと帽子が同じ黒で統一された女性が歩いてくる。

「いいところに来て下さいました。これから地震が起こります。とても大きな地震です。帰って用意をしておいてください」

それでは、と帰ろうとする女性を、近くに居た咲夜が引き止める。

「これから地震が起こる？もう地震で神社が倒壊したわ。それについて知っていることを話してもらおうわ」

と霊夢が言う。

「既に地震がおかしいですね」女性は雲を見回して「雲を見ればこれから地震が起こるように見えましたが・・・」

もしや・・・、女性がそう呟いたのを聞き逃さず

「関係しているなら話してもらおうわ」

咲夜が言い放ち、ナイフを投げる。

それを避けた女性は

「これから地上に地震のことを知らせに行かなければならないのですが・・・」

と言っではいるが、戦闘の空気を読んだようで

「しょうがないですね、付き合いますよ」

そう言っただけだから青白い光が発生する。

「龍宮の使い、永江衣玖、空気を読んで戦ってあげましょう」

そう言っただけで身構える。

「悠太、霊夢。先に行きなさい」

ナイフを構えた咲夜さんが言う。

「・・・分かったわ。行くわよ悠太！」

そう言つて上昇する二人。

その二人に対して

「犯人はおそらく総領娘様です。少しお灸を据えてあげてください」と言つてきた。

サイド咲夜

「行かせてよかつたのかしら？」

ナイフを構えつつ聞く。

「もし、本当に総領娘様が原因であるなら、止めねばなりません。これほどの地震が起これば、地上の人間は十分の一になってしまうかもしれません。それは、幻想郷のバランスを考えたら、あつてはならないことです」

そう言っつて緊張を解く。

「しかし、天界にいる鬼を合わせても三対二。一対一でなければ総領嬢様も気に入らないでしょう。ですから、今ここで貴女を足止めする必要がありますので」

そう言っつて、羽衣を手に巻きつける。

「なら、さっさと貴女を倒して先を急ぐことにするわ」

『咲夜の世界』

スペルカードを使った瞬間、咲夜のみが動く世界に変わる。

速符『ルミネスルコシエ』

投げたナイフが、一本、また一本と、衣玖の衣を岩に縫い付けていく。

「そして時は動き出す・・・」

そう呟いた瞬間。

「あら？」

見事に張り付けにされ、動けなくなる衣玖。

「参りましたね・・・。このような芸当が出来る方とは」

やれやれと、一つ溜め息をつく。

「しかし、これで私はどうにも出来ません。どうぞお先に行ってください」

手と言葉で先に行くように促す。

「今晚の夕食は鰻かしら？食べきれるといいけど・・・」

そう呟いて。

「あー、すみません。行く前に左腕だけでもいいのでナイフを外して行ってもらえませんか？」

その言葉は誰にも受け入れてもらえない。

サイドアウト

空気の読めるお方。(後書き)

最後のネタは友人から頂きました。

酔っ払いは見てる分はいいが、絡まれるとウザイ（前書き）

原発が怖くて震えてました。

11/03/21

酔っ払いは見てる分はいいが、絡まれるとウザイ

雲の上に着くと、そこには地面があり、木が生えている。

「かなり有力な発言だったな」

総領娘様。

様は敬称だから抜かす。

これをヒントにすれば探すのは容易になるだろう。

そう思っている

「悠太じゃないか！」

と、節分で聞いた声がする。

「萃香か？」

「久しぶりだねえ」

瓢箪を煽りながら、近寄ってくる。

「霊夢も一緒かい？」

呑む？

要らない。



そんなやり取りをしているかのように、萃香が瓢箪を突き出して、それを霊夢が手を振って断る。

「にしても、何でこんな辺鄙な場所に来たんだい？」

突き出した瓢箪を、そのまま口に運んだ後聞いてくる。

「ここに地震を起こした奴が居てね。知らない？総領娘とか言われてたけど」

あー、と考えるようにして数秒。

「確かそんな奴居たねえ。名前は確か天子とか何とかって」

そんなことより、と言葉をつけたし

「悠太、一戦やってかないか？酒を呑む以外にやる事が無くてねえ」

オヨヨ、と泣いた真似をする。

「そんな暇は無いわ。それに、能力以外一般人の悠太が鬼と戦って無事に済むとは思えないし」

そう言って先に進もうとするが・・・

「そんな釣れないこといわないでさ、闘たたかおうよ」

萃香が道を塞ぐ。

「しょうがないわねえ。悠太、先に行きなさい。後から追いつくわ」  
そう言っつて悠太を押し。

そのまま走り、霊夢達から離れる。

#### 霊夢サイド

「なんでアンタがここに居るのよ」

と、お札をと御祓い棒を構えながら聞く。

「ここに気質を集めてる奴が居てね。気になったから来たんだよ」

と、再び酒を煽る。

「会ってみたら別に普通でさ、この場所と桃を貰って飲み食いしてるのさ」

と、今度は桃を齧る。

「霊夢もどろ？なかなか美味いよ」

そう言っつて、手頃な木から桃をもぎ取り、霊夢に投げ渡す。

それを一齧りする。

硬すぎず柔らかすぎず、それでいて瑞々しい。

「ホント、美味しいわね」

それを食べきる頃に、咲夜がやってくる。

「・・・何やってるの？」

「鬼に絡まれてた」

「・・・その割には楽しそうだったわね」

気にするなと手で合図をする。

「で、2対1になったけど、やるのかしら？」

萃香は、うーんと悩むが

「楽しそうだね。かかってきなよ」

と、挑発をする。

「なら、後悔しないことね！」

「話が見えないわ」

と、それぞれスペルカードを構える。

珠符『明珠暗投』

霊夢の陰陽玉が巨大化し、飛び跳ねながら萃香に向かっていく。

霧符『雲集霧散』

その陰陽玉を、瓢箪を叩きつけて弾く。

「横ががら空きよ」

奇術『エターナルミーク』

「お？」

がら空きの横から、咲夜が至近距離でナイフを投げまくる。

「ナイスよ、咲夜」

咲夜に向けて親指を立てる。

「そんなことしてる暇があったら次をしなさい。あの程度で倒れる鬼じゃないでしょう？」

再びスペルカードを構える咲夜。

釣られるようにして、霊夢もスペルカードを構える。

「痛たた・・・、二人いつぺんは厳しいね、やっぱり」

なら、と、即座にスペルカードを掲げる。

鬼符『ミツシングパワー』

掲げきつた瞬間、萃香が巨大化する。

「あー、そんなのもあったわね・・・」

「でも、有効なのは確かよ」

巨大化したことで、腕、足、瓢箪までもが大きくなり、射程距離が大幅に伸びた。

「怪我しても知らないよ!」

そう言つて瓢箪を振り回す。

霊夢と咲夜は、それを屈むことで回避する。

「大きくなつたから下を攻撃しにくくなつたのかしら?」

「??じゃあるまいし、そこまで馬鹿じゃないでしょう」

と、話をしていると

酔神『鬼縛りの術』

即座に小さくなつた萃香は、スペルカードを掲げ、屈んで動きにくくなつた二人にスペルカードを使う。

「そういつこ・・・きゃあー!」

霊夢が鎖で縛られる。

「力が・・・吸い取られる!?!」

鎖に、霊夢の身体から滲み出るように零れる青白い光が吸収される。

「そこ!」

傷符『インスクライブレッドソウル』

咲夜が近づき、両手に持ったナイフで出鱈目に切りつける。

それを、霊夢を離して距離を取ること回避する。

「助かったわ」

「礼は後！畳み掛けるわよ！」

銀符『シルバーバウンド』

宝具『陰陽鬼神玉』

咲夜のシルバーバウンドが退避路を塞ぎ、霊夢の陰陽鬼神玉が萃香を狙う。

「あー、こりゃやばいわ」

そう言って、陰陽鬼神玉が萃香に当たる。

そのまま吹っ飛び、地面へと倒れて

「降参降参」

と、手を掲げてふらふらと揺らす。

「久々に楽しめたよ。また機会があったら、悠太も混ぜて闘やむいおうよ  
そう言っつて、ムクリと起き上がると、酒を煽る。

「こいつの考えは良く分からないわ・・・」

「それは後で考えるところとして、先に進むわよ」

じゃあね〜、と、萃香はこちらに手を振る。

そのまま空を飛び、悠太の走っていった方へ向かう。

「悠太は元凶を見つけられたかしら？」

「見つけていようと見つけていまいと、やることは一つよ」

周りの天人に話を聞きながら、総領娘とやらを探す。

サイドエンド

空の上の住人（前書き）

東電幹部以上の奴らは燃料棒の上で焼き土下座しなきゃ許されない  
レベル。

3 / 28



## 空の上の住人

「ああ、もう。何でこんなことになったんだ」

そう一人愚痴る。

犯人を見つけたら一発ぶん殴ってやる。グーで。

そう思いながら走ることに数分。

走っている間に、奥の手の確認をする。

そして周りの天人に聞いたところ、濃い青髪で、虹色の飾り布のついた服を着て、帽子を被り、その帽子に桃が付いているという。

さらに数分。

「アンタが天子か？」

特徴にピッタリの女の子がいた。

「そうよ。これから地震を起こすんだから邪魔しないでくれる？」

そう言うと、剣を取り出す。

「邪魔をするなら、斬るわよ？」

そう言って構えを取る。

俺はG11を創り、三点バーストで撃つ。

天子はそれを

「甘いわね!!」

剣を地面に突き刺すと、岩が競り上がってきた。

その岩が銃弾を止める。

「メンドクセエことしてくれるなあ!!」

G11を捨てて、カールグスタフM3\*1を撃ち、爆発するが、煙が晴れたときには大きく削れた壁も、新しい壁がそれを隠すようにそびえ立つ。

「こいつならどうだ!!」

そう言つて、M2ブローニング\*2を創る。弾は徹甲炸裂焼夷弾HEIAP\*3を使用する。

しかし

「畜生Damn!これだけやつても駄目かよ!!」

次々と壁を作られて防がれてしまう。

ドドドドドドドドという轟音と共に、次々と12・7mmの巨大な爆弾が撃ち込まれるが

ガチン!という音と共に弾が切れる。

「踏んだり蹴つたりだな！Fuck！」

急いで弾を作り出し装填しようとするが

「イッテエ！」

石が飛んできた。

その石にはしめ縄がされている。

その石に注視していると

「余所見は危ないわよ？」

声のした方を見ると、先ほどの剣を振りかぶっている天子がいる。

すぐに、創り出したマガジンを盾に使う。

弾の入っている半分ほどまで切れて止まる。

その隙に距離を取り、M3スーパー90\*4を創る。

その照準を合わせて、引き金に指を掛ける。

が

ガン！バン！

「グッ！」

石に邪魔をされる。

「要石のお味はどう?」

その石に座りながら天子が聞く。

「要石・・・?」

「そう、要石」そう言つと石から降りて近寄ってくる。

「私の能力は“大地を操る程度の能力”。大地がある場所なら私は最強よ!!」

説明している間にM3を持ち直し、弾を一発、先ほどの暴発の分を入れる。\*5

そうして発砲するが、壁に阻まれる。

次を撃つと、照準を合わせようとする。が

左足が宙に浮いた。

いや、持ち上げられた。

そのまま動かすことも出来ずに、転ばされて、頭を打つ。

声にならないうめき声を上げ、立ち上がるつとすが

「余所見は危ないって言ったでしょ?」

ズブリと、天子の持つ剣が悠太を地面に張り付けた。

軽い脳震盪だろうか、頭がくらくらしていたが、突き刺された痛みで意識がはっきりし、そのおかげで再び痛みを感じる。

「地上人はどうあがいても天人には勝てないって解ったかしら？」

そう言つて悠太の脇腹を蹴る。

蹴る蹴る蹴る。

何度目か分からないくらい蹴られたが、痛みで意識ははっきりしている。

その時、蹴っていた足を掴む。

そして

一発の銃声と共に、天子のうめき声が聞こえる。

悠太は、蹴られている間に奥の手、右腕の袖に隠したデリンジャー

\*6を出し、それを掴んだ天子の足に撃ち込んだ。

撃ち込まれて直にスペルカードを取り出す。

気符『無念無想の境地』

「地上人が！天人に！傷を！負わせる！なんて！百年！早いのよ！」

スペルカードの効果で、右足の痛みも気にせずに蹴りを入れる。

悠太自身は痛みで気絶することも出来ずに呻いている。

そこに

「悠太！！」

途中で合流したであろう霊夢と咲夜が来る。

「ハア、ハア、良かったわ、丁度飽きてきたところなの」

そう言っつて、悠太の顎を蹴る。

脳震盪で失神した悠太から剣を引き抜く。

「・・・咲夜、悠太をお願い」

静かに、ゆっくりと話すそれは、怒りを通り越している様子が伺える。

「分かったわ。くれぐれも殺さないようにね？」

そう言い残して、悠太ごと消える。

## 空の上の住人（後書き）

- \* 1：スウェーデンが作った無反動砲。名前の由来は昔のスウェーデン王の名前。
- \* 2：アメリカ製の重機関銃。12.7mm NATO弾を使用。
- \* 3：貫通してから爆発する弾。装甲車の破壊などに用いられる。
- \* 4：イタリア、ベネリ社のセミオート・ポンプアクション両方を用いるショットガン。12ゲージ。
- \* 5：チューブ型弾装のメリットで、途中装填が出来る。
- \* 6：小型拳銃の愛称で、手の平サイズだが、41口径を撃てる。シングルアクションなので、撃鉄を引いておく必要がある。

博麗VS天人(前書き)

汚染水垂れ流しっておいィ・・・。

日本は早くも終了ですね。

4 / 4



## 博麗VS天人

「いいの？一人で。貴女も彼のようにしてあげようかしら」

クスクスと笑っている天子を一瞥し、スペルカードを出す。

神霊『夢想封印』

笑っている天子に向かって、複数の弾が飛んで行く。

それを創りだした壁で防ぐ。

「博麗の巫女の実力はそんなもの？」

半ばまで削れた壁を戻すと

「あれ？」

霊夢の姿が消える。

「後ろがから空きね」

神技『天覇風神脚』

四回のサマーソルトの後、大きく蹴り上げる五発目。

そして、落ちてきたところを

神技『八方鬼縛陣』

と、追撃する。

「地上人ごときが!」

乾坤『荒々しくも母なる大地よ』

飛び上がり、地面から3メートルほどの所で要石を出し、それに乗る。

そしてそのまま地面へと突き刺さる要石。

その要石が地面に刺さった瞬間

地面が急に競りあがる。

その勢いは、霊夢の身体を軽々と上空に飛ばしてしまう。

「おっと!」

上空で体制を立て直し、降りるが

要石『天地開闢プレス』

着地と同時に、天子が宙に浮き、霊夢に向かって巨大な要石が落とされる。

「地上人が天人に勝てるわけないでしょう?」

砂煙でよく見えない中言い放ち、勝ったと確信している天子。

それを勝利台詞にでもしようとしていたのか、そのまま背を向ける。

「危ないわね、当たったらどうするつもりよ」

砂煙の中から一枚のスペルカードを持った霊夢が姿を現す。

「夢境『二重大結界』。これがなかったら危なかったわ」

そう言っつて、スペルカードを袖に戻す。

「追撃してたら勝てたかもね」

そう言っつて、袖から違うスペルカードを取り出す。

珠符『明珠暗投』

霊夢の袖から出てきた三つの陰陽玉が巨大化し、バウンドしながら天子に向かって行く。

「こんなもの！」

そう言っつて、ジャンプをしながらグレイズしていく。が

「余所見は危ないわよ？」

と、天子が悠太に言ったのと同じ言葉、同じトーンで言っつ。

その言葉に反応した天子が見たのは、霊夢のかかとだった。

霊夢は、スペルカードを発動してすぐにジャンプをし、天子がグレイズをしながら跳ねるだろうという“勘”で、空中で前に回り、勢いをつけて踵落しを決める。

そのときに、「余所見は危ないわよ？」

と言ってやる。

その言葉に反応してしまったために、本来なら頭頂部に当たるはずだった踵が、鼻に当たる。

そうして、天子と地面のファーストキスが決まった。

「地上人の癖に・・・、よくも、よくも・・・!!」

『全人類の緋想天』

天子がスペルカードを使った直後、宙に浮き、緋想の剣が回転を始める。

「それがあなたのラストスペルって訳ね」

そういうと、霊夢も一枚のスペルカードを構える。

「受けきってみなさい!」

『夢想天生』

スペルカードを唱え終わった直後、霊夢の周りに陰陽玉が七つ、公転するように浮かぶ。

「それがどんなものでも、このスペルの前では無意味よ!」

そう言うと、全方位に無数の小さな針のようなレーザーが飛び交う。

それを霊夢は、グレイズせずに、突っ立ったままで受ける。

が

「何で効かないのよ!」

すり抜けてしまう。

次は、細いレーザーを全方位、逃げ場がないように放つが

「だから!何で効かないのよ!!!」

これもすり抜ける。

「これなら!どう!?!」

緋色のオーラで霊夢に照準を合わせ

「喰らいなさい!?!」

超高速かつ超高密度の気弾の塊が霊夢を襲つ。

が

「何で……、何で効かないのよ!!!」

地面を抉るそれは、何も無いかのようにすり抜ける。

そして、陰陽玉が光ったかと思うと、無数の破片のようなレーザーが逃げ場無く天子を襲つ。

それを受けて、立っていられる体力も無く、倒れ伏す天子。

その天子に向かって

「さっさと神社を建て直す！それが無理なら寄付金でもいいけどね」

と言い放つ。聞こえているかどうかは別にしてだ。

これで、神社が直れば異変解決であるが、もう一度神社が倒壊するのは、まったく別の話。

## 入院（前書き）

引越しの都合でいつまでネットが出来ないか分からないので予約投稿で。

原発が良くなっていることを祈る。

4 / 4

## 入院

サイド悠太

永遠亭

・・・ここは

「・・・永遠亭か？」

和風の天井に畳の床、布団で怪我人ときたら永遠亭か白玉楼だが、腹の痛みで生きていると判る。

ともかく腹を突き刺されているので、下手に動いて傷を開けるのも拙いと思い、寝たまま周りを見渡す。

周りには棚があり、その棚の中には薬品と思われる瓶が並んでいる。

「ともかく生きてりゃ勝ちだ」

布団の中で手を握ったり開いたりする。

最後に見たのは天子が足を振りかぶる動作をした直後。

その後は目の前が真っ暗になった。

どうやら脳震盪で失神したらしい。



そう考えていると、ふすまから声が聞こえてきた。

「目は覚めましたか？」

そう言っつて鈴仙が入ってくる。

「目は覚めているようですね。今から食事を持ってきますから、少し待っててください」

そう言っつてふすまを閉める。

確かに腹は減っている。

が、それ以上に気になることは、以前来たときからずっと鈴仙は目を合わせようとしない。

何か目を合わせてはいけないような種族なのだろうか？

たとえば、メデューサ。

彼女の魔眼は、目が合った者を石にすると言うもの。

ならこんな、人が（比較的）多く来るところには居ないだろう。

なら何故だ？

と、自問自答をしていると、再びふすまから鈴仙の声が聞こえる。

返事をする、ふすまを開けて鈴仙が入ってくる。

さつきは意識していなかったが、鈴仙はふすまを開けて入ってくる  
ときも目を合わせないようにあさつての方向を向いている。

「怪私の経過はいいみたいです。一応、胃が切られていたので、  
胃に負担が少ないものを食べてください」

そう言っただけ渡されたのはおじや。

そのおじやを渡されるとき、意図的に目を合わせる。

合わせた瞬間、意識が遠くなるのがわかった。

サイドエンド

サイド鈴仙

悠太さんが目を覚まし、作って保温しておいたおじやを持って行く。  
傷は大きい、処置が（時間を止めて連れて来られたため）早くで  
きたおかげで大事には至らなかったが、胃が斬られていたため、胃  
を縫合した後に皮膚を縫った。

そのときに、一部肋骨も切断されていたため、そこも固定して、師  
匠が傷の治りが早くなる（細胞分裂が早く行われる）薬を注射して  
いた。

それでも全治一ヶ月。

一週間は入院してもらうことになる。

後の三週間は、自宅で静養すればいい。

そうして、土鍋に盛ったおじやを盛って行く。

食べきれればいいが、残すだろうということも考えての量だ。

途中で師匠に会い、それを食べきったら連れて来るようにいわれた。

そうして悠太さんの病室の前に着き、ふすまを叩いて、返事を聞いてから開ける。

そのときに目を合わせないようにする。

能力の所為で、狂われても困るからだ。

たぶん、気付かれては居ないと思う。

気付かれたら気付かれたで説明すればいい。

そう、考えていた。

おじやをお茶碗に盛って、スプーンと共に渡す。

「怪我の経過はいいみたいです。一応、胃が切られていたので、胃に負担が少ないものを食べてください」

そう言って渡したおじや。

そのおじやを渡すとき、悠太さんと目が合ってしまった。

拙い。

そう思う暇も無く押し倒され、首を絞められた。

その目からは光が失われ、狂気に飲まれているのが伺える。

私は擦れた声でやめてくださいと言ってはみるが、聞こえている様子も無い。

首を絞めている手の力は弱まるどころか徐々に強まっている。

目を合わせても、この状態じゃ波長を変えるほどのことは出来ず、余計狂わせてしまうかもしれない。

そうしているうちにも意識が朦朧としてくる。

最後の手段。

私は悠太さんの傷口を蹴り飛ばした。

サイドエンド

サイド悠太

意識が戻ったとき、目の前には咳き込んでいる鈴仙がいた。

おじやの入ったお茶碗は床に落ちていて、おじや自体も四散してしまっている。

「大丈夫、でしたか？」

鈴仙がそう聞いてくる。

「そつちこそ大丈夫か？何があつた？」

そつして、こうなつた理由を聞く。

何でも、鈴仙の能力“狂気を操る程度の能力”は、波長を操ることであり、その紅い目を見てしまうと狂気に飲まれてしまつらしい。

「つまり、俺が目をあわせたからか」

と、納得して

「すまなかつた」

と、土下座をする。

「謝らないでくださいよ」

と、慌てて頭を上げるように言う。

「そもそも私が最初に言わなかつたのが悪いんですから」

と、言われる。

「何かしら理由があるのもわかってたのに、聞きもしなかったところの責任だ。鈴仙に非はない」

と、頭を下げ続けて言う。

「ならもう水に流しましょう。私はもう気にしてませんから」

でも、と言ったところで声を重ねられる。

「それに、せっかくの食事が冷めてしまえますし」

と、鈴仙が指を差す。

その方を見ると、湯気が消えてしまった土鍋が見えた。

「・・・そうだな。じゃあ、食おうか・・・痛ッ」

悠太の腹部を見ると、紅く染まっている。

先ほどの蹴りで傷が少し開いたようだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

と、慌てて鈴仙が廊下に飛び出る。

「師匠！悠太さんの傷が！」

と、都会なら近所迷惑になるような声で走っていく。

「これぐらいの痛みなら我慢できるんだけどな・・・」

そう言っつて、黙々とおじやの量を減らして行く。

どうやら開いたのは皮膚だけで済んだようだ。

しばらくして、鈴仙が永琳をつれて戻ってくるが、その頃にはケロツとした表情でおじやを完食した悠太が座っていた。

「鈴仙、もう少し冷静になりましょう。ちょっと傷が開いたぐらいで大騒ぎしないの。わかった？」

開いたのはほんの数ミリで、止血は済んでいるため、縫合の部分から出ただけであり、命に別状どころか、関係も無いレベルであった。

「すみません師匠・・・」

と、自分の臆病さに反省する鈴仙。

「まあまあ、怒るのはそのぐらいにしときましょうよ。大したこと無かったんですから」

と言っつが

「一応言っておくとあなたは重症よ。胃の一部が斬られてて、肋骨も数箇所骨折が診られるわ。大きな血管が切れていないだけで、そのまま放って置けば胃液が徐々に胃から皮膚まで溶かして取り返しの付かないことになってたかも知れないのよ？」

つまり、あの場に咲夜さんがいなければ死んでいたかも知れないということだ。

「以前のようには、焼けて血が止まってないし、以前以上に危険な状態だったってことは知っておいて頂戴」

そうして、化膿止めと、胃が荒れるのを防ぐ錠剤、痛み止めを渡された。

「それは一日3回、一錠を食後に飲むこと。痛み止めは痛くなったら我慢できなくなったら一日3回まで自由に飲んで。後は一週間、入院してもらおうよ」

そう言って出て行く。

鈴仙も後に続いて出て行ってしまふ。

これから一週間、どうやって暇をつぶそうか……。



一級天人を怒らせたせいで栄養食を食う羽目になった。(前書き)

同じく予約投稿。

ネタが分かった人は感想で突っ込んでくれ。

4 / 4

一級天人を怒らせたせいで栄養食を食う羽目になった。

翌日になって、咲夜さんとレミリア、フランがお見舞いに来た。

「貴方も大変ね。二度目でしょ？それ」

一回目はフラン、二回目は天子と、刃物に対して何か悪いものでも憑いているのだろうか？

「あの時はごめんね？」

そうフランは謝る。

「もうあの時ののは完治してるからいいよ」

そう言う。

「申し訳ありません。あの時もう少しでも早く着いていれば・・・」

咲夜さんが謝る。

「咲夜さんだって闘ってたんですから、しょうがないですよ」

本当にしょうがない。

「悠太、貴方は完治するまで静養すること。いいわね？貴方は大事な家族なんだから」

「え？」

レミリアから言われた家族という言葉で、目尻に涙が溜まる。

当のレミリア自身も、そっぽを向いて照れ隠しをしている。

それを妹はクスクスと、従者はニコニコと笑っている。

「分かりました。警備は一応狙撃メイドで対応できると思います。弾は俺の部屋にあります。普通に出ているのは非致死弾。鍵のかかったロッカーにあるのが実弾です。鍵は枕の中に隠してあります」  
そう伝える。

「分かったわ。警備は任せなさい。貴方の仕事は傷を治しきることよ」

了解と返事をする<sup>ヤ</sup>と、出て行ってしまった。

そうしてすぐに鈴仙が入ってくる。

「いい吸血鬼ですよね」

座りながら話しかけてくる。

「知ってるのか？」

「最初貴方を連れてきたのはあのメイドですし、異変のときも来ましたがからね」

「ここも異変を起こしたのか？」

ええ、と返事をして異変のことを話してくれた。

輝夜が月から逃れるために月を消したことで、それを妖怪と人間が協力して解決しに来たこと、闘ったこと、負けたこと。

「あの吸血鬼と従者は何なのかしらね。私の能力も大して効かなかったし、あつという間にやられちゃうし・・・」

溜め息を一つ吐く。

「月の異変じゃレミアアたちが動くのもうなづけるよ。吸血鬼は月から力を貰ってるし、満月のときならなお更だ」

と、話を区切る。

「ところで鈴仙は何でここに居るんだ？見たところ因幡じゃないようだし・・・」

因幡のウサギは垂れ耳だが、鈴仙のものは上の少しが重力に負けて垂れている程度だ。

「・・・私は月の兔なんです。月に人間が攻めてくるって言う噂が流れたとき、一人仲間を裏切って逃げてきたんです」

話は続く。

「この竹林に不時着して、遭難しているときに師匠に助けられました。後から聞いたんですが、師匠達は最初私を月の使者だと思って殺そうとしたそうです。でも、月から逃げてきたと知ったときに話

してくれました。そのときから月に数回、月の現状を知るために月と交信しています。それが一時期途絶えたときに、師匠は「月が私たちの場所を特定したから交信しなくなったのでは」と考えたようです。師匠が月を隠す秘術を使い、月を隠したのを知った妖怪たちが解決しに来たのが例の異変です。後で知ったのですが、月で大きな出来事があり、交信する暇がなかったそうです。そして情報では、師匠や姫様を捜す動きはもう殆どないということで、私達は人前、人里に出向くようになりました」

そう一区切りが着く。

「これが私の過去です。仲間を裏切った私を、師匠達は暖かく迎えてくれました。私はその恩に報いるために、師匠に弟子入りしました。師匠の知識を借りて、師匠に楽をしてもらうために」

そう言って、笑顔を向ける。その目尻には涙が溜まっているのが分かる。

「あの異変にはそんなことがあったのか・・・」

輝夜から大雑把に異変のことを聞いていた悠太は、詳細に聞けて喜んでる。

「逃げるなんてのはしょうがないだろ。怖いものは怖い。俺だってレミリアとフラン、咲夜さんがケンカしてたら逃げるしか手はねえさ」

逃げるというのは悪いことじゃない。死ななければ儲けだ。

「仲間を裏切るなんてのはいくらでもありえるだろ。鈴仙が逃げな

かったら、他の奴が逃げてただろうさ。反面教師って奴か？」

他人がこんなことをしたから自分はしないという心理が働いたのだらう。

「俺も部活で辞めたいって思ったこともある。スゲーある。でもさ、一人辞めた奴がいてさ、俺はあいつみたいに逃げたくないって思ったから続けられた。それと一緒にでさ、誰かがこうしたから俺はしないって思うわけよ。今でも逃げたことを後悔してるか？」

それに頷いて肯定の意を示す。

「なら二度としなければいい。後に悔いるから後悔なんだ。頭があるだろ？ならもう一度しなきゃいい。そのための頭なんだからさ」

笑いかみ殺す。

間違いの一度や二度、生きてるならしょうがない。間違えたなら同じ間違いをしなきゃいい。

「誰かに責められたか？永琳、輝夜、月のウサギ達。責められてねーだろ？許される間違いなんだ。ならもう間違えなきゃいいんだ。分かっただろ？永琳も輝夜も、人里の人も、鈴仙を必要としてくれるんだ。なら後ろ向かずに、前向いて頑張ろうぜ？」

と、言い切ってゴロンと仰向けに布団へ寝転ぶ。

「ありがとう、ごさいます」

鈴仙の鼻をすすする音と共に、礼が聞こえてくる。

「礼なら俺じゃなくて永遠亭の奴らにしるよ。説教して礼されるなんて胸糞ワリーよ」

寝返りを打って、鈴仙にあっちに行けと手で合図をする。

その後、ありがとございましてと、礼が聞こえた後、ふすまの閉まる音が聞こえた。

「はあ、説教なんて俺のキャラじゃねーだろ・・・」

に、しても

「月の裏にはサンタクロースが居た、か。あながち間違いじゃなかったらしいな」

その咳きは宙に溶けて消える。

## ゲーム(前書き)

実在のゲームが出てきます。  
拙いようなら削除します。

Windows7すげえ・・・。  
輝夜が普通に出てきた。

今回は2話連続投稿です。



## ゲーム

「暇だ……」

相変わらず暇である。

入院なんてものは盲腸のとき以来だ。

漫画……、雑誌でもいいから読み物が欲しい。

そう言えば

「輝夜なら何か持ってるんじゃないか？」

ふと声に出してしまう。

輝夜が持っていればしばらくは暇が潰せるだろう。

そう考え、病室を出る。

因幡に案内してもらい、輝夜の部屋へと着いた。

中からは英語が聞こえる。

どこかで聞いたことのある声だ。

「案内ありがとう、また頼むよ」

因幡は頭を下げて行ってしまった。

ふすまを2回叩き、入るぞーと、声をかける。

中からはどうぞーと、気の抜けた声で返される。

中では

「いらっしゃーい」

輝夜がゲーム、FPSをやっていた。

聞き覚えがあったのはこれか、と考えつつ、いいことを思いついたので実行する。

「何のゲームをやってるんだ？」

画面を見たまま答える。

「CALL OF DUTY4ってゲーム。一月ぐらい前にAya  
zonってところにあったから通販で買ったの」

CODH・・・

「面白そうだな、FPSってやつか？」

「みたいね。やってみる？」

そう言ってP3のコントローラーを渡してきた。

「やってみるか。外で名前も聞いたことあるし」

そういうと、オフラインで対戦するモードを選ぶ輝夜。

「一番狭いところでいいわよね？」

答える前に決めやがった。

「撃ち合わなきゃ面白くないだろ？」

ももとのマップが狭いとはいえ、二人では広い。

「俺はこのM16を使おうか」

M16は三点バースト。

「なら私はMP5を使おうかしら」

そう言っつて、ゲームが始まる。

そして、俺のワンサイドゲームが始まる。

（数分後）

「ま、一年半やってなきゃこんなもんか」

輝夜は絶句している。

点差は100対15

輝夜はあぜんとしている。

「さて、もう一回やるか？」

この言葉で正気に戻ったのか「当然よ！」と言って再びゲームスタート。

と、再び数分で決着がつく。

今回は100対10

「このままいけば0デスいけるか？」

そう呟く。

「なんでこんなに強いのだよ……」

と、輝夜がキレる。

「名前ぐらいは聞いたことある程度なんですよ！？なんでいきなり感度10とか使ってるの！？？なの！？死ぬの！？？」

「別に不思議はないだろ、他にも有名どころのゲームはあるし、FPSなんて操作はほとんど同じなんだから」

と、言い返す。

実際はキルレ\*11・48のプレイヤーだったりするわけだが。愛用武器はR700\*2。

「それでも強すぎないかしら？一年半やってないんでしょ？」

その言葉に

「ああ。一年半やってないな。このゲームは。この続編もやってたぞ？」

言い終わった後、輝夜を見ると、プルプルと震えている。

あ、マズった。

「なら最初から言いなさいよツツ！！！！」

部屋なのに木霊が聞こえる、頭がぐらぐらする、吐き気、気持ち悪くなる。頭も痛い。

典型的な脳震盪の症状だ。

「今から最後の勝負よ！！！」

そういつて、ゲームをスタートさせる。

「あなたはこれを使いなさい」

使用武器まで決定しやがった。

使用武器はM21。輝夜は相変わらずMP5。

M21は頭と首、胸までが即死判定だ。

輝夜はスナイパーを使っ  
てないな？

俺はそう確信した。

試合が始まった直後、俺に5ポイント入る。

輝夜はあぜんとしている。

「このゲームの狙撃銃には即死判定があるんだぞ？M21で、この仕様なら胸までだな。それに俺はQS\*3もできる」

出来なきゃ愛用銃が狙撃銃にはならないだろう。芋砂\*4（笑）

「ぐぬぬ・・・」

輝夜は何か言いたそう  
だ。聞きますか？

はい

ニアいいえ

そのまま試合は続い  
ていく。

このM21は跳ね上りが  
ほとんどないため、連射してもブレがない。

数回倒すと弾が切れ  
てしまった。

しょうがないので落  
ちていたMP5を拾う。

そのまま試合は続  
き、一分もしないうちに試合が  
終わった。

結果は100対0。

「よし、無死でやれたな」

と、喜ぶ悠太に対して輝夜は

「・・・」

絶句。

さすがに一回も倒せなかったのはショックだったのだろう。

「またやるうぜ〜」

そう言って出ていく悠太。

「覚えてなさいよ!!」

閉まったふすまに向かってキレる輝夜。

この日から輝夜の部屋からブツブツと呟く声と、銃声が一晩中続くようになったという。

## ゲーム（後書き）

\*1：キルレート。殺害数と死亡数の比率。悠太は一回死ぬ時に、約一人から二人倒している。

\*2：ボルトアクション式ライフル。なぜかM700ではなくR700と表現されている。

\*3：クイックショット、クイックスコープとも。スコープを覗いた瞬間に撃つとまっすぐに飛ぶという仕様を使った撃ち方。

\*4：スナイパーのギリースーツで伏せている様が芋虫に見えたことから。砂はスナイパーを略したスナの当て字



## 帰宅（前書き）

今回は2話連続投稿です。

先週は申し訳ありませんでした。

## 帰宅

サイド悠太

退院当日。

「お世話になりました」

玄関で永琳、輝夜、鈴仙が見送ってくれている。

「一応傷は塞がってるけど無理はしないこと。……って言っても、狙撃じゃ身体は大して動かさないわね」

「次来たときは必ず倒すわ!!」

「もうお世話にならないようにしてくださいね?」

ハハハ、と苦笑いをしながら了承する。

「ああ、そうだ」

そう言っつて鈴仙にM9を2挺渡す。

「な!?!」

「世話になったお礼に。ホルスターは出せないから、自分で調達してくれ。弾は俺の居た病室に置いてあるから」

鈴仙は固まっただまま、輝夜と永琳が微笑んで手を振っている。

そのまま歩いていく。

十分後

迷った……。

やはり迷いの竹林を一人で抜けるのは俺には早かったか……。

さらに数十分

なんですか……。

永遠亭に戻ってました（笑）

背に腹は代えられない……。

「すみませ〜ん……」

力なく声を出す。

「やっぱり」

鈴仙が出てくる。

やはり出られないとわかっていて、本当は自分が送っていく手筈だったことを明かすが、俺が余計なことをして固まってしまったよう

だ。

そのまま歩きながら話をする。

「いや、それはすまないことをした」

「まあ、あつて困ることではないですけど」

今はホルスターがないのか、銃は身に着けてはいない。

「しかし、なんで銃なんて渡すんですか？正直、理解に苦しみます」

と、こちらを見ながら言ってくる。

「軍に居たんなら銃の扱い方ぐらい知っているとと思ってた」

「いや、確かに一通り覚えてはいますが・・・」

「それに」

鈴仙の言葉にかぶせるように言う。

「武器つながらりで、月の仲間を忘れないようにと思つてさ。裏切つたこと、まだ後悔してるか？」

その言葉に鈴仙は、首を振る。

「裏切つたから、師匠に会えて、姫様にも会えて、幻想郷にも来れました。そこは後悔してません」

そう言い切る。

「なら、いいじゃないか。この素晴らしい世界に来て、素晴らしい出会いがあったなら。でも、昔の仲間を忘れるなよ。それも素晴らしい出会いだ」

そう言っつて無言になる。

お互い無言になって数十分。竹林の出口が見えてきた。

「あれが出口だな？案内ありがとう」

「いえ、こちら相談に乗ってもらったり、銃も頂いて。ありがとうございました」

そう言っつて俺は人里へ、鈴仙は永遠亭へ向けて歩き出す。

その時

「あやややや、やっと見つけましたよ」

目の前に五月蠅い鴉が下りてた。

サイドエンド

サイド文

あの異変から一週間。

一週間探しても悠太さんは見つからない。

協力者容疑のある紅魔館の咲夜さんからはナイフを投げられ門前払いを受けた。

同じく容疑のある巫女からも札を投げられ門前払い。

話を聞くには悠太さんから聞くしかないようだ。

紅魔館で門番をしていたらしい彼は、住み込みで働いていることが確認されていたが、今はいないようだ。休暇を取っているのか、クビになったのか。

私は後者だと考えている。

彼ほど遠距離に優れている者はそういない。

なら、紅魔館の吸血鬼が彼を手放すとは考えにくい。

なら休暇だろうか？

その線も薄い。

なぜなら幻想郷のどこへ行っても、彼の足取りがない。

この一週間、彼は人前に出ていないのである。

ならばなぜ紅魔館に居ないのだろうか？

それを一週間考えていた。

今日も、以前彼を取材した人里付近を中心に探していると。

「お？」

竹林から歩いてくる悠太氏の姿を確認した。

その隣には永遠亭のウサギの姿も見える。

「あやや、入院でしたか」

道理で見つからないわけである。

あそこはプライバシー保護が厳しいですからねえ。

竹林の出口手前でウサギと別れた彼は、真っ直ぐ人里の門を目指して歩き出す。

「あやややや、やっと見つけましたよ」

目の前に降り立ち、話しかける。

サイドエンド

サイド悠太

「びっくりしたぁ・・・」

思わず尻餅をついてしまった。

「清く正しい射命丸です」

相変わらずそんな自己紹介やってるんだな。

「いきなり降ってくるんじゃないよ」

いきなり降ってくるのは夕立だけで十分だ。

「この前の約束通り、異変について教えてもらいますよ!!」

と、ペンをマイク代わりに突き出してきた。

「まあ、いいけどさ。俺が知ってるのは元凶と何が起こったかぐらいだけだな」

構いません構いませんと、話を聞いてくる。

「俺が気づいたのは霊夢の身体から紅い靄がからだ・・・」

それから三十分ほど話をした。

「ほうほう、犯人は天人の比那名居天子という方で、理由はおもしろそうだったからと・・・起こそうとしていたのは大地震で間違いないんですね?」

「俺の記憶が正しければな。あとは霊夢にでも聞いてくれ。俺が知ってるのはそこまでだ」



途中で歩きながらに切り替え、そのままお茶屋へ入り、お茶と団子を頼んだ。

出てきたお茶を一口啜る。

「ありがとうございます。これだけわかれば十分です。では、お体に気を付けて」

そう言い残して出て行ってしまった。

代金を払わずに。

「あの野郎・・・！」

次見つけたら鉛玉をプレゼントすることを神に誓い、建て替えておく。

## 紅魔館

「ようやく着いたよ」

朝に出かけたはずが、紆余曲折あって着いた頃はすでに夕方。

「ほら起きろって、起きろよ中国」

立ったまま寝こけている門番をゆするが、起きる気配がない。

「まったく、自業自得だからな」

そう言っつて、ワルサーP99\*1を出して、米神に突きつける。

そして、引き金を引く。

乾いた音とともに鉛玉・・・ではなく硬質ゴムが発射される。

そのゴム弾がぶつかったのと、耳元の爆発音で目を覚ました中国はすぐに構えを取るが

「あ、悠太さんでしたか」

俺だと気づくと、構えを解いた。

「寝こけてんじゃねーよ、門番だろうが。咲夜さんに報告で」

と、美鈴を涙目にさせて門をくぐる。

そのままレミリアの部屋に向かう。

「ただいま戻りました」

ノックをして、返事を聞いた後、ドアを開けながら言う。

「そう、お帰り。紅茶はどう?」

レモンティーで、と答える。

部屋ではレミリアとフランが将棋を、咲夜さんが紅茶を淹れている。  
いや、おかしいだろ。

「なんで将棋だよ、チェスとかじゃないのかよ」

と、笑いをこらえながら言う。

「たまには志向を変えてね、和風のものをやるつもりだったのよ」  
どうぞと、咲夜さんがレモンティーを渡す。

それを受け取って一口。

「あー、紅茶も美味しい」

この味で紅魔館に戻ってきたと感じる。

「明日から仕事に戻ります」

「お願いするわ。あの狙撃メイドたち、応用力がなくて困るわね。  
応用力のあるリーダーがそばにいないとろくに守れないわ」

なんでも魔理沙は鉄板で防いだきたという。

硬質ゴムじゃ厳しいよなあ……。

「わかりました。何とかします」

「あなたは指示を出しておくぐらいにいなさいね。まだ本調子ではないでしょう」

見透かされてるなあ、と考えながら返事をする。

「わかりました。そうしておきます。あ、咲夜さん、美鈴また寝てましたよ」

言い切るや否や、咲夜さんの姿が消え、すぐに表れる。

その直後に、美鈴の悲鳴が聞こえる。

その日は夕食まで談笑して過ごした。

## 帰宅（後書き）

\*1：プラスチックを多用した拳銃。使用弾は9mmパラベラム。  
装弾数が16発と多い。

## 体罰（前書き）

日本の学校にも体罰は必要だと思えます。

## 体罰

屋上でモソモソと動くむkkげぶんげぶん。

悠太と狙撃メイド一同。

「お前らって奴は・・・、手持ちでだめならもつと応用しろ。中で迎撃するとか、いち早く咲夜さんに報告するとか」

中国？寝こけてるやつになんか期待はしない。

「まあ、寝てないだけましだよな」

と、中国に聞こえるように叫ぶ。

それに反応しないあたり、寝てるんだらうつなと予想する。

「俺も戻ってきたし、次は入れるなよ」

その言葉にいい返事で返す狙撃メイドたち。

「監視に戻れ。どうせ味を占めて毎日来てるんだらうつ」

その言葉道理、昼前に魔理沙の姿が見えた。

「バルメ\*<sub>x</sub>、お前が観測手スポッターをやれ。他のやつ等は魔理沙を徹底的に“こいつ”で狙え！当たらなくてもいい！」

そう言って四つ出したのはM240機関銃\*1。

これは機関銃だが、使用弾は狙撃銃と同じ7・62mm NATO弾。

「これでは今までと同じでは？」

アニー\* Xが意見をしてくるが

「こいつは罠だ。本命はこいつさ」

そう言つて、AW50FT\*2を創り、地面へと置く。

「その銃は？」

シノア\* Xが聞いてくる。

「大口径の狙撃銃だ。実弾なら、この距離でも魔理沙の身体は泣き別れするぐらいの威力があるが・・・、今回のもゴムだ」

そう言つて弾を見せる。

12・7mmという大きさで、真っ黒なそれは、いささか不気味である。

「50メートルぐらい近くに来れば、鉄板を押しして魔理沙の頭にぶつける位は出来るだろうさ。さ、説明は終わりだ。鉄板を真っ黒にするぐらいの勢いで撃ち続けてやれ！」

その瞬間、弾を撃つ音が始まり、薬莖もナイアガラのごとく落ちて行く。



数分して、耳が麻痺したのか、大して大きな音と感じなくなった頃、魔理沙が200メートル以内に入ってきた。

「バルメ、当たったかどうか、確認頼むぞ！」

そう言つて、AW50FTのスコープを覗く。

50メートルほどの距離、4倍という低倍率のスコープだが、この距離なら丁度いい。

そのスコープの中心に魔理沙の持つ鉄板が来た。

その瞬間、引き金を引く。

いつも以上の反動だが、問題はない。

撃ち出された弾が空気を切り裂く高い音を置き去りにし、魔理沙の鉄板へとぶち当たる。

鉄板はそのまま後ろに吹き飛び、魔理沙の顔に当たり、気持ちのいい音と共に、地面へと落ちて行く。

「撃ち方やめ！一人ここに残して、後は魔理沙を拘束しろ。アニー、残ってくれ」

はいっ、と返事をして、魔理沙に向けてM240を向ける。

「他の四人はついてきてくれ。俺が拘束するのは流石に、なあ」

というわけで、悠太、バルメ、シノア、フェアル\* x シエリー\* x

の四人で魔理沙の元に向かった。

「さて、と」

俺が門に着いて最初にやったことは

「おはよう、美鈴」

寝こけている門番に銃を突きつけることだ。

そのまま銃を撃つ。

その弾は美鈴の頭に当たり、帽子を飛ばし、その衝撃で頭が門にぶつかる。

「い、いたー！ー！何するんですか！」

「寝てて魔理沙が来たのも知らないくせによくもそんな言い方出来るなあ、美鈴」

美鈴の頭に銃口をぐりぐりと押し付ける。

「あー、それはー、そのー」

と、しどろもどろ言い訳をしようとするが、問答無用。

「ま、このことは咲夜さんに言っておくから安心して寝てろって、な」

肩にポン、と手を置き、魔理沙を拘束したという報告を聞く。

「じゃあ、書斎に持って行ってくれ。こういう輩は身体で覚える方が早いだろう」

何度止めても分からないやつは体罰しかないだろう。

「俺は咲夜さんを探してくる。見つけたら教えてくれ」

メイドたちは頷き、魔理沙を担いで運んでいった。

俺は灰になっている美鈴を無視し、引き続き見張りをアーニーに頼み、咲夜さんを探しに紅魔館へ戻っていく。

「広いつても考え物だよな」

要約すれば迷った。

「どこにでもメイドがいるからいいけどさ」

と、近くに居たメイドに咲夜さんの居る場所を聞き、そちらへ向かう。

居た場所は書斎。

「着いていった方が早かったわけか」

書斎の掃除をしているらしい。

あの広さだ、魔理沙を置きに行ったメイドたちが会わないのも頷ける。

そのまま書斎に向けて歩を進める。

「失礼します」

地下にあるため、埃くささのある書斎だが、そんなことはない。

これも咲夜さんのおかげだろう。

「ああ、悠太。ありがとうね、魔理沙を捕まえてくれて」

その魔理沙は、頭を下にして宙吊りにされている。

「よお魔理沙、相変わらず盗みに入ってるんだって？」

「ぬ……盗んで、なんかない、ぜ……私が……死ぬまで、借りてる……だけだぜ」

宙吊りで頭に血が上ってきついだろうに、そこだけは訂正するんだな。

「まあ、俺の仕事は入れないことだからな、殆どお前だけど。悪く思わないでくれよ。パチユリー、何冊取られた？」

「麦をわしづかみにした時ぐらい持つてかれたわ」

要するに分からないってことか。

「また取りに行くのか・・・、魔理沙、これ以上俺の仕事を増やすのは止めてくれないか？」

「全力でk y、悪い、止めるぜ」

魔理沙にM500を突きつけ、止めさせることに成功。

「じゃ、取りに行かせますよ。あ、咲夜さん居ますか？」

「ここに居るわよ」

かの後の？が出るか出ないかあたりで俺の後ろに姿を現す咲夜さん。

「心臓に悪いんで後ろに出てくるの勘弁してください」

「次は善処するわ」

あつそ。

「美鈴がまた昼寝してましたよ。ああいうのはナイフで刺すより飯抜きとかの方が効くんじゃないですか？」

それに対して咲夜さんは

「それも考えたんだけどね、なんだかんだで人間襲って食べちゃったら色々と拙いのよ。まだ美鈴を手放すのは惜しいし」

つまり飯抜きは出来ないってことか。

「はあ、まあ、寝てたんで。報告は終わりです」

その直後に、美鈴の断末魔が聞こえた（ような気がした）

魔理沙の本はメイドに任せ、俺はレミリア、フランと共に大富豪を  
楽しんだ。

ちなみに、平均でフランが富豪、俺が平民、レミリアは貧民となっ  
た。

## 体罰（後書き）

\*1：7.62mm NATO弾使用の機関銃。毎分650〜950発を発射する。

\*2：イギリスのアクュラシー・インターナショナル社が作った対物理狙撃銃。FTは部品がチタニウムで作られているということ。ボルトアクション、装弾数は5発。

\*x：狙撃メイドの名前。バルメはライト様、シノアはスコープピオン様、アニーはSu-37J様が考えてくださいました。フェアル、シエリーはそれぞれフェアリー、シュリンカーから。

## 再建（前書き）

寮の生活にも慣れてきました。



## 再建

「悠太、博麗神社にお茶を集りに行くわよ!!」

開口一番そう言われた。

「へえ、直ったんですか？」

天子の地震で倒壊した神社は天人達の手によって建て直されていた。

「まだよ。おそらく今日完成するはずよ」

なんか嫌な予感しかない。

しかし、こうなったレミリア相手に拒否権があるわけもなく、仕方がなく着いていくことになった。

紅魔館の廊下で、フランに会い、フランも行くとのこと、俺、レミリア、フラン、咲夜さんの四人で行くことになった。

道中、俺が「また倒壊するんじゃないですかね？」と冗談を言ってみる。

フランと咲夜さんは笑っていたが、レミリアだけは笑っていなかった。

博麗神社の境内では、天人達が忙しく働いていた。

“天子以外は。”

「なんでお前が監督やってんだよ張本人」

そう言つて、銃のストックで突く。

「痛いわね！私が一番偉いんだから、監督するのは当然でしょ！」

と言い返してきた。

「張本人が働かないでどうすんだよ……。お前もNEETなのか？」

「誰がニートよ！そんなのは竹林のやつだけで十分よ！」

竹林で誰かがクシヤミをしたような気がした。

「ああ、つまり何もできないから邪魔扱いされて監督の真似事をしているわけか」

うんうんと頷きながら言つてやる。

「誰が邪魔扱いよ！あんた達も言つてやりなさいよ！」

と、働いている天人達に言つてはみるが、誰も反応せず、むしろ顔を逸らせているような気すらする。

「はいはい、言いたいことはわかったから、おとなしくしてようね」

子供をなだめるように言う。

「なに？喧嘩売ってるの？買うわよ？」

「別に喧嘩を売ってるつもりはないけど？それよりもこんなことで油売っていいのか？監督さん」

という。

ムキになる前に、適当に折れて終わらせる。

「悪い悪い、天子が面白くってな」

そう言っつて紅魔館組の隣に座る。

「別にいいわ。面白いものも見れたしね」

「ゆーたー、弾幕ごっこしよー！」

「妹様、悠太はスペルカードを持ってませんし、作業している方たちの迷惑になるかもしれないから、今はやめておきましょう」

「別に神社に被害出さなければいくらでもやってもいいけどね」

と、それぞれの言い分。

「ははは、他の遊びにしませんか？しりとりとか」

「しりとり〜」

しりとりの説明をしてゲームスタート。

フラン、咲夜さん、霊夢、俺、レミリアの順。

俺は出来る限りレミリアに対して“す”で繋げていた。

「カラス」「スイカ」

「鱧<sup>きす</sup>」「スカ」

「ドス」「筋子」

「チークピース」「ストライク」

「コース」「ストレッチ」

「クースー」「スパイス」

「キグナス」「ストッパー」

「メス」「スニーカー」

.....

「ガラス」「.....」

開始して約10分。

とうとう“す”が切れだした。

「なんで“す”ばかりなのよ！」

とつとつ怒りだしたレミリア

「なんでって言われても、たまたまでしょ」

そう言われてしまったてはしょうがない。

続けることになる。

「リス」「・・・スルメ」

やはり“す”で終わる

「ライス」「・・・」

とつとつ続かなくなってしまった。

「もう終わりにしますか？」

「・・・つう」

やばい、もうすでに半泣きになってしまっている・・・。

「あー、その、すいませんでした！」

そのまま勢いよく頭を下げる。

「きに・・・、グスツしてないグスツ」

やばい、これはやばい。

「あとで里のお菓子を買ってきますから！」

それを言った瞬間、レミリアの顔が明るくなる。

「えー、姉さまだけずるいー！」

フランも欲しいようだ。

「わかったわかった、フランにも買ってあげるよ」

喜ぶレミリアとフラン。

「まるで父親ね」

そついう霊夢を睨む。

「俺にこんなデカい子供が居ると思ってんのか」

「仲がいいってことよ。そつ怒らないでよ」

まったく、誰が父親だ。

「少なくとも俺は人間やめてないし、父親にもなっていない」

「あら、そつなの。似合ってるわよっ。」

と、紫がいきなり出てくる。

「ちよ、いきなり出てこないでよ！つて、煎餅食うな！」

紫がいきなり現れ、煎餅を手に持っている。

「しかし、なんで紫さんがここに？」

「ちよっとここに用事があったね、それ」

その言葉とともに神社上空に大きなスキマが現れたかと思うと、電車を神社へ落下させた。

電車はそのまま重力に引かれて落ちていき、神社へと直撃。

作業をしていた天人達は上空にスキマが現れた瞬間に離脱していて怪我はなかったが、もう少して完成していたであろう神社は大きな音とともに跡形もなく崩れていった。

「紫！あんた、何したかわかってるんでしょうね！！」

霊符『夢想妙珠』

5色の珠が紫に向かって飛んでいく。

それを紫は扇を一振りして作り出したスキマの中に入り回避する。

すぐに出てきた紫は、こつした理由を言う。

「私は別にいいんだけどね」

「あなたがよくても私が嫌なの。神社はすぐに建て直させるわ。萃香？」

と、萃香を呼ぶと、大工道具を肩に担いだ萃香が現れる。

「あいよ、一週間ぐらいで終わらせるからね」

というと、小さく分かれてそれぞれ作業を始めた。

木を切る者、切った木材を運ぶ者、運ばれてきた木材を組み立てるもの。

もともと一人だから当たり前なのだろうが、図面も見ずにテキパキと建てていく姿にも驚いたが、小人が何十人も集まって神社を建てるという光景はそう見れるものではないだろう。

「このペースなら一週間ぐらいで本当に終わるかもしれないなあ・・・」

そう呆けていると、レミリアがそろそろお暇しようと言い出した。

「帰り際に絶対買いなさいよね！」

はいはい、と返事をして神社の階段を下りていく。



人里につくと、何やら騒がしい。

がやがやと人だかりができています。

その人たちに話を聞いてみると、神社によくわからないものが落ちてきたという話だった。

その話を聞いて、さっきの電車のことだと理解し、その人物に紫がやったことだと話すと、ものすごく驚いていた。

「あの方が居るから人里が襲われずに済んでいるんだ。あの方のことだ、何か考えがあるんだろう。その話は僕から回しておこう、ありがとう」

と言われた。

なんでもこの里で無用な騒ぎを起こした妖怪、妖獣は紫がOHAN ASIIしに行くらしい。

紫がいるから里での騒ぎは大きくなるそう。

まあ、ほとんどは藍が納めているんだろうな。

そう思いながら、ショートケーキを12切れ買って置く。

帰って食後にでも食べようと考えながら里を後にする。

霧の湖で無線がかかった。

「お疲れ様です。今のところ侵入者の姿は見えません」

アニーからの無線だ。

「お疲れ様、引き続き監視をよろしく」

とだけ返し、そのまま紅魔館へと向かう。

で

「また寝てたのかよ・・・」

頭にナイフが刺さったまま動かない中国が居た。

「ほら、生きてるか？」

そう言ってナイフを勢いよく抜いてやる。

一言つめき声が聞こえたが、それ以降声を発しない。

「なんだ？マジで死んだのか？」

口の傍に耳を当てて呼吸を確認する。

寝てました

そのままDEを額デザートイーグルに当てて撃ちこむ。

「いい気持ちだな、寝てるやつに撃ちこむってのは」

「ね、寝てませんよ？」

涎が垂れている口からその言葉が出てくる

「ならその頬の痕はなんだ？」

「え!？」

と、頬をさする。

「報告は任せとけ。ゆっくりしてていいぞ」

「悠太さん!」

呼ぶ声を見殺して門の中に入る。

そのまま咲夜さんに会いに行き、ケーキを渡すついでに美鈴の件を報告しておいた。

その晩、レミリアのケーキが1つ増えていて、中国のケーキが無かった。

## 宴会（前書き）

宴会ですが、短いです。

## 宴会

一週間ほどして、霊夢から宴会の招待状が紅魔館に届いた。

レミリア曰く、異変の後は宴会をして、やったことを水に流すのだという。

それならと、紅魔館一同参加するということで、博麗神社に来た。

来たのだが……。

「ほら、もっと呑みなさいよ」

「若いんだから、まだまだイケるって」

現在進行形で霊夢と萃香に吞まされそうになっている。

「バカ野郎！俺は下呂だ！」

なぜこんなことになったのか。

それを説明するには少しばかり時間を巻き戻す必要がある。

（30分前）

「神社直ってよかったな」

そう言っつて肴を一口食べる。

「まったくよ。天人に壊され、紫にまで壊されて」

御猪口の酒を飲み干す。

「まあ、変なものを植えられるよりいいんだろ？紫にも幻想郷にも」

また一口肴を食べる。

「紫が行動を起こすってことは、そうなのかもね」

あいつはこの世で一番幻想郷（こゝろ）を愛しているから。

そう言っつて俺の御猪口に酒を注ぐ。

「お、悪いな」

そう言っつてから酒を飲み干す。

「にしても災難だったわね、お腹大丈夫？」

俺の腹を指さしながら霊夢が言う。

「もう数分遅かったら拙かったつてさ」

斬られた部分を摩りながら答える。

「そう、あの場に咲夜がいなかったら助からなかったでしょうね」

「だな。咲夜さんには足を向けて寝られねえよ」

また肴を口に入れる。

「悠太にもお礼を言わなきゃね、今回の異変、手伝ってくれてありがとう」

そう言われた。

「どういたしまして。その代り、何かあったら手伝ってくれよ？」

魔理沙の盗み癖を治す時とかな。

あれは死ななきゃ治らないわよ。

そう言っつて酒を口に含む。

それからしばらく、他愛ない話が続く。

そこへ

「元気にのんでるか？」

萃香が現れた。

「萃香、あのときはよくも邪魔してくれた・・・ね」

萃香は肩に樽酒を持って現れた。

「これはあの時のお詫びの印。呑も呑も」

そう言っつて萃香は自分の拳で樽のふたを叩き割る。

「ほら、そつちの新顔も呑まなきや損だよ」

そう言っつて、五合枴に酒を入れて渡してきた。

「悪い、俺はそんなにはいいよ。一合ぐらいで」

そう言っつて枴を返すが

「若いんだから一升ぐらい軽く呑まなきや」

そう言っつて枴の受け取りを拒否された。

「いや、俺は下呂なんだつて」

「呑まなきや強くないよ」

そう言っつて、一合ほどの量を一気に呑まされた。

そうして、冒頭に戻る。

そう、俺は呑めない。

いや、呑めるには呑めるが、なめる程度。



霊夢たちの基準でいえば、雀の涙ほどあれば十分なのだ。  
なのに

「そんなの呑んでみなきゃ判んないって」

そう言って口に一升瓶を突っ込もうとする。

「俺には判ってるから！無理だつて判ってるから！！」

一升瓶あんなもの呑まされた日には急性アルコール中毒で眠るハメになるのは  
見えきっている。

「ほらほら、早く呑みなさいよ」

霊夢は、俺を後ろから羽交い絞めにする

「もう酔ってんのかこいつは！」

レミリアやフランは遠くでこの有様をケラケラと笑いながらワイン  
を飲んでいる。

このやろつ、あとで必ず泣かす。

「よし霊夢、そのまま放すなよ！」

と、口を思い切り閉じて、唇に力を入れる。

しかし、鬼の力の前にはその最後の抵抗も意味をなくし、頬をつかまれ、口を開けられる。

そして

「んんー！」

一升瓶の口が突っ込まれる。

そのまま酒は、重力に従い口の中に落ちてくる。

一升の半分、五合ほどで流れは止まったが、五合という量を一気に飲んだらどうなるかは明白で

パタリという音とともに俺はぶっ倒れた。

**宴会（後書き）**

短くて申し訳ない。

次は長めの話を用意します。

またまた(前書き)

シリアス難しい・・・

またまた

・・・見慣れた天井だ。

見慣れたくはないけど。

患者用の布団に寝かされていた。

その布団をどかし、そのまま起き上がる。

宴会でのことは一応覚えてはいる・・・はず。

起こったことを思い出していると、不意にふすまが開いた。

「大丈夫ですか？」

鈴仙が入ってくる。

両脇にホルスターで俺が渡したM9を固定している。

「・・・頭がガンガンする」

気づかなかったが右腕に点滴が打たれている。

「何があったか覚えていますか？」

「・・・萃香に一気飲みさせられた」

それだけは覚えている。

「意識は良好ですね。また咲夜さんが運んできたんですよ？」

またか……。ほんとあの人には頭が上がらない。

「それにしても災難でしたね、呑めないのに呑まされるって」

やれやれといった感じで鈴仙は首を振る。

その時に右腕に刺されていた点滴の針を抜く。

「まったくだ。覚えてるのは一升瓶の半分くらいは呑まされたと思うが……。どうなんだ？」

「血液中のアルコール濃度からして、それより一合弱ほど多いですね」

一応、呑まされる前に徳利を一本呑んでいたので、ほぼ五合らしい。

「一応致死量ではないですけど、かなり危険な値でした。次からは能力を使っても阻止しないと本当に死んじゃいますよ」

そう警告された。

「急性アルコール中毒は本当に危ないんです。解毒剤はありませんから、無理やり血中のアルコール濃度を下げるしかないんです」

それ以降、鈴仙の医療的蘊蓄が始まるが、長いのでカット。

「いいですね、これからは呑みすぎないこと！」

はい、と返事をして、一日は検査入院だと告げられる。

「はあく、また入院か・・・」

だるい。

一日とはいえ本当にだるい。

あいつら、次に会ったらどうしてくれようか。

この日は輝夜に対戦をせがまれることなく、次の日を迎えた。

「じゃあ、これで退院ということぞ」

玄関の前で鈴仙と永琳が見送ってくれている。

「今度こそ世話にならないようにしなさいよ」

前日も聞いたことを永琳に言われる。

「今回は俺のせいじゃないですって」

そう言い返すが

「無理にでも断らなかったあなたも悪いわ」

そう言い返されてしまった。

「そうそう、今日はこの後すぐに薬の材料を採りに行くから、鈴仙は送れないの」

この竹林を一人で歩けと？

「その代わりとってはなんだけど、代わりの迎えがそろそろ来るはず……、あの人がそうよ」

振り返ってみると、赤のモンペにサスペンダー、白い服……、あれはワイシャツだろうか？それに真っ白な長髪、それを束ねるリボンのようにお札が添えられている。

「そいつがそうか？」

「ええ、そうよ。今回はなしでお願いするわ」

ああ、と返事をして、こちらを見る。

「初めましてかな？私は藤原妹紅。健康マニアの焼き鳥屋だ」

そう言っ て握手を求められた。

その手を握り返しながら自己紹介をする。

「高野悠太。一応紅魔館の門番をしてる。里を守るのに戦ってたのは君か？」



その言葉にびつくりしたのか、きよとんとする。

「お前みたいのは里で見たことはないが・・・、ん？前に一度後ろから弾幕以外の援護があつたが、それか？」

里が襲われていた時のことだろう。俺がフランを連れて行った時の。

「ああ、たぶんそれだ。偶然居合わせてな、同じ人間だ。近くで死なれても後味悪いし」

「理由はどうあれ助かったよ。あのままじゃ里に入られてたかもしない」

「もうそれくらいにして行ったら？姫様に見つかったらいろいろと面倒だし」

その言葉を聞いて、お世話になりましたと礼を言ってから妹紅の後についていく。

「不老不死・・・」

聞いたところ、妹紅も不老不死だという。

「一応はな。不老不死も面倒なもんだ。痛みは当然あるし、死ななきや治らない」

そう言ってケラケラと笑う。

「・・・辛くないのか？」

「昔は辛かった」

声が暗くなる。

「誰にも理解されなかった、この白い髪も、成長しない身体も。一つの街に五年と居られなかった。化け物扱い、火炙りもあった。でも、今はいい理解者に、優しい人たちがいる」

そう言つてニカツと笑う。

「強いんだな、妹紅は」

「死ねなかつただけさ。自殺しても死にきれない。なら生きるしかない、そう考えただけさ」

「さ、暗い話はここまでだ。悠太は門番で言うけど、あの中国風の妖怪はクビになったのか？」

「俺は遠・中距離だ。あいつは近距離。バランスがいいのさ」

寝てなければ尊敬もするんだけどねー、と一言。

「寝てて門番が務まるのかよ・・・」

あきれたまま言つ。

「ああ、魚釣りに行くこうと思つてたんだ。ついでだ、紅魔館まで送つてやるよ」

「ああ、ありがたい。お願いするよ」

「で、なんでこうなってるんだ？」

現在の状況、2〜30匹の妖獣に囲まれています。

「人間のおいがするからじゃないか？」

そう言っただけで構える妹紅。

「まったく、俺は病み上がりだぞ」

そう言っただけでF2000\*1を作り出す。

「なんだそりゃ？」

「外の世界の銃だ」

「銃ねえ……。外じゃそんなに進化してるのか」

そう言っただけで、火球を妖獣に向けて撃ちこむ。

俺は銃を撃ち込むが、よけられてしまう。

そのまま突っ込んできた妖獣をナイフで突き刺す。

「なかなかやるねえ」

そう言いながらまた火球を投げて一匹を倒す。

こっちもC4を投げ込み爆破する。

「そんな火薬まであるのか」

火球を出すのを躊躇するが

「火じゃ爆発しないから安心して使え」

と、火球で火のついたままの妖獣の死体に向かってC4を投げ込む。

「便利になつたもんだな」

任せると言わんばかりに火球を投げる妹紅。

それに合わせて、撃ち漏らしを潰していく。

「火を使うなんて便利だな、この時代じゃまだ竈だろう?」

リロードしながら妹紅に聞く。

「ほとんどが竈だな。でも一部のところじゃガスレンジとかいうのもあるらしい」

永遠亭とか妖怪の山とか。

「へえ、妹紅のところは竈か?」

「そつだよ」

会話をしながらも攻撃の手は緩めない。

10匹ほど倒すと、妖獣も距離を取るようになってきた。

妹紅も投げるとはいえ、それほど速くはない。

俺の銃も点による攻撃でほとんどが避けられてしまっし、C4もそれほど届かない。

「距離を取り出したな・・・」

「でも、相手も攻撃できないはずだろ」

そう言つて、F2000にグレネードランチャー\*2を取り付ける。

「また変なものを出したな」

それを妖獣のほうに向けて引き金を引く。

小さな塊が妹紅の投げる火球の何倍もの速さで飛んでいき、地面に当たる。

すると、そこから爆発が起こる。

その爆風に巻き込まれた妖獣数匹が吹き飛び、手足が地面に転がる。

「おお、外の兵器は怖いな」

あとは悠太に任せるといった感じで腕を組む。

しかし、先ほどの爆発で諦めたのか、妖獣たちが背を向けて去っていく。

「お疲れ、今度夕方ごろ里のはずれに来れば、酒くらいは出すぞ」

「いや、遠慮しておく」

昨日ぶっ倒れたばかりだ、呑む気にはなれない。

「まあ、暇になったら来いよ。焼き鳥もあるからさ」

そう言っただけで歩き出す。

焼き鳥は好きなほうだし、暇ができたら行ってみるのもいいかもしれない。

「どれくらい人がくるんだ？」

「人間と妖怪、半々ぐらいかな？大抵仲良く杯を交わしてるよ」

途中、妹紅が自宅に寄り、釣り竿と餌、魚籠を持って出てくる。

「竿はもう一本あるか？」

「あるけど、釣るのか？」

それに肯定して、竿をもう一本出してもらおう。

「この竹の竿、懐かしいな。キャンプに行ったとき、親父に釣りを教わってた」

その眼にはうつすらと涙が溜まっている。

「もう3か月ぐらい経つのか・・・」

外で搜索願が出ているだろう。

いや、ひよつとしたら親はもう俺が死んだと思っているかもしれない。

「紫に頼んで出して貰ったらどうだ？」

え？

「紫自身もたまに外の世界に出ているという噂もある。頼めば、一時的にでも出れるんじゃないか？」

と、その発言に対して

「でも、こんな話をして信じられると思うか？違う世界に居て、そこには人じゃない知的生命体が居て、俺自身も能力があるなんて馬鹿げた話、まともな人間が信じるわけがない」

少なくとも俺自身、体験するまで信じてはいなかった。

神隠し。

そんな都市伝説、そんなものはただの人さらい、人為的な誘拐だと

決めつけていた。

それがどうだ。

サバゲーをしてて神隠しに遭った。それも犯人が妖怪？以前の俺だったらそんなもの信じられるか、と突っぱねていただろう。

でも、現に翼の生えた幼女、時を操るメイド、空を飛ぶ巫女、糸も使わず人形を操る魔女。

これを見て信じないほうが可笑的い。

「なら諦める。おとなしく門番でもしていたほうがいい」

いつの間にか霧の湖に着いていた。

「人間、諦めも肝心だ。無理に出て精神障害者の烙印を押されるよりはましだろ」

そう言いながら針に餌を付ける。

「出るっていうならそれでもいい。でも、信用されなかった時のことも考えてから行動するんだ」

竿のしなりを使って餌を垂らす。

その系には3つほど目印がついている。

俺も針に餌を付ける。



「少なくとも、俺が生きてるってことだけでも、親に伝えたい。できれば友達にも」

「それぐらいならいいんじゃないか？変に話すよりは、大分楽になると思うぞ」

俺も餌を湖面に落とす。

「そうかな、何時死ぬかわからない、そんな世界だとしても？」

腹の傷に手を当てる。

「それを話すかどうかはお前次第だ。勘当されても、お前が選んで後悔しないならそれでもいいじゃないか」

たぶん親のことだ、絶対に反対するだろう。

「でも、何時紫に会えるか、会えたとしても出れる保証はないんだ。あの神出鬼没の妖怪を見つけるのは至難の業だぞ」

妹紅の竿がしなり、それに合わせて竿を上げると、魚がついている。

おそらく山女魚だろう。

「まずは紫と話を付けてからのほうがいいだろう。皮算用なんですかの意味はない」

慣れた手つきで針を外し、山女魚を魚籠に入れ、餌を付ける。

それをまた湖面に投げ込む。

「・・・だな。悪いな、こんなくだらな話につき合わせちまって」  
「気にするな、私も暇なんだから」

そのあとは他愛ない話をしながら、合計で5匹釣り上げ（内訳俺3、妹紅2）、その魚を持って妹紅は里へと帰って行った。

そうして、俺はというと・・・

「ずいぶんと遅かったわね」

「なんか魚臭いわよ」

「釣りでもしてたの？」

「私たちを心配させといて？」

「これはお仕置きかしらねえ」

メイドと吸血鬼姉妹にいびられました。

またまた（後書き）

\*1：P90で有名なFN社が作ったアサルトライフル。850ノ分という高レート。排莢は前方から排莢するという珍しい銃。ブルパップ方式。

\*2：アンダーバレルグレネードランチャー。F2000専用のもの。

## 悩みと相談（前書き）

テスト始まったお・・・。

UFOキャッチャーで露伴先生のフィギュア取るのに5000円か  
かった・・・金欠だあ・・・

## 悩みと相談

「何か悩み事？」

朝食の後、レミリアにそう聞かれた。

「え？」

悩みはある。

両親に会えないが生きてることを伝えるか、死んだことにするか。

「悠太は悩みがあるとボーっとすることが多くなるわね」

確かにそうだ。

進路でも、部活動でも。

何かしらの悩みがあるときは上の空でいることが多かった。

「悩みがあるなら、相談しなさい。種族が違ってても、何かしら力になれると思うわ」

そこで区切り、モーニングティーを一口飲む。

「同じ人間同士がいいなら咲夜に相談しなさい。人間同士のほうが分かり合えることもあるでしょう。その悩みが解決するまで、見張りは休むこと。いいわね」

会話はそこで終わり、レミリアは自身の部屋に戻ってしまった。

すでにフランは書斎に行き、咲夜さんも食器を片づけている。

食堂には俺一人。

普段ならフランとレミリアが今日何をするか話すのだが、俺の悩みを見透かしているかのようにいなくなってしまった。

「悩んでても始まらないんだけどなあ……」

悩んでいても始まらない。

そう、解ってはいるのに……。

「で、悩みってなんなの？」

結局俺は同じ人間である咲夜さんに相談することにした。

「ええ、人生最後の親の顔を見ようかどうが悩んでいまして」

昨日妹紅と話したことも含めてすべてを話す。

「なら会ったほうがいいんじゃないかしら。死んだと思っていた者が生きているのは嬉しいことよ。今生の別れであっても、生きているとわかるだけで嬉しいものよ」

と、言われた。

「でも、紫に会えるかどうか・・・」

「それなら博麗神社に行けば何とかなるわ。あそこは外と一番近い場所。霊夢なら結界に穴を開けることもできるはずだから」

紫に会う。

それ以

レミリアは俺の顔を見て、にやりと笑うと

「悩みは解決したみたいね。思ったより早かったわね」

と、即答で許可をもらえた。

俺はすぐに持ち物をそろえ、出発する。

門を出る際、珍しく起きていた美鈴に寝ないように釘を刺した後、博麗神社に向かって走り出す。

40分ほどだろうか

ランニングと同じようなペースに落として走っていると、朱い鳥居と階段が見えてきた。

その階段を一段越しで登り切り、鳥居の下あたりで息を整えていると

「この間は悪かったわね」

そう言って、箒を手持って、境内を掃いている霊夢に目が行った。

夏とはいえ、風や夕立で落ちた葉を纏めながら話しかけてくる。

「この間は悪かったわね。酔ってたとはいえ」

「もう気にしてないさ。それより、すぐに俺を外に返すことってできるか？」

その言葉でこちらに振り向く。

「外には帰らないんじゃないの？」

「なに、今生の別れってのをしに行くだけさ。能力があると、自然に引き寄せられるんだろ？」

そう言って、手にガバメント\*1を作る。

「そう、それくらいならお安い御用よ。一時間ぐらいで準備ができるから、それまで待ってて頂戴」

その言葉を聞いて、動悸が激しくなる。

親の顔が見れる。

外で一人暮らしをしていた時期も含めると約半年という時間と、二度と会えないと思われた再開に胸が弾む。



一時間。

短いようで長いその時間を、茶を飲むという方法で耐えた俺は、霊夢に呼ばれ、神社の裏に来ている。

「ここから出れば外の世界の博麗神社に出られるわ。能力が消えなければ数日で幻想郷に引き戻されるから、それまでに会うことね」  
そついう注意を聞き、結界が開かれる。

無言で歩きだし、境界に足を踏み入れる。

そして・・・

光に飲まれた。

その眩しさから目を抑えてしまう。

そつして、何秒たったかは判らないが、それほど長い時間ではなかったと思う。

せいぜい数秒から数十秒だっただろう。

目を開けると・・・

「・・・地元じゃねえか」

地元の廃神社に出ている。

## 悩みと相談（後書き）

\*1：軍用拳銃。今年で採用百周年を迎える。やったねガバちゃん！使用弾は45ACP弾。マンストツピングパワーに優れた大口径銃の代表格。現在までに様々なバリエーションが作られている。装弾数7発。

## 半年ぶりの実家（前書き）

この作品とまどかマギカのクロスでQ、Bを撃ち  
すだけの小説を書  
きたくなってきた今日この頃。

## 半年ぶりの実家

その廃神社は今現在公園になっている。

神社の境内に公園があるというよりも、公園の中に神社があるといった感じだ。

その廃神社から徒歩10分ほど歩いたところに実家がある。

公園の時間は10：23分を示している。

徒歩で行ったとしても33分ごろには着く。が、3ヶ月ぶりの地元、もう会えないと思っていた両親に会えるという気持ちからか、自然と早足になっていた。

そして、気が付けば実家の前。

インターホンを押すために伸びた腕が、躊躇われた。

一拍おいて、深呼吸をする。

そうして、今度こそと腕を伸ばし、インターホンを押す。

ドアの中からピンポンと、つい半年前まで中で聞いていた音が聞こえる。

中から声が聞こえ、足音もする。

そして

「どちらさ……」

半年ぶりに母の顔を見た

そのあとはよく覚えていない。

玄関から出てきた母が抱き着いてきたのだけは覚えている。

恐らく泣いていたのだろうと思う。

今の時計は10:52分を刺している。公園から29分が経っていることになる。

今母は携帯で父に電話をしている。

今日は仕事を休んで家に帰るといふ会話が聞き取れた。

電話を終えた母がこちらを向き、一つの質問をした。

「アンタが行方不明になって3ヶ月、どこで何をしていたの？」

核心を突く質問。

「……異世界に行ってたって言ったら、信じる？」

残念ながら俺に幻想郷あそこの存在を証明することは不可能に近い。

俺にあるのは俺が行ったという証言と、小火器こを創り出し扱おう程度の能力だけ。

それ以外に証拠はない。

ふざけている、信用できないと言われたらそれまでだ。

だが

「そう……。アンタが言うならそうなんだろうね」

と言われた。

「信じて……。くれるのか？」

「アンタに3ヶ月仕送りなしで過こせるとは思っていないわよ。バイトもしてないんだから」

グサリと胸を刺された気分だ。

「異世界でも行って保護されてたっていうほうが真実味があるよ」

カラカラと笑われてしまった。

「そうだね。確かにその通りだ」

笑いをこらえきれずに声に出してしまっつ。

そのあとは、父が帰ってくるまでこっちであった大きな事件の話で持ちきりだった。

関東の電力会社が不祥事を起こしたとか、今の総理大臣がG8で八  
づられてたとか、そんな話をしているうちに、父が帰ってきた。

父は、玄関を開けるなり、すぐに居間へと入って

「悠太が帰ってきたってのは本当か!!」

そう大きな声で聞いてきた。

「ただいま、親父」

そう言った途端、こちらにズンズンと歩いてきて

殴られた。

「今までどこで何してやがった!心配かけさせやがって!!」

そう言い終わるときには、目に涙を貯めて、声も涙声になっていた。

「ごめん、親父。異世界に行ってたんだ」

言い切ると、父がこちらを向き

「ふざけてんのか!異世界なんてあるわけねえだろうが!」

そう怒鳴られた。



まあ、それが当たり前の反応だろう。が

「本当なんだ。変な能力のせいで、引き込まれたって言ってた」

そう言って、手にワルサーP38\*1を作る。

いきなり出てきたワルサーに驚く両親。

「一応、俺の能力。“小火器を創り出し扱う程度の能力”」

そう言って父に渡す。

ぎこちない手付きでマガジンを外し、中に込められている銃弾が本物だと確認する。

「ま、まあ、信じよう。それで、もう異世界には行く必要はないんだろ？」

「それが・・・」

一呼吸置く。

「この能力がある限り、何回戻ってきてても引き込まれるらしい。今回も、二日ぐらいで戻ることになって言われた」

「その能力は捨てられないのか？」

父が聞いてくる。

「捨てられないらしい。向こうで発現した能力ならまだしも、俺はこっちで能力が発現したらしいから」

そう言うと、そうか。とだけ言われた。

「アンタは、後悔してないの？」

母に問われた。

「後悔はしてない。向こうにも友人や、俺を頼ってくれる人がいるから。ただ、母さんや親父に会えないっていうのは、寂しいかな」

ハハ、と力なく笑う。

「そうか。なら、お前の好きにすればいい」

そう言って、ガハハと笑う。

「お前の人生だ。俺の人生じゃない。自分の道は自分で決めてこそだ。なに、父さん母さんのことなら心配はいらないさ。お前の自主退学の書類も何とかしよう」

そう言うと、開けていない日本酒と、御猪口を二つ持ってきた。

「もう戻ってくるつもりはないんだろ？人生最初で最後の息子との酒だ」

御猪口に酒を並々と入れて渡してくる。

渡した後、自分の分にも注ぎ、こちらに突き出してくる。

「息子の旅立ちに乾杯だ！」

俺も腕を突出し、コツンと御猪口をぶつける。

そして、それを一気に飲み干す。

そのあと呑み合った記憶はあるが、よく覚えていない。

目を覚ましたのは、居間で、卓の反対側では父が大の字になっていびきを掻いていた。

新聞の日にちを見ると、一晚眠っていたようだ。酒って怖い。

その日、昨日の続きだと言い出した父が、母に止められ、夜に焼肉を食べに行くことになった。

そのお金を引き出すために銀行へやってきた。

やってきたのだが・・・

「テメエ等手え上げろお！」

銀行強盗が乗り込んできた。

俺は素直に手を挙げ、母には俯せになって、ATMの後ろに隠れる

ように言う。

人数は4人。いずれも拳銃を持っていた。

しかし、持っている銃はそれぞれガバメント、SAA\*2、26年式拳銃\*3、オートナイン\*4を持っていた。最後のやつ完璧にネタだろ。

3人は奥へ、26年式拳銃を持った一人がこちらの見張りについている。

その見張りが、近くに居た子供を人質に取ってしまった。

どうするか……。

能力を使えばあつという間に制圧する自信はある。

相手は引き金に指を掛けっぱなしの素人。

こっちは携行兵器をなんでも出せる人間武器庫。

勝敗は目に見えている。

26年式拳銃とガバメントはわからないが、他の二つは確実にモデルガン\*5だろう。

「子供を放してやってください。俺が代わりになります」

両手を挙げたままそう発言する。

強盗は少し考え

「……いいぜ、こいつで目を隠したらな」

子供に銃口を向けたまま、ポケットから黄色のバンダナを取り出し投げ渡す。

それで目を隠すと、足音が近づいてくる。強盗のものだろう。

「大人しくしてりゃ痛い目見ないで済むからな」

と、明らかに失敗フラグを建ててくれた。

銃口が右の米神に突きつけられる。

声の位置からして顔があるのは右側だろう。

一拍おいて、左手で銃をつかみ、シリンダ\*61をつかんでやりながら銃口を強盗のほうに向けるように、かつ下を向くように動かしてやると

スポッ

そう言う音がしたかのように強盗の手から銃が抜けて俺の手に収まる。

そのまま右手でバンダナを外し、右ひじを強盗の顎に向けて回転しながら当てる。

脳震盪を狙った一撃は見事に当たり、脳震盪で崩れるように倒れた。

シリンダーを確認すると、モデルガン特有の発火式ダミーカートが装填されていた。

俺は母に警察を呼ぶように言って、先に進む。

先には、金を詰め終えて仲間と合流しようとして歩いていた3人に出くわした。

「て、テメエ！」

3人はすかさず銃を抜くと、こちらに向けて構える。

それを確認して

「安全装置かけたまま向けられても怖くねえよ」

と、安っぽいカマをかけるが

「「「なっ!?!」」」

おいおい……。

安全装置を確認する強盗だが、モデルガンだとバレているので意味はない。

そのまま接近して、さっき奪った26年式拳銃のグリップで一人の米神をぶん殴る。

あと二人。

至近距離でモデルガンを撃ち、音で怯ませる。

そのまま一人をぶん殴りあと一人。

「デメエ・・・この野郎！」

右手に銃を持ち、左手で殴り掛かってくる。

それを躲し、距離を取る。

銃を後ろに投げ捨てる。

「来いよ強盗。銃なんか捨ててかかってこい」

そう挑発する。

頭の出来が単純なのか、挑発に乗った強盗は銃を投げ捨ててボクシングのような構えを取る。

そんなのお構いなしに突っ込む俺。

相手は右手を振りかぶり、殴るしぐさを取る。が

「!?!」

相手からは俺が消えたように見えただろう。

俺は殴ることなど考えずにタックルに行ったのだから。

殴る相手を見失ったことでバランスを崩した強盗は、俺のタックルで見事に後ろへ倒れる。

受け身も取れなかったであろうが、何とか意識はあったのだろう。

弱々しいながらも呻いて、こちらを見る。

俺はそいつの鼻に向かって掌底で殴りつける。

それで意識を失ったのだろう。

手には血がべっとりついていたが、強盗の鼻の周りに血の跡があっただけで出血は止まっていた。

拘束用に紐を探しに戻ると、警察がすでに準備をしていたらしく、入れ替わりに奥へと進んで行った。

その後は事情聴取で数時間拘束されたが、ほぼ予定通りに焼肉屋へと行くことができた。

明日がこっちに居られる最終日。

それを頭の片隅に置きながら悠太は布団に入る。



## 半年ぶりの実家（後書き）

\* 1：ドイツのカール・ワルサー社が作ったダブルアクション式拳銃。9mmパラベラム弾。

\* 2：シングル・アクション・アーミーの略。ピースメーカーとも。様々な口径があるが、総じて装弾数は6発。名前にもあるようにシングルアクション。

\* 3：リヴォルヴァー。使用弾は26年式拳銃実包。装弾数6発。ダブルアクション。

\* 4：ロボコップが使っていた物。M93Rをベースに50発マガジンとフルオート機能を付けたもの。

\* 5：火薬を使って動作する遊戯銃。

\* 6：リヴォルヴァーの銃弾を入れておく部分のこと。

## 帰郷（前書き）

QBを撃つだけの小説も書きたいんだけど、2足の草鞋なんて言う器用なまねは出来ない訳でして。

## 帰郷

朝、外での最後の食事を摂る。

「向こう行っても、病気になるんじゃないよ」

母が言う。

「どんな薬でも作れる薬剤師がいるから大丈夫だよ」

「薬は耐性ができるから、過信は禁物だぞ」

と言う父。

「ともかく、気をつけなさいよ」

この一言に尽きる。

「わかってるよ。そんな無茶はしないよ」

「ならいいが・・・」

心配性な父。

今現在、腹の傷は見せていないし、見せるつもりもない。

見せたら確実に反対されるからだ。

どうせ別れるなら笑顔で別れたい。

その気持ちから、傷を見せることはしなかった。

朝食を摂った後、両親に別れを告げて、廃神社へとやってきた。

その公園ともいえる神社の一角に光のトンネルのようなものができる。

が、平日の昼間とはいえ、ここは公園。

子供を連れ親が何組もいる。

しかし、このトンネルは俺にしか見えていないのか、親子たちは気にする気配すらない。

「さっさと入りなさい。霊夢が待ちくたびれてるわよ」

と、親子から死角になる位置に紫の生首が現れる。

ギヤアアア！

という声を無理やり飲みこんで、深呼吸をする。

「いきなり生首で出てくるんじゃないじゃねえ！」

小声で言う。

「悪いわね、でも貴方がさっさと入らないからよ？」

そう言われた。

「繋がってるのはわかってる。あと30分もしないうちに引き込まれるのもわかってる。でもさ、こんな光ってるのに誰も気にしないっていうのが不思議じゃん？それを考えてたんだよ」

言い訳を試みる。

「言い訳なんかしていいわけ？」

.....

「さーて、そろそろ入ろうかなあ」

スルー検定2級がこんなところで役に立つとは.....

「無視しないでよ」

その言葉すら無視してトンネルに入る。

トンネルを抜けると、幻想郷だった。

「おかえり。お茶でもどうぞ?」

トンネルを抜けてまず言われたのが、おかえり。

戻ってきたのが悲しいような、嬉しいような。そんな複雑な感情を持ちつつも

「ただいま。貰えるなら」

そう返した。

「ふうん、結構近くにあったのね、あんたの実家って」

お茶をもらってすぐに霊夢から、外に戻った感想はどうかと聞かれた。

俺は、外であったことを言葉に直し、その時の自分の感情を入れながらも簡素に話した。

「俺もびっくりだよ。廃神社だと思ってたのが外の博麗神社だったなんて」

外の人でもあの神社の名前を憶えているのはお年寄りのごくごく一部。

俺の婆ちゃんですえ知らなかったほどだ。

「もう外への未練はないのよね？」

お茶を一口飲む。

「無いつていえば嘘になる。でも、吹っ切れた……かな？」

お茶を一口啜り、ほうと息を吐く。

「そう。また出たくなったら言いなさい。気分次第で出してあげるから」

「そうか。またその時には手土産でも持ってくるよ」

そう言い、最後の一口を飲みきる。

「お茶ありがとう。そろそろ帰るよ」

ずいぶんと話し込んでいたようで、太陽はすでに頭上、時間にして12時ぐらいだろう。

「またね。今度来るときはお茶菓子ぐらいは持ってきてきなさいよ」

それに手を振って応え、階段を下りていく。

目指すは紅魔館<sup>紅魔館</sup>。

両親との別れをしてきたためか、自然と足に力が入る。

「悠太さ〜ん！」

紅魔館のほうからそんな声が聞こえる。

スコープだけを創り出し、覗いてみると、美鈴がこちらに向かって手を振っている。

もちろん額にはナイフが刺さっていた。

それに呆れ、後ろ手に銃を創り出す。

創り出すのはオートナイン。

ロボコップが使っている銃だ。

隠し持ちながら門番をしていなかったであろう美鈴に近づく。

「おかえりなさい悠太さん。外はどうでしたか？」

「ああ、吹っ切れたよ。それより美鈴」

至近距離、かつ手の届かない4メートルという間。

「お前はまた寝てたみたいだなあ」

引き金に指を掛け

「い、いや、ねてないべー!!」



ナイフに向かって連射する。

弾はゴム弾とはいえ、至近距離、ナイフは中ほどまで刺さっていたものが、今では根元まで刺さっている。

「お前は門番だっことを自覚しろ！それともこれからの季節は寝やすいように毛布でも掛けながら門番したいか？」

これからの季節は夏。

毛布など付けたまま寝たら確実に脱水症状を起こすだろう。

「うう……さ、咲夜さんより厳しい」

ナイフが根元まで刺さったことなど気にしないで言うあたり、美鈴も妖怪なんだなあとしみじみ思う。

「厳しくされたくなかったらしっかりしろ。咲夜さんは優しいから相手してるが、そのうち相手にされなくなるぞ」

反省してます、と言ってナイフを抜く。根元まで血が付いたナイフを見る機会なんてそうそうあるもんじゃないな。

「反省なんてしなくていいから態度で示せ」

そう言って門をくぐる。

庭では妖精メイドが木の剪定をしていた。

それを横目に紅魔館の中へと入っていく。

この時間なら咲夜さんは掃除をしているだろう。

そう考えて、レミリアの部屋へ向かう。

紅魔館に入って先ずすることは、レミリアへの帰還報告。

いつ帰ってくるか言っていないのだから、俺がいないことを前提に予定を組んでいるだろうから、仕事はおそらく午後からになるだろう。

コンコンと二回ノックをする。

中からはレミリアの音がする。

「ただいま、レミリア」

「おかえり、悠太」

俺は扉を開けながら、レミリアは手にティーカップを持ちながら言う。

「悩みは解決したかしら」

「一応はな。まだまだ悩むこともあるだろうけど、その時は相談に

乗ってもらえるかな？」

手に持ったティーカップをソーサーに置く。

「家族の相談ぐらい、受けるのが当たり前でしょう？」

クスリと笑い、クッキーに手を伸ばす。

「悠太は何を飲むの？紅茶？珈琲？」

「じゃあ珈琲でも。ミルクだけでいい」

「その前に悠太、パチエと美鈴を呼んできてもらえないかしら？久しぶりに家族で飲みたくなっただわ」

そう言うレミリアの要望に応えるべく、レミリアの部屋を後にする。

最初に目指したのは美鈴の居る門。

「美鈴、レミリアが呼んでるぞ」

その言葉に美鈴は肩を一度だけ震わせる。

「も、もしかして、く、クビ・・・ですか？」

「そんな事の為にレミリアが呼びだすと思うのか？いいから俺の後についてこい」

それだけいい、踵を返して紅魔館へと戻っていく。

それに続く形で美鈴が走り寄ってくる。

「い、いったい何の御用なんですか!？」

いい加減五月蠅くなってきた。

「いいからついて来いって。悪いことじゃないんだから」

その言葉に安心したのか、ホッと胸をなでおろす。

次はパチュリーのとこだな。

「ゆ、悠太さん、なぜこんなところに?」

現在は地下、つまりフランの部屋と書斎……、パチュリーの居るところだ。

「パチュリーを呼びに行くんだ。美鈴はパチュリーのサポート。パチュリーって、身体悪いんだろ?」

そうでなければ圧倒的にレベルが下の魔理沙に負けるはずがない。

「確かに、喘息を患ってますね」

喘息か……、一応薬物治療で治るか?

「なら一度永遠亭で診てもらおうか」

「永遠亭っていうと、天才薬剤師のいる？」

ああ、そう答えて書斎の扉を開く。

相変わらずかび臭く、ここに長時間いれば、それは喘息にもなるだろうというほどである。

少し歩くと、パチュリーがいる読書スペースに着く。

「相変わらず本の虫ですね」

ムツとした表情でこちらを見る。

「なにか用かしら？」

「レミリアが呼んでましたよ。久しぶりに家族でティータイムを過ごしたいと」

久しぶりで降はパチュリーに耳打ちするように、美鈴には聞こえないように言う。

「・・・わかったわ。美鈴、この本を持って行ってちょうだい」

と、机に置いてあったら冊ほどの本を指さして言う。

「わかりました。しかし悠太さん、なぜ耳打ちを？」

本に手を掛けながら聞いてくる。

「行けば解るさ。さ、行こう」

そう言って扉へ向かう。

廊下で偶然にも、レミリアに会った。

レミリアはフランと咲夜を連れている。

「あら、ちょうど揃ったわね」

咲夜さんはニコニコと、フランはウキウキしている。

「みたいだな。このまま一緒に行くか」

そう言つて、6人で歩きだし、数分のことながら、お互いに談笑しながら部屋へと向かう。

部屋の中では、ティーカップ、ティーポットめられていて、もうすぐにも紅茶を淹れられる、そんな状態であった。

「悠太は珈琲だったわね」

その言葉の直後、一つのティーカップがコーヒーカップに変わり、コーヒーポットも増える。

「別に紅茶でもよかつたんだけどな」

その言葉を合図に、各々が好きなところに座る。

レミリアは両脇にフランと咲夜を、パチュリーの両脇に俺と美鈴が。しばらくは普通のお茶会が続いたが、フランの「チェスしよう」という言葉で、フランとレミリアがチェスを始めたことをきっかけに、俺、美鈴、咲夜、パチュリーの4人が麻雀を始めた。

え？なんで麻雀かって？4人でできてかつ作者がルールをよく知ってるのが麻雀だからだよ、文句あるか？

卓は全自動卓。手牌は自分で取るタイプだ。

結果はパチュリー1位、咲夜さん2位、俺3位の美鈴が4位だ。

パチュリーはヒョイヒョイ上がり、咲夜さんがそれに続く形で上がる。

それで焦った美鈴が突っ張りまくったところを俺が直撃させて、箱下になった。

焦ったほうの負けだということが今回よくわかった。

レミリアとフランのほうでは接戦が繰り広げられたようで、

5勝4敗というフランが次勝てば勝ち越し。

対する4勝5敗のレミリアは次勝たなければ負けてしまう。

中盤、見た目的にはレミリアが有利だが、肉を切らせて骨を断つというように、フランの動かし方は何かを狙っているようだった。

そうして

「チェックメイト！」

フランの声が上がる。

フランの残りの駒はキング、クイーン、ナイト、ポーンがちらほら。レミリアのキングの前にクイーンが、そのクイーンを取られても問題ない位置にナイトが置かれている。

ポーンはかく乱のためだろう、まったく関係のないところに置かれている。

一方、レミリアのほうは、後一手早ければフランのキングを取れただろうというところ。

これはフランの見事なコンビネーション勝ちだろう。

フランは手を叩いて喜び、レミリアは手を着いたまま盤を見ている。

今日そのまま夕食に入り、6人で夕食を摂った。



その時に、明日も休んでフランと人里に行くようにレミリアに頼まれた。

もちろんそれを二つ返事で返し、部屋を後にする。

外出（前書き）

まどかマギカ3巻まで買いました。

余計QBを撃ちたくなった。

## 外出

翌日

「それじゃあ行ってきます」

「いってきまーす！」

朝食後、昨日言われた通りにフランと人里へ向かう。

廊下では妖精メイドたちが、門では美鈴が挨拶をしてくる。

以前は、フランが通ると姿を隠すメイドも少なくなかったそうだが、今では考えられない。

「フラン、人里に行ったら何がしたい？」

「一つ聞いてみる。」

「うん……、とにかく楽しいことをしたい！」

と、簡単そうに難しいことを言ってくれる。

まあ、財布には今日まで貯めた貯金の1/4が入っているから、余程のものを買いすぎなければ大丈夫だとは思うが……。

霧の湖では相変わらず視界が悪い。

今は夏なので蒸し暑い、と思われるだろうが、チルノが居るからだ

ろう、半袖の私服では少し肌寒いくらいだ。

「悠太、なんか血のにおいがするよ?」

フランの声が隣から聞こえた。

「誰か怪我してるのかもしれないな……。場所はわかるか?」

がーんだな……。出鼻をくじかれた。

今日は一日楽に過ごせるかと思んだがなあ。

そんな考えを他所に、フランは歩き出す。

「においが強くなってる、もう少し」

と言って数秒、地面に倒れてる人影が。

「おい、大丈夫か?」

倒れていたのは俺と同年代と思われる男性……。

どうやら出血は額からのようだ。

仰向けにして、肩を強めに叩く。

返事がない、ただのshiry

なんてことはなく、呼吸と脈は正常だ。

見たところ、出血も止まっただけで、傷の位置からして脳震盪で失神しているだけのようだ。

「とりあえずは、人里に連れて行こう」

どれくらい倒れていたかわからないが、時間が経つほど血のにおいで妖獣たちが集まってくるだろう。

「で、予想通りの展開なんだが」

十匹ほどの妖獣の群れに包囲されています。

「ゆうた、能力使ってもいい？」

担いでいた男性をゆっくり降り降ろしながら考える。

この場でフランの能力を使えば、逃げるところか余裕で殲滅するところができるだろう。

「ダメだ。素手で殴り倒せ」

だが、その提案を通すことはない。

「能力を使わない戦い方も覚えて、ついでに死なない程度まで手加減するんだ、いいね？」

能力に頼り切るのはよくない、ということだ。

え？俺はいいのかって？

吸血鬼と人間を一緒にすんじゃねえこのやろつ。

「はい、えい！」

俺がPP-19バイソン\*1を創る間に、一匹を殴り飛ばしていた。

「フラン！その調子で気絶させ続ける！」

マズルフラッシュを出しながら大声でしゃべる。

一匹に数十発を撃ちこむと、足をバタバタと動かして倒れたままになる。

痛みでのた打ち回っているようだ。

数分もしないうちに倒し終わり、再び男性を担ぐ。

「怪我はないな？」

「全然へーき。それよりも急いだほうがいいでしょう？」

その時、担いでいた男性からうめき声上がる。

「っと、起きたみたいだな」

男性を降ろし、確認をする。

「自分が何やってたか思い出せるか？」

ポカンとした男性だったが、数秒で治り、今までのことを話す。

「えっと、俺は・・・そう、樹海に行ったんだ。友人との肝試しに二人一組で。そうしたらいきなり懐中電灯の光が消えたんだ！パニックになった俺たちはバラバラのほうに逃げて・・・！？何処だここは！！」

話しているうちに何が起こったかわからなくなったのだろう、再びパニックになる。

「落ち着け！落ち着け！深呼吸！吸って・・・吸って・・・吐いて」

俺に言われた通り、深呼吸をする。

「吸って、吸って、吸って、はい、吸って、吸って、苦しいわ！！」「オーケー、落ち着いたな」

一先ず現状の確認だけさせる。

「ここは幻想郷、隣にある異世界みたいなもんだ。帰れるから安心して。とりあえず、人に居るところに行こうか」

そう言って肩を貸す。

脳震盪で目が覚めた直後なんかはふらふらするもんだ。

移動している最中は、俺とフランがそれぞれ疑問に答える。

「じゃ、お大事に」

何はともあれ、里の医者に男性を託し、病院を後にする。

「じゃあ、気を取り直して、何をしようか」

外の世界であればゲーセンや映画館など、遊ぶところは沢山あるの  
だろうが。

「色んなところ見て回りたいな」

里を見て回るようになった。

「ここが寺子屋。子供たちが勉強をするところだ」

時折中から子供たちが手を挙げる元気な声が聞こえる。

「ここは新しく家を建ててるのかな？一応大工・・・、建物を建てる人たちの仕事場」



棟梁の指示に従って木を運び、切り、削り、やすりで滑らかにし、組み立てていく人々と鬼。

鬼？

「萃香、何やってんだこんなところで」

合法ロリこと、伊吹萃香がそこで働いていた。

「何って……、大工？」

「見ればわかるんだよ！理由を聞いてるんだよ！」

と、有りがちな漫才をする悠太と萃香。

「ゆーたの友達？」

フランが聞いてくる。

「一応友人、ではあるな」

この間の一件で怒ってはいるが、仕事を邪魔するほどではない。

「おー、紅魔館の嬢ちゃんか。なんだい悠太、こんな小さい子に手を出してるのかい？」

ズドンと、炒り豆弾を頭に撃ちこんでやる。

「レミリアからの頼みだよ。フランと一緒に里を周ってくれってな。

ま、頼まれればある程度都合をつけて来てもいいけどさ」

そう言っつて萃香を起こす。

角をつかんで引き起こす。

「いたたたた！！！抜ける！私の立派な角が抜ける！！！」

そのまま抜け落ちてしまえ、そう思いながらも口にはしない。

「バカなこと言ってるからだ。さっさと仕事に戻れよ」

シッシ、と追い払うように手を動かす。

「何言っつてんだい、ついさっき昼休憩に入ったところだよ」

どうやら俺と話しているうちに休憩時間になったようだ。

「っつてわけで、一緒に昼でもどうだい？」

それほど嫌っつてるわけでもないし、と昼を一緒に過こす。

「にしても、萃香が手伝いねえ。どついう風の吹き回しだ？」

注文を頼み、来るまでの暇つぶしに話を持ち出す。

「それがさ、勝負に負けちゃつたのよ、棟梁に」

「何の勝負に負けたの？」

「早口言葉」

「「え？」」

早口言葉？

「いや、あのときは呑みすぎちゃってね、呂律が回らなかったのよ。それで負けちゃって」

てへへといった感じで頭を掻く。

「まあ、一度乗った勝負だし、負けたからにはしっかりやらないとね」

そう言って、普段持ち歩いているであろう、紫色の瓢箪から酒を煽る。いや、どこから取り出したし。

「ま、私にとっては木材なんて爪楊枝みたいなもんだからね、軽いもんだ」

そう言っているうちに注文していたものが届く。

悠太は肉うどんを、萃香とフランはカツ丼を食べる。

しかし、食べているときは途端に会話が少なくなるのは何故だろう、そう考えながらも黙々と胃にうどんを入れる。

十分ほどで食べきり、二人も残り少ない。

食べきるのを待って、俺は自分とフランの分の勘定を取り出し、萃

香も同じように自分の分を取り出して払う。

一言二言話すと、萃香は現場に戻っていった。

「次はどこに行こうか」

フランは少し悩んだが

「香霖堂とか？」

飛び出しナイフをノリで買ったのはいいが、使いにくいことを思い出し、香霖堂へと向かう。

「いらっしやい。久しぶり、かな？」

そうですね、と軽く話をしつつ、目的のナイフをあさる。

フランも気に入ったものがあれば持って来れば購入するということを言ったら、嬉々として店の奥に向かっていった。

「またナイフかい？」

「飛び出しナイフはやはり戦闘には向きませんね」

そう言ってシースナイフを手取る。

「こつこつような頑丈で取り出しやすいやつのはづがいいですね」

形が気に入らなかつたそれを戻し、自分好みの形を探す。

数分して好みの形が決まり、それを持って店の奥に向かう。

そこではフランが両手に人形とテディベアを持ってその二つとにらめっこしていた。

「<sup>それ</sup>テディベアの方がいいんじゃないか？部屋にはなかつただろ、テディベア」

その一言が決め手だろうか、フランは人形を戻し、テディベアを持ってこつちに歩いてくる。

テディベアを受け取り、その場で購入。

二万円ほどで二つ買った。

何時の間にやら3時。

フランと共に、お茶所に入り、饅頭とお茶を頼む。

「今日はどうだった？」

「楽しかった！テディベアありがとう」

その直後に来た饅頭を頬張るフラン。隣には先ほど買ったばかりのテディベア。

「これぐらいで楽しんでもらえたなら俺としてもうれしいよ」

お土産として6つ頼み、包んでもらう。

「次来的时候は何をしたい？」

うーんと、少し悩み

「お姉さまと来たい！」

「なら自分で頼まないとな。その場に俺は要るか？」

「勿論！あと咲夜と美鈴も！パチュリーは体が悪いから出られないよね」

即答で答えてくれたことを嬉しく思うが、フラン。館の番を妖精だけにしたら帰るまでに書斎の本の何割が盗まれるか考えてみよう。

「俺も要るっていうのは嬉しいな。次はみんなで来ることにしよう」

馬鴉に見つかったらなんて記事を書かれるんだろうか。

紅魔館、人里侵略か！？

こんなタイトルで新聞が発行されるのか。

その日の晩飯はほぼ決まったな。

そんなことを考えつつ、紅魔館へと向かう。

その晩、饅頭が出たが、店で出たのとまったく同じ、味が劣化していなかった。

咲夜さんのおかげなのは言いつまでもない。

## 外出（後書き）

\*1：ロシア製SMG。弾は7.62mmトカレフ弾、9mmマカロフ弾、9mmパラベラム弾等が使える。製作者はビクトル・カラシニコフ、AK-47の生みの親、ミハエル・カラシニコフの息子、SVDの生みの親、エフゲニー・F・ドラグノフの息子、アレクセイ・ドラグノフらである。銃身の下に円形のマガジンがあり、これに64発入れることができる。また、専用の消音機もある。レートは700発毎分。



## 体調管理（前書き）

最近暑いですね・・・。

皆さんも体調に気を付けてください。

## 体調管理

翌日、いつも通りにギリースーツを着て屋上へと上がる。

が

「暑いな・・・」

恐らく30 はあるだろう。

現在の季節は夏。

妖精たちは何故か知らないが平気そうな顔ですでにスタンバイしている。

自然から発生したものだからだろうか？

とにかく、一応のリーダーである俺が着ていないのも可笑しな話なので、着ることには着るが・・・。

数時間後

や・・・ヤバイ、クラクラしてきた。

数年前、18歳の時に興味本位で友人が吸っていた煙草に手を出した時のようなクラクラとした感覚が悠太を襲う。

水でも飲みに行こう・・・、が

「魔理沙、来ます！」

シェリーが声を上げる。

急いでシェリーが担当する方を双眼鏡で覗くが

「またメンドクサー方法を・・・」

魔理沙はこちらに向かってきている。

大きく、早く横に移動しながら。

上空から見たらその動きは稲妻のように見えるだろうその動きは、かなり適当で、何時曲がるかわからず、かつ、動きに緩急をつけている。

「狙撃中止！狙撃中止！！こいつで狙え！！」

M240のACOGスコープ付を渡し、伏せ撃ちで撃たせる。

下手な鉄砲何とやらだ。

魔理沙の方からも見えるであろうマズルフラッシュが弾幕の多さを語っている。

700発/分という間隔で撃たれた弾たちは、風に煽られ不規則に変化する。

その弾の何発かが直撃したのだろう、進んでいた方向に慣性の力で進みながら落ちていき、水しぶきを上げながら湖の中へ落ちた。

夏だから低体温症になりはしないだろうが、一応助けには行く。

「今回はシェリーが残れ。他のやつは魔理沙のきゅうsy・・・」

立ち上がりながら言ったその言葉は、途中で止まってしまっ

床に倒れこんだ悠太の顔からは汗がすっかり引いていて、息が荒く、顔色も悪い。

声が途中で止まったことと、倒れこんだ音とで反応したアニーが急いで指示を出す。

「シェリーは残って！バルメは咲夜さん呼びに行って！残りは私と一緒にリーダーを中に運ぶよ！」

そう聞き取れた。

それに遅れること数秒、身体が引きずられているのがわかる。

そうして、部下がすっかりしてくれていることによる安心からか、完全に意識がとんだ。

目が覚めたとき、上半身裸で、手首足首のあたりには濡れタオルが置かれていた。

「起きましたか？」

確認のためだろう、バルメが話しかけてきた。

その時に常温であろう水がコップで出された。

「一応は、な」

コップを受け取り、ゆっくりと一口ずつ飲む。

「迷惑かけたな、すまない」

暑いとわかっていて、ギリを着こみ、水分をまともに取らなかったのだから当たり前だが熱中症である。

「今季はリーダーだけはギリスーツを着ないでください。これは狙撃部隊全員からのお願いです」  
私たち

そう言われてしまった。

「・・・わかった。でも、これからも狙撃は続けるぞ」

当たり前です、そう返されて、自分が必要とされるといふ嬉しさを感じる。

「それから、お嬢様からの言伝です。“自分の体調管理ぐらいはしっかりしなさい”だそうです」

はははという渴いた笑いの後、了解と返す。

「あと、今日はもう休んでてください。日に二回は来ませんから何が、とは言わずに部屋を出ていくバルメ。」

意識障害、でなくなった汗。恐らく熱射病であろう症状が数時間で治ったのはパチュリーのおかげだろう。

一人になった部屋で、冷めた身体と頭で考えることができた。

寝かされていたベットから立ち上がる。

ふらつきもなく立てたことでもう大丈夫と判断し、書齋へと向かう。

書齋は相変わらずかび臭く、薄暗い。

いつものように読書スペースでパチュリーが本を読んでいる。

「もう大丈夫になったのかしら？」

本から目を離さないで聞いてきた。

「お陰様だね。助かったよ」

数十分でも処置が遅れていたら白玉楼に逝く羽目になっていただろう。

「礼なら私より貴方の部下に言いなさい。運んできたのは彼女たちよ」

ペラッとページをめくる。

「うちのメイドが全員あんなら咲夜も苦労しないでしょうにね」

それっきり話が止まってしまい、邪魔したな、という一言を言っ  
て書斎から出る。

「すまなかった」

屋上に来て開口一番、謝る。

「もうあんならないように気を付けてくださいよ」

代表してアニーが言う。

「今季は涼しくなるまでギリは着ないで、紅い迷彩だけにするよ」

うんうんとうなずくメイドたち。

「解っていただけなら幸いです」

そう言っ  
て各自の持ち場に戻っていく。

オフの時でも、何かしらの用事で呼ばれることもあるので無線機だけは忘れないようにしているのだが、その無線機に咲夜さんからの通信が入る。

「はい、こちら悠太」

「お嬢様がお呼びよ。さっきの熱中症の件でね。すぐに来ること」  
ブツリと通信を切られる。

さて、何を言われるのやら。

「自分の体調管理をしっかりしておきなさい。いらない心配かけさせて」

部屋に入ってすぐにそう言われた。

「水分補給しに行こうとしたら魔理沙が来たんだよ」

「言い訳無用！一気に摂るんじゃないやなくて少しずつ摂りなさい！」

これからは水筒でも持っていくしかないようだ。

「了解、心配かけてすまなかつたな」

なんか今日は謝ってばっかだな。

「次からは気をつけなさいよ、優秀な門番が居なくなったらパチュ



リーも困るし、フランだって悲しむんだから」

そう言ってカップに口を付ける。中身はアイスココアのようだ。

「次からは水筒でも持っていくよ。じゃあ、俺は日向ぼっこでもしてきます」

そう言って、部屋から出ていく。

出たのは屋上。

恐らく紅魔館で一番眺めがいいところ。

「邪魔するよ」

本日二度目の登場。

水筒を取り出し、中身を一口飲む。中身は麦茶だ。

「お前らも飲めよ」

そう言って水筒を5本取り出して、それぞれに渡す。

「日向ぼっこするか？」

つい数時間前に熱射病で運ばれた男から出る言葉ではないと理解しながらも、自分はもう大丈夫という意味も込めて誘う。

結局全員が日向ぼつこの輪に入り、今は美鈴がチルノたち四人（バカルテットと言っらしい）と、湖上で遊んでいるのが見える。おい働けよ。

ぶっ倒れながらも何とか撃退した時にこいつは遊んでた、もしくは寝てたと考えると、同じ仕事をしていると考えると腹が立つな。

と、双眼鏡で覗いていると、見知った人影が見えた。

その人影に誘われるように、メイドたちに言って下に降りる。

「今日も釣りか？」

釣り糸を垂らして座っている人物・・・、妹紅に話しかける。

「今日も休みか？」

釣り糸とにらめっこをしながら答える。

「熱中症で倒れて臨時休暇だ」

傍に腰を下ろす。

「で、両親には会っってきたのか？」

「・・・ああ」

短く返す。

「そうか。煙草吸ってもいいか？」

そう言ってもんぺのポケットから煙草の箱を取り出す。

「吐かなきゃいくらでも吸っていいさ」

ムツとした顔になるが、そのまま一本取り出し口にくわえて、妖術で指先につけた火で煙草に火をつける。

ふう、と紫煙を吐き出す。

「どうだった？久々に会った感想は」

煙草を再び口にくわえ、釣り糸とのにらめっこを再開する。

「まあ、嘘のない別れだったよ」

嘘はついてない。

「そうか・・・」

「ごそごそもんぺのポケットを探り、再び煙草の箱を取り出すと

「吸つか？」

と、悠太に勧めてきた。

それを無言で受け取り、口に啜える。

妹紅が火のついた指を差し出してきたので、それで火をつける。

すう、と煙草の煙を肺に入れ、

「ゴホツゴホツ！」

煙を吐き出しながら咽る。

その様子に妹紅は笑いをこらえる。

その時、釣り糸に動きがある。

笑いをこらえながらも、しっかりと合わせて魚を釣り上げる。

「煙草は初めてか？」

釣り針を魚から外しながら聞かれる。

「親父が吸ってたり、同級が吸ってたりするのを近くで見てたぐら  
いだ。」

煙草は二十歳になってからにしましょう。この小説は、喫煙を勧  
めるものではありません。

「そうか。で、初めての煙草はどうだ？」

少し悩んで

「・・・なんか落ち着いた」

そうして、また一息吸い、咽る。

「まあ、そのうち慣れるさ。普通に里で売ってるから、気に入ったら買えばいい」

ライター\*1も里で手に入れることができるようだ。

ついでだ、と言われて、煙草の箱も渡された。中を見ると、まだ7本ほど残っている。

「それなりに釣れたし、そろそろ引き上げるよ」

先ほど釣った魚を魚籠に入れて、湖の水で手を洗う。

吸っていた煙草を携帯灰皿に入れ、立ち上がる。

俺も、同じく立ち上がり、携帯灰皿を借りて火を消す。

「じゃあな、嫌なら捨てちまってもいいからな」

そのまま歩き出す妹紅。

それと反対方向に向かって、軽く酔ったような気分になりながらも歩き出す悠太。

いい機会だと考え、紅魔館に戻り、財布と、部屋に置いてあったマ

ツチを持ち出して人里へと向かう。

## 体調管理（後書き）

\*1：日本で初めて実用化されたのは1772年。マッチは1830年、フランスで作られた。

## タバコ（前書き）

今回は梅田さんのリクエストにお応えした銃器を使っています。

悠太に合わせて煙草を吸い出したけど、俺には無理だった。



## タバコ

熱中症で倒れた翌日、朝食を済ませた後、自室のベランダで一服する。

「ゴホツゴホツ」

肺に煙を入れるたびに咳き込む悠太。

「そんなに咳き込むなら吸わなければいいじゃない」

「・・・ここ、俺の部屋なんですけど」

咲夜さんに言う。

「ただシートを取り換えに来ただけよ。そしたら悠太がベランダにいるからね」

ただの興味か。

「煙草は身体に悪いわよ」

ジジジ、と巻いてある紙を葉が燃やす。

「もう外に居た時とは違うっていう、決意表明みたいなもんですよ」

もう一度煙草に口を付けて、吸う。

再び咳き込む。

慣れるまでどれ位掛かることやら

「ともかく、お嬢様方の前では吸わないようにして頂戴ね」

「それくらいわかってますよ。他人に迷惑は掛けません」

短くなった煙草を携帯灰皿に入れる。

普通の灰皿を買うことを忘れてしまったからだ。

「ああ、咲夜さん。麦茶頂きますね」

そう言って、キッチンへ向かう。

フラフラする頭を働かせながら、キッチンへと向かう。

そこへ

「ゆーたー!」

「おお!?!」

後ろからフランが跳び付いてくる。

力加減をマスターしたようで、転ぶことはなかった。

「なんか臭いよ?」

「煙草の匂いだよ」

臭いと言われたことにショックを受けながら答える。

「たばこ?」

ああ、そうか。

「身体に悪いものだよ」

「なんでそんなのを使ってるの?」

「気分だよ」

そう、気分。

「ふーん・・・」

と、フランが思いもよらないことを言ってきた。

「私も使っていていい?」

「ダメだ」

即答する。

「え〜!なんで〜!?!?」

と、眉を逆八の字、口をへの字にしながら聞いてくる。

「身体に悪いから。特に吸血鬼には」

勿論口から出まかせである。

「む〜」

キッチンに着いた悠太は、水筒に麦茶を詰める。

勿論他の5人の分もだ。

「じゃあ、フラン。今日は陽が強いから、仲良くレミリアと遊んでなよ」

そう言って、計6本の水筒を両手で抱える。

その時

「えい！」

フランがポケットの中から煙草の箱を取り出してしまった。

「あーこらー！」

それを手に持ったまま、勢いよく宙を駆けるフラン。

それをただの人間である悠太が追いつけるわけもなく

「どこに行ったんだ」

見失ってしまった。

「ごそごそと、無線機を取り出す悠太。」

「咲夜さん、聞こえますか？」

5秒ほどして

「何かあったのかしら？」

返事が返ってくる。

「フランに煙草の箱を取られてしまいました、取り返していただけませんか？」

ため息が聞こえ

「分かったわ。その代り、今度人里でお土産を楽しみにしてるわよ」

「わかりました」

こういう所まで完璧にこなす、流星はパーフェクトメイド。

「何か今度買ってきますよ。頼みましたよ」

無線をしまい、水筒を抱え直して屋上へと向かう。

「じゃあ、一通り終わったし、監視に戻るぞ」

一通り練習も終わり、普段通りの監視に戻る狙撃部隊。

また新しい話題が出ているらしく、いつも以上に騒がしくなっているが、誰も双眼鏡からは目を離さない。

もう小火器を置いておけば俺も要らないと思うんだけどなあ……。

そう考えながらも、双眼鏡で周りを見渡す。

この前、俺が倒れているときに遊んでた中国妖怪がサボってないかを監視するために、時折門にも目を向ける。

この前のように遊んではいなかったが、バカルテットと何やら話をしているようだった。

話ぐらいいはこつちも許可してるし、大丈夫だろうと判断して他所へ目を向ける。

他の妖精たちは臭いに鈍感なのか、それとも気にしてないだけなのか、煙草の匂いを気にせず監視を続けている。

ひよっとしたら、妖精たちの話は俺が煙草臭いことじゃないかと邪推しながらも、監視を続ける。

そして

「魔理沙、来ます!!」

シエリーが叫ぶ。

シエリーが担当する位置に目をやると、今度は縦横無尽に空を駆ける魔理沙が居た。

「昨日と同じだ!叩き落としてやれ!!」

と、昨日とは銃を変えて、RPK\*1を渡すが

「Shit!!<sup>クッ</sup>なんて動きしやがるんだ畜生!!」

縦横無尽に動き回り、太陽を背にした形でどんどん近づいてくる。

あと50メートルほどといったところで急に高度を下げてくる魔理沙。

何かがおかしい。

太陽を背にするというアドバンテージを捨ててまで何をやる気だ?

撃つのをやめ、魔理沙を観察する。

動きながらも確認できることは、手に何かを持っていて、それに光が集まっていることだけ。

嫌な予感がする。

「全員館内に避難しろ!Early《早く》!」

言うのとほぼ同時だろうか、魔理沙の声が遅れて聞こえてきた。

恋符『マスタースパーク』

まるでロボットアニメの必殺技のような巨大なレーザーが魔理沙の手から放たれる。

それをぎりぎりで避けることができたが、当たっていたらと思うと背に嫌な汗が垂れる。

「とにかく、もう侵入は免れない。中で迎撃するぞ」

その言葉に頷く5人。

「フェアルとシノアは俺に着いてこい。アニー、バルメ、シェリーは横から攻撃して十字砲火を決めるぞ。分隊長はアニーだ。出来るな？」

それぞれにAKS-74U\*2を渡し、予備のマガジンを4本、それぞれに渡す。

「アニーはこれも持って行け。使うときはスタングレネードって叫ぶんだ、いいな」

そう言ってスタングレネードを渡す。手榴弾の使い方の一応程度だが教えてあるので問題はないだろう。

「じゃあ、無線で見つけたら知らせてくれ。まずは地下に向かうぞ」



そう言って走り出す。

しばらくして

「魔理沙を捕捉しました。スタングレネードを投げます」

遠くから甲高い音がする。

「アニーの分隊が魔理沙を見つけたらしいな」

音がした方へと慎重に向かう。

現場では、激しい銃声と薬莖の落ちる音、魔理沙の弾幕が壁を削る音が響いている。

「まず二人が撃て。弾切れになったら下がって俺が撃ち切るまでにリロードを終わらせる」

そう言って、二人を前に出す。

いきなり違う方向から撃たれた魔理沙は、まるで鳩が散弾銃を撃たれたかのような顔をしながら、物置へと入っていった。

「集合しろ、中にスタングレネードをふち込んでから入るぞ」

スタングレネードのピンを外し、ドアノブに手を掛ける。

ドアを20センチほど開けて中にスタングレネードを投げ込む。

数秒して、ドアが吹き飛ぶのではないかというぐらいの衝撃と共に、音が漏れる。

「突入！」

俺の掛け声とともに、ドアを開けて中に入る。

恋符

「逃げ」

『マスタースパーク』

今日、二発目のマスタースパークが俺たちを襲った。

言い終わる前に撃たれたそれは、後ろにいた5人を扉ごと吹き飛ばした。

弾幕ごっこの建前、5人は生きてはいるだろう。

「よくもやってくれたなあ、魔理沙」

苛立ちを隠すこともせず言い放つ。

「さんざん本を借りる邪魔をしてくれたんだ、安いもんだろ」

「お前のは借りるじゃなくて盗むだろうが」

銃をAKS-74uからMP443\*3に持ち変える。

物がごちゃごちゃしている物置では、切り詰められているとはいえ、アサルトライフルでは取り回しが悪い。

「私が死ぬまで借りてるだけだぜ。人間に比べたら妖怪の寿命は永いからな」

匍匐で移動を始める。

恐らくスタングレネードが使われることを予見して構えていたのだろう、これは俺のワンパターンな行動ばかりしていたからだろう。

「だったら返しに来ればあんなゴミ屋敷みたいにはならなくて済むぞ」

ここそと動くことで音を立てずに動くことが出来てはいるが、声ではれているだろう。

「面倒だぜ」

その一言で切り捨てる魔理沙。

声ではれていようと・・・

出来る限り音を出さぬように、腹の下でゆっくりとピンを抜く。

「だったら持ち帰らせるわけにはいかなーなあ！」

スタングレネードを入り口と自身の真ん中ほどに投げ込んでやる。

その直後に、目を力いっぱい瞑り、腕で目を保護する。

甲高い音とともに、閃光があたりを照らす。

その対象にはもちろん魔理沙も入っており

「くう！」

という音とともにガタンと何かにぶつけた音がする。

今まで向かっていた方と逆方向へと向かい、暗闇で目を抑えてのた打ち回っている魔理沙に銃を突き付けて拘束する。

「もう諦めろって、もう手はないだろ」

そう言って、無理矢理立たせて廊下へと戻る。

その時にフランが通りかかり、魔理沙へ抱き着く。

「ゆーた、魔理沙借りていい？」

「おお、いいぞー。たっぷり遊んで貰え」

そう言って、魔理沙をフランに渡す。

フランに引きずられるようにして連れて行かれた魔理沙を尻目に、

マスタースパークによって吹き飛ばされたメイドたちを気に掛ける。

「生きてるか」

手を挙げて生きてますアピールをしているが、しばらく仕事は無理だろう。

「パチュリー呼んでくるから、おとなしく待ってるよ」

そう言って、パチュリーを呼んでくる。

「全治3日、安静にしていること」

その程度で済んだことに感謝し、自室へ戻る。

その間に、咲夜さんに後ろから声を掛けられ、煙草が戻ってくる。

中身を確認したが、フランは吸ってはいなかった。

自室に入り、煙草を取り出す。

もう今日は魔理沙は来れないだろう、そう考えて煙草に火をつけて

「ケホッケホッ」

咽た。

## タバコ（後書き）

\*1：ロシアの軽機関銃。AK-47と同じマガジン、同じ弾を使用するが、銃身を伸ばしたことで初速が上がっている。600発/毎分。今回は75発のドラムマガジンを使用。

\*2：ロシア製アサルトライフル、AK-74を折り畳みストックにし、銃身を切り詰めたもの。小さいため、小回りが利く。5.45mmロシアンという小口径の弾だが、貫通力が高い。人体のような柔らかいものに当たると、ブレながら貫通するため、ダメージが大きい。

\*3：ロシア製の拳銃。装弾数17発、使用弾はNATOとの互換性を考慮して9mmパラベラム弾を使用。

弾幕花火大会前編（前書き）

最近友人たちと手持ち花火で花火をした時に思いついたのでこれで。

## 弾幕花火大会前編

数日して、狙撃メイドたちは持ち場に戻ってきた。

一応完全に治りきつてない者もいるが、狙撃には問題ないレベルではある。

狙撃には問題ないが、中に入られたらほぼ俺と咲夜さんと相手をすることになるのだが

「むしろそっちの方が楽か・・・？」

咲夜さんに銃を渡して、時間停止中に乱射させれば・・・

硝煙の匂いが嫌とかで拒否られそうだな。

そう考えていると

「悠太」

噂をすればとは言うが、本人のことを考えていて影が来るとは。

「なんでしょう」

双眼鏡から目を離さずに聞く。

「お嬢様が用事を頼みたいから来るようにとおっしゃっていたわ。早くしなさい」



よいしょと、うつ伏せの状態から立ち上がる。

「じゃあ、用意が済んだらすぐに向かいます」

先日の反省を活かし、点ではなく面で攻撃するようにするために

「魔理沙が先日と同じ動きをするようなら、これを撃て」

出した銃はパントガン\*1。

この馬鹿みたいに大きな銃口から出る散弾は、途方もない数、それこそクレイモアがいくつつ作れるか分からないほどの量の弾をばら撒くことが出来るだろう。

「こいつなら、撃ち落とせるだろう。落としたら、何時も通りで」

要するに、撃ち落としたり強制帰還させろということである。

メイドたちの返事を聞き、屋上を後にする。

「花火大会!？」

用事というのは

「そう、花火大会よ。それも、ただの花火大会じゃないわ」

酒屋の護衛である。

「弾幕を使った花火大会よ!!」

ババアーン!!

「弾幕花火大会・・・ねえ」

そうよ、と一口紅茶を飲む。

アイステイーである。

「招待状は既に出してあるわ。それでお酒が足りないのよ」

確かに、幻想郷・・・、レミリアの友人たちは酒豪が多い。

「それで注文したはいいいけど、道中の危険があるじゃない。その道中、運んでくる人たちの護衛が悠太の仕事よ」

そう言ってまた一口紅茶を飲む。

「わかりました。で、その酒屋は？」

「里に酒屋は一カ所しかありませんので、地図を描くよりも里の方に聞いた方が早いかと」

咲夜さんがそう答える。

「りょーかい。じゃあ、行ってきます」

ドアを開け、すぐに無線を取り出し

「今日は魔理沙が来ても撃つな。客人扱いだ。ただし、一人は監視に置いていてくれ。何時盗みに入るかわからん」

そう言い終わり、了解、と返事が来る。

「猛暑じゃないだけましだけどさ」

そう一人愚痴る。

湖でバカルテットに勝負を挑まれることも、移動中に襲われることもなく無事に人里へと着くことが出来た。

「お疲れ様です。酒屋ってどちらにありますか？」

「おお、お疲れ様。酒屋はここからならまずは西の門に行けば近いぞ。あとはそっちに聞いてくれ」

ありがとうございますと言って、中に入る。

里の中なら襲われる心配は0に近いが、外ではそれが極端に上がる。

それほど広くはない人里だが、門から反対の門までは歩いて数十分ほどかかる。

なので、ゆっくり歩いている。

里の喧騒をBGMに、のんびりと探索をしながら、最近買いたした

煙草の店を覗く。

いくつかの種類に手を出して、自分に合った種類を探す。

この前かったのはマイセンだが、どうも口に（肺に？）合わなかったらしく、あまり旨く感じなかった。

今回はピアニッシモ・ワンという、軽い煙草を買ってみる。

今は封を切らずに、灰皿も買って、西門へと向かう。

その途中、里の喧騒に混じって殴るような音がかすかに裏路地から聞こえる。

喧嘩なら見物もいいだろう、そう考えながら裏路地へと向かうと

「さつさと出すもん出さないからこつこつという目に合っただぜ？」

3対1・・・、いわゆる私刑シンチが行われていた。

「おいおい、3対1かよ。いい大人が恥ずかしいねえ」

3人はどう見ても俺より年上といった感じのおっさんである。

対する1人は俺と同じか、ちょっと上ぐらいのものだろう。

「ああ！？なんだガキイ！」

そう言って、胸倉を掴まれる。

「五月蠅い臭い汚い黙れ」

そう言つて、掴んでいた手の親指を握り、手の甲の方へと持つていき、手の甲の方へ勢いよく引つ張つてやると、するりとつかんできた手が離される。

「力抜きすぎだぜ」

掴んできた男の後ろの一人が言う。

「ほら、そこへこたれてるの、さっさと逃げとけ。このおっさん共は俺が何とかしとくから」

そう言つと、その倒れていた青年が這いつくばつて出ていこうとするが

「誰が逃げていいつた？」

一人のおっさんが立ち塞がる。

「俺がいいつたんだよ」

一番近くに居たおっさんの右手首を掴み、右へ引つ張る。

右へ重心が傾いたおっさんの右足を払い、転ばせてやる。

そのおっさん乗り越え、立ち塞がっていたおっさんにとび蹴りする。

人間のほぼ全体重の乗つた蹴りでおっさんは倒れ、その隙に青年を

逃がす。

「おおおう！よくも逃がしてくれたよなあ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぐおっさんを尻目に、ワルサーP22\*2にサブレッサーを取り付けたものを取り出す。

それをおっさんたちから見えないように隠しながら、距離を詰める。

「落とし前つけてもらわねえとなあ！！」

大ぶりの右フック。

それを距離を詰めてかわし、そのまま右腕を掴み、身体全体を使って投げ飛ばす。

そのまま足を押さえつけ

パスッパスッ。

足の甲に一発ずつ、.22LR弾をプレゼントする。

「ぎゃあああああ！」

「騒ぐなよ、大した怪我にならないように小口径使ってるんだからさ」

その叫びが聞こえたからか、先ほど逃がした青年が呼んできたのか、路地裏に慧音さんがやってきた。

「こんにちは、慧音さん」

「お前は……、何をしとるかああああ!!」

ガツリホールドされる悠太の頭、振りかぶられる慧音の頭。

その頭が出会うとき

ガチイイイン!!

星が生まれた。

「す、すまなかった……」

お茶屋で慧音さんが謝ってきた。

「まあ、間違いは誰にでもあるでしょう。しかし、確認もなく頭突きとはどういうことでしょう」

ズズズとお茶をすすする。

先ほどの侘びとして奢ってもらっている。

「確かに、先ほどの様子を見ただけなら俺がおっさんたちに銃撃したように見えますけど、最初に手を出してきたのは向こうですからね?」

また一口、お茶をすする。

あー茶が美味い。

「それに、小口径を使って足を撃って動けなくしたただけで、それ以上のことはしてませんからね」

出された饅頭を一口食べる。

あー、甘味は人類が生み出した文化の極みだ。

「まあ、小言はこれぐらいにしておいて、次からはちゃんと確認してから頭突きをしてくださいね」

饅頭の最後の一口を食べ、お茶も最後の一口。

キリがいいので話を終わらせる。

「では、まだ仕事の途中なので、これで失礼します」

「あ、ああ。気を付けてな」

そう言って別れる。

酒屋の前に着くと、店員であろう男が荷車に酒を積んでいる最中だった。



「紅魔館からの使いの者ですが」

取り合えず声をかける。

「おお、あんたがそうかい。ちょっと待っていてくれな、あとこれ一つだから」

そう言って、明らかに重そうな樽酒を荷車に積もつとする店員。

「少しばかりですが手伝いますよ」

そう言って、店員の反対側を持つ。

「せー、のー！」

持ち上げ、ゆっくりと樽を置く。

「いやー、助かったよ。さっきまで一緒にやってたやつがぎっくり腰になっちまって、一人で持てるようなのをやってたんだが、最後に大物が残っちまって」

そう言って一休みといったように荷車に腰を下ろす。

「もう少ししたら出発するから、それまで少し休ませてくれ」

そう言って、懐から煙草を取り出し、吸い始める。

俺もそれに倣って、煙草を吸う。

「お前さん、前里を守ってくれた人だろう？」

プカーと、紫煙を吐きだす。

「まあ、一度だけ」

「そんな人に守ってもらえるなら道中も安心だねえ」

長くなった灰を携帯灰皿に落とす。

「俺自身はそんなに強くないですよ。道具が強いだけですから」

再び紫煙を肺に入れる。

「またまた、そう謙遜しなさんな。道具が強かろうと、使いこなせなけりや宝の持ち腐れになっちまうんだからよ」

そんな他愛もない雑談をして5分ほど、お互いに吸い終わり、酒屋を出発する。

店員は前をで荷車を引き、俺はそれを後ろから押す。

「前に妖怪が見えたら言ってくださいね、蹴散らしますから」

「おう、頼むぜ」

最初は軽く雑談を楽しんでいたが、段々と会話が少なくなっていく。

夏、気温は30 ほど、外にいるだけで体力を消耗するほどだ。

「紅魔館に着いたら、麦茶でも用意してもらいましょう。帰りも送

つていきますよ」

「そいつぁありがてえ。なら、さっさと持っていかないとなあ」  
荷車を押す腕にも力が入る。

「にーさん、前の方に妖精が見えるんだが・・・」

ただの妖精なら威嚇射撃ほどで済むだろうと考える。

「わかりました、荷台を置いて、休憩でもしていてください」

そう言つて、62式機関銃\*3を創り出し、その場に伏せる。

「デカイ音が出ますから、耳を塞いでおいてください！」

荷台の陰に隠れたまま耳を塞ぐのが見えたので、弾を発射する。

毎分80発という低いレートなので、反動制御は楽なのだが、抱え撃ちをして半分以下でも反動制御をこなせと言われた日には自衛隊でも訓練に何日かかるだろうか。

そんなことを考えて数十秒、音と飛んできた弾に驚いた様子の妖精たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

「もう大丈夫ですよ」

減ってしまったベルトを、新しいものと交換しながら声をかける。

「驚いた……。そんなものが外の世界にはあるのか」

紐をつけて、背中に背負い、荷車の陰の店員を起き上がらせる。

「全員が持っているわけじゃありません。俺の能力がたまたまこれらを創り出せる能力だっただけですよ」

そう言って、再び歩き出す。

先ほどの妖精のおかげだろうか、それとも火薬の匂いのせいだろうか。

あれ以降、妖精や妖怪の襲撃がぴたりと止んだ。

まあ、俺としても店員としても、そっちの方が楽なのだが。

「お、紅魔館が見えだしたぞ」

荷台の横から前方を見ると、確かに、霧に紛れて紅い館が見えだした。

「紅魔館の大きさからしてももう少しでしょう。麦茶がたらふく飲みますよ」

その後、ペースを上げて歩いたことで、数分後には門に着いた。

「おいこら起きやがれ」

こんな暑い日でも昼寝ができるこいつに呆れ、それに慣れてる自分に吃驚だ。

「咲夜さん！毛布を5枚ほど持ってきてくださーい！」

数秒して、毛布を5枚どころか10枚持ってきた咲夜さんが現れた。

その咲夜さんに驚いた店員が驚いたような声を上げるが、それを無視して、美鈴に毛布を掛けてやる。

「じゃあ、中へどうぞ。荷台はメイドたちに持たせますから」

そう言って、メイドたちが集まり、5人ほどで荷車を持っていき、5分後には荷車だけが戻ってきた。

「ご苦労様。持ち場に戻ってくれ」

そう言うと、各自持ち場に帰っていく。

「お疲れ様でした。あと20分ほどしたら帰りましょう。それまでごゆっくりどうぞ」

そう言って、ベランダへと煙草を吸いに行く。

麦茶を一气飲みし、靴を脱いでソファに横になる店員。

足を休めているのだろう。

20分ほどして、店員が立ち上がる。

「帰りもよろしく頼みますよ」

そう言ってきた。

帰りには、話すことも少なくなってきたうえに、大したことも起きないので、自然と会話が少なくなっていた。

「お疲れ様でした。また同じようなことがあったら呼んでください」  
そう言って、手を振り、酒屋を後にする。

その後は定食屋に寄って、昼飯を食べて紅魔館へと戻る。

## 弾幕花火大会前編（後書き）

\*1：口径42mm程、重さおよそ50キロ。主に大量のカモを撃つために作られた散弾銃だが、人間一人が撃つには大きすぎるため、何かしらの台に載せて撃つべき銃。Su-37J氏がリクエスト、情報提供をしてくださいました。

\*2：ウルサーP99の.22LR弾仕様。セミオートで、弾の反動自体が小さく、銃が.22LR弾使用の銃にしては大型のため、反動制御がしやすい。22LR弾自体が亜音速弾のため、サプレッサーを装着すると、ほとんど動作音だけとなる。

\*3：7.62mmNATO弾を使用し、最大650発/分とまあまあな発射レートだが、これを繰り返すことは出来ず、持続させる場合は80発/分と、大幅にレートが下がってしまう。おまけに反動も強く、抱え撃ち、腰だめ撃ちをする際には、腕だけで支える必要があるため、射手に与える負担が大きい。さらに、加熱しすぎると暴発し、給弾不良等多かった。

弾幕花火大会後編（前書き）

東京も暑いけど、実家も暑い！



## 弾幕花火大会後編

「お疲れ様、今日はもうフリーで居て頂戴」

レミリアにそう言われても・・・

やることなけりゃ

「暇だけなんだよね〜」

フウ、と煙を吐き出す。

やることもなく、暇だけの悠太は、自室のベランダで煙草を吹かしている。

花火というぐらいだ、弾幕といっても、夜に観た方が綺麗なんだろう。

準備を手伝うぐらいは出来るか

そう思い、短くなった煙草を灰皿に押し付け、部屋を出る。

「咲夜さん、手伝いに来ましたー」

そう言っつて、手伝いに行った方がいいが

「もう必要なのは人手より料理だからいらないわ」

俺が酒を取りに行っているうちに料理以外は終わってしまったようだ。

その肝心の料理も、俺が料理できないということを手伝えない。

「何かすることないですかね？」

「お嬢様方のお相手をお願いするわ」

とだけ言われて、今はレミリアの部屋。

「フー訳で、何しましょうか」

現在部屋に居るのは俺にレミリア、フランの三人。

ロリコンが見たら泣いて代わってくれと言ってくるだろうな。

「これ終わったら何かしましょう」

今、レミリアとフランがチェスをしている。

負けず嫌いなレミリアは、フランと似ていて、レミリアが勝ったらフランが、フランが勝ったらレミリアがというように、お互いが もう一回 *ne more* と言って何かしら用事の間になるか、眠くなるまで続けようとする癖がある。

五分ほどして、今回はレミリアが勝った。

One moreしないあたり、3人で何かをするようだ。

「じゃあ、今度はババ抜きしよう」

フランがそう言う。

「ならばババ抜きよりもジジ抜きしよう」

ジジ抜き？と最初は首をかしげた二人だが、ジョーカーの代わりに他の一枚をランダムに選んでそれがジョーカーの代わりだと説明すると、すぐに納得してくれた。

そうして俺が最初に勝ってしまい、花火の直前まで続いてしまった。

「それじゃあ楽しんでいって頂戴」

レミリアが開始の号令を終わらせた途端、そこかしこからスペルカードを使う声が聞こえる。

「悠太も自由にしていっていいわよ。知り合いと駄弁るもよし、料理をかつ食らうもよしよ」

そう言って、咲夜と一緒に離れて行く。

とりあえず、これからの行動を決めようと思い、一旦自室に戻って煙草を吹かす。

「よう悠太」

煙草があと2、3口吸ったら消すぐらいになるタイミングで魔理沙がやってきた。

「よう、この間はよくもやってくれたな」

手に拳銃を出し、魔理沙に突きつける。

「ちよ、タンマタンマ！」

慌てて2、3歩後ろに下がるが、構わず引き金を引く

ポン！

軽い音がして、銃口から造花が飛び出す。

「銃の形ならどんなものでも作れるらしいな」

そう呟いて、銃を消す。

「お、脅かすなよ・・・」

帽子を被りなおしながら魔理沙が呟く。

「次は脅しじゃ済まないだろうぜ」

と言っておく

「で、こんなところで何をするつもりだ？」

煙草を魔理沙から離して吸う。

「なに、悠太が居るのが見えたから来たんだぜ」

そう言っつて、手すりに腰掛ける。

「俺なんかと話すより、花火を見ているほうが楽しいんじゃないか？」

「弾幕はもうお腹いっぱいだぜ」

そう言っつて、俺のポケットに手を伸ばしてくる。

その手を払っつて、吸殻を灰皿に入れる。

「ケチだなあ」

「お前にはまだ早いんだよ、未成年」

そう言っつて、自室へと戻り、玄関からきちんと出て行く。どっかの  
理沙こそ泥とは違っつんだよ。

玄関から出ると魔理沙が待っていた。

「なんだ、ストーカーか？」

「別にそういつつもりはないぜ。ただ、一つお願いがあっつてきたんだ」

ふーん、と、あくびをかみ殺しながら話半分で聞く。

「明日、もう一度紅魔館にくる。その時に悠太、邪魔をしないだけでいいんだ。それだけで。頼む！」

手を合わせて、頭を下げてきた。

悠太は舌打ちをして

「しゃーねーなー！今回限りだぞ！」

そう言っつて、歩いて去っていく。その顔は、悪戯を思いついた子供のような顔をしていた。

少しして、霊夢の姿が見えた。

「よお、霊夢。楽しんでるか？」

そう聞いてみるが

「もちらんれしょ〜」

ああ、完璧に出来上がってやがる。

無駄に絡まれてもウザイだけなので、軽く流して後は放って置こう、そう考えるが

「さあ、飲みなさい」

そこだけ妙に発音が良くなって、グイツとワインの瓶を寄越してく

る。

「……」

それを手に持ち、使われていないグラスに入れて、クイツと一口飲む。

「やっぱりワインもいいな」

そう言っつて、また一口飲む。

数分かけてグラスのワインを飲みきり

「じゃあ、ほかに用事があるから」

と言っつて逃げる。

何とか逃げ切り、今度はアリスを見つけた。

アリスなら、と近寄ってみる

「あら、悠太じゃない」

声を掛ける前に気付かれた。

「よう、久しぶりか」

「そうね。あれからどう？魔理沙の襲撃は」

「毎回アレコレ使われて大変だ。アリスが協力してくれなくて助かってるよ」

そう言っつて、ワインをグラスに入れる。

ついでにアリスのグラスにも入れる。

「ありがとう。まあ、パチュリーにはたまに協力してもらってるし、お互い様ね」

ワインを飲み込み、チーズを一欠けら口に入れる。

「なるほど。なら引き続き協力しないで居てくれよ」

「分かってるわ。パチュリーとも約束があるしね」

あの会話の後、アリスと別れた俺は、会場の片隅で座りながら煙草を吹かして花火を見ている。

弾幕ながら花火のようで風情があるな〜などと考えていると

「あ〜」

声を掛けられた。

「はいはい、何か御用で？」



声を掛けられた方を向くと、以前、妖怪の山に潜入し、脱出するときに出会った少女だ。

「あの〜以前どこかで会った事ありませんか？」

「それだと一昔前のナンパの手口だけど、それも幻想入りしてたのか？」

えっと、そうじゃなくてですねあのー、と、慌てているので、弄るのは止めにしよう。

「分かってる。一応はじめましてじゃないよ。山で一度だけ会ってるよ」

ほ、っと胸を撫で下ろす少女。

「一応自己紹介を。俺は高野悠太、ここで門番をしてる。種族は人間で、能力は“小火器を創りだして扱う程度の能力”だ」

「私は東風谷早苗といいます。守矢神社で風祝をしています。種族は現人神ですけど、殆ど人間と変わりません。能力は“奇跡を起す程度の能力”です」

「あ、現人神!？」

現代に降り立った神!？

「そんなに驚かないくださいよ。幻想郷じゃ、普通に神様がいらつしゃるんですから、現人神なんて普通の人間と変わりはありませんよ」

と、普通に言ってくれる。

「ま、まあ、いいや。これから偶に山の方にも行くことがあるかもしれないから、そのときはよろしく頼むよ」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

そう言つて、2、3言話をしていると、遠くから早苗さんと呼ぶ声が聞こえ、そちらに行ってしまった。

それから少し歩くと

「悠太さーん！」

と、聞きなれた声で呼ばれた。

そちらを見ると、輝夜を抜いた永遠亭組と妹紅が揃っていた。

「久しぶり、輝夜は？」

「貴方に負けたのがショックでまだあのゲームをやっているわ」

そ、それほどか・・・。

「そんなバ輝夜は放っておいて」

バ輝夜と言つた瞬間に妹紅が吹き出した。

「そんな笑つてやるなって、本当のことでも」

その一言で、さらに吹き出す妹紅。

「ま、リアルを蔑ろにするやつはネットのレベルが上がるほどリアルレベルが下がるわけだ。絶対に真似はするなよ?」

と、言い切ったあたりで永琳が話しかけてくる。

「あれから傷の調子はどう?」

「まったく問題ありません。強いて言うならこの間軽い熱中症になったぐらいで。パチユリーが居なかったらやばかったと思いますけど」

はははと笑う。

「相変わらずね。定期健診とかならいつでももやってるから、調べたくなったらいつでも来なさい。ただでさえ怪我が多いんだから」

分かりましたと返しておく。

恐らく行くことは殆どないだろう。

「鈴仙はどうだ?銃の方は。弾は足りてるか?」

足りないなら今度補充しに行くけど、そう言い掛けるが。

「私みたいな元軍人には、この銃はすごく撃ちやすいです。弾も充分にありますから、大丈夫です」

そう言われたので、それ以降は何も言わなかった。

もう眠くなってきた。

部屋に戻り、風呂は明日にでも入れればいいか、と考え、ベランダに出て一服し、そのまま布団の中へと入ってしまった。

## 油断（前書き）

実家は暑かったり寒かったりで大変です。

読者の皆さんも体調管理に気をつけてください。

## 油断

サイド悠太

「今日、魔理沙が本を盗みに来ます」

朝食の席で何気なく言われた一言。

「俺は今回手を出しません」

続けて放たれたその言葉に、フラン以外の手が止まる。

「それは本気で言っているのかしら？」

レミリアが問う。

「俺は手を出しません、部下にやらせますよ。一応、俺は手を出さないって言う約束です」

そう言って、食を進める。

「今日の魔理沙襲撃には俺は手を出さない」

なわ・・・なわ・・・

ざわめきが起こる。

だが、と言葉を続ける。

「罨を仕掛けるぐらいなら問題はない」

そう言って、罨の内用を伝える。

「で、伝えたのはいいけれど・・・」

自室のベランダでタバコを吸いながら、門の方を見る。

「あいつが仕事しないことに腹が立つのは俺だけだろうか・・・？」

元々の門番である中国は、チルノたちバカルテット相手に弾幕ごっこをしている。

その顔には笑顔が浮かび、仕事というよりも遊びといった面が大きいように見える。

「そろそろ本気で叩き直さなきゃ駄目か？」

そう考えていると

「マーカー1、設置終わりました」

そう無線が入る。

「了解、そのまま魔理沙が来るまで近くで待機。間に合っようなら駄弁っていいぞ」

そう返す。

それからも

「マーク2、終わりました」

「マーク4、設置完了」

「マーク3、設置終了」

「マーク5、完了しました」

と、次々に無線が入る。

全部の設置が終わり、後は魔理沙が来るのを待つだけだ。

数十分ほどして、監視していた悠太の目に、黒い点が映る。

「VIPが来たぞ、全員配置に着け」

無線にそう言い掛けると

「了解」「了解」「了解」

5人から同じ答えが返ってきた。



「最初に言ったとおりだ。マーク1に指示を出してそれぞれ1分後にそれぞれ作動させる」

と、言ったあたりで、館を振動が襲う。

魔理沙が門に向けて撃ったマスタースパークの振動である。

「マーク1作動させる、後は順次作動、魔理沙が通ったのを確認したらマーク5の方に行け」

さてと、俺も行きますか。

サイドエンド

サイド魔理沙

昨日悠太と約束した、「今日一日、私を邪魔しない」という約束が守られているなら、悠太は邪魔をせず、私は悠々と本を借りることが出来る。

それを考えると、気分がハイになってくる。

その気分を抑えるために、軽く空を飛び、それから紅魔館へと向かう。

今となつては、軽く空を飛ぶ時間がいけなかったのかもれない。

紅魔館の見える、霧の湖に来た。

見えるのは霧と、紅い館、それに、その門番が妖精たちとじゃれ合っている光景だけ。

もうこれぐらいの距離になればいつもなら紅魔館の屋上で何らかの光が見えるはずだが、それも無い。

悠太は約束を守ったらしい。

律儀なやつだ、なんて考えながら、ミニ八卦炉を取り出して、撃つ準備をする。

そして、門がはつきり見え出したところで、

恋符『マスタースパーク』

マスタースパークを撃ち、門を破って中に押し入る。

中に入って一分ほどしただろうか、廊下を飛んでいると壁にぶち当たった。

壁といつてもそのままの意味ではない。

煙の壁だ。

火事のような焦げ臭さも無く、煙の色自体も火事特有の黒煙ではなく、鼠色である。

大した害も無いだろうと突っ込んでみると、予想通り、問題なく通ることが出来た。

「こんな煙じゃ私は止められないぜ！」

そう叫びながらも一つ、新しく見えた煙の壁を通過する。

さらに一つ、また一つと煙の壁を突破し、次で五つ目。

既に地下、あと数百メートルで書斎の扉が見える、といったところでまたも煙が出てきた。

「そろそろしつこ・・・ゲホッゲホッ！！」

煙を突っ切ろうと、中に入ると、咳が出る。

「なんな、ゲホッゲホッ！！」

目も開けられなくなってきた。まるで目に粉末状の唐辛子でも入れられたかのような痛みで目が開けられなくなり、涙が出てくる。

そのまま壁にでも激突したのだろう、ぶつかった衝撃で筭から落ち、そのまま這って動く。

そうしているうちに幾人かの声が聞こえる。

咳でその声が何を言っていたかは分からないが、声が聞こえてすぐ、

両腋を持たれて移動させられているのがわかる。

そうして、手足を縛られ、顔を洗われ、まだヒリヒリと痛むが、何とか見えるようになり、顔を上げると

「そろそろ諦めた方がいいんじゃないか？」

悠太が呆れたような顔でこちらを見ていた。

サイドエンド

サイド悠太

こいつは本当に何もしないと考えていたのだろうか……？

顔を洗われる様を見て呆れる。

そうして顔を上げる魔理沙。

「このヤロー、嘘つきやがって」

「嘘なんか言っていないさ。俺は手を出しちゃいない。ただ単に作戦と道具を渡したただけで後は皆がやってくれただけさ」

と、周りの部下が頭を下げる。

「そーいえば、フランが魔理沙と遊びたいって言ったな」

「フランのところに連れて行ってあげといて。それが終わったら上がっていいから」

そう言って、その場を後にする。

この後どうするかなあ・・・。

現在、フランが魔理沙と遊んでいて暇になったレミリアの部屋に居ます。

「ほい、チェック」

「ト、とナイトを置く。」

「うう・・・」

それに向かう形でキングを動かすが

「チェックメイト」

「ト、とクイーンを動かして詰みにする。」

「何でそんなに弱いんだよ……」

レミリアはこういったゲームの時には能力の使用をしないようにしているらしい。

理由は“つまらないから”だそうだ。

「何でそんなに強いのよ……!」

何でといわれてもねえ……

「頭の出来？」

「ムカツクわねえ!!」

と、殴ってくるがそれをスウエーで避ける。

「吸血鬼に殴られたら挽肉になるからやめい!!」

「たく、と悪態をつき、止めさせる。」

「ところで話は変わるけど」

と、殴りかかったときに散らばった駒を片付けながら

「血を吸わせても「断る」「まだ言い切っていないじゃない!」

そう言ってきたが、即座に拒否する。

吸われてたまるか。

「とりあえず、俺は人間のままがいいんだ。能力が人間的じゃなくてもいいが、人間を辞めるのだけはごめんだね」

そう返して、駒を拾うのを手伝う。

吸血鬼になる。

そのパワーと身体能力は確かに魅力的だ。

だが

日の光におびえながら暮らすのは性に合わない。

どちらかといえばインドア派だが、けっして外が嫌いというわけではない。

気が向いたりスポーツに誘われれば意気揚々と外に出ることも多い。

サバゲー自体も殆どが外で行われる。

偶に室内もあるが。

故に、日の光を浴びれなくなるのは好ましいことではない。

「もし寝てる間に吸おうとしてみる、吸おうとしたことを後悔させてやる」

恐らく寝てる間に吸おうと考えていたであろうレミリアがビクッと

する。

図星がちくせう。

「そ、そんな卑怯なことするわけ無いでしょう!？」

必死な当たり、しようと考えていたようだ。

「しないならどうでもいいけど」

と、最後の駒を拾い、片付けが終わる。

知っている西洋のボードゲームがチェスだけの俺がレミアアと出来ることといえば、ルールが簡単でレミアア、フランが楽に覚えたというオセロ、もしくはオセロの盤を使った五目並べぐらいなので、オセロ、五目並べの順にやるのだが

「・・・オセロで真っ白なんて初めて見たぞ」

盤の上が後攻、要するに俺の白一色になってしまった。

レミアアはというと、涙目になりながら俯いてしまっている。

「まあ、そのー、なんだ。ドンマイ」

そういって、うわー!と泣き出してしまった。

どうしようか。。。。。



というわけで、レミリアのご機嫌取りに人里の和菓子を買いに来ています。

・・・超メンドクセエ。

泣かしたのも事実なので、しょうがないと割り切り、和菓子を買う。  
今回買った和菓子はわらび餅。

人気があるものらしく、最後の一つだった。

最近入ってきた紅茶に合うように甘さ控えめだとか。

と、手に入れたわらび餅を袋に入れてもらい、それを腕から下げて歩く。

歩いていると、後ろから声をかけられた。

「貴方が高野悠太さんですか？」

幼さの残る中に礼儀正しさがある声。

少女と取れる声に振り返ると

「はじめまして、稗田阿求と申します。お時間よろしいですか？」

と、少女が幼女か判断しにくい娘だった。

「今は買出しの途中で、この時期。腐らせてしまつのも悪いからま

た後日ってことでいいですか？」

そういつと

「そうですね、失礼しました」

紙とペンを取り出し、さらさらと何かを書いていく。

「これを門の方に見せれば案内してくださると思います。今度暇がある日にでもいらしてください」

と、ミミズのように書かれた紙を渡された。

がんばれば解読できるだろうが、そんなことをしていたら帰るまでに日が暮れてしまうだろう。

「分かりました。また今度お邪魔させていただきます」

失礼します、と踵を返して行ってしまった娘に対して

「不思議な子だったなあ・・・」

と思ってしまった。

わらび餅は受けが良かったらしく

「次から里に行ったら必ず買ってきなさい！」

と言われてしまった。

人気が高そうで購入ののかなあ・・・。

## 幻想郷縁起（前書き）

遅れて申し訳ありません。

夕立が夜まで続いてPCを起動できませんでした。

後書きは、悠太を求聞史紀風に書いたものです。

## 幻想郷縁起

魔理沙の最後の襲撃から一週間。

あれ以来一回も魔理沙が来ないため、暇をしていた俺は、里で会った少女に会いに行くことにした。

「というわけで、里に行ってくる」

「どういうわけよ」

ノリが悪いレミリアだったが、隣にいたフランが

「それじゃあしょうがないね」

と、納得し、外出許可が下りた。レミリアエ……。

タバコを吸いながら歩き続け、里の門へとたどり着く。

「この間こんなものを貰ったんだが」

そう話すと、案内役を呼んだのだろう、若い青年がこちらに向かってくる。

「阿求様のお屋敷へご案内いたします」

そう言われたので、着いていく。

一言で言えば、立派であった。

稗田と表札には書いてあり、門番こそ居ないが、地主の家というのが一番の感想であろうか。

「こちらが阿求様のお屋敷になります。それでは、失礼します」

と、役目を終えた案内人は去っていく。

うだうだ考えていても始まらない。そう考えて

「すみませーん！」

門から声を上げつつ入っていく。

「わざわざ紅魔館から来ていただきありがとうございます。私が九代目御阿礼の子、稗田阿求です」

「紅魔館で門番をやっている高野悠太です」

と、軽い自己紹介をし、本題へと入る。

「今回お呼びになったご用件とは？」

その質問を予測していたのだろう阿求は、背後から一冊の本を取り出す。

「この本は、私が編纂している“幻想郷縁起”という書物です」

そう言っつて、その本を渡されたので、中をパラパラと捲って内容を見る。

「・・・妖怪の自己紹介本ですか？」

中身は、妖怪の危険度や友好度、どこを中心に活動しているか、どのような能力を持っているか、里の住民からどのように見られているかなどが書かれていた。

「今となつてはそのように見えるかもしれませんが、かつては妖怪に対する自衛の手段を書いたものでした」

その時、失礼しますと女中が入ってきて、紅茶とクッキーを出して出て行く。

その紅茶を一口のみ、阿求は話を続ける。

「現在のそれは九冊目にあたります。幻想郷が外から隔離され、安定してきた今、妖怪が無闇矢鱈と人間を襲うことが無く、むしろ手を取り合つて生活している今、新たな関係を築くことに役立てられればと、現在の形になりました」

そういわれて見てみると、なるほど、確かに危険度、友好度等と書かれてはいるが、その後が続くようにどのような人柄（妖柄？）か、どのようなことをしているかなどが書かれている。

「危険度は高めに、友好度は低めに水増ししてありますから、実際に会ったときに違和感を感じるかもしれません」

そう言つて、また一口、紅茶を飲む。

「確かに、レミリアやフランはもっと危険度は低く、友好度は高いかもしれませぬ」

紅茶を飲む。

「しかし、何故水増しなど？そのまま感じたままに載せればいいのでは？」

「今、妖怪が無闇矢鱈と人間を襲うことはしないといいましたが、襲うこと自体はしています。ただ、理由も無くするわけではありませんが、確実に襲うことはしています。しかし、それ自体も極々稀以前あつた“吸血鬼異変”がもつともそれに近いでしょう。外からやって来た強力な妖怪に、幻想郷自体が乗っ取られる、ということも無いわけではありません。少なからず、人間の恐怖を糧に妖怪は生きています。それをなくさないために、つまり、妖怪に対する恐怖を忘れないようにするために形式的なことですが、こういう風にしているのです」

なるほど、と感心しながら、紅茶を一口飲む。

「で、俺が呼ばれた理由は何なんでしょうか？」

阿求は冷めてしまった紅茶を飲み干し、ポットから新たに紅茶を注ぎ、答える。

「その幻想郷縁起をさらに捲ってみてください」



言われたとおりに捲ると、英雄伝と書かれたページで目が止まる。

「そのページ以降には、幻想郷で起きた異変に関わった方々が載っています」

見ると、霊夢、魔理沙、咲夜さん等が載っていた。

「鴉天狗の方に聞きましたよ。以前、天候が不安定になったとき、異変の解決に携わったと」

あのバ鴉め、と愚痴る。

「確かに関わりましたが、あれは援護程度であって、それほど活躍は「天狗の里から単独で脱出したと伺いましたが」そ、それは・・・

余計な面倒を増やしたバ鴉を烏鍋にすることを胸に誓う。

「それに、霊夢さんは言っていましたよ、貴方が天人の集めた力を使わせたお陰で楽に勝てたと」

俺に向かってはそんなこと一言も言っていなかったぞと愚痴る。

「それに、ただの人間が紅魔館で門番なんか出来るわけがありません。何か、強靱な身体能力、もしくは強力な能力があるはずですよ」

もうどうしようもないなと考えて、素直にインタビューに応じる。

「本日はありがとうございました」

「いえいえ、この程度ならいつでも構いませんよ」

そう言っつて最後の一口ほど残った紅茶を飲み干す。

「まさかこんなに外の武器が発達していたとは、驚きました」

約120年前、幻想郷と外が隔離された当時、外にあった銃といえばSAAなどのリヴォルヴァーか、ライフルド・マスケットと呼ばれた先込め式の銃で、自動拳銃やボルトアクションも無かった時代である。

現在のフルオート、三点バースト、セミオートなどは考え付かなかった時代であろう。

「それはそうでしょう。120年という時代は、確実に銃以外のことも進化させています」

それはコンピュータだったり、自動車だったりと様々なことであるが。

「それにも驚きました。外から来て、不便だとは思いませんでしたか？」

「確かに不便ですが、外ではこんな綺麗な景色はめったに見れませんでしたから、プラスマイナスで見たら確実にプラスですね」

そう言っつて、立ち上がる。

「ちょっと煙草を吸ってきます。終わったらすぐに戻ってきますから、ゆっくりしててください」

そう言つて外へ出る。

煙草に火をつけ煙を肺に入れて、吐き出す。

それだけの行為を繰り返しながら、不意に空を見上げる。

太陽は既に頭上を超え、時刻が正午を過ぎていることが伺えた。

持参していた携帯灰皿に火を消した吸殻を入れて蓋をする。

それをポケットへと戻し、先ほどまで座っていた部屋へと戻る。

「失礼しました。話を続けましょう」

「銃は外の世界では誰でも持てるものなんですか？」

阿求が新しく紅茶を淹れて、聞く。

「外の日本でも免許があれば持つことはできます」

俺は持つてませんでしたけどね、と言つて紅茶を飲む。

「貴重なお時間ありがとうございました。今回の話を元に、幻想郷縁起に書かせていただきます」

いえいえと返して、部屋から出る。

その後を歩くように阿求が着いてくる。

玄関に着き、靴を履いていると

「また縁があれば外の世界について教えてくださいね」と言われた。

「俺なんかでよければいつでも言うてください。それではお邪魔しました」

玄関を出て、門を抜けるといつもの里、いつもの喧騒が戻る。

もう昼だし、昼飯食って、わらび餅を買って帰ろうか。

ということ、いつもの飯処でいつものうどんを頼み、レミリアに言われたように、わらび餅を買おうとするが

「なん・・・だと・・・!？」

売り切れだった。

しょうがないので甘さ控えめと書いてあった羊羹を買って帰る。

これも人気があって、残りが少なかったが、値段以上の味で人気が出るのも頷けた。

## 幻想郷縁起（後書き）

紅魔館の狙撃手

高野 悠太

能力

小火器を創り出し扱う程度の能力\*1

危険度

極低

人間友好度

極高

遭遇頻度

低\*2

多様性

低

門番として紅魔館に雇われた外来人だが、既に肉親同然の扱いのようだ。

能力は外の世界の武器を無尽蔵に創り出すことが出来る。\*3

彼が来て以降、紅魔館の屋上には狙撃手が遠距離の外的から館を守っているようだ。

能力の応用としては、明かり\*4を出せたり、刃物\*5を出せたり、栓抜き\*6を出せたりと応用が利く便利な能力らしい。

遠距離から近距離まで、さまざまな小火器を出すことが出来るが、大きさによって出すまでにかかる時間が異なるようだ。

弾だけを出すことも出来て、弾の種類も選べるらしい。

彼は意外と顔が広いらしく、紅魔館の吸血鬼は勿論、博麗の巫女だけでなく永遠亭の薬師、亡霊の姫、守矢神社の風祝、妖怪の賢者殿とも友好関係があるらしい。

彼自身や、紅魔館に敵対するようなことが無ければ気さくに話を聞いてくれるし、多少仲が良くなれば相談にも乗ってくれる。

煙草を吸っているが、マナーを守っていて、人が居ないところで吸ったり、携帯灰皿を持ち歩いている。意外とまめな人物である。

もつと仲が良くなれば外の世界の武器を使わせてもらえるかもしれない。  
\*7

\*1：銃の装飾品のみ出すことも可能。本人が持てない重さになると出せないらしい。

\*2：不定期に人里へ訪れる為、いつ会えるかは運しだい。

\*3：本当に無尽蔵かは確かめていない。

\*4：フラッシュライトと言っらしい。

\*5：銃剣と言っらしい。

\*6：銃に栓抜きが着いているらしい。

\*7:自己責任で。

魔法（前書き）

魚釣に行つて、魚が釣れずにカブトムシが捕れたよ！！

どうしてこつなつた！！



## 魔法

阿求に遭って早一週間。

暦の上では既に9月の頭。

今週も魔理沙の襲撃は無かった。

もう諦めて白旗でも振りながら来れば監視付きでも書斎に入れてやるのに。

そう考えて、双眼鏡を覗きながら部下の話に耳を傾ける。

雑談も多いが、すっかり仕事をしてくれている。

雑談の内容はまちまちで、今日の昼飯の話をしているものや、魔理沙の襲撃が無くて楽だという話もしている。

噂なんかもどこからか入ってくるのだろう、よく耳にする。

またチルノが蛙を氷付けにしたとか、今年は暑さが長引くだとか、さまざまなことを耳にする。

残暑厳しいこの時期、持参した水筒で喉を潤す。

ふう、と一息つき、再び双眼鏡を覗く。

覗いても覗いても変わりは無く、時折気持ちのいい風が吹き抜けて行く。

暇になった時間に、以前戦闘になった時の事を思い浮かべる。

妖夢との戦闘では、距離をつめられて思うように自分の闘い方が出来なかった。

あの時は、偶然掌底が決まってくれたから良かったものの、決まらなかったらどうなっていただろう……。

天子との戦いでも、思い通りの戦いが出来なかった。

永遠亭からの帰り、妹紅と共に闘った妖獣との戦いは、妹紅が居なければ距離を詰められ、あの妖獣たちの身体の一部になっていただろう。

これらの事を踏まえて、今の俺に必要なことは……

“近距離戦闘力のアップ、距離を詰められたときの離脱法”

このどちらかである。

近距離戦闘では散弾銃を使えばいいのだろうか、作り出すまでの口スを狙われるだろう。

それを考えると、一息で距離を　　希望を言えば弾幕を出される  
前に行動できる10メートル程の距離を　　取れる移動方法が望ましい。

立ち止まった状態で（立ち幅跳びで）跳べる距離なんて高々2メートル行か行かないかぐらいの距離。

走り幅跳びでも、世界記録は9メートルに届かないぐらいである。そういえば、と外のとある漫画を思い出す。

あの漫画に出てきた瞬動術という技術。

気や魔力を足の裏に溜めて、爆発させるように放出して、10メートルほど移動するという技術だったが……。

美鈴のように気を使う者や、パチュリー、魔理沙、アリスのような魔法使いが居る幻想郷なら、そういった事が出来るかもしれない。

思い立ったが吉日。

とは言ったものの、今は仕事中である。

話を聞くのは夕食が終わってからにしよう。

これからの行動を決める。

「悠太、ちょっといいかしら」

と、考え事が纏まった時に咲夜さんから話しかけられる。

「どうしました？」

双眼鏡から目を離さずに答える。

「お嬢様がお呼びよ。この前の雪辱を晴らしたいと仰ってるわ」

この前の・・・、ああ

「チェス？オセロ？」

いいえ、と答える。

「勝負はの内容は

」

「で、チェスやオセロの雪辱戦が何で

ペラッ一枚捲る。

「神経衰弱なんだ？」

もう一枚捲る。

出たカードはスペードのAとクラブの3。

それを元の位置に戻し、レミリアの番になる。

「これなら悠太に負けないわ。吸血鬼の記憶力を舐めないで頂戴！」

ペラペラと2枚同時に捲る。

クラブの6にハートのK。

それを再び戻し、悠太の番。

「まー、暇つぶしには丁度いいか・・・、っと、頂き」

一枚捲ったときに出たのはクラブのK。先ほどレミリアが捲ったハートのKを捲り、これで1ペア。

続けて捲るがどちらも新しいカードだった。

「そうだ、レミリア。レミリアは魔法って使えるのか？」

レミリアが再びカードを捲る。

「魔法・・・、は使えないわね。魔力を餌に悪魔たちを召喚することとはあっても、魔法は使えないわね。あとは魔力をそのまま放出するぐらいかしら」

と、そう言って手から魔力を放出したのだろう、シャンデリアが軽く揺れる。

「出来ることといえばこれぐらいかしら。魔法ならパチエに聞けばある程度は教えてくれると思うわよ」

まくったカードはダイヤの5とクラブの5。

「能力使っていないだろうな」

「使わないって言ってるでしょ！」

再び捲るが、新しいカードでそのまま伏せる。

「なるほど、やっぱりパチユリーか。これが終わったらパチユリーのところに行ってもいいか？」

カードを捲くってダイヤの6。先ほどのクラブの6を捲って2ペア目を取る。

「ぐっ、構わないわ。何を覚えようとしてるかは、後で教えて頂戴ね」

また捲ってクラブのA。記憶を頼りに捲るがダイヤのJ。

「外れたみたいね。スペードのAはこk・・・あれえ!？」

捲くったカードはダイヤの8。

「吸血鬼の記憶力がなんだって？」

レミリアはぐぬぬ、と顔をゆがめているが気にしないで置く。

そうして

「俺は16ペアある。ってことは」

レミリアが10ペアなので俺の勝ちである。

またしてもぐぬぬ、と言った顔である。

「じゃあ、俺はパチュリーのところに行ってくるよ」

そう言っただアから廊下へと出る。

「瞬動術？」

パチュリーに尋ねると、疑問形で返ってきた。

「そういうのって出来ませんか？」

「出来る出来ない以前に、瞬動術って何よ」

本を開いたまま机に伏せ、ページを保持する。

「足の裏とかに魔力や気を溜めて、爆発させるように放出すれば、短い距離を素早く移動できるんじゃないかと思ひまして。ほら、俺の能力は距離を離しておかないと戦う場合は不利じゃないですか」

なんだそんなことかと、溜め息交じりで言われた。

「それは縮地と言われている仙術よ。私より美鈴の方が詳しいと思ひけど」

そう言っただ面倒くさそうに返される。

「俺には気なんてものはありませんから。魔理沙みたいに、人間でも魔力はあるんでしょう？なら、まずは魔力を簡単にでも扱えるようにしようと思ひまして」

「なら、簡単なモノから試していきなさい。小悪魔！」

はいー、と間の抜けた声で返事が返ってくる。

そのままふよふよと漂うように小悪魔が飛んでくる。

「悠太に見合うレベルの魔力のコントロールに関する本を一冊見繕ってきて頂戴」

「わかりましたー」

そう返して、再びふよふよと飛んで行く。

「その間に、悠太には魔力とは何たるかをレクチャーするわ」

「よろしくお願いします」

レクチャーが終わり、俺が理解したことは

一つ、魔力とは少なからず誰にでもあるものである。

一つ、霊力とは似て非なるものである。

一つ、訓練で総量を上げることが出来るが、雀の涙程であること。

一つ、火をつける、軽い風を起すぐらいは慣れれば呪文を発するこ



となく使用できると言うこと。

これぐらいである。

「悠太の魔力量はそれほど多くないけど、縮地に使うぐらいであれば、問題はないわ。むしろ多いぐらいね。使わなければ自然と身体の外に出てしまうから、無理に消費する必要は無いわ。使いすぎて必要なときに魔力が無くなる、なんてことは無いように気をつけなさい」

と、レクチャーが済んだところで、小悪魔がタイミングよく戻ってきた。

「話が終わったよなのでこれをお渡ししておきます。まずは火力の調節あたりから頑張ってください」

魔力の確認は、パチュリーの協力で何とかなった。

自分の身体にパチュリーの魔力を流し込み、それを伝って行く感覚で自身の魔力を見つけることは出来た。

本来ならこれは自身だけで見つけるものらしいが、そんな本格的にやらないなら問題らしい。

「じゃあ、必要なことはその本に1から10まで載っているから。コントロールが正確になってきたら、美鈴に言って、縮地の練習を見てもらえばいいんじゃないかしら」

そう言って、先ほどまで読んでいた本を持ち、パラパラと捲つてもともと読んでいたらしい場所で止めて読み始める。

自室に戻り、本を読み始める。

まずは、魔法を発現させたい場所に魔力を溜める。その時、どのような形で出したいかを明確にイメージをする。

出す場所は指先、イメージは蠟燭の火をイメージする。

イメージをしたら、そのイメージの形に魔力を放出しながら、それに関連したラテン語（風であればウェントス、光であればルクスなど）を口にして発音する。

ありがたいことに、簡単なラテン語はこの本に載っている。

火の単語はイグニスというらしい。

イメージの通りに魔力を出すようにして、イグニスと口ずさむが何も起きない。

まあ、いきなり成功したら何年も研究しているパチュリーの立つ瀬が無いわけで。

そうして、イメージしては発音し、失敗してイメージしなおすこと  
一時間……。

「何とか、火種は出来たか？」

3回に1回ほど、火種らしき明かりが見えるようにはなった。

さらに30分練習して、火種のようなものは確実に出せるようになり、火も出るようになっては来た。

さらに30分、ようやく確実に火が灯るようにはなった。

「えーと、次の段階は・・・」

確実に発動するようになったら、調節の練習を始める。

火を指先に灯し、それに与える魔力の量を調節し、火の大きさを変えていく。

まずは先ほどと同じくらいの大きさの、蠟燭の火ほどの大きさで灯す。

指そのものに与える魔力を徐々に上げていき、火の大きさ自体を大きくしていくが

「これ以上やるとやばいんじゃないか？」

室内である以上、ある程度の制限は出来てしまう。

松明の火程の大きさをやめておく。

一応魔力のコントロールを覚えたところで、今日の練習はやめておく。

また明日にでも復習してから次の段階へと進もうと考え、何時間も放っておいてしまった仕事の方へと戻る。

予想外（前書き）

最近いきなり寒くなりましたね。

皆さんも体調管理をしっかりとって、夏風邪などひかないようにしまし  
しょう。

## 予想外

翌朝、昨日の復習もかねて煙草に魔法で火を付ける。

「・・・よし、一応は出来てるか」

ふうー、と紫煙を吐き出し、一言。

昨日数回成功しただけだったので心配だったが、何とか出来ているらしい。

後は何度かやってみて、昼にでも美鈴に聞いてみよう。

そう考えて煙草をもみ消し、灰皿へ入れて、屋上へ向かう。

魔理沙も来ないで早2週間。

このままもう盗みに来なければ俺も楽なんだがなあ・・・。

魔理沙が諦めのいいやつだとは思っていないが、ふとそんな考えが頭をよぎる。

今俺は、美鈴に教えてもらおうと思ひ、門に向かっている。

そして

「美鈴」

ウトウトと夢の国への切符を手にしている美鈴に向かって声をかけると

一瞬ビクツと反応して、後ろを振り向く美鈴。

「い、いや、寝てませんよ?」

切符をもう使っていたのか、と思いながら、その墓穴をスルーしてやる。

「そうじゃなくて、縮地を教えてくださいなんだ」

一瞬悩んだかと思うと

「縮地、ですか……。一応、私も出来ますけど」

と、歯切れの悪い返事が返ってくる。

「そんなに完璧にするわけじゃないんだ。相手との距離をある程度離せるぐらいでいいんだ」

それなら、と首を縦に振る。

「じゃあ、まず見本を見せます」

そう言って構え、ドンツという音と共に姿が消える。

構えていた方を見ると、立ってこっちを見ている美鈴がいる。

「これが一応形としての縮地です。悠太さんは何か、気とか魔力とか扱えますか？」

歩いて戻ってきながらそう問いかけられる。

「一応予習程度に魔力の扱い方をパチュリーに聞いてきた」

そう言って、指から火を出す。

少し悩んで

「一応、扱いは出来ているようなので、やり方を説明しますね」

まず、両足の裏に魔力や気を溜めて、それを一気に、爆発させるように放出させる。

「じゃあ、まずは両足に魔力を溜めてみてください」

言われた通り、両足に溜める。

「次は軽く放出してみてください。自分で分かれば問題ありません」

言われたとおり、放出するイメージをして、放出する。

「次は全力で放出してみてください。足は踏ん張ってください」

踏ん張ってという言葉が気になったが、言われたとおりにする。すると

「おお！！」



まるで足を掬い上げられるかのような感覚になってしまった。

踏ん張ってなければ星空が見えていただろう。

「それを一気にやって移動するのが縮地と言われている技術です。やり方の説明は以上です。実際にやってみてください」

そう言われて、今度はゆっくりとした放出をなしに、そのまま全力で放出する。

身体が引っ張られる感覚と共に、景色が一瞬動き

「ああああああ！！！」

恐ろしいスピードでコケた。

「と、そのように、そのまますべての魔力を放出してしまうと、止まる時にまた足へ魔力を溜める必要がありますが、恐らく無理です。なので、すべてを放出するのではなく、少し、まあ、めたうちの1割ほど魔力を残して、止まる時にまた放出して止まって下さい」

それを先に言いやがれ畜生と思いつつも、言われたとおりに行う。

何度か失敗したが、何とか形だけは出来るようになってきた。

「じゃあ、今日はこれぐらいにしておきましょう。魔力も無限ではないですし、また明日以降やりましょう」

そういわれて仕方なく持ち場へ戻っていく。

夜、草木も眠る丑三つ時……と言っほどではないが、深夜。

夕食も済ませ、シャワーも浴びて既に床についておおよそ3時間程たつただろう時間。

揺らされる感覚と起すような声で目が覚めた。

「なんかあったのか？」

あくびをして聞く。

「侵入者です。とんがり帽子を見た人もいるので魔理沙だと思います」

こんな時間に、か……。

「まったく、あいつは何時から夜行性になりやがったんだ」

愚痴愚痴言っついても始まらないが、眠りを妨害されては愚痴りたくもなる。

ジーンパンを履き、玄関へつながるカーテンを1箇所開けるように指示をする。

「俺より先に魔理沙が寝るのは腹が立つが、これもお仕事だからねえ」

深夜、あまり騒音は出したくないと言うことで、VSS\*1を使う。スコープは、標準装備のものからナイトヴィジョンスコープ\*2に変更してある。

VSSと、三脚代わりのクッションを持って、玄関前へと向かう。

調子を見るために一度スコープを覗くと、一面が緑の濃淡で、壁の模様等まではつきりと見える。

肉眼で見ると真っ暗で、窓の周囲が月明かりで照らされているのが分かる程度だ。

そうして数分、スコープに激しい光が確認された。

恐らくメイドたちが撃っているであろうそれは、狙われている本人にことごとく避けられている。

息を整え、止める。

迷い無く動くそれは、俺がここに居ることが分かっていることを知らせてくれている。

素直に避け続けるそれは、まるで撃ってくれと言っているようにも錯覚してしまう。

十字の真ん中に魔理沙を捉え、引き金を引く。

ボスツという銃声の後、絨毯に葉莢の当たる鈍い音が聞こえる。

魔理沙はそのまま箒から落ちて、絨毯へと吸い込まれていく。

箒の方は、慣性に従って進みながら落ちていき、カランカランと言う音と共に墜落した。

魔理沙をメイドたちが囲み、直にでも弾幕を撃てるようにしているが、当の魔理沙は落ちたショックで気絶をしている。

「手足をタオルかなんかで保護してから縄で縛って適当にベッドに寝かしといて。お疲れ様」

VSSと、気絶していなかったときの為に出しておいたUSPを消して、部屋へ向かう。

部屋で、中途半端に目が覚めてしまったため、ベランダで煙草を吸っている

「お疲れ様」

と、咲夜さんがホットミルクを差し出してきた。

「っと、ありがとうございます」

いきなり出てきた咲夜さんに驚きながら、煙草を消してホットミルクを受け取る。

「まさか魔理沙がコソ泥みたいなことをしてくるとは思わなかったわ……」

そう言つて、ホットミルクを飲む。

「いつも昼に来てたんでしょ？ ったく、こっちの都合も考えやがれつてんだ」

同じく自分もホットミルクを飲む。

「貴方が来てから、魔理沙の対応に追われなくて済むから助かるわ」  
そう言つて笑いかけてくる咲夜さん。

「それをするのが俺の役割ですからね。咲夜さんはゆっくりしててください」

また一口飲む。

「そうね。でも、悠太もそれを飲みきったらゆっくり休みなさい。  
明日は妹様が魔理沙と遊びたいと言い出すだろうし、また休みになるでしょうね」

どれだけ休みをくれるんだと考えつつも

「もらえるんなら貰っておきましょう。いくらあっても足りないものだしな」

ハハハと笑う。

「じゃあ、もうお休みなさい」

「ああ、おやすみなさい」

そう言って、飲みきった自分のカップを持って消える咲夜さん。

消した煙草に再び火をつけて、紫煙を肺に入れる。

## 予想外（後書き）

\*1：9×39mmという特殊な亜音速弾を使用するロシアの狙撃銃。バレルの殆どがサプレッサーになっていて、恐ろしいほどの静音性を誇り、50メートル先では銃声が聞き取れないと言われる。有効射程400メートル。

\*2：暗視装置に十字のあるもの。倍率はそれほど高くなく、およそ2倍ほど。

紫の話(前書き)

アイリーンすごいようですね。

日本もゲリラ豪雨がすごいとか。

皆さんの家は大丈夫ですか？



## 紫の話

朝食の後、いくつかおにぎりを作って魔理沙の部屋へ持って行く。

その時、ブラブラしていたフランに会い、そのまま一緒に魔理沙に会いに行く。

ノックを数回して、魔理沙の返事を待たずに入る。どうせ手足を縛られているんだ、ろくなことは出来ないだろう、そう考えながら。

・・・寝てました。

縛られているのなんて関係ない、私は寝たいときに寝ると言わんばかりにぐっすりと寝ている。

仕方が無いので揺らして起す。

あくびをして、なぜ俺が居るか解らないようだったが、少しして、自分が夜中に忍び込んだことを思い出したらしい。

本は既に書斎へと戻してある。

「おはよう、いい夢見れたか？」

そう言うっておにぎりを差し出す。

「夢見は悪かったけど、これが無けりゃ寝起きは最高だぜ」

そう言つて、飯をよこすなら手首の縄ぐらい外せと目で訴えてくる。手を拘束しておいて飯を食えと言つのもどつかと思つたので、手の縄だけは外してやる。

そのまま何も言わず、おにぎりを食べる魔理沙。いただきますぐらい言いやがれ。

「ふう。で、なんでお前がここにいるんだ？」

ペロペロと、指に付いたご飯粒を舐め取りながら聞いてくる。

「本職は門番だが、お前の監視が最重要だからな。盗人が中にいるのに目を離すはず無いだろ」

魔理沙の部屋のベランダに出て煙草に火をつける。

「ただ借りてるだけで、盗んでないぜ」

一口吸い、吐き出してから

「返さなきゃ盗んでるのと一緒だ」

と言り返す。

「人の寿命なんて妖怪や魔法使いからすればあつという間だぜ。なら、問題ないぜ」

やれやれと言つた感じで言い返すが

「そういつわけにはいかないだろう。Time is moneyだよ。お前は自分の金を取られてそのままにしておくのか？」

本がなくなれば出来ない実験等もあるだろう。

「金と本は違うぜ。返ってくるならいくらでも貸すぜ」

もう面倒くさい……。

「いいから、もう盗みにくるな。期間を決めての貸し借りならパチユリーも納得するだろ」

グググシと煙草を消して、灰皿へと入れる。

「じゃ、魔理沙を魔法の森まで送り届けるけど、フランも行くか？」

二つ返事で行く事をきめて、レミリアに報告しに行くフラン。

足の縄を解いて、魔理沙の箒を持ってやる。

「箒は持たなくていいぜ」

「お前に持たせたら追いつけないからいい」

そう言って拒否する。

帰りに人里によってまた茶菓子を買うか。

そう考えていると、許可を貰ってきて、日傘も持っているフランが

戻ってきた。

どうやら俺は傍から見ると二人の保護者のように見えるらしい。

途中、人里の茶店に寄って、団子とお茶を奢ってやると

「普段はいい奴なのに、何で入ろうとするときには厳しいんだ」

と、魔理沙がグチグチ言っているが、無視をする。

週一で来るかどうかなので、ついでに煙草を買っておく。銘柄はアメリカンスピリット。

何でも増燃剤が入っていないとかで、煙草本来の味が強いらしいが、若干お高い。

それをポケットに入れて、店を出る。

魔理沙とフランは先ほどの茶店で雑談をしていたので、さっき買ったばかりの煙草を取り出して吸ってみる。

吸いきり、戻る頃にはすっかり食いきって、もういつでも出れる状態ではあった。

そのまま香霖堂の傍まで来て、魔理沙をそのまま帰す。

今の装備じゃ20分もいれば魔法の森の中でぶっ倒れるだろう。

そのため、香霖堂の傍で足を止めて魔理沙を帰した。

必要なものはすべて揃っているし、香霖堂に寄る必要も無いので、フランに聞いたが、いいと言う返答だったので、そのまま人里へ戻る。

ゲームセンター等の遊び場が無く、どうやって暇を潰すか考えていたが、室内体育館のようなものがあり、その中ならフランも日傘を使わずに遊ぶことが出来るし、他の子連れの妖怪もいたので、その中に混じって遊んでいた。

親は親で、井戸端会議をしていたので、その中に混ざっておく。

手に入った情報は、紅魔館にいる間は大きく関係の無いことだった。

昼過ぎ、フランが昼の飯所を選んだが、どうやらアタリだったようで、手頃な値段でいいものが食べられた。

再び午前と同じところでフランを遊ばせっていると、藍さんが橙を連れてやってきた。

それが目に入り、こんにちはと声をかける。

「おお、悠太か。こんにちは」

と、挨拶を返してくれた。

「買い物ですか？」

手に持ったマイバッグを見れば分かるが、確認のために聞いてみる。

「ああ、人里には良くくるんだ。ここなら橙も遊び相手に困らないしね」

どうやらここは託児所のようなものらしい。

「そうだ悠太。紫様から会ったら伝えてほしいと言われていたんだ」と言ってくるが

「それは買い物しながらでもいいでしょう。手伝いますよ」

そう言って、フランに少し知り合いに付き合ってくる旨を伝えて、藍さんと一緒に出る。

「で、紫さんからの言伝って、何なんですか？」

一息つき

「今度、まだしばらくはいいらしいんだが、外の世界で厄介ことが

起こるらしい。その解決を手伝って欲しいそうだと。無論、只では言わないだろうが、報酬は、ある程度優遇してくれるそうだと。」

外での厄介ごと……。紫が動くとなれば、幻想郷に関係することには違いないが……。

「一応受けておきます。で、その内容はどんな感じなんですか？」

それは、と藍が言いかけたとき

「それは私が説明するわ」

目の前に紫が生首で飛び出してきて、思わず尻餅をついてしまう。

その光景に、紫は扇を口に当て、クスクスと笑い、藍はため息をついている。

「脅かさないでください、紫さん」

ズボンを叩きながら立ち上がる。

「悪かったわね。で、内容だけど」

外に出て、ある人物と協力しながら、とある魔女を倒し、とある魔女の誕生を阻止することらしい。

期間は一ヶ月ほど、その時の必要経費は八雲が持つと言っ。

「……幻想郷を破壊する魔女を倒すのが目的……ですか？」

その問いを、いいえと否定する。

「倒すべき魔女は此方に干渉するほどの力はないの。ただ、その魔女を倒すために、とある少女が力を使い、魔女になってしまったことで、此方に干渉してしまうほどの強力な魔女が誕生してしまうの。貴方はその少女に力を使わせないようにしつつ、その倒すべき魔女を始末してくれればいいわ。恐らく、貴方の知っている火器で、周りの被害を最小にして倒す方法は、恐らく小型の戦略核兵器ぐらいでしょうから、とどめをさす兵器は此方でその時に渡すわ」

と言われ、戦略核兵器でしか倒せない奴をどうやって俺一人で倒せと言っただろう。

「一応は分かりました。それで、その協力する人というのは？」

「その世界で貴方と同じように火器を扱う少女よ。貴方と違うのは、それが小火器を作り出せない代わりに、咲夜の能力を持っているところね」

あー、つまり

「時間を止めて、ナイフの代わりに銃弾を飛ばすってことですか？」

せいかわい、というように、隙間から、バラエティで使われるようなxの紙が先に付いた棒を取り出し、を此方に向けてきた。

「はあ、分かりました。一応、レミリアに話は付けておきます」

それでは、と言って、先ほどの建物に戻っていく。



帰り際に、何時もの和菓子を買に行くが、フランがこっちがいいと思う。ということ、おはぎを買って帰る。

そのおはぎもなかなか絶品だった。

そのおはぎを食べきった後、レミアに今日、紫に言われたことを話す。

「外の世界で起こることがこっちにも影響を及ぼす……。それほどの事が起こるとはにわかには信じられないけど、紫が言うなら起こるんでしょうね……。あいつは幻想郷のことについては誰よりも敏感だから。いいわ、貴方の力が必要と言うならいくらでも貸しましょう。ついでに、貴方の部下も連れて行くといいわ」

と、ずいぶんと太っ腹なことを言ってくれるが

「部下は残していきます。必要になれば紫さんに頼んで送ってもらいますから、準備だけしておいて貰えれば」

と、言うておく。

「悠太がそういうなら、準備だけはさせておくわ。それと悠太」

はい、と返すが、その真剣な眼差しに、プレッシャー威圧感を覚えてしまう。

「必ず生きて帰りなさい。それと」

それ以外にまだ何かあるのか・・・。

生唾をゴクリ、と飲み込む。

外の世界のお土産、よろしくね」

ニパツッと笑い、犬歯が見え隠れする。

「俺の感動を返せ！！」

そう怒鳴り、その怒鳴り声にびっくりしたのか、半ば涙目になるレ  
ミリア。

「そこは普通少女を泣かすなどが、ハッピーエンドにして来いとか  
言うものでしょう！」

俺の主張はきつと間違っていないはず。

## 紫の話（後書き）

一応外伝を書く予定です。

有名な作品なので、これで分かってしまう方も居るかも知れませんが、胸に秘めて置いてください。

## 博麗神社の温泉（前書き）

某掲示板でこの小説を晒して宣伝してくださった方、感想はこちらのほうに書いてくださらなければ以降の話に生かせません。

文句だけを書くならチラシの裏にでも書いといてください。

## 博麗神社の温泉

紫から話を持ちかけられて早3ヶ月。

それから音沙汰もなく、魔理沙の襲撃の回数もだいぶ少なくなってきた。

魔理沙が来ても、部下だけで一応は何とかなっているので、基本的に俺はブラブラしている。

中に入られはするが、書斎に入られる前に迎撃することは出来てい

る。  
紅魔館でフランやレミリアと遊んだりお茶を飲んだり、人里へ買い物に行ったりと、様々なことをしている。

時には人里で仕事することもあるが。

そんな時

「博麗神社に温泉が湧いた？」

「そうだぜ」

また性懲りもなく本を盗みに来た魔理沙をとっ捕まえて、持ち出さないならと許可を得た書斎で、魔理沙は魔道書を読みながら世間話をしていると、そんな話を始めた。

「へえ、それじゃあ今度行ってみるか」

温泉なんて久々だ。この時期、雪を見ながら入るのもいいものだろう。

ついでに、一杯湯船で呑むか。そう考えていたが

「やめといたほうがいいぜ」

魔理沙がそんなことを口にする。

「どうしてだ？雪を見ながら風呂に入って一杯やって、風呂上りに牛乳を飲む。いいことじゃないか」

そう、温泉の良さを熱弁するが

「・・・出るんだよ」

ボソっと言う。

「出るって何がだ？痴女か？」

「地底の幽霊が出るんだよ」

そう言ってきた。

「いまさら幽霊ぐらいでビビる必要もないだろ。知り合いに亡霊や半霊、神様まで居るんだ。それに、悪さはしてないんだろ？流石の霊夢も、悪さするなら放って置かないだろ」

そう言いつと

「まあ、そうなんだけどさ、幽霊を見ながら温泉ってのは、気が乗らないだろ？」

まあ、確かに。

雪の降る中、雪に混じって幽霊が現れる。

うん、勘弁してくれ。

「そうだな、幽霊は夏に出るべきだ」

うんうんと、自分の言った事に頷く。

「夏でも幽霊と一緒に入浴するのはごめんだぜ」

それもそうだ。どんな時、どんな季節でも幽霊と一緒にするなんて御免被る。

そう言つて紅茶を飲む。

「それはさておき、霊夢は解決する気はあるのか？」

さくさくとクッキーを食べている魔理沙に聞く。

「見た限りじゃ解決は当分無理だろうな。あいつ、幽霊を止めたら温泉まで止まっちゃうんじゃないかって考えてるみたいだから」

指に付いたカスを拭きながら答える魔理沙。

はあ、と溜め息が漏れる。

「ま、ともかく行ってみるしかないだろ。今日あたり俺は行くけど、魔理沙はどうする?」

もう帰るのか、帽子を手に取っている魔理沙。

「せっかくの誘いだけど、私はパスだ。もう幽霊と混浴なんてしたくはないぜ」

じゃあなと手を振って帰ろうとする魔理沙の筭を掴み

「魔道書は置いて行け」

と言って、帽子を掴み、中から2冊の魔道書を取り出す。

あははは、と乾いた笑みを浮かべる魔理沙だが、一目散に筭に乗って逃げてしまった。

「油断も隙もあつたもんじゃないな」

呆れてものも言えない。

「パチュリーはこの幽霊の件、どう思う?」

と、後ろで本を読んで、我関せずを通してきたパチュリーに聞いてみる。



「そうねえ、地底っていう未知の場所からの幽霊……もう面倒くさいから地霊でいいわ、地霊がどういうモノか、出てきたことが何を意味するのかがわからないから、正直放置するのは危険だと思うわ」

ペラツと本を捲くる音が聞こえる。

「それでも関わるのも危険じゃないか？」

それが問題ね、とパチュリーが答える。

「誰かが、力のある妖怪辺りが調べるのがいいんだろっけど」

「それはちよつと困るわ」

パチュリーの言葉に重なるようにして紫がスキマから顔を覗かせる。

「地上の妖怪が地底に干渉するのはちよつと拙いよね。その代わりに、霊夢たちを地底に向かわせて調査をしてもらうから、外部から協力してくれないかしら？当然、それなりにお礼もするし、機材も提供するわ」

どうかしらと言つように、こちらを見てくる。

「俺は構わねえぞ。最近はずいぶん暇してたからな」

そう言つて、紅茶を一口飲む。

「私も構わないわ。地底がどんな風になっているか気になるし」

パラツと再びページを捲る。

「助かるわ。始める日時は追って連絡するわ。それまでに、ある程度準備をしておいて頂戴」

そう言いきると、スキマに頭を吸い込ませるようにして消えてしまった。

「話が終わればすぐに帰っちまうか……。それだけ紫にとっても予想外な出来事だったんだろうな」

ずっと本から目を離さないパチュリーに言う。

「恐らくは何かしら動きは察知してたけど、こんなことになるとは思わなかった、って言うのが本音でしようね。あと悠太」

最後の一口の紅茶を飲みきり、煙草を吸うために外へと出ようとした悠太に、パチュリーから声をかけられた。

「貴方、軽く返事をしたようだけど、恐らく地底に潜らされると思っわよ?」

確かに、紫の言い草では霊夢“たち”と言っていた。

複数形、そしてここに居て人間であり、了解を取ってしまったということは……

「……はあ、しょうがねえ。言っちゃったモンはしょうがねえ、行くしかねえよなあ……」

軽くOKなんて出すんじゃないかな・・・。

そう思いながらも、了解しちまったもんはしょうがねえと諦め、妖怪の山に必要なものを作ってくれるように注文しに行く悠太。

「じゃあ、これをモトにして作ればいいんだね？」

そういうと、そのモデルを背中のリュックにつめる河童　河城  
にとりというらしい。

「出来れば数日中に作ってもらいたいんだが、できるか？」

そう聞くと、チツチツチ、と人差し指を振りながら舌を鳴らす。

「河童の技術を舐めちゃいけないよ、おにーさん。コピーなら二日もあれば作りきれちゃうし、防水効果も完璧にしてみせるよ！」

ドンッと胸を叩いて胸を張る河童。

「なら、期限までに2つ3つ作ってくれ。追加で、期限は何時まででもいいから、5つ作って、合計7つ8つ作ってくれ。期限までの最低2つで」

それすらも呑ん貰うことが出来て、妖怪の山を後にする。

後は、問題の温泉を今日あたり見に行ってみよう。

久々の温泉だ、地霊と混浴になったところでプラマイゼロってこと

でいいだろう。

で、夕方。

温泉に入りに来たのはいいものの・・・

「これは酷くないか？霊夢」

幻想郷の男が弱いのか、女が強いのかは分からないが、地霊の殆どが男湯に来てしまっている状態であった。

「知り合いの妖怪が殆ど女だからね、自然と追っ払っちゃって、それで男湯の方が自然と増えちゃって」

簡単に払っちゃうから、ちょっと待っててと言いつ残し、神社の方へ戻ってしまった霊夢。

本当にゆっくりと入りたいなら、異変を解決するしかないな。

湯船につきりながら、本気で考えた悠太だった。

## 準備完了(前書き)

活動報告で、外伝についてのアンケートを採ろうと思います。

良かったらアンケートに答えていただきたいと思います。

## 準備完了

博麗神社に向かって2日。

明日にでもそれぞれ用意が完了するということ、妖怪の山、その中の河童が多く住む辺りに、頼んでおいた物をとりに来る。

「にとりー？出来てるかー？」

そう呼ぶと

「あー、ちょっと待っててー！！もうちょっとで最後のが終わるか  
らー！」

とのこと。

外にいて哨戒天狗に見つかっても面倒なので、声がした滝の裏へ回り込む。

「え？」「お？」

何時だか、妖怪の山に登ったとき、俺を捕まえた白狼天狗がいた。

「なんでここに人間がいる！！！」

と、腰に刺した刀を抜く。

「お前こそなんでここに居やがる。サボってんじゃねえぞ」

と言って、拳銃を構える。

「人間を捕まえればどうってことない!!」

と言って斬りかかって来たのを、銃のスライド部分を使って逸らす。

「俺を捕まえれば、お前が俺の裏でサボってたことがばれるだろうな！」

その言葉に、突きをする体勢のまま止まる天狗。

「それでもいいなら、その刀で突けよ。見逃せば、俺もここで会ったのはにとりだけってことにしておいてやる。他のやつなんか影すら見てないことにする」

すこし考え、その白狼天狗は刀を鞘に収める。

それを確認して、俺も拳銃を消す。

「おまたせー、終わったよー……、って、どうしたの？二人とも立ち上がった」

お互いがエモノをしまった辺りでにとりがやってくる。

「いや、大したことはないよ。それで頼んでおいた物は？」

そうそう、と言って、それを渡す。

「一応頼まれていたようには見れるけど、増幅回路が上手く作れなくてさ、一応は増幅できるけど、増幅無しで見れるのは20メートル

ルぐらいまで。後は、上に取り付けた赤外線発生装置を使ってもらえば、一応500メートルぐらいまでは見えるよ。洞窟の先に暗室を作っているから、一応試してみよう」

そういわれて、先へと進む。

黒いカーテンで仕切られたその部屋に入ると、本当に何も見えない。手探りながら、ゴーグルを付けて部屋の周りを見回す。

部屋の中にはドライバーやペンチなどの工具類が散乱しているのが見える。

「OKOK、これだけ見れば充分だ。今度仕事が入ってるから、落ち着いたら報酬を渡すよ」

そう言っつて、持参したバッグにそのにとり製の赤外線ゴーグルをしまっつ。

「了解了解、また今度頼むよ。外の世界の兵器については私たちも気になっていたんだけど、いかにせん資料が少なくてさ」

そついった話を少しして、その洞窟を後にする。

さて次は

博麗神社へと立ち寄り、スペルカードを作るための紙を貰う。



「あんだ、まだ作ってなかったの？」

そう言っただけで呆れられる。

「下手に宣言するよりは撃った方が早いからな」

適当に20枚ほど貰っておく。

賽銭箱には500円ほど入れてやると、入れた瞬間に賽銭箱から取り出した。

「本当は完全に宣言しなきゃ拙いんだろうが、前は作っている暇がなかったからな」

そう言っただけで、墨と筆でさらさらと書き込んでいく。

悠太の能力的に見ても、スペルカードの種類は3つか4つでいいんだろうが……。

書き込む文としては

銃『』といった形で、銃の分類を書き、その後に名前が来るような感じになっている。

例としては

狙撃銃『L96A1』といった感じだ。

「そんなに書かなくても、今回使う分だけでいいんじゃないの？」

お茶を湯飲みに入れながら霊夢が聞く。

「銃なんて物はそれぞれ特徴があるからな。同じ弾を使っている、その特徴で性能が変わってくるんだ」

例えばM700とL96A1。どちらも7.62mm NATO弾を使うが、M700が曲銃床であるのに対して、L96A1は直銃床であったりと、細かな性能に違いがある。

「そんなモンなの？」

「そんなモンなんだよ」

霊夢がお茶を差し出し、それを一口貰う。

十数分して、書き終わった。

「お疲れ様。明日の昼ごろには、今回の異変を解決する気になっている連中は来るはずよ」

ズズズとお茶を飲む霊夢。

「実行は俺と霊夢だけか？」

霊夢違って音を立てずに飲む悠太。

「魔理沙が参加するようね。協力してくれるのは萃香、紫、アリスがいるわ。実行組みと支援組みの連絡手段は明日紫が渡すそうよ」

「りょーかい。じゃあ、俺も先にこいつを渡しておくよ」

そうしてバッグから赤外線ゴーグルを渡す。

「ナニ？これ」

訝しげに渡されたゴーグルを眺める霊夢。

「赤外線ゴーグルつつつて、暗いところでも良く見えるようになる  
ゴーグルだと思ってくれればいい」

ふーん、と鼻で返事をする霊夢。

「一応試しておくわ。使い方わからないなんてことになったら面倒  
なもの」

今夜にでも試してくれと言って、その場を去る。

次は魔法の森で魔理沙へと渡す。

「へえ、実行班は3人て聞いてたが、悠太だったのか」

てつきり咲夜だと思ったぜと言って紅いクッキーをサクツと噛む。

「咲夜さんじゃなくて悪かったな。明日の持ち物だ」

そう言つて、魔理沙にも赤外線ゴーグルを渡す。

「なんだこれ？新しい双眼鏡か？」

そう言っつて覗き込むが

「おわ！！なんだこりゃ！！！」

恐らく魔理沙の視界にはとても薄い緑が見えているだろう。

「それは赤外線ゴーグルと言っつて、暗闇でも周りが見えるっつていう装置だ……っつて話を聞きやがれ！！！」

わーわーと落ち着きがない魔理沙。

「聞ってるぜ、とにかく暗くても見えるんだろ？」

要約すればそうなる。

「くれぐれも夜紅魔館に来るのはやめてくれよ？たたき起こされて迷惑がかかるのは俺なんだからな」

相変わらず聞いていないので、異変が終わったら魔理沙の分だけ叩き壊そうかと本気で考える。

「それと、聞いているだろうが実行は明日の昼ごろ、時間厳守だ。協力してくれる妖怪は萃香、紫、アリスだ。魔理沙はアリスと組んだ方がいいだろう、魔法使い同士で」

「そうだな。アリスなら長い付き合いだし、癖もわかってくれるだろうしな」

「じゃあ、俺の話はこれでお仕舞いだ。明日、さっさと終わらせて、パーッと宴会でもして騒ごうぜ」

手をグーにして突き出す。

その意図が伝わったのか、魔理沙もグーにして突き出し

コッソ、と拳の先同士がぶつかる。

じゃあなーと簡単に挨拶をして、魔法の森から走り去る。長時間外にはいられないからだ。

紅魔館に帰って、一応、明日の予定をレミリアと咲夜さんに話す。

「そう。なら、見送りぐらいは行かないとね、咲夜」

「そうですね、お嬢様。他の協力してくださる妖怪たちも、恐らく博麗神社に集まることでしょうし、見物するのもいいかもしれませんね」

という始末。

「なんだ、異変は他の奴らからしたら一種の祭りか？」

「あら、気付かなかった？悠太が来てから初めての、あの桃天人が起した異変のときなんか、関係のない奴らは全員楽しんでたわよ？」

主に冥界の管理人とかが。

「はあ。ま、いいか。宴会のときは無礼講で、炒った豆をぶつけて

やる」

そういうと、ガタガタと震えながら咲夜さんの後ろに隠れてしまった。

なにこの可愛い吸血鬼。

「あまりお嬢様を苛めないようにしなさい、悠太」

と、鼻を紅くしながら言っても威厳がないですよ咲夜さん。

「とにかく、異変が終わったら騒ぎましょう」

そう言って、煙草を吸いに行く。

## 地底の入り口（前書き）

東方茨歌仙買いました。

霊夢・・・お前はなんの修行をしてきたんだ・・・。

外伝のアンケートを活動報告のほうで行っています。参加をよろしくお願いします。期限は地霊殿編の宴会終了時までです。

月箱が一万円で買えました。

## 地底の入り口

「じゃ、行きましょうか」

博麗神社集合と言われていたので、向かってみると、既に俺以外の全員が集まっていた。

全員、一応知ってはいるが、それほど親しいわけではない。

顔合わせとして、簡単な作戦会議のようなものをして、そのときに紫から通信機のような物を渡され、それを耳に嵌める。

<聞こえるかしら？>

「おお、バッチリだ。しかし、地底で使えるのか？これ」

<問題ないわ。スキマで通信を取っているから。霊夢には陰陽玉、魔理沙には人形の形で渡してあるわ。それら自体で通信を取ることも可能よ>

「りょーかい。簡単なサポートを頼むよ」

任せなさいと言う言葉を最後に、通信が終わる。

温泉の湯気が立ち込める。

目の前には、大人二人が余裕で入れそうな穴がぼっかりと開いている。



「じゃあ、俺が先に行こう。飛べないから、時間もかかるしな」

そう言っつて、一番近くの木にロープを括り付ける。

「じゃ、行ってくる」

行っつてらっしやいと手を振られて、ロープを落とす。

ゴーグルを付けて、下を覗き込む。

ロープは既に地面に着いており、距離は15メートルほどだろうか。

ラペリングの要領で降りて行き、下を確認すると既に残り1メートルほどになっていた。

地面へと降り立って、周りを確認するが、地霊が少し見えるだけで、他は岩肌だけが見えている。

地面は下り坂になっている。

「様子はどお？」

霊夢、魔理沙という順で降りてくる。

「地霊がちょこちょこ見えるが、他は何も無いな」

そつとだけ返事をして、先へ進む。

「こちら悠太、紫さん、聞こえますか？」

<はいはい、こちら、みんなのアイドルゆかりコン>ブリン。

変な言葉が聞こえてきたので無理やり通信を切断する。

<お茶目ぐらいさせなさいよ>

無理やり繋いだのだろう、紫の声が聞こえる。

「そういうの要らないんで。そういうのは宴会の時とかでマイクを使って言っして下さい。ところで、俺たちの目標は？」

<こついうときに言うから面白いんじゃない。貴方たちの目標は、そのまま道なりに進んでいけば見えるはずよ。だいたい距離はあるけど>

了解とだけ答えて、霊夢たちに伝える。

「まったく、適当よね紫は。こんな暗いところに行き成り行けなんて言っつて」

ぶつくさと言っているが、それでも異変解決に動くのが霊夢の良いところだろう。

「私は別にいいぜ、こついうのは。探検みたいで面白いし」

魔理沙のこついうところは直してもらいたい、マジで。

「それでも、幻想郷の為なんだろうな、紫さんが動くってことは」

あの人は普段はテキストだが、幻想郷が絡んで遊ぶほど腐っちゃい

ないだろう。

俺を外に出してまで仕事をさせようとする人だ、これだけは断言できる。

「ま、そーなんだろうけどな」

魔理沙と霊夢は低空で、俺は徒歩で地下を進む。

時折、数体の妖精が弾を出してくるが、それを避けて、銃で反撃して撃退する。

「ま、最初はこんなもんだぜ。後からは妖精の攻撃でもバカみたいたのが出てくるから、気をつけるよ」

と、魔理沙に忠告を受けた。

と、その時。

地面が揺れる。

その揺れと共に、岩が降ってくる。

「耳ふさげえ！！」

上まで20メートルはあろうかと言う大きな空洞。

こんなところで生き埋めなんて御免だとばかりに、バレットM82 A2\*1を創り、HEAT弾を、当たったら拙そうな岩に向かって撃ち込む。

当たった弾は岩の中で爆発し、砕けて飛び散る。

それを何度か繰り返すと、落石は止まった。

「助かったわ、ありがとう悠太」

「え？何だつて？」

いくら広かろうと、ここは限られた空間。その中で音が反響して、耳鳴りが酷く、少しの間まともに会話が出来ない。

「そんなことより先に行こう。俺はあくまで実行側のサポーターなんだからな。妖怪が出たら頼んだぞ」

そう促して、歩を進める。

そうしてすぐにまた妖精たちが現れるが、それも先ほどと同じように撃退していく。

時折、小さな岩が降ってくるが、霊夢の弾幕で粉々になる。

妖精の襲撃が一段落したところで

「止まれ」

悠太がその声を上げる。

「どうしたの？」

霊夢が聞いてくる。

「2、30メートル先の天井を見てくれ、何かぶら下がってないか？」

霊夢と魔理沙が目凝らしてみるが、やはり距離があるのと、見慣れない視界のため、何かがあることだけしかわからない。

悠太は、ゴーグルの上部にある赤外線照射装置を使い、見てみると、桶のような物がぶら下がっているのがわかる。

それを見ていた霊夢が言う。

「あれは釣瓶落としね。降られても面倒くさいし、先にやっちゃいましょう」

そう言って霊力を溜めるが

「俺がやるよ」

そう言ってAK-105\*2にGP-30\*3グレネードランチャーを着けた物を出す。

照準器を起し、目標物の約5メートルほどを狙う。

弾の種類は催涙弾を使う。

ポンと軽い音がして発射されたそれは、放物線を描くが、頂点辺りで天井に当たり、催涙ガスを撒き散らす。

「あれかぁ・・・」

と、複雑な顔をして魔理沙が言う。

「そういえば魔理沙は食らったな。感想は？」

そのときに霊夢が「え、食らったの！？なにやらかしたんだコイツ」といった表情を魔理沙に向けるが、魔理沙は気付いていない。

「顔面に唐辛子の粉末を塗りたくられたみたいだぜ。目にはからしを塗りたくられたみたいで、一時間ぐらいはヒリヒリしたぜ」

もう食らいたくないなと言うが、なら盗みに入るなと言うと、顔を逸らした。

そんな会話をしていると、ガスが晴れて、その場にあった桶は見えなくなっていた。

「ガスもなくなったし、行くか」

そう言っただけで歩を進める。

後ろから霊夢が「意外と悠太って容赦がないのね」といった目で見ると、悠太は気付いていない。

その後も妖精の襲撃は続いたが、三人の弾幕で蹴散らされる。

すると、またも少し広い場所に出る。

「おお、人間とは珍しい」

その声と共に、ゆつたりとした服を着た少女が現れる。

「地底に遊びに来たのかい？あそこは今お祭り騒ぎよ。誰も拒みやしないから楽しんでおいき」

そう言ってくるが

「すまないが、楽しみにしてきたんじゃなくてな。そこを通してもらえると助かるんだが」

そういう悠太。

<・・・悠太、敵よ。倒しなさい>

いきなり敵と言われてもなあ・・・

「とりあえず様子見つてことで、専門家に任せるよ。つてことで霊夢、よろしく」

何で私なのよ！と怒りながらも、スペカを用意する霊夢。

<お、土蜘蛛かあ、懐かしいねえ>と聞こえる。

俺のは通信機の形をしていて、耳に嵌めているから周りには聞こえないようだが、霊夢の場合は陰陽玉自体がスピーカーとマイクの役割をしているようだ。

「私が懐かしいなんて、その声の主は何の妖怪なのかしらね。まあ、胡散臭いから、この場で倒してあげるわ!」

そう言つて、土蜘蛛もスペカを用意する。

その間俺は、少し後ろに下がって煙草に火をつけて一服する。

一本吸いきる頃には、勝負がついていた。

言つまでもなく、霊夢の勝利である。

「ところで、懐かしいって何なのよ、あいつ」

と、萃香に話しかける霊夢。

しかし帰ってきた返答は

<・・・ぐー・・・ぐー・・・>

いびきのような、腹の音のような擬音だった。

「寝てるのか、お腹が空いてるのか・・・」

「で、ありやなんだったんだ?」

「ただの土蜘蛛よ。それ以上でもそれ以下でもないわ。ほら、先に行きましよう」

「なんか腑に落ちないなあ」



「次は私がやらせてもらうからな」

「……人選ミスね。魔理沙にやらせたら地下が崩壊してしまうわ  
意見や考えをそれぞれがまとめたところで、歩を進める一行であっ  
た。」

## 地底の入り口（後書き）

\*1：バレットM82を対空用にしたブルパップ式のバレット。しかし、実用性が低かったため、少量の生産に留まった。

\*2：AK-74Mの銃身を短くしたような形をしたカービン銃。使用弾薬は5.45mmロシアン。

\*3：先込め式のグレネードランチャー。GP-25というグレネードランチャーの改良版。

橋姫く嫉妬深い水神く

土蜘蛛を霊夢が撃破して数十分。

適度に雑談をしながら、さらに地下へと降りていく。

「にしても、まったく。どれだけ深いのかしら、この洞窟は」

と、霊夢が愚痴をこぼす。

確かに、土蜘蛛を倒すまでに随分と下ってきたが、それでもまだまだ終点は見えそうにない。

「どれだけ深いのか判らないからな……。気長に行けばいいさ」

そう楽観する魔理沙。この楽観が魔理沙の長所であり、短所でもあるのだが。

「っと、なんか出て来たぞ」

前から赤と青の服を着た妖精が現れるが、三人の弾幕で出落ち状態である。

「こういう雑魚も適度に出てくれれば退屈しないわね」

と言いながら、弾を避けていく霊夢。

最後尾の悠太は大した苦労もなく、一步動くだけで回避していく。

前にいる二人はそれなりに動いているが、空中に居るので大した苦  
労もなくスイスイと避けていく。

出てきた妖精の数が数十人になったあたりで、妖精とは違う、霊夢  
の陰陽玉のような青いモノが飛来する。

「よかったな霊夢、陰陽玉があんなに増えて」

「冗談言っていないで、援護続けなさいよ」

そう言っつて、弾を撃つてはいるが、倒し切れてはいない。

先ほど出したままのAK-105を3発づつほどバースト撃ちして、  
陰陽玉モドキを撃破していく悠太。

陰陽玉モドキが出した弾は、1発だが、それが分裂して10発程に  
なっつて向かってくる。

それも回避して、先に進もうとするが、今度は中央に先ほどの陰陽  
玉モドキが赤紫になったモノが飛来する。

それは道の中央あたりで静止し、まるでそこを通れと言わんばかり  
に、通路のような弾幕を撃つてくる。

その青と水色だったり、緑と黄緑色だったりするの弾をすべて回避  
しきると、前から人型をした妖怪が現れた。

その妖怪は、言葉を発することもなく、自身の周りに青い鱗のよう  
な弾をばら撒く。

その弾はゆつくりとだが、霊夢たちに狙いを定めたようで、霊夢たちも左右に大きく動きながら隙間を抜けていく。

それをすべて抜けきると

妬符『グリーンアイドモンスター』

スペルカードを発動する。

そいつ自身は洞窟の右、左と現れるだけなのだが、右なら左から、左なら右からと、緑の静止弾が現れ、二人をその場に留まらせまいとする。

それを回避しきり、少しするとまたも赤と青の妖精が弾をばら撒いてくる。

「あー、もう！めんどくさいわね！！」

その妖精に弾を当てながら霊夢がぼやく。

「出てこなければ、やられなかったのに！」

そう言いながら、悠太もAK-105を当てていく。

妖精を倒し切ると、またも陰陽玉モドキが現れ、霊夢と魔理沙に狙いを定めて撃っていく。

その陰陽玉モドキにも弾を当てて蹴散らす悠太。

「まさか、ずっとこれのループじゃないだろうな」

無限ループって怖くね？

しかし、そう思ったのもつかの間。

陰陽玉モドキをすべて撃破すると、若干の静寂が洞窟を支配する。

その静寂を破ったのは

「今、地下何階だ？」

魔理沙である。

その魔理沙の言葉に反応したのか

<洞窟に階数があるわけじゃないじゃない>

アリスだ。

「そーだな、この洞窟に階数があるんだったら、案内ぐらい出してあるだろ」

そう返すと

「現在、地下666階よ」

前方から、先ほどスペルカードを撃つてきた少女が現れる。

「逆さ摩天楼の果てまでようこそ。歓迎はしないわ」

そう言って、金髪の少女が一礼する。

「ほら、階数があるじゃないか」

どうだといった顔で魔理沙が続ける。

「大体、階数がないと深さがわかりにくいんだよ」

<降りてきた時間で大体はわかるでしょう。それよりも敵よ。>

そう言うと、魔理沙は

「さっきも言ったが、今回は私にやらせてもらうぜ」

「旧都を目指す愚かな人間……。気でも病んでるのかしら……？」

やれやれといった感じで首をすくめる。

「そう言えばお前、さっき出てきた奴だな？ということはこのダンジョンのボスだろ？」

ボスね、とアリスが答える。

「であった奴なんて片っ端から倒していけば何時かは黒幕にぶち当たるんだから、問答なんかしないで倒せばいいのに」

「そう言いつつお前もさっき問答してただろっ」

まったく、どういつ思考回路をしてるんだか……。

「ゲーム気分で地下に潜るのはお勧めしない。経験値稼ぎのつもりが、時間だけ潰れることになるかもね」

「御託はいいから、さっさと倒させてもらっぜ」

ミニ八卦炉を取り出す魔理沙。

「さて、俺らは休憩でもしてようか」

少し距離を取り、再び煙草を吸いだす悠太。

「あんた、私の時もそんなことしてたのね」

と、ジト目でこちらを見てくる霊夢。

「いいじゃないか、弾幕ごっこはサシが基本だろ？なんなら次のボスは俺がやってもいいぜ」

ふうと煙を吐き出す悠太。

「そうね。次に大物が出てきたら悠太に任せるわ」

そう言って離れていく霊夢。

「ところで紫さん。あれはなんの妖怪なんだ？」

と、物知りばば……げふんげふん！物知り姉さんに尋ねる。

「あれは橋姫ね。あいつの奥に橋が見えるでしょう？」



そうやって覗き込むが、ボスと魔理沙の弾幕でよくは見えないが、橋らしきものは何とか確認できた。

「ああ、なんか橋らしきものは見えるな」

体制を戻し、煙草の火を見つめる。

「あの橋を守るのが橋姫の役割よ。同時に、嫉妬深い一面もあるわ。あいつの前で他の橋を褒めるのはお勧めしないわ。興味があつて、覚悟が出来てるならいいけど」

おお、怖い妖怪だな。

「女の嫉妬は深いからな。絶対にやらないようにしよう」

うんうんと自分で頷く。

それをお勧めするわ。

といった瞬間に、被弾する音が聞こえたので見てみると、魔理沙が勝ち誇った顔でこちらを見ている。

もう休憩が終わりかと考えながら、立ち上がる。

そうして歩いていくと

「時間が潰れたな。得たものは少なかったけど」

その言葉を見無視するように、アリスが言う。

<さ、先を急ぎましょうか。もうすぐ目的地付近よ>

俺たちはその目的地もろくに教えられていないんだがな。

「おおっ、やっと目的地か」

そう言っつて、少し悩み

「ところで、目的地ってどこなんだ？」

と、疑問をアリスに伝える。

<封じられた妖怪の住む旧都よ>

何処とは聞いたが、どんな所かは聞かずに聞いた魔理沙の落ち度だな。

「ふむ、ダンジョンが短いのはいいことだ」

そう言う魔理沙。

だがまだ魔理沙は気づいていない。

まだ、ダンジョンの1ノ3ぐらいにしか居ないということ・・・！！

## 怪力乱心と銃使い（前書き）

予想以上に大分長くなってしまいました。

アンケートはまだ続いていますので、よければ答えていただきたいです。

## 怪力乱心と銃使い

橋姫を倒してちょっと進むと、人里のようなところに出た。

よくな、というのは間違いで、恐らくここが旧都と呼ばれるところなのだろう。しかし、疑問が一つ生まれた。

「なんか人里みたいね」

「ここが旧都ってところか。しかし」

周りを見渡す魔理沙。

「なんで地底で雪が降ってる（のよ）んだ？」

魔理沙と霊夢が同じような感想を言う。

「魔理沙、ここからは飛んだ方が早いだろう。箒に乗っけてくれ」

いいぜ、と言って、高度を下げて、俺が後ろに乗る。

そのまま高度を上げて飛んでいく。

霊夢も後に続くように高度を上げていく。

ある程度高度を上げると、水平移動に移り、先を目指していく。

しかし、そのあとすぐに、先ほどの陰陽玉モドキが下から上がってきては弾を撃ち出していく。

避けるのは魔理沙に任せて、俺は銃を使って、霊夢は霊力弾を撃ち、落としていく。

先ほどと違うところと言えば、赤紫のやつから放たれるのが、全方位のレーザーのようなものになったくらいだが、一步ほど動くだけで当たらないので、大した問題ではない。

「そろそろあのモドキ共を従えて欲しいもんだな！」

銃を撃ちながら霊夢に言う。

「あんなのじゃ退治の足手まといになるだけよ！こっちから願い下げだわ！」

と、願いは却下された。

少し倒すと、杯を持った、一本の角を生やしたやつが出てきた。

まるで喧嘩をするかのように、何も言わずにモドキ共を出して、攻撃してきた。

それを難なくかわす。

出した瞬間に三つほど倒したが、他に十ほどある。

それも三人で倒し、二度、三度繰り返すと、無駄だと判つたのだから、自身から弾幕を出してくる。

RPGで言う中ボスだろうそいつは、黄色のばら撒きと、青の自機

狙いを交互に繰り返すが、最小の動きで回避する。

それも無駄だと判って、撃つのをやめて話しかけてきた。

「あんたらなかなかやるね。何者かは知らないけど、暴れる奴らには、暴れて答えるのが礼儀ってね！」

鬼符『怪力乱神』

言うことだけ言ってスペルカードか！

そう思うが、動きは魔理沙に任せて、俺は振り落とされないように、そして少しでもサポートをと、スペルカードを使う。

P D W 『A R - 5 7』\* 1

ストックの部分を脇ではさみ、マガジン部分を上から抑えるようにして、反動を減らすように持つ。

力を開放するかのように放たれた弾幕を、後からばら撒くようにしたのだから、ランダムに飛ぶ弾幕を、絶妙なテクで回避する魔理沙。

流石霊夢と並ぶ異変解決者だといったところか。

それに振り落とされないように、足でしがみつき、鬼に向かって銃弾を撃ちまくる。

霊夢も同じく撃っているのだが、避けることと、自身が動いているのでなかなか当たらない。

俺も条件は同じなのだが、連射力に任せ、ごり押しで撃っている。

しばらくして、撃つのをやめた鬼は

「気に入った！」

そう言って一口酒を飲む。

「もっと愉しませてあげるから駄目になるまでついてきなよ！」

そう言って下がって行ってしまった。

「着いていくのは気が進まないが……、どうする？」

魔理沙が相談してきた。

「俺は諸手を挙げて賛成はできないが……、取れる道はそれしかないだろうな。ここまで来たのも、紫たちの言葉と、一本道だったからだしな」

「私は賛成。とっちめれば異変について何か話すでしょう」

そのとっちめるのが俺だと解ってて言ってるんだろうなと、悠太は思う。

「次は順番的に見ても俺か」

確認を取るように聞く。

「さっきそう言ってたじゃない。任せたわよ」

「私もちよつと休憩だぜ。二人乗りなんて滅多にしないから、少し疲れた」

と言って、箒を杖のように扱いだす。

「オーケー魔理沙。これから紅魔館に来たときは二人乗りぐらいじゃ疲れないように、フル装備の部下を重り代わりにして乗らせてやるよ。距離は幻想郷10週ぐらいでいいよな？」

そう言つと、魔理沙は目を逸らした。

霊夢はやれやれといった感じで首を振っている。

「夫婦漫才はそれぐらいにして、進む道がわかったんだから、先に進むわよ」

という霊夢の言葉に魔理沙は顔を赤らめる。

「べ、別に夫婦なんかじゃないぜ！ほ、ほら、悠太！お前も反論しろって！..！」

そう言う魔理沙の必死さに、俺と霊夢も笑いをこらえるのに必死で、反論することが出来ない。

「お、お前..！」

と言って、箒でたたき出すが、それを掴んで、先を急ぐことにする。

「反論しろ..！」



という魔理沙の言葉を無視しながら。

普通に考えれば、着いて来いと言ったやつが曲がり角で着いてきてないことを確認すれば待っているはずだと思い、そのまま真っすぐ直進していく。

少し進むと、鬼が待っていたように現れ、その左右を妖精が埋める形になった。

そのまま鬼はこちらを向いたまま、後ろ向きで飛び、自機狙いの、先ほどより二回りほど大きい球を撃ってくる。

妖精も、ラグビーボールのような形の自機狙い弾なので、かわすのは容易かった。

妖精の一陣が過ぎると、次はモドキ共の再登場だ。

青は自機狙いの丸い球を、赤はわざと外しているのだろう、自機外しのレーザーを撃ってくる。

これは二陣ほどで終わり、場所に着いたのか、鬼は降りていく。

その10メートルほど先に着地し、こちらから話しかける。

「なあ、ここは地下世界だろ？なんで雪が降ってるんだ？」

と、周りを見渡しながら聞く。

「なんでって、そりゃ、冬だからだろ？」

何言ってるんだこいつというふうな目で見られてしまった。

・・・おかしいのは俺なのか？

「せっかく地上の連中が来たんだ、ここらで一杯やろうじゃないか」  
そう言っつて、どこから持ってきたのか、樽酒が現れるが

「異変が終わってからなら飲んでもいいから、この異変の犯人を教えてください」

そう言っつと

「異変？犯人？こちらはいつもと変わらないけど・・・。あそこに見える地霊殿の主なら知ってるんじゃないかな？」

と言っつて、中心部であろう方を指さし、ひときわ大きな建物を確認させる。

「そう、ならアンタに用はないから、通してくれないかしら？」

と霊夢が言っつが

「あはは！通りたいたら私を倒してから通るんだね！」

そう言っつて拳を構える。

「霊夢と魔理沙は先に行つてくれ。さっさと地上に帰つて、風呂でも入りたいからな」

そう言つて霊夢と魔理沙を先行させる。

「アンタの相手は俺がするよ。二人は先に行かせてもらつが、いいよな？」

と言う。鬼は二人の方を向くが、すぐにこちらを向き直し

「別にかまわないよ。もしつまらないことになったら、お前さんを殺すかもしれないけど、覚悟はいいかい？」

まるで友人に「明日暇？」とでも聞くかのように聞いてくる。

「ああ、つまらなかつたら殺してもらつても構わない。どうせもう2回は死んでる身だ。今更命なんて惜しくない」

よく考えれば、こんな狂つた要求を呑むことが、幻想郷に染まつてきたと考えた。

「あはは！肝の据わつた人間だねえ！いいよ！用意はいいかい？」

ちよつと待つてくれと言つて、煙草を取り出し、火をつける。

「オーケー、準備は万端だ。いつ来てもらつてもいい」

先ほどから出しっぱなしのAR-57を構えて、煙草は口に咥えている。

「じゃあ、行くよ!!」

パパパパパパパン!

激しい銃声とともに横に動く。

ガチツ!という音とともに弾が切れた。

急いで代わりのマガジンを創りリロードしようとするが

「遅い!」

と、5メートルはあろう距離を一步で埋めてきた鬼に殴られそうになる。

それをAR-57を盾にして、後ろへ飛び、距離を取る。

点じゃだめだ・・・、面で、面で!!

散弾『イサカM37』\*2

使用弾は12ゲージのバックショットを使用。

ドンツ!ガシャ、ドンツ!

という音が響く。

素早く建物の陰に身を隠した鬼に銃口を向けたまま、右手で二発リロードする。

そのまま銃を構えて、じりじりと移動する。

怪輪『地獄の苦輪』

スペルカードを発動させた。

まずは鬼を中心に、5つほどの輪が出てくる。

縮地で距離を取り、ドン！ドン！と二発撃ちこむと、切れたわがどんどんと小さくなり、よけやすくなる。

また5つ輪をだし、同じように撃ち、避ける。

そうしていると、いつの間にか周りを自機外しが囲んでいた。

鬼から扇状に弾がない状態を維持している。

その扇状のところに当てるように輪が放たれる。

ショットガン用のスピードローダーを使って、4発リロードし、また2発撃ちこむ。

それを繰り返すと、スペルカードブレイクしたのだろう、通常弾に戻っていった。

「面白い武器だねえ、あんた、外人だったのかい？」

「そうだよ、なんか知らんが、こっちに入ってたよ。能力は『銃火器を創り出して扱う程度の能力』だ」

通常弾は、もう見飽きたモドキ共が放っているが、散弾で一網打尽である。

それが終わり、またもスペルカードを使う。

力業『大江山嵐』

上にひとときわ大きな大玉を撃つ鬼。

「ハ！どこに撃ってんだ！」

チャンスと考え、散弾が最も威力を発揮する至近距離に接近しようとする。

だが、今まで見て、特徴を理解しているであろう鬼は動こうとしない。

不思議に思い、足を止めると

ドゴー！

上から大玉が降ってきた。

反射で上を見ると、雹のように大玉が落ちてくる。

急いで下がり、上を向く。

隙間は大きいが、上からということ、足元がおぼつかない。

しかし、上を向いている相手を倒す気はないと言いたいのか、酒を

飲みながら俺が避ける様を眺めている。

先ほどから一滴たりとも零さず、俺の攻撃でも落とさないように庇っているように見えるそれを見て紫が通話をしてきた。

悠太、今大丈夫かしら？

「大丈夫だと思うなら、いい医者を紹介してやるよ！」

と、怒鳴ってしまふ。

そう怒鳴らないでとなだめられる。

あの鬼と萃香は友人だったようよ。名前は星熊勇儀。山の四天王で、力の勇儀と呼ばれていたそうよ

そんなどうでもいい話をされても困る。

「そんな話はあとでいい！そんな話なら切るぞ！」

まったくまった、大事なものはこれからよ

そう言つてコホンと咳払いをする紫。

勇儀が持っている杯があるわね。それに酒を注いで、零さないようにするという、所謂縛りプレイをゆうぎはしていたそうよ。今のを見て判る通り、恐らく今も続けているでしょうね。それを狙えば、簡単に勝てるんじゃないかしら？がんばりなさいね

口で言うのは簡単だが、やるのは面倒くさいことこの上ない。

ああ、クソツタレ！やってやるよこん畜生！！

適当にドンドンドンドンと四連射し、撃ち切ったそれを消す。

そして、何とかよけきることが出来た。

ゼーゼーと息を整えながら勇儀に話しかける。

「アンタ、山の四天王なんだってな」

こんなもの、適当だ。息を整えるまでの時間稼ぎだ。

「おや、どこでそれを知ったんだい？確かに私は昔妖怪の山で四天王を務めさせてもらったよ。力の勇儀つてのは私の事さ！」

と、聞いてもいないのに自己紹介をしてきた。

「俺は高野悠太だ。一応門番みたいなことをやってるよ」

自分も自己紹介をする。

何とか息が整ってきたところで、一つ提案を持ちかける。

次の一撃で終わりにしようという提案だ。

「俺はもう息絶え絶え、しかもさっさとあいつらの後を追いかけていんだ。あんたもさっさと終わらせて酒でも飲みたいだろ？」

うーんと考え



「よし、乗った。私も十分楽しんだし、これで終わらせよう。当然、負けたらアンタを食べちまうっていうのはなしだ。もう充分楽しませてもらったからね」

そう言う。

その言葉を聞いて、すでに灰すら落ちてしまった煙草を灰皿へと捨てて、最後のスペルカードを2枚取り出す。

勇儀も同じようにスペルカードを取り出し、お互いがほぼ同時に宣言する。

回転式拳銃『S A A・バントラインスペシャル』\*3

早撃ち『クイックドロ』

四天王奥義『三步必殺』

腰にガンホルダーに入ったS A Aバントラインスペシャルを装備し、何時でも撃てるように、ハンマーを起こしておく。

勇儀はというと、力を溜めるようなポーズをして、何時でも開放できるようにしている。

そして

一歩目

勇儀を中心に、時計回りに15本ほどの粒のような弾が連なって現

れる。

手に力が入ってしまふ。

二歩目

先ほどの連なつた先に同じように連なつて出てくる。

背筋に汗が流れ、咄嗟に縮地で前へ出る。

三歩目

先ほどまでいた居た位置が見えなくなるほどの密度で大玉が現れる。

縮地の限界、止まる位置に合わせたように勇儀が拳を振り上げている。

パン！！

ズドン！

勇儀が拳を振り下ろした瞬間、周りの弾が動き出す。

振り下ろされ、その拳が当たる直前、早撃ちでS A Aを撃つが

勇儀を狙っていたそれは勇儀の右側にそれで、勇儀の持っていた杯に当たる。

途端、勇儀が無理矢理軌道をずらしたのか、悠太の横を拳が通り抜け、後ろの弾幕が地面へ激突し、銃声をかき消す。

「お見事！」

へたり込む悠太に、勇儀が声をかける。

「それだけ力があれば地霊殿に行っても大丈夫そうだね！」

「鬼の言うことなら間違いはないだろうな。例外を除いて」

ふう、とため息をつき、ほとんど吸えなかった煙草の代わりというように、もう一本煙草をくわえ、火をつける。

「へえ、あんた例外を知ってるのかい？」

煙を吐きだし

「ああ、地上にも鬼が一人紛れてるよ。萃香っていう鬼が。本人はあなたのことを友人と言ってるけど」

一瞬きよんとしたが、すぐに表情を変えて、笑い出す。

「友人なんてもんじゃないよ！大親友さ！萃香は元気にしてるかい？」

ごくごく、水を飲むように酒をあおり、俺にまで進めてくるが、やんわりと断る。

「元気だねえ。節分には自ら鬼の役を演じて豆を投げられてるよ」

「そーかいそーかい！元気なのはいいことだ！」

悠太、今いいかしら

「ええ、ちょうど戦闘が終わったところです。何かありました？」

耳元から紫の声が聞こえる。

ええ、今近くに勇儀っていう鬼が居るでしょう？そいつと話がしたいのよ。通信機を渡してちょうだい

「了解<sup>ヤ</sup>。今渡す。俺のサポーターがあんたに変わって欲しいそうだし、そう言っつて、通信機を渡し、耳に着けてやる。

「変わったけど、変わったものだねえ」

後の会話は勇儀の話でしか分からなかったが、どうやら契約と違つたと怒っているようだった。

「じゃあ、彼に返しておくよ。ついでに、地霊殿まで連れて行ってあげるとするよ」

ほら、と通信機を渡してきたので、そのまま耳に着ける。

「他に伝言はありますか？」

霊夢に伝えておいてちょうだい。神社にあったお茶はいまいちおいしくなかったって

「あとで霊夢に怒鳴られても知らないですよ」

先で勇儀が早くしろと五月蠅いので、吸いかけの煙草を灰皿に押し付け、消火してから立ち上がり、歩き出す。

## 怪力乱心と銃使い（後書き）

\*1：M16を改造して、5.7ミリ弾を撃てるようにしたもの。銃身と平行に装着されるマガジンはP90と同じもの。排莢は5.56ミリ弾のマガジン部分から下に排莢される。

\*2：装填口と排莢口を同じにして、開口部を下にしたポンプアクションショットガン。使用弾は12ゲージ、16ゲージ、20ゲージ28ゲージ。装弾数4発。

\*3：SAAの8インチモデル以上の銃身を持つSAAのこと。今回はワイアット・アープが使っていたとされる、16インチモデルを使用。

## 地霊殿（前書き）

アンケートにご協力お願いします。

## 地霊殿

しばらく歩くと、立派な洋館が見えてきた。

「あれが地霊殿だよ。偉そうにしてるやつらが住んでる館だよ」

赤と黒のタイルでできた館は、地霊殿という言葉とは裏腹に洋館のような外見をしている。

「ここらでいいかい？できれば会いたくないんだ」

鬼が会いたくないという相手に、嫌な予感しかしない悠太。

「ああ、ここまでで構わない。案内ありがとう」

そう言って、門番の居ない門を抜ける。

庭は紅魔館といい勝負だ。日がないのによくもここまで立派に見えるもんだ。

そう感心して、中へ入ると

「あーあ、派手にやってくれて」

霊夢と魔理沙の弾幕が当たった痕だろうか、そこらじゅうがボコボコと穴が開いている。

「修理するのは俺たちじゃないからって、やりすぎじゃないか……？」



ま、どうでもいいか。そう言って、弾幕の痕の酷い方向に向かって歩く。

暫く歩くと、ステンドグラスのある、広間らしき場所へ出た。

そこでは一人の少女が複数の動物たちに囲まれている。

「そんな所で突っ立てないでこっちに来たらどうですか？あなたに私と対立する気がないのはわかってますから」

そう言われて姿を現す。

「初めまして。私はこの地霊殿の主をしています、古明地さとりと言います。自己紹介はいりませんよ、高野悠太さん」

こちらの名前を当てたことに吃驚する。

「そう驚かないでください。私の第三の目の前では何人たりとも隠し事は出来ませんから」

そう言うと、座るように促してくる。

さとの背後にはステンドグラスが。

自然とそのステンドグラスに目が行ってしまふ。

「やはり、ステンドグラスは珍しいでしょうか？それよりも、貴方も間欠泉や怨霊についての調査ですね、先ほどの巫女たちのように、中庭に行く道を開けておきましょう」

何か見透かされているような、嫌な気分になる。

俺の数少ない妖怪の知識を絞って、出てきた答えは……

「なるほど……なるほど……。さとり、ね。名は体を現すとは言ったもんだ。アンタは覚妖怪か？」

「ええ、確かに私は覚妖怪です。この能力ゆえに地上で嫌われ、こうして地底で細々と暮らしています」

そんな会話をしていると、紫から通信が来た。

悠太、一旦代わりなさい。彼女と話があるわ

「了解。俺は残ったほうがいいのか？行ってもいいか？」

好きになさい。これから先、私のサポートも大して意味はないでしょう？

いや、同意を求められても……。

そう思っていると、やはり覚妖怪。会話も筒抜けらしく、クスクスと笑っている。

「分かっていると思うが、話があるそうだ。終わるまで俺は休憩させてもらおうよ」

そう言って、寛ぐ。

さとりの方は、紫との話でこちらに気が向いていないようだ。

ポケットをまさぐって煙草の箱を出そうとするが

「煙は控えていただけませんか？」

変わったアクセサリーのような目がこちらに向いていて、さとりの口から発せられた言葉に、バツの悪そうな顔で煙草をしまっ悠太。

それから少しして、話が終わったのか、通信機をこちらに返してくるさとり。

「ありがとうございます。これはお返しします」

返されたそれを耳に着けなおし、立ち上がる。

「案内を付けておきましょう。迷うことはないと思いますので」

「ああ、助かる。こんな広い館じゃ、最初に来たやつは案内があっても迷うだろうな」

そう言って部屋を出る。

案内として宛がわれたのは、一匹の犬。

「よろしく頼む」

そう言って、頭をなでてやると、素直になでられる。案内はきちんとしているようだ。

その犬に連れられて歩くこと数分。

さまざまな調度品が飾られているが、どれもお高いものだというのが分かった。

高くても魔法の品じゃないし、来るのもめんどくさそうだから、魔理沙に狙われるようなことはないだろうとか考えていたら一瞬とも取れる時間だった。

「ここからはあたいが案内するよ」

そう言っただけ現れたのは濃い緑色の服を着た、赤い髪の猫耳少女。

「おにーさんもさっきのおねーさんたちの仲間なんですよ？」

おねーさんと言われて一瞬首をかしげそうになったが、霊夢たちのことだと思えば浮かぶ。

「一応はそうなるな。あいつらほど強くはないが」

ふと見ると、目の前の少女の背後に何匹化の怨霊が浮いている。

「よかったよ。あたいのメッセージが届いたようで」

話を聞くと、この火焰猫燐という妖怪は、親友が暴走してるから助けてほしい、懲らしめてほしいといった意味を込めてあの怨霊を出していたらしい。

「とりあえず、今度からは文章でよこしてくれ。あれじゃ地下で何かあったのはわかるが、何が起こって何を目的にしているのかさっ

ぱりわからない」

「やははーと笑ってごまかそうとしているが無駄だ。

「次からは頼むぞ、おかげでこんなところまで来る羽目になったんだからな」

恐らく手紙がなくとも来る羽目になってたんだろーなと考えるが、言わないでおく。

そうしているうちに、地下の最下層、旧灼熱地獄跡地の前に着いた。着いてしまった。

「あたいの親友・・・、お空っていうんだけど、悪いやつじゃないんだ。すごい力を手に入れて、ハイになってるだけなんだ。だからさ、もとに戻してやってよ・・・!!」

友情ね・・・。つたく、

「面倒くせえ・・・、けど、そう言うのは嫌いじゃない。お空ってやつはいい親友を持ったもんだ、羨ましい位にな」

そう言って扉を開ける。

地霊殿（後書き）

次回ラストです。

旧灼熱地獄跡地（前書き）

次回で一応ラストです。

今回が一番の駄作かもしれませんが・・・。

アンケートにご協力お願いします。

## 旧灼熱地獄跡地

扉を開けると、冬とは思えないような熱風が吹く。

「跡地と言ってもまだ火自体は残っているから、服は脱いで行った方がいいと思うよ」

「そう言うことは早めに言うておいてくれ・・・、いや、マジで」

そう言うって、何枚か着ていた物を脱ぎ、置いていく。

縮地を連続させて移動しているが、一向に敵が現れない。

霊夢たちが悉く倒している姿を想像して、ひよっとしたら全部の敵を蹴散らすように進んでいると思うと、敵に同情したくなる。

「紫、今の霊夢たちの様子を教えてくれ」

紫に霊夢たちが押しているのか、押されているのかを聞く。

<拙い状況よ。敵の高火力で霊夢のお札も針も無効化されているわ。頼りの魔理沙も避けるので精一杯って所ね。・・・正直、甘く見てたわ>

それだけ分かれば十分。先を急ぐ。



そうして

「この先だな」

扉越してもビリビリと伝わってくる威圧感。

M82A2を肩に構えて、チャージスターを仕掛ける。

ドアの脇に退避して、起爆。

派手な音とともにドアが破壊され、そこに突っ込んでいく。

中では、必死に避けながら針を投げる霊夢と、魔法が打ち消されている魔理沙の姿、遠くの方には白いマントに黒い翼という姿の人間が飛んでいる。

あれがお空で合っているだろう。

お空に向けてM82A2を撃つが、それよりも一息早かったお空の攻撃によって、弾が熱したフライパンに水を落としたような音を立てて蒸発してしまう。

撃ったあと、回避行動を行ってお空の弾を避けるが、熱風と共に床がえぐれてしまう。

さらに続けて2発撃つが、これも同じような音を立てて蒸発してしまふ。

蒸発するのはわかる。だが、一瞬でというのが気になる。

それほど的高温を出すものはそうはない。

と考えながら何度か避けきると、スペルブレイクしたのか、優しい弾幕が来るが、お空自体が動いていて攻撃を当てることが出来ない。

幸いにも、それほど縦横無尽ということもなく、弾も四方八方に撃ちこんでいるということもないので、01式軽対戦車誘導弾\*2のダイブモード\*3で狙う。幸い、天井も高く、ぶつかるということもないだろう。

「霊夢！援護を頼む！一回でいい！耐えられるだけの結界を張ってくれ！」

「絶対に当てられるっていう自信があるなら使いなさい！」

そう言って投げて寄越す。

使い方を一応紫に聞くが、絶対には無理だろう。上空に行くということ、見えている時間が長く、迎撃もされやすくなってしまふ。

そう思い、霊夢に投げ返そうとするが、その間を弾が掠めるように通り、断念する。

「紫、お願いできるか？」

「<そう長くは持たないわ。遠い上に地下、本当に一発しか守れないわ>

この通常弾を見れば、自機狙いのパターンで、避けるのも楽だが、

ロックするための時間が足りない。

二往復で中央に止まり、大玉をばら撒いてくるのも判った。

一往復目が終わった瞬間にロックをするために画面中央にお空を入れながら体を動かす。

ロックが完了したという電子音を聞いて引き金を引く。

ミサイルが出た瞬間に紫に結界を張ってもらい、弾が当たらないうちに回避行動をして、何とか避けるが、ミサイルの発射筒と発射機は弾に触れた瞬間にベッコリとへこんでしまい、上空のミサイルは暫くしてからお空に迎撃されてしまった。

「畜生Damn!」

と悪態をつきながらも、次の手を考える。

隙についてダイレクトモードで撃ちこめれば変わってくるのだろうが、それを出来るだけのスペースがない。

あるとすれば、スペルカードを宣言したあたりだろう。

その時の為に、常にロックをした状態にいるが、何時スペルカードを宣言するかと考えていると、動きが止まり、カードを取り出した。

その瞬間に引き金を引き、今度は確実に当たる！そう思った刹那、お空の出した弾に当たり、爆発ごと溶かされてしまった。

「!」

当たる瞬間、僅かにお空の出した弾の方へ誘導されたような感じがしたが、まさかフレア\*4の代わりにもなっているのだろうか？

あのタイミング以外で当てるのは無理だろう・・・。

しかし、フレアの代わりまでであるとすると、赤外線ロックは大して効果はない。

ならばと、91式携帯地对空誘導弾\*5を用意する。

「霊夢、魔理沙。アイツのスペカが終わった瞬間にスペカを使ってアイツの弾をすべて消してくれ。そうすればこいつが当てられる」

「いいぜ、それで終わらせられるんならな！」

「失敗はしないでよ！こつちも残り少ないんだから！」

二人の同意を得たところで肩に担ぎ、縮地を使いながら避けていく。小弾と核融合であろう力を使って撃ってくる弾の熱風にさらされながらも、何とか避け切っていくが、本当に危ない。

所々に軽度の火傷を負いながらも、スペルカードブレイクまで持ち込んだ。

「今だ！」

ロックをして、まずは霊夢がスペを使い、魔理沙が入れるだけのスペースを作る。

次に魔理沙がスペカを使い、お空までの道を開ける。

「それでも、喰らってる!!」

そう言って撃たれた地对空ミサイルは、尾のように煙を出しながらお空に向かって飛んでいく。

そのまま直進したミサイルは、お空の回避行動も空しく、追尾してお空の翼に当たり、爆発。

煙に飲まれるのを見届けて、発射筒を捨てる。

「・・・やったか？」

その安心も束の間、煙から出てきたお空は、当たった翼とマント、服が少しボロボロになっただけで、瀕死、致命傷ということはない。そうだ。

「クソツタレ！なんで墜ちてねえんだよ!!」

M82A2を構えるが、遅かった。

お空は取り出したスペカを発動させ、俺の撃った弾を蒸発させていく。

先ほどと違い、撃った弾は劣化ウラン弾\*6だが、それも発火する様子もなく融解、蒸発してしまう。

「悠太！さっきので決めるって言ってたわよね！」

霊夢が怒鳴る。

「俺だつて予想外だよ！地対空ミサイル防ぎきるとか、馬鹿じゃねえのか！！」

悠太も怒鳴り返す。

「怒鳴りあいはやめろ！次が来るぞ！！」

ハツツとして、前を見ると、先ほどとは比べ物にならないほどの大きな弾が止まっている。

後ろにも同じくらいの弾があり、横に移動し避ける。

霊夢と魔理沙がスイスイと避ける中、飛べない俺は小刻みにステツプしながら避けるが本当にギリギリ、要らない傷を増やす。

避けることが出来ても、次の攻撃方法がない。

赤外線ロツクもダメ、地対空ミサイルも大した効果もない、アンチマテリアルも溶かされる。

まさに手詰まり。

サポートしようにも悉く無効化され、ここにいること自体が場違いではないのか？

何とか避けることが出来たが、服は既にボロボロ。

入り口付近に服を置いておいて正解だったな。

途中魔理沙が隙を見つけてお空の目の前でレーザーを撃っていたが、大した効果もなく、危うく被弾するところだった。

霊夢が、そろそろラストスペルだろうと言ってきた。

根拠は勘なのだろうが、それを信じるしかない。

お空は、自身の周りに数えきれないほどの弾を円のよう巻き、スペルカードを掲げた。

そのスペカが発動されると、お空の身を守るかのように弾を保持させ、それに向かうように弾が移動する。

それをお空に背を向けて避けていく。

空中に居る霊夢たちは気にしなくてもいいだろうが、俺は地面に立っている。

今までのお空の攻撃でできた地面の凹凸を見ながら回避していくが、下を見たとき、視界の端にこちらへ近づくと弾が見えた。

それは全方位に向かって撃たれたが、霊夢は気づいているようで、万が一避けきれない時のためだろう、スペルカードを手にしている。

魔理沙は気づいていないようだ。

その弾が魔理沙に向かっていく。

縮地の推進力を平行ではなく、垂直に使い、3メートルほど飛ぶ。

「魔理沙！後ろだ！！」

え？という表情と共に、後ろを向くと、すぐそこまで近づいている小粒の弾。

回避行動をしても、広がりながら近づいてくるそれは避けられないだろう。

目を瞑る魔理沙。

そこに向かって霊夢に投げつけられた結界用のお札を投げつけ、結界を張る。

そうして

被弾。

小粒の弾が2、3個当たり、体制を崩してしまう。

体制を崩さなければ、何とか着地は出来ただろうが、体制を崩し、地面まで残り1メートル。

重力に引っ張られ、そのまま地面に叩きつけられた悠太は、50センチほど地面を滑り、止まる。

結界が崩れた瞬間に魔理沙は悠太の方へ、弾を避けながら降りていく。



「おい！大丈夫か！」

返事をしないが、呼吸だけはしている。

左目のあたりを大きく切つて、出血が酷い。

咄嗟に悠太を箒に乗せて飛び上がり、弾を避けていく。

地霊殿へ戻れば何かしら治療は出来るだろう。

ならばやることは一つ。

目の前の鴉を倒すこと。

魔理沙と霊夢は、ありつたけのスペカを用いて、お空へ攻撃する。

霊夢の勘は馬鹿にできない。

霊夢がラストスペルと言ったのなら、これが本当にラストなのだろう。

そう考えての行動だ。

そうして、お互い最後のスペルカードを使い

「これで！」

「最後よ！」

お空のスペルカードを破った。

## 旧灼熱地獄跡地（後書き）

- \* 1：爆薬に指向性を持たせて、ドア等を破壊するための爆薬。C4などが使われる。
- \* 2：自衛隊の使っている個人携行式対戦車ミサイル。赤外線ロツクの撃ちっ放し式で、すぐに射手が退避できる。アメリカ軍のジャベリンのようなモノ
- \* 3：一度上空に上がってから打ち下ろす形のモノ。戦車の弱点である上部を狙うためのモノ。
- \* 4：赤外線ロツクを解除するために使われる熱源。主な材料はマグネシウム。
- \* 5：自衛隊で使用されているステインガーの上位互換。赤外線ロツク以外に可視光（普通に見える画像）を認識してホーミングするため、フレアに強い。
- \* 6：文字通り劣化ウランを弾頭にした弾。ごく少量の放射線を出す放射性物質だが、人体に影響が出るほどではない。削れると発火し、HEAT弾のような効果がある。

## 帰還（前書き）

アンケートは日曜まで受け付けております。

誤字脱字、感想等いただけたら幸いです。

## 帰還

目が覚めて初めに目にしたのは、これでもかというほど大きなステンドグラスだった。

いまだに残るズキズキとした頭痛を黙殺しながら体を起こす。

「目が覚めましたか？」

声のした方を見ると、座って霊夢たちと話をしているさとりの姿が目映る。

が、その視界に違和感を感じる。

普段よりも視界が、狭い。

左目に当たりに手を当てると、包帯だらう布が巻かれていた。

「今は寝てた方がいいわ。脳震盪起こしてるみたいだし」

霊夢がお茶をすすりながら話す。

左目を塞がれていることで、視界が狭くなったのだろう。

その為だろう、距離感がおかしい。

「一応消毒と化膿止めを塗っておきましたが、後できちんと医者に掛かっておいた方がいいでしょう」

さとりが言う。

恐らくだが、この左目はもう使い物にはならないだろう。

なんとなく、そんな気がした。

「ええ、その通りです。おそらく、眼球にも酷いダメージがあるでしょうから、左目はあきらめた方がいいでしょう」

やはりか、と、喪失感を覚えながらため息を吐く。

「私のペットがご迷惑をかけたようで、申し訳ありませんでした」

そう言って、頭を下げる。

片目だろうと、銃は使える。

刀等の武器ではないのだから、距離感なんて有って無いようなものだ。

「しばらくは、片目に慣れるようにしないとな・・・」

目が覚めて初めて口にしたのは、前向きな言葉だった。

「じゃあ、悠太も目が覚めたし、私たちはもう地上へ帰るわ」

霊夢がそう言うと、俺も立ち上がろうとするが、脳震盪での影響だろうか、地面に足を付けて立ち上がってすぐに膝を着いてしまう。

「あんまり無理するなって、ほら」

いつ近づいたのかは分からないが、魔理沙が手を取る。

その言葉に甘えるように、手を取り、そのまま魔理沙の肩を借りる。

そのまま魔理沙の箒に乗り、宙に浮く。

「また何かあったら連絡するわ。今回のことで、紫とも話をしなきゃならないし」

そう言って霊夢も飛ぶ。

道中は、俺を気遣ってか、来た時の半分ほどのスローペースで飛んでいる。

「悠太、庇ってくれてありがとう……。それと……。ごめん」

魔理沙が俺に話しかける。

「気にすんな。俺が勝手にやったことだ」

まだ頭痛がするがさつきほどじゃない。

試合で何回か脳震盪で運ばれる奴らを見ていたが、全員がこんな感じだったのだろうか？

「それでも、ごめん」

何というか、むず痒い。

しんみりとした魔理沙という、滅多に見られないモノを見ているためか、むず痒い気分になる。

「ホントにすまないと思っっているなら、盗みに入るのをやめてもらえれば嬉しいなあ」

絶対に拒否するだろう、そう思っただけ

「・・・わかった」

なん・・・だと・・・!?

魔理沙が、盗まないことを・・・約束した、だと・・・?

「それで悠太の気が晴れるなら、そうする」

おいおい、熱でもあるんじゃないか?

「ホントに魔理沙か？俺の知ってる魔理沙はそんな簡単にあきらめる奴だったか？」

「いいんだ、それくらいで許して貰えるなら、その条件で」

おかしいおかしい、ホントにこいつは魔理沙なのか？

「OKOK、さっきのは冗談だ、忘れてくれ。いいな？」

本当に調子が狂う。

頭痛が酷くなる。

「代わりに、いつも通りのテンションの高い魔理沙に戻ってくれ、  
むず痒くてかなわん」

分かった、と返事をするが、いつも通りのテンションとは言えず、  
まだ違和感が残る。

二、三日すれば戻るだろうと考えて、これぐらいの違和感ならと無  
視をする。

洞窟を出て真っ先に向かったのは永遠亭。

魔理沙にはそのまま紅魔館に向かってもらい、俺が永遠亭に居るこ  
と、怪我をして一日ほど検査入院をするということだけを伝えても  
らった。

検査の結果としては

「これはもう左目は無理ね」

という、予想通りのモノだった。

「右目に影響がなかったのが幸いね」



なんでも、片目を失明するともう片方の目も失明したり、視力が落ちたりするそうだが、幸いにもそう言ったこともなく、右目は正常に働いてくれているようだ。

「一週間ぐらいで義眼も作れるけど、どうする？」

これは断る。

「そう、なら脳震盪の方だけど、一週間ぐらいは脳を強く揺らさないように動いてね」

と、問診、触診が終わり、宛がわれた病室へ向かう。

その時、偶然が狙ってかは知らないが、鈴仙と会った。

「今から食事を持っていくところだったから、ちょうどよかったわ」

手には、俺の分であろう栄養食がある。

「そうか、本当にちょうどよかったな」

そう言って歩き出す。

「にしても、失明するなんて、貴方も大変ね」

病室に着き、食事をしながら話す。

「片目ならまだよかった方さ。これが両目だったら、どうなってい

たか」

一生介護付きなんて死んでもごめんだ。

「そうねー、片目があれば、人間生きていけるし、距離感はおかしくなるけど」

鈴仙の、こういった相手の性格を判断して話すことを変えるというのはありがたい。

変に同情されてもウザったいだけだからな。

「なににせよ、生きてれば問題なし。死ねば何もできないからな」

こうして飯を食うことも、寝ることもできないしな。命あつての物種ってやつだろう。

そんな会話をしながら食事を済まし、鈴仙が退室した後、布団に入つて寝た。

## 帰宅（前書き）

アンケートありがとうございます。

結果は、3が3表、2が2表、5が1表ということ、3に決定しました。

ご協力ありがとうございます。

## 帰宅

翌朝、検査の結果も良好ということで、紅魔館へと帰る。

竹林で妹紅に会い、一服しながら眼のことについて聞かれたが、ありのままのことを話す。

「へえ、そんなことがあったのか。なんなら、私の眼をあげようか？」

そう言っつて、左目を抉り出そうとしていたが、丁重にお断りする。

「あくまでこれは自己責任。自分への戒め……、みたいな感じで、残しておきたいんだ」

そう言っつて、左目のあたりを触る。

「ふーん……。なら、眼が欲しくなったらいつでも言っつてくれ」

そう言っつて、吸い切った煙草を灰皿に入れて、再び歩き出す。

人里などには寄らず、そのまま紅魔館へ向かう。

「お帰りなさい、悠太さん」

最近、異変の帰り以外でこいつが起きているのを見てない気がする……。

「ただいま。今日は起きてるのか」

寝てたら撃とうと思ってたのに、と伝えると

「私だっていつでも寝てるわけじゃありません！」

怒られた。

「ところで、その眼・・・、大丈夫ですか？」

眼のあたりには、今も包帯が巻かれて隠れている。

「ああ、痛み止めも効いてるけど、少しムズムズする程度だよ」

そう言って、門を開けてもらい中へ入る。

そのまま庭を通り、紅魔館の中へと入っていく。

相変わらず紅くて、ちょっと間をおいて入ると眼がちかちかする。

そう考えていると

「ゆうたー！ー！」

「ぎゃああああー！ー！」

フランからのタックルが入る。

「ゆうた！大丈夫！？」

ゲホゲホと、咳き込みながら腹を押さえる。

「フ、フラン！飛び込むなって言ってるだろ！」

息を整えながら言う。

「だって、ゆうたがケガしたって聞いて、それで心配で……」

心配してくれるのは嬉しいが、怪我をしたたびにこれでは、怪我が余計に悪化するかもしれない。

「心配はありがたいけど、そういう風についでくるのはやめてくれ。妖怪と人間じゃ、力が違いすぎるんだから」

人間相手のタックルであれば、後ろへパスするだけの余裕はあっても、妖怪にされたらボールじゃなくて俺が後ろへパスされてしまう。

「ごめんなさい」

少ししょぼんとしたフランに、次からはやめてくれと言って、この話を終わらせる。

終わった直後、まるでタイミングを見計らったように咲夜さんが現れる。

「お帰りなさい、悠太。さっそくで悪いんだけど、お嬢様が呼んでいるわ」

りょーかいと間延びした声で返事をして、フランに別れを告げる。

「あとであそぼーねー！」

と、手を振るフラン。

それにこちらも手を振って応える。

「お疲れ様、悠太。眼の方は大丈夫？」

それに対して、美鈴と同じ返事をする。

「そう、無事ならよかったわ。それと、貴方には一週間、休みを与えるわ。一週間、好きに過ごしなさい」

これにも了解と答え、フランを呼んでくる。と言って部屋を出ようとする。

「そうそう、今回も宴会をするそうよ。日は五日後、いつも通り博麗神社でやるらしいから、忘れちゃダメよ」

五日後・・・、その時にはもう包帯は外せているだろう。

そう考えて、分った、と返事をする。

一週間の休み・・・、とりあえず、片目に慣れることから始めようと考えながら、フランを探す。

まずは、さっきフランと会ったエントランスあたりを探してみよう

考えて、エントランスまで戻る。

と、フランはエントランスで妖精メイドと談笑していた。

ついこの前までフランを避けていた妖精メイドたちだが、最近になってフランと話をしているのが目に入る。

その時のフランは、レミリアたちと話をする時のように、眼を輝かせている。

邪魔するのも悪いし、話が終わるあたりまでこのままでいようと考える。

少しして、こちらに気付いたのが、手を振るフラン。

フランの方へと行って、レミリアの部屋で何かしようという

「ねえ、この子も連れて行っていいかな？」

と、話をしていた妖精メイドに目配せする。

「いいんじゃないか？それほど厳しくもないし、人数は多い方が楽しいだろ？」

これで二人で遊べるゲームはなしだな。

そう考えて、レミリアの部屋へ向かう。



「」「ダウト！」「」

「うー！ー！？」

現在、俺たちはレミリアの部屋でダウトをしている。

で、さっきの悲鳴は、終盤にダウトを食らって手札が持ち切れない  
ほどになってしまったレミリアの悲鳴である。

「なんで判るのよ！」

「それは言ったら面白くないだろ？（主に俺たちが）」

他のフランやメイドはうんうんと頷いている。

そうして、それから4順ほどして

「5だよー」

「それ、ダウトよ！」

と、レミリアが声を張り上げて言う。

先ほどの増加分もほとんど消化しきれておらず、焦っているようだ。

そうして捲ってみると

「」「5だな」「ですね」「だよー」

宣言通りの5。

14枚増えるレミリアの手札。

「うーーーーー!!」

響くレミリアの悲鳴。

それを忠誠心をダダ漏れにしながら見ているメイド長。

その回は、フランがすべて手札を使い切り、フランの一人勝ち。

俺の残りは3枚、メイドは5枚、レミリアは・・・

「もう・・・ゴールしてもいいわよね・・・?」

32枚。

いくらなんでも負けすぎだろ・・・、と呆れられるようなレベルである。

そのままの流れでもう一回、もう一回となって、レミリアは負け続けた。

魔法の森、キノコの森（前書き）

今回、次回やることは大変危険です。

現実では絶対にやらないようにしてください。

## 魔法の森、キノコの森

朝、時間を確認すると、既に10時過ぎ。

疲れが出たのか、休暇だったからか。もしくは両方かもしれない。

ベットから出て、寝巻のまま、永遠亭で渡されたガーゼに消毒液を塗布し、左目に当て、その上から黒い眼帯をする。

そのあと、消毒液がしみて痛むのを我慢しながら着替える。

宴会まであと4日……、今のうちに準備をしておこう。

そう考えて、魔法の森……、正確には魔理沙の家へ向かう。

途中にある香霖堂で、あればガスマスクでも買おうかと考える。

少し出てくることと、遅くなるかもしれないから昼は勝手にするという伝言を紙に書いて食堂の壁に貼っておく。

紅魔館を出て、霧の湖を横目に歩き出す。

空ではバカルテットらしき4人組と、一際大人びている大妖精が一緒に遊んでいるのが見える。

絡まれる前に逃げるのが得策だろうから逃げる。

そう思い、早歩き程度で逃げる。

人里に着く。

時間を確認すると11時になるかならないか位だ。

昼にするには早い気もするが、魔法の森に行つて帰ってくる頃には時間を逃してしまふ。

そんな時間だ。

早くて困ることはない、某アニメの速さを大事にする人が言っていたような気もしなくはないので、昼を摂ることにする。

相変わらず、いつもの処でいつものうどんを食べて出る。

40分ほどして、森の入り口にたどり着く。

ここから少し移動するだけで香霖堂が見えてくる。

5分ほどで店の前に着き、ドアを開ける。

いつも通りごちゃごちゃした店内で、店主はストープを近くに置いて、新聞を読んでいた。

ペラッと捲る際にこちらに気が付いたのか、新聞を折って4分の1ほどの大きさにした後、机に放り投げるように置く。新聞には文々新聞と書かれている。

「いらつしゃい。またナイフかい？」

と、以前買ったものを探しているのか？と聞いてきた。

「いえ、今回は魔法の森に入るので、ガスマスクでも置いてあれば  
と思ひまして」

店主はうーんと一回唸ったあと

「少し探してみるよ。その新聞でも呼んで寛いでもらっていいよ  
と言つて、店の奥に行つてしまった。

お言葉に甘えて文々。新聞を読む。今回はあのバ鴉がどんな記事を  
書いているのか、楽しみである。

『異変！？神社からあふれ出る怨霊！』という見出しで始まつてい  
る。

内容は実にくだらない、霊夢が倒してきた妖怪たちの霊が怨霊とな  
つて出てきたのだの、実は神社の地下は霊界と繋がっていたのではな  
いか、などの事実無根の射命丸の憶測が書かれているだけだった。

最後の方にちよこつと、数日後に霊夢たちが地下に潜り原因を探る  
旨が書かれているだけであり、怨霊が出ていることと、地下に潜る  
以外の真実は書かれていなかった。

「これが新聞として通用するあたり、外とは違つてことを考えさ  
せられるなあ・・・」

そんなことを考えていると、店主がいくつかマスクとフィルターらしきものを持って戻ってきた。

「お待たせ。倉庫の方にあったガスマスクみたいなのはこれが全部だよ」

と、先ほどまで新聞を置いていた机にコトリ、コトリと一つづつ並べていく。

「一応劣化とかは見られなかったし、予備のフィルターもあったよ」と言っ、ほとんど同一規格であろうフィルターも置いていく。

「これは殆どが同じフィルターを使うんですか？」

「みただいね。変えることもできるみたいだよ」

と言われたので、サイズの合ったものを一つ選び、フィルターも一つセットで買う。

それほど高くなかったと言っておこう。

「じゃあ、気を付けて」

「ありがとうございます」

と言って、店を出る。

そのままマスクをつけて、森へ入る。

昼でも薄暗いここは、キノコが大量にあり、その胞子も大量に舞っているため、有毒ガスが周りにあふれているのと同じ状況であり、妖怪、妖兽等も近づくことが少ない、幻想郷でも数少ない危険地帯であるが、魔力も豊富にあるということで、魔法使いが居を構える場所としても有名である。

今回の目的は、そのキノコである。

キノコと言えば魔理沙というレベルで、幻想郷一キノコに詳しいのは魔理沙であることは間違いない。

キノコに詳しくない俺が頼れるのは魔理沙一択である。

暫く歩くと、魔理沙の家が見えてきた。

ノックをして少し待つと、魔理沙が出てくる。

「どちらさま……、って、悠太か。どうしたんだ？」

一瞬左目を見たかと思うと、すぐに目をそらす。

「欲しいキノコがあつてな。それを明後日までに少量でいいから用意してほしいんだ」

という疑問符を浮かべたような顔をする。

「種類にもよるけど……、何が欲しいんだ？」

素直にそのキノコの名前を口にする。



「ホテイシメジってキノコだ。チヨコタケとも言われてるらしい」  
昔、ふと見た図鑑に書いてあったキノコの名前を言う。

「何に使うんだ？そんなキノコ」

明後日までということと、そのキノコの特徴を考えれば、何をしたいか解るはずだ。

「以前の“お返し”をしてあげようと思ってね」

口が歪むのがわかる。

「ほどほどにしておいてやれよ、あれでも一応反省してるみたいだぜ？」

と言われたが、知ったことか。

「ああ、分ってるよ。ほどほどにな」

という短い会話をしてそのまま魔理沙の家を後にする。

そのまま紅魔館に帰った俺は、レミリア、フラン、俺、咲夜さんでカルタをした。

もうすぐ正月だし、カルタの練習でもしようじゃないかという建前でやったが、本音を言えば、俺の距離感を掴むための練習でもある。

何度かお手付きをしたが、勝負は殆ど俺とレミアアの勝負になってしまった。

フランはこういった認識する能力が低いのかも、と思ったが、どうやらただ単に眠いだけのようだ。

時折フランの方を見ると、ゆっくりと船を漕いでいるようにも見えた。

詠み人は咲夜さんがやってくれていたが、途中から俺に変わる。

時折レミアアの手が上に来たり、下になったりするのだが、その時に感じる咲夜さんの殺気がヤバイ。

命の危険を感じた俺は、途中で咲夜さんの交代し、詠み人に回る。

俺の時のように手に触れるのだが、そのたびに口と鼻を押さえるのには何か意味があるのだろうと考えてしまう。

魔法の森、キノコの森（後書き）

遅れて申し訳ありません。

## 宴会々時々悪酔い々（前書き）

今回やっていることは大変危険です。

いたずら等でやるのは絶対にやめましょう。

また、誤飲等も気を付けて、キノコ狩りはベテランの方と一緒に、食べる場合は自己責任でお願いします。

## 宴会々時々悪酔い々

宴会の前日、紅魔館に戻ってから4日経った午後、魔法の森の前でマスクを被り、森の中へ入っていく。

暫く歩き、魔理沙の家が見えてくる。

ノックを3回する。

中からは空いてるからテキトーに入ってくれ、と返事が来た。

中に入り、マスクを取る。

「不用心……って言っても、こんなところ誰も来ないか」

俺みたいなやつ以外は、と付け加える。

「ほら、ホテイシメジだ。そんなに量を使わないように、二株だけだぜ」

二株か……。そんなに量は必要ないし、それを受け取る。

「一応報酬として使えそうなものを持ってきたぞ」

そう言っつて、小さな本を2冊取り出す。

その本を見た魔理沙の顔がパツと変わる。

「パチュリーに許可を貰って持ってきた奴だからな、返さなくてい

いぞ」

そう言っつて近くの机に置く。

「へえ、助かるぜ。アイツのグリモワールはどれを盗つても勉強になるからな」

取つてのニュアンスが若干おかしかったが、気にしたら負けなのだろう。

「所で、暗視ゴーグルを返して欲しいんだが」

そう言つたところ、そっぽを向かれて口笛まで吹き出した。

いいから返せ、と銃で脅してようやく返して貰えた。

まったく、と口の中で呟いて、家を出る。

マスクを着け直し、息を思い切り吐き出す。

そのホテイシメジが入つた袋を持って。

ホテイシメジは焼いて味噌をつけて食べるとおいしいと図鑑に書いてあつたので、そのまま保存して明日あたり宴会が始まる前に行って試食してもらおう。

そう考えている。

そのまま昨日と同じようにカルタ等をして遊んでいた。

そして翌日、昼過ぎ。

博麗神社前に居るのだが……。

「おいすー」

と、自前の瓢箪から酒をぐくぐくと、水のように飲んでいる。

あの一口で五合ぐらいはあるのではないかと思うほどだ。

そして、宴会の準備に追われているのが、紅白巫女である。いや、巫女自体が紅白なのだが、早苗がいる分こつ分けている。

「なにー？手伝ってくれるの？」

おう、と返事をして手伝う。

「ほら、萃香！あんたも酒ばかり吞んでないで手伝いなさいよ！」

えー、と嫌そうな顔と声で拒否の意思を表しているが

「手伝って終わったら魔理沙に（採ってきて）貰ったキノコを焼いて食わせてやろうと思ってるのに」

一つづつだけどな、と付け足しておくが、その言葉を聞いた瞬間霊夢の目つきが変わる。

「萃香、あんたはやらなくていいわ。私が悠太とやるから」  
が……、がめつい……。

だが、俺としては二人に一つづつ食わせたい訳で

「そんなこと言っていないで、さっさとやろうぜ。キノコならまた今度もらってくるから」

二人より三人の方がはかどるだろ？と声をかける。

仕方ないわね、と言ってお札を使って萃香を働かせる。

その姿は奴隷商と奴隷のようであった。

萃香のおかげで予定よりも早く終わった。

「じゃあ、焼くか。七輪であるか？」

七輪を取り出してきた霊夢に断って、中に文々。新聞、小さめの薪を入れて、新聞に火をつける。

その火は小さめの薪に移り、それなりの火力になった後、二回りほど大きな薪を加える。

それに火がついた後は、小ぶりの炭を入れて、30分ほど経ったら中を確認し、ちょうどいい具合になるように火箸を使って調節する。



「へえ、慣れてるわね」

そう感心したように言う霊夢。

「紅魔館なんてこんなことするイメージ無いな」

という萃香。

「ガキの頃からキャンプとか、長期休みのときには行ってたからな」

一応カレーぐらいなら作れるが。

「へー、そんなもんかしらね」

遠火ぐらいになるまで待ち、七輪へ網を乗せ、その上にキノコを置いて炙るように焼く。

5分ぐらいして、霊夢に味噌と皿を用意してもらい、さらに5分ほどして網からあげる。

それに軽く味噌を塗り、箸を使って食べる。

「菌ごたえがあって、味もいいわね。これ、なんてキノコなの？」

確か、と付け加えて、ホテイシメジという名前だと教える。

「シメジの仲間かしら？ま、仲間かどうかなんてどうでもいいわね」

そう言って、もう一口食べる。

残りはもう一口ぐらいになっている。

萃香の方を見ると、同じくおいしそうに食べていたが、口を動かしているだけで、箸や皿の所にはない。もう食べきってしまったのだらう。

「いやーおいしいね。まだあるならもっと食べたいけど」

と言って、酒を煽る。

笑わないように注意しながら、酒でも買って来ると言って、その場を離れる。

一応一樽を自腹で買って戻してみると、顔を真っ赤にした萃香と、それを見て心配そうに、怪訝そうに眺めている霊夢が居た。

「ねえ、萃香って変なものでも食べたのかしら？」

先ほどのキノコは一切疑わない。

「一応俺と魔理沙の仲を知ってはいるので、俺に毒キノコを渡す、とは思っていないようだ。」

「さあな、流石に死にはしないだろ」

と言って、持ってきた酒樽を置いて、貸してもらったリアカーを返しに戻る。

「そうそう、バ鴉が悠太の所にも取材に行くって言ってたわよ」  
その言葉に動きを止める。

「紫はなんて？」

「口止めは無しよ。悠太が言いたいところだけ言えばいいわ」

そう言って話は終わる。

ま、来ても撃ち返すだけだけどな。

そうこうしている内に既にぱらぱらと疎らながら人（妖怪）が集まってくる。

「悠太、ちょっと」

と、てきとーにポーっとしていたら、紫に呼ばれる。

「例の件ですか？」

という質問に対して

「ええ、そうよ」

という返答。

集まりつつ人ごみから離れて、人けのない場所へ向かう。

「その眼は大丈夫かしら？」

左目を触りながら

「日常生活ぐらいじゃ一応大丈夫です。格闘は問題が残りますが、何とかなるでしょう」

そう答えると、満足そうに笑う。

「こちらもちり札の問題は一応解消したわ。後は時間の問題。これは河童に頑張ってもらえないわ」

と、少し心残りがあるようだ。

「後どれぐらいで決行ですか？知っておいた方が何かと楽なので」

そうねえ、と一区切り。

「あと2週間後、といったところかしらねえ。それから一か月以内には、恐らく終わるわ」

特に問題がなければ、と付け加える。

「了解。それまでにいろいろと準備を進めておきます」

ちよつと待つて、と声を掛けられる。

「貴方の主な仕事のうちの一つである魔女退治なんだけどね、あち

らの魔女は結界と言われる自分の世界に引きこもって人間を誘うらしいわ」

それがどうしました？と聞く。

「その結界を見つけれられるのは魔法少女、貴方の協力者しかいないのよ」

なんと面倒くさいこと。

「でも、その少女は学生。中学生ぐらいかしらね、そんな子が昼間外を歩いていたら何かと面倒でしょう？だから、貴方の身体を行く前にちよっと弄らせてもらおうわ」

要するに、見つけられるように弄られるわけか。

「ええ、構いません。それが無きや仕事になりませんから」

そう言っつて、快諾する。

「勿論、貴方が戻ってきたらそれは戻すわ。こちらでは必要のないことだもの」

それじゃあ、と言って紫は去っていく。

そのあと、一服付けから戻ると、既に宴会は始まっていた。

「どうもー！清く正しいしゃめいまー」うわあー！

M37\*1を突き付けて、射命丸の言葉を中断させる。

「よお、バ鴉。よくものこのこと来れたもんだなあ」

左手でレシーバーを持ち、左腕を上下に振って排莢する。

「言っておくが、取材は受け付けねえから、そのつもりでな」

グリップを握り直し、引き金に指を掛ける。

「さっさと消えるかミンチになるか、選ぶ時間ぐらいはやるよ」

言い切る前に「失礼しましたー！」と言って飛んで行ってしまった。

鴉に対して、悪態をつきながら適当な肴を持って、呑んでいると、

一部の方がざわついてきた。

見ると、霊夢と萃香がグロッキーな状況になっている。

萃香はまだましな方なのか、チビチビと酒を飲んでいるのに対して、  
霊夢は頭を抱えて唸っている。

その光景を見ながらにやにやとした笑みを浮かべながら御猪口で酒  
を呑む悠太。

一方魔理沙は、やれやれという顔でその光景を見ている。

結局、霊夢と萃香は宴会終了までグロッキーな状態でいて、宴会の  
片づけは明日に持ち越された。

## 宴会々時々悪酔い々（後書き）

\*1：ポンプアクション。四発装填。

ホテイシメジは、通常のままでは中毒は起こらないが、アルコールを体内に入れた場合、中毒症状が出る。

主な症状は悪酔い、と書くとなんだと思うが、体質によっては心臓に負担がかかり、顔が赤くなり、動悸が激しくなったり、頭痛、気持ち悪さ、最悪の場合肝硬変で死亡したという報告もあります。

間違っても毒キノコをいたずら等に用いないようにしてください。

魔法陣（前書き）

MW3が面白すぎて作業に手がつかない・・・。



## 魔法陣

宴会の片づけも終わり、霊夢たちにはネタばらしをしないまま紅魔館へと戻り、ろくに寝れなかったから二度寝をして、午後1時。

遅めの昼食を食べてパチュリーの居る書斎に向かう。

「え？空中に立てるような足場を作る魔法？」

そう、地霊殿での移動の遅さ（地面がガタガタなせいでろくに縮地が使えなかったため）を考えて、空を飛ぶことは無理でも、空中で縮地が出来ればいいのではないかと考えた結果だ。

「そんなのをやるよりも飛ぶ努力をした方がいいんじゃないかしら？」

というパチュリーだが

「それよりも覚えてる縮地を有効に使える方がいいと考えてな」

と、自分の考えを言う。

飛べることもいいが、覚えたことを活用した方がいいという考えだ。

「そうねえ。確かにひよつとしたら飛ぶより早いかもしれないわね」

そう言って、小悪魔を呼ぶ。

「何かご用でしょうか？」

呼ばれて少しして小悪魔がやってくる。

「魔法陣に関する本を持ってきて頂戴。基礎の基礎ぐらいでいいから」

わかりましたーと言って、奥へと去っていく。

「悠太にはまず基本知識を教えるわ」

魔法陣とは、自身の魔力を使って生成するモノ以外に、地面に直接描くものが存在する。

これらは魔力を使って生成するモノよりも効率はいいが、前準備が必要であること。

そして、描くモノによって向き不向きがあること。

たとえば、召喚魔法陣などは血で描くモノが最も効果が高い。

血に含まれる魔力が最も人間の中で純度が高いからである。

チヨークなどは簡単な契約などに用いられる。

地面を掘る形で描かれる魔法陣も契約などに用いられるが、チヨーク等がないときの代用品といった面が強い。

一方、魔力による魔法陣は、自身の力量に左右される。

自身の身の丈に合わないことをすれば自分に却ってくることもある。魔力による魔法陣の用途は主に自身の強化、魔法の底上げ等に使われる。

ということ。

そしてすべての魔法陣に言えることは、その形を記憶していなければならぬということ。

「足場にするなら固定の魔法陣ね。地面に使う場合は五芒星、空で使う場合は六芒星を使うと効率がいいわ」

という説明を受けた。

説明が終わったところ、見計らったかのように小悪魔が本を一冊持って戻ってくる。

「パチユリーさまー、これでいいですかー？」

と言って、その持ってきた本を渡す。

それをぺらぺらと捲り

「ええ、これでいいわ」

そう言って小悪魔をもとの仕事へ返す。

「この部分のページよ。とりあえず、これと、呪文を覚えなさい」

図面は二重の円の間には呪文が描かれ、中の円に角が当たるように六芒星、五芒星の描かれた二つが描かれている。

空で使う場合は六芒星、ということを出し、六芒星の方を見る。

「使う場合の呪文は『フィクサfixa マキニースmachinis』よ。意味としては足場 固定といったところね」

足場を固定するということか、と考える。

「この魔法陣に書かれている文字の意味は？」

本のその部分を指さしながら聞く。

「その部分はラテン語ね。そのラテン語の筆記体、というよりもかなり崩した筆記体……。日本語で言うところの隷書体に近い形になってるから、ラテン語を覚えていても解読は困難でしょうね」

ということだった。

読めないのも当然だな、と考えて、文字ではなく魔法陣そのものを図として覚えてしまった方が早そうだと考える。

「それさえ覚えてしまえば魔力は自分の魔力を元に足場は空中を漂う魔力を使って構成することもできるわ。もちろん空中に魔力がなければ全部自身の魔力で補う必要があるけど」

なるほどと考えて、一度作ってみる。

「フィクサ・マキーニース」

縮地を使って1メートルほどジャンプして使ってみる。

魔法陣に着地した瞬間に引っ掛かりがあったが、地面が抜ける感覚でそのまま落ちてしまう。

着地し、パチユリーに問題点を指摘してもらおう。

「まず実践という考えに敬意を表するわ。問題点だけけど、構成が甘い。魔力の取り込みが少ない。もっと自分の魔力を餌にしなさい」ということだった。

もう一度図を見直し、紙に書いてみる。

「その魔法陣の文字はラテン語であれば筆記体でもなんでもいいのよ。わざわざ筆記体にする必要はないわ」

と言われても・・・

「ああ、そうね。ラテン語を知らなかったわね」

と、バツサリ斬られた。

「とりあえず、きちんと書くならこうよ」

そう言って、紙にフィクサ・マキーニースとラテン語でサラサラと書く。

「これがラテン語で書いた場合よ。これなら覚えられるでしょう」  
そう言って書いた紙を渡してくる。

礼を言って、その単語を何度か書き、またも実践する。

先ほどと同じように縮地で飛び、フィクサ・マキーニースと呟いて足場を作る。

今度は少し緩い地面に立った時のように少し歪んだが、何とか着地できた。

「そのまま縮地を試みなさい」

そう言われて、魔力を流す。

5メートルほど移動して、また足場を作り着地する。

元の足場からは50センチほど下がっていた。

「分かったわね？1メートルにつき10センチほど下がるから、斜めに跳ぶ感じで縮地をした方がいいわ」

そう言って、先程いた足場にパチュリーが魔力を流していたのか、粒子のようになって消える。

俺も足場から降りると同じように粒子になって消えてしまった。

「後は練習あるのみよ。また聞きたいことがあれば来るといいわ。」

暇なら面倒見てあげる」

と言っ、小悪魔を呼んで本を取りに行かせる。

俺は一言礼を言っ、書斎から出る。

サイドパチュリー

「ねえパチエ」

何処からかレミイの声が聞こえる。

「覗き見は趣味が悪いわよ、レミイ」

水晶を取り出し、それに話しかける。

その水晶にはレミアアが映っていて、まるでテレビ電話のようになっている。

「悠太、どうだったかしら？」

パチュリーは少し考えて

「・・・正直、驚いてるわ。魔法陣の基礎とはいえ、たった数時間で覚えてしまったわ。彼の才能は私たちの予想以上よ」

だけど、とため息を吐き

「彼の魔力量では、すぐに限界が見えてくる。魔力と才能が釣り合  
ってないのよ」

そもそも彼に魔法使いになる気がない。

それが問題である。

一度レミリアが血を吸おうとしても、人間でいたいという思いから  
拒否をしている。

レミリアが飲む量など、献血の半分以下程だというのに。

「そうよねえ……。悠太が魔法使いになれば、パチエを凌ぐほど  
になる可能性もなくないわね」

そう悪戯っぽく笑う。

「いくら才能があっても駆け出しになんか負けないわ。それも50  
年以上はね」

それも取らぬ狸の何とやらだ。

「今は本人の希望を通すことをお勧めしておくわ。無理に魔法使い  
や吸血鬼化させても、あれほどの才能を持った家族を失いたくはな  
いでしょう?」

レミリアは少し考え



「・・・そう、ね。本人の意味で、ね」

「パチエ、咲夜。この話はオフレコよ。間違っても他のメイドやフラン、悠太に話してはならないわ」

「解ってるわ」

「承知しております」

パチュリーと咲夜の返事が聞こえ、その水晶はレミリアではなくテールブルを映すようになった。

## 魔法陣（後書き）

そろそろ外伝を書きだす頃ですね。

楽しみにしている方もそうでない方もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7766n/>

---

東方野戦録～サバゲーしてて幻想入り～

2011年11月21日22時18分発行